

モードレッドは自分の部屋でワインを飲んでいた。盤上のチェスの駒を動かす。向かいの席には誰もいない。

モードレッドはセリーンの事を考えていた。自分の副官ながらモードレッドにもあの女の考えていることだけはわからない。恐ろしく頭の回る女だった。鬼才の参謀と言われるモードレッドに唯一匹敵する策謀を考え出せる女だ。

おまけに自分の容姿に絶対の自信を持っている。どんな男も虜にしてしまう。神が与えた美しさだった。

「レオグランデスに行くと言っていたが……何を企んでいるのか……」
 モードレッドが笑った。

ライオネルはもう何日もほとんど休むことなく馬を駆けていた。走りながら馬の足がふらつく。相当疲労しているようだ。それはライオネルも同じであった。数日に渡る強行軍とも言える旅でライオネルの表情は濃い疲労に包まれている。眼だけがギラギラと光っていた。

馬が足を折る。ライオネルは宙に投げ出され、大地に叩きつけられた。ライオネルが起き上がり、馬を見る。極度の疲労のせいだろう、もう死んでいた。ライオネルが馬の頭を撫でた。

「……よく走ってくれた。ゆっくり休んでくれ」

ライオネルが遠くに見えるレオグランデスの首都、キャメロンに向って歩き出した。

キャメロン城の正門、一人の守備兵がライオネルの姿を見て驚きの声を上げる。周りにいた兵士達もライオネルの姿に気付く。兵士達が一斉にライオネルの元に駆け寄った。

「ライオネル様、よくぞ御無事で」

一人の兵士が言った。

「うむ。お前達も変わりが無いようで何よりだ。陛下は何処に居られる？」

「謁見の間です」

「謁見の間？誰か来ておるのか？」

「はい。ミリアムⅡエルドリッチ様という方が訪問しておられます」

「ミリアムⅡエルドリッチ？聞いたことがない名前だが……」

「なんでもミルチア国の貴族様だそうです」

ミルチアという言葉聞いてライオネルの表情が曇る。ミルチアは鎖国国家だ。貴族といえども自由に国外に出ることはできない。となるとそのミリアムとやはらミルチア国の外交官として来たという事だろう。ライオネルの脳裏にアルテオムの顔が浮かぶ。

「……そのミルチアの貴族が陛下に何の用なのだ？」

「さあ？そこまでは……」

一兵士が其処まで知っているわけも無かった。ライオネルは兵士達と別れると謁見の間に向った。

謁見の間の前までやってきたライオネル。中に入ろうとすると扉の前にいた兵士がライオネルを止めた。

「ライオネル様、王は謁見中です」

「わかつている。火急の用だ。かまわん」

ライオネルが怖い顔で言う。ライオネルにそう言われるとどうする事もできない。兵士は扉の前から離れる。ライオネルが扉を開けた。広く豪華な部屋の中には玉座に座るアヴァロン王とその横に立つオクト大臣。そして一人のブロンドの髪をした美しい女性の姿が合った。王は謁見中に無断で入ってきた事に一瞬険しい顔をしたが、それがライオネルだとわかると玉座から立ち上がった。

「おお！ライオネル、よくぞ戻ってきた！」

アヴァロン王が目の前の女性と無視して、ライオネルの元に歩み寄る。ライオネルが膝を突いて、頭を下げた。アヴァロン王がライオネルの手を握る。

「それでエレインは……」

アヴァロン王が心配そうに聞いた。

「今サンダルクの王宮におられます」

「無事なのか？」

「はい。何処にもお怪我はありません」

「そうか……よかった」

アヴァロン王が溜息をつく。父としての安堵だった。

「……心配したぞ。噂ではエレインがミルチアでボールスを倒したと聞くし。ミルチアでは内乱が起こるし……エレインがボールスを倒したというのは本当の事なのか？」

「はい、本当です」

「……まったく昔からお転婆だとは思っておったが、まさか十三使徒を倒してしまうとは……やはりわしよりあの子の方がアト口の血を濃く継いでいるようじゃな」

「女性ながら勇ましき御方。まさに勇者といえる御活躍でございました」

「うむ、そうか。しかしエレインが無事だったのもすべてお主がいてくれたから。礼を言うぞ、ライオネル」

「ありがたきお言葉」

ライオネルが深々と頭を下げた。

「聞かせてくれ、ライオネル。お主達がどの様な旅をしていたのかを」

ライオネルはアヴァロン王にこれまでの旅の経過を大まかに話した。

「……そうか。そんな事が……それでサンダルークに援軍を送って欲しいというのじゃな」

アヴァロン王が言う。

「はい」

ライオネルが言った。それに部屋にいたオクト大臣が口を挟む。

「賢明とはいえませんが。魔族が何時攻めてくるかもわからない今、自国の戦力を減らして他国のために軍を出すなど。所詮ミルチアとサンダルークの問題。エレイン姫にだけ御帰国願って後は傍観しておるのが最上でしょうな」

ライオネルが無言でオクト大臣を見る。オクト大臣もにやけた表情でライオネルを見た。

「なぜエレイン姫を伴って帰ってこなかったのです。ライオネル殿はエレイン様の護衛役でしょう。危険な他国に姫一人残してくるなど職務怠慢もいところ」

「その事につきましては弁解のしようもございません」

ライオネルがきっぱりと言った。

「一言、言わせてもらってもよろしいでしょうか？」

それまで黙っていたブロンドの髪の女性が言った。ライオネルがその女性を見る。その女性は今までライオネルが見てきたどんな女性よりも美しかった。エレイン姫も美しいが、エレイ

ンの美しさを太陽とするなら、その女性の美しさは月の様だった。落ち着いた静かな美しさだった。

「ライオネル、紹介しよう。ミリアムⅡエルドリッチ殿下。ミルチアの貴族で、我が国に亡命を希望しておる」

アヴァロン王に紹介されたミリアムがライオネルに優雅に礼をした。

「ミリアムⅡエルドリッチです。ライオネル様の御高名は遠いミルチアにいた頃から耳にしております。お会いできて光栄ですわ」

ミリアムが言う。ライオネルも黙って頭を下げた。

「それで援軍の事ですけれども。部外者の私が出すのは恐縮ですが、やはり兵を派遣した方がよろしいのでは。レオグランデスとサンダルクは長い間の同盟国です。その友国の危機を傍観などしていたら偉大なレオグランデスの歴史に傷がつくでしょう」

ミリアムがアヴァロン王を見て流暢に言った。オクト大臣がミリアムを睨むが、ミリアムは素知らぬ顔をしている。

「ふむ、やはりそうだな。援軍は派遣しよう。軍の準備に数日掛かるが、その間は城でゆっくり休め」

アヴァロン王がライオネルに言った。ライオネルが礼をする。

「ではミリアム殿の処遇の話に戻ろう。ライオネルは部屋に下がって休んでおれ」

ライオネルは謁見の間から出て行った。

王との話も終わり、ミリアムが謁見の間から出てくる。ミリアムが見ると廊下にライオネルが立っていた。腕を組んで壁に寄りかかっている。ミリアムとライオネルの目があつた。どうやらミリアムが出てくるのを待っていたらしい。

「あら、ライオネル様。もしかして私を待つて下さっていたの？」

ミリアムが美しい笑顔で微笑みかけた。その美しい顔と対称にライオネルはじろりとミリアムを睨む。

「……なぜ亡命を？」

ライオネルが低い声で言った。

ライオネルはミリアムがアルテオムの工員ではないかと疑っていた。時期が時期だけに十分ありうることだ。おまけにアルテオムはその様な策を好む。かつての戦友だったライオネルにはわかつていた。

「そんなことを聞きたくて待つていましたの？」

ミリアムが面白いことのように笑う。

「ミルチアで内乱が起こりアルテオムが王位に着きました。しかし、ミルチア国内ではそんなアルテオムに反発する貴族も少ないながらいるのですよ。前国王の死因も怪しいですしね。私もそんな貴族の一人です。しかし、アルテオムは恐ろしい男だと聞きます。自分に反抗する貴族などこれからどんどん排除していくことでしょう。アルテオムに貴族の地位を剥奪されるば

かりか、殺されるかもしれない。幸いなことに私は家族もない自由の身です。だから屋敷も領地も捨ててレオグランドスに亡命を決めました」

ミリアムが淀み無く言う。ライオネルはじつとその顔を見ている。表情の変化一つ見逃すまいとしているようだ。しかし、ミリアムの表情に怪しい点などまるで見受けなれなかった。

「さすがにアヴァロン王は寛大な方ですね。今すぐというわけにはいかないようですが、近い内に叔位と共に適当な領地を見積もって私に与えると仰って下さいました。それまではこの城に客として滞在していいそうです」

「……ずいぶんうまい話もあるものだな」

ライオネルが言う。他国の貴族を無条件で受け入れるなど考えられない。

「もちろんただではありませんわ。私が手土産に持ってきたのはミルチア内部の情報です。貴族の序列や軍の編成のね」

ミリアムが言った。なるほど、確かにミルチアは鎖国国家で国内の情報は非常に入手しにくい。その情報とならば多少の領地を交換条件に出しても惜しくは無いだろう。

ライオネルはミリアムに背を向けて歩き出した。これ以上話してもミリアムが工作員かどうか見抜けぬと思ったのだろう。

「よかったら今夜一緒に私の部屋でお食事でもいたしません？私見知らぬ国で知り合いもいなくて寂しくて」

「断る」

ミリアムの言葉に振り返りもしないでライオネルが言う。そのままライオネルは立ち去った。「冷たい方ね。男としての魅力は十分だけど」

ライオネルの背中を見送ってミリアム、いやサーリンが妖艶な笑みを浮かべた。

ロアは後ろを振り返った。馬に乗ったりリユネットが苦しそうに馬の背に体を預けている。呼吸は不規則で荒かった。

「大丈夫か？」

「……この程度なんでもない。それよりまだなのか、目的地は？」

リユネットが蒼白な顔でいった。

「もう少しだ。もう少しで着く」

ロアは自分に言い聞かせるように前を向いた。目の前に何処までも続く荒野。乾いた大地に疎らに人間界では見慣れぬ植物が生えている。空の色は昼だというのに薄暗い。

魔界に入っても何日になるだろう。ずっとリユネットと二人でこの呪われた地を歩いてきた。口ではなんと言おうとも、既にリユネットの体力は限界に達していた。日が経つごとにリユネットの容態は悪化していく。ロアもリユネットの体調を考え、休憩を取ることが多くなった。馬があるとはいえ、このままではいずれ進めなくなることは目に見えていた。

荒野の小高い丘を登りきったロアが立ち止まった。ロアにたずなを引かれている馬も立ち止まる。

「見えたぞ。死の都ネグロードだ」

ロアが眼下に広がる巨大な都を見つめた。

ロアとリュネットがネグロードの町に入っていく。町は薄気味悪いほど静かだった。人影一つ見えない。

死の都ネグロード、十三使徒ボールの居城のある町だった。かつては大勢の人間が住んでいた巨大な都だったのだろうが、魔界に取り込まれた今は見る影もなく荒んでいる。異国風の見慣れぬ建築様式の建物が訪れる者も無く静かに佇んでいた。

「……陰気な町ね」

馬の背からリュネットが力なく呟く。

「だな。幽霊でも出そうだけ。俺、幽霊は苦手だね」

「……」

ロアがわざと明るく振舞う。リュネットに答える元気は無かった。

二人は無言で無人の街を進んでいった。向うのはボールの居城で町の中心に位置するネグロード城。ロアの足と馬の蹄の音だけが町に響いた。

「……あれ？」

リユネットが虚ろな目で町の物陰を見た。

「どうした？」

「……さっきその建物の影に誰かいたような」

リユネットが数十メートル先の建物を指差した。ロアが見るが特に何も見えない。

「……気のせいだろ。あれ位の距離にもし誰かいれば吸血鬼の俺なら気配でわかる。疲れて幻覚を見たんだよ」

ロアが言った。そのままリユネットの乗った馬を引っ張って行く。

ロア達は人間はもちろん、魔物一匹会うことなく城の中まで辿り着いた。

「馬はここに繋いでおこう。歩くのは辛いだろ、俺が背負ってやるよ」

ロアが馬の背からリユネットを抱きかかえた。リユネットがその手を振り払う。

「……いらん。自分の足で歩ける……」

そう言うどリユネットは剣を杖代わりにして、ふらつく足で一人で勝手に進んでいった。

「おい、無茶するな。ぶっ倒れるぞ」

ロアがリユネットの横に並び、そう言った。リユネットは答えない。歩くことだけに集中しているようだ。

城の中は薄暗く町よりさらに静かだった。城の中の調度品や家具は酷く古かった。

「この城、魔族に征服される以前は誰かが住んでいたんだろうな。なんか見慣れない美術品が多いけど。これなんか異国美術コレクターに高く売れそうだな」

ロアは廊下に置かれてあった三十cmほどの金属製の像を手を取った。穏やかな女性の顔をしているが腕が六本もある。かつてこの土地に住んでいた民族が祭っていた神の姿を模った物だろうか。

ロアの前を歩いていたリユネットが突然倒れた。ロアが駆け寄る。

「おい！大丈夫か？」

「……なんでもない……ちょっと立ち眩みがしただけだ……」

ロアの腕の中でリユネットが眩いた。すでに意識が朦朧としている。ロアがリユネットを抱きかかえた。一番身近な部屋に入る。

部屋にはドアというものが無かった。中に入ると客室だろうか、狭い部屋だったが低いベッドのような物が置かれたあった。ロアがリユネットの体をベッドの上にゆっくり降ろす。

「……何のつもりだ？」

リユネットがロアを睨んだ。

「お前はここで休んでろ。俺が城の中を探索してくる」

「……大丈夫だといっているだろう」

そう言っってリユネットが体を起こそうとしたがうまくいかなかった。既に起き上がる力も無いようだ。

「そこから動くなよ。すぐに戻ってくる」

ロアが言う。リユネットは何か言いかけたが、諦めて目をつぶった。

ロアが部屋の外に出る。ロアは部屋を一つ一つ調べていった。

「……ここだな」

部屋の中に入ってロアが呟く。ガラス管の中に薄気味悪い生物、数え切れないような書物。間違いなくポールの研究室だ。棺桶の様なガラスの容器の中にはどう見ても人間のようなものも入っている。

ロアはそこらじゅうにあるファイルを片っ端から手にとって見ていった。どれもロアには読めない文字で書かれている。

「……駄目か」

ロアがファイルを投げ出す。吸血鬼を人間に戻す方法、そんなものは簡単に見つかるはずはないのか。それにロアがこのポールの居城に来たもう一つの理由、それはロア自身の過去を探す事。ロアには過去の記憶がなかった。六十年前以前の記憶が空白なのだ。自分は何処で生まれたのか、いったい何をしてきたのか。誰に育てられたのか。普通の人間なら誰でも知っている当たり前の事をロアは知らなかった。

気配を感じてロアが研究室の入り口を見る。一人の少女が立っていた。

「あれ？前に一度会いましたよね」

少女が研究室の中に入ってきて言った。ロアがいぶかしげに少女を見る。

「何処かで会ったか？」

「ええ、会いましたよ。ほらダルフェンディアの宿で」

「……ああ、あの中年貴族にからまれてたお嬢ちゃんか」

「はい。あの時はどうも」

少女、ルーテネがにっこり微笑む。

「こんなとこで何してんだ？ここは危険だぞ」

「わかってるわ。ここに来た理由はロア君と同じでポールの研究を調べに来たんですよ」

「うん？俺の名前知ってるのか？」

「ええ、もちろん。よく知ってますよ。ミルチアのポールの研究室にあった貴方のファイ

ルは読みましたから。自分の過去を探してるんですってね」

「ファイルってこれの事か？」

ロアが懐から一冊のファイルを取り出す。表紙にロアと書かれたファイルだ。

「はい」

「幼い姿して頭いいんだな。俺には何書いてあるかさっぱりだ」

「そうですか。残念ですね。それにはロア君のすべてが書かれてありますよ」

「なあ、訳してくんない？」

「ふふふ、嫌です。何で私と同じ苦しみを味わっている仲間を助けてあげなきゃいけないんで

すか」

ルーテネが残酷に笑う。

「お前も記憶がないのか？」

「いえ、記憶はあります。でも貴方と私はとても似てますよ。だいたいなんでロア君は自分の過去を探してるんです？」

「なんでって……自分の過去を知りたいって事に何か理由が要るのか？」

「私にはわかりますよ。過去がないから、昔の自分がないから今の自分が不安定なんですよ。人は過去がないと不安で仕方ないんですよ。貴方はいつもおどけているが、本当は不安で仕方ないはずだ。自分という人格がわからなくて」

「俺はそんなにデリケートな人間じゃないよ。自分の過去が知りたいのはただの好奇心さ」
ロアがおどけて言った。

「そうですか。ただ知らないほうが幸せな記憶もありますよ」

「意味がわからないな」

「いづれわかります。私とロア君が似ているといった理由がね」

「まあ、そっちはいいや。それより吸血鬼を人間に戻す方法って知らないか？」

「なんです？ロア君はいまさら人間に戻りたいんですか？」

ルーテネが笑う。

「俺じゃないよ。仲間に一人囃まれた奴がいてな」

「悪いですけど、そっちは本当に知りえませんか。そんな方法があるかどうか疑問です」

ルーテネはそう言ってロアの側を通り過ぎると柵に並んであるファイルを手にとって調べ始

めた。

「お前魔族だろ？俺を殺さないのか？」

ロアの鋭い感覚はこの少女が魔族だということに気付いていた。

「別に貴方を殺す理由がないですから。私の邪魔をすれば殺しますけどね」

ルーテネはファイルから目も話さずそう言った。

「そっか。なら俺も勝手にさせてもらうかな」

ロアは再び研究室を物色し始めた。しかし、書き物はどれも読めないし、棚に並べられているアイテムは何のために使うものかわからない。ロアは何処から手を付ければいいのかわからなかった。

ふとロアがルーテネのほうを見る。ルーテネは椅子に座り、片手でファイルをもって読みながら、もう片方の手で机の上に置いたガラスのビンに入った錠剤を驚掴みにして口に放り込んでいた。

「おい」

「……ひひひ、なんです。黙ってないと殺すっていいませんでした？」

ルーテネが焦点の合っていない目でロアの方を見た。

「……薬か。体に悪いぜ」

「よーけいなお世話よ。こうでもしないと人格が保てないのよ。それに体のことなんていい。どうせこの体ももうすぐ捨てるんだから。また私が殺される、アハハハハ」

ルーテネが笑いながら言う。目は泣いているようだ。

やがてルーテネがファイルを手にしたまま椅子から立ち上がった。奥の壁の方に向かって歩いていく。

「何処に行く？」

「ボールスの実験サンプルを見にね」

そう言うのとルーテネは壁の一部を押しした。壁が音を立てて独りでに動いていく。地下に続く階段が現れた。ルーテネが階段を降りていく。ロアも後に続いた。

しばらく暗い階段を下りていくと一つのドアに行き当たった。ルーテネがドアを開ける。中はそれほど広い部屋でもなかった。飾り気のない石壁の無機質な部屋だが、異様なのは床に無数の棺桶のようなものが並んでいることだ。

ルーテネは棺桶の間を進んでいく。部屋が一番奥にある棺桶の前で止まった。黒い金属製の棺桶で美しい装飾がされてある。表面には数字も刻まれていた。

「これですね」

ルーテネが棺桶に刻まれた数字と手に持ったファイルの中を見て言う。

「この棺桶がどうしたんだ？」

「この中に入っているのがボールスが最初に造った吸血鬼みたいですね。開けてみましょう」

そう言うのとルーテネは棺桶の蓋に手を掛けて、蓋を奥に引きずり落とした。金属製の棺桶の蓋が床に落ちて大きな音を立てる。

ルーテネとロアが棺桶の中を見る。中に入っていたのは美しく長い黒髪をした女性だった。見慣れぬ異国の衣装を着て、死んだ様に目を閉じている。肌の色は透き通るように白く、血の気がない。

「元は異国の人間だったみたいだな。肌の色は白いが、俺達とは顔の造りが違う」

ロアが棺桶の中の女性の顔を見て言った。

「で、こんなもの見てどうする気だ？」

「ポールスはこう書いています。最古の吸血鬼がもっとも優れていると。そのできとやらを見
てみたくてね」

ルーテネが言う。

「ふーん、これが最強の吸血鬼？そうは見えないけどなあ」

ロアが棺桶の中の女性の顔を覗き込む。棺桶の中の女性の目が開いた。ロアがビククリして棺桶から飛び退く。女性はそのままゆっくりと上半身を起こした。ルーテネとロアの顔を交互に見る。

「名前は？」

ルーテネがその女性に聞く。

「……カーリアアールメリア。最古にして吸血鬼の祖」

「吸血鬼の祖？吸血鬼の祖はポールスじゃないのか？」

ロアが怪訝な顔をして言う。

「……祖という言葉が何を指すかによるが、すべての吸血鬼の元になったのは私だ」

カーリアがゆっくり立ち上がり、棺桶から出る。そのままロアの顔を覗き込むように顔を近づける。カーリアの銀色の瞳がロアの金色の瞳を見つめる。

「う……なんだよ？」

ロアがじつと黙ったままロアの顔を凝視し続けるカーリアに言った。

「……お主、ずいぶん変わっておるな。そうか……ポールスはそこまで研究を進めたか……」
カーリアがわけのわからないことを言う。ロアは何と反応していいかわからない。ルーテネが口を開いた。

「ポールスなら死んだわよ」

カーリアがルーテネのほうを見る。その表情に変化は見られない。

「……驚かないのね。貴方、ポールスの部下じゃないの？それにこの城、無人だけど他のポールの配下は何処行っただの？」

「……知らぬな。大方、ポールの呪縛が解けて、それぞれ勝手に出て行ったのだろう」

吸血鬼に噛まれた者はその魔力によって血を吸った相手に操られる。

「貴方も呪縛が解けてるの？」

ルーテネが聞く。

「無理だな。私はポールスに血を吸われたわけではないからな。言った筈だ。私が最古の吸血鬼だと」

カーリアがロアとルーテネを交互に見る。銀色の硝子の様な冷たい瞳がロアを見つめる。

「お主等はこの城に何の用だ？」

「あ、俺？俺は知り合いがボールルスに囃まれたんで、その治療の方法を探しに」

「私はボールルスの研究をあさりによ」

ロアとルーテネが答える。

「そうか……ならばお主等を殺さねばならんな。この城に無断で入るものは誰であろうと殺さねばならん」

カーリアが静かにそう言った。物騒なことを口に行っている割には、その口調も態度も寂としている。カーリアの言葉を聞いてルーテネの表情が変わる。顔は微笑しているが、目が殺気立っている。

「ボールルスは死んだのよ。そこまであの男に義理立てすること無いんじゃない？」

「義理立てなどではない。私の使命だ」

カーリアが言った。声にまるで感情がない。

「あらそう。なら仕方ないわね」

ルーテネがそう言うと、飛び退いてカーリアから距離をとった。

「お、おい。待てよ」

「いきなさい、ポチ」

ロアの静止も聞かず、ルーテネそう言うと、ルーテネの肩から獅子の顔をした獣が生えてく

る。獅子の首が伸び、カーリアに襲い掛かる。

カーリアは平然と立っていたが、獅子がカーリアの首元に噛み付こうとする瞬間、左手を振った。まるで無造作のように見える動きだった。

カーリアの手によって獅子の顔がぐしゃりと潰ぶされ、血が飛び散る。そのままカーリアは床を滑るようにルーテネに近づいていく。流れるように無駄のない動きだった。

「きやあー！」

ルーテネが悲鳴をあげ、右手を押さえる。その手首から先は無かった。カーリアの手刀によって切り落とされたのだ。ルーテネがうづくまる。

ロアがカーリアを止めようと飛び掛る。

だが、ロアがカーリアに手を伸ばした瞬間、カーリアの姿がロアの視界から消えた。

何が起こったのかもわからぬまま、側頭部に激しい衝撃を受けロアが壁に叩きつけられる。見とれるほどの見事なカーリアの後ろ回し蹴りがロアと蹴り飛ばしたのだ。

(冗談じゃないぜ……俺の動体視力でも動きを追えないとはよ……)

まだ眼の前がチカチカするが、ロアが立ち上がる。

吸血鬼であるロアの動体視力は人間のそれを遥かに超えている。しかし、今のカーリアの動きはロアでさえ目が追いつかないどころか、目にさえ映らなかった。どうやればあんな動きができるのか。

(こいつ……ボールス並みに強いんじゃないかねえのか……)

ロアがカーリアを見る。カーリアは再びルーテネに襲いかかろうとしていた。その動きは風のように速い。傷を負ったルーテネに反応できるようなスピードではなかった。

あっさり間合いに入ると、ルーテネの頭部めがけて手刀を振り下ろす。

「ちっ！」

ロアがカーリアとルーテネの間に飛び込んだ。熱く痺れる様な感じがして、ロアの右肩は胸元まで切り裂かれていた。ロアが力なく前にのめりになる。

カーリアがもう一撃手刀を繰り出そうとした時、体がロアの方に引っ張られた。見るとカーリアの片腕がロアに掴まれている。

「……へっ、掴んじまえばいくら動きが速くても関係ないだろ」

ロアが疲れたように笑った。そのまま頭を振り上げ、あろうことかカーリアの額に頭突きした。

ゴツンと鈍い音が響き、ロアとカーリアが同時に地に膝を突く。

その隙にルーテネがカーリアに魔法を放つ。衝撃波が弾け、カーリアの体を吹き飛ばした。

「何してるの。急いで！」

ルーテネが頭を抑えたままうずくまっているロアの手を引っ張り地下室から抜け出した。そのままボールスの研究室も飛び出し廊下に出る。

「おー痛て。あの女、小顔に似合わずものすごい石頭だぜ。岩をも砕く俺様のヘッドバットと相打ちとはな。頭蓋骨にひび入ったかも……」

額を押さえながら涙目になって、ルーテネの横を走るロア。いくらなんでも頭蓋骨にひび入っていたら動けないだろう。それよりカーリアに切り裂かれた肩の傷の方が重症に思える。血があふれ出してジャケツトを赤黒く染めていた。

「冗談言ってる場合じゃないでしょ。あの程度の魔法でたいしたダメージを与えられたとも思えないわ。すぐに追って来るわよ」

ロアが耳を澄ます。後ろから誰か走ってくる音が聞こえる。確かに追って来ているようだ。
「……まさかこんなに強いとは思わなかったわ。たかがポールの一作品がここまでやるとは。私一人じゃなくてもっとコピーを連れてくるべきだったわ」

ルーテネが腕を押さえながら言う。手首から先がないその片腕からは血が滴り落ちていた。
「おいその手、大丈夫か？」

「ほうって置けばそのうち生えてくるわよ。私の再生能力は、その辺の生物とは桁が違うのよ」

ルーテネがそう言うと、思い出したようにロアを睨んだ。

「そういえば、さっきは何で私を助けたの？私は貴方の仲間ってわけじゃないでしょ」
「ああ、なんとなくな」

ロアが軽く言う。その言葉を聞いてルーテネの顔がますます険しくなる。

「なんとなくて助けられたら迷惑よ。それに私は死んでもいくらでもコピーがいるのよ。比喻なんかじゃなく、文字通り命が幾つもあるのよ。肉体の死など怖くないわ。あなたは命が一つ

しかないんだから、もっと自分の身を大切にしたら？」

「そりやどうも。だが、いくらコピーがいてもお前はお前だ。俺は馬鹿だから難しいことはわからないけど、お前とコピーはやっぱり違うだろ。お前こそもっと自分を大切にしろよ」

「貴方みたいな無学な人に生命の定義をしてもらう必要はないわ。それにコピーと私は違うわい。どちらも私よ」

ルーテネが言う。だが、その声はどこか寂しげだ。

「そう言うお前だって、さっきは俺を助けてくれたじゃないか。頭突きで脳震盪起こしかけてる俺を地下室から引っ張り出してくれただろ」

「それは……」

ルーテネが口ごもる。

「おっと、こっちじゃない」

ロアが突然道の角を曲がる。ルーテネは立ち止まった。

「ちよっと！そっちは出口じゃないわよ」

「わかっている。でもこっちの部屋に知り合いを寝かせてるんだ。迎えに行かないと」

ロアが立ち止まってルーテネに答える。

「あ、そう。じゃあ、バイバイ。もう会うこともないでしょう」

ルーテネはそう言ってロアに背を向けて走り出そうとする。そのルーテネの服の襟をロアが掴んで持ち上げた。ルーテネは少女の姿で背も低い、ロアに襟を掴まれ持ち上げられると足が

地面から離れた。

「……ちよっと、何の真似？」

ルーテネがロアに掴まれたまま、首だけロアの方を振り向く。

「一人じゃ危ない。二人でいたほうがお互い安全だろ？」

「危ない？あんたとこのまま城の中で寄り道する方が危ないわよ」

「あははは、まあそう言うなよ。俺一人じゃ、もしあのカーリアって奴が来た時、知り合いを守りきれないんだよ。なあ、ここは一つ俺を助けると思ってる」

ロアは片手でルーテネの襟を掴み上げたまま、もう片方の手でルーテネを掴んだ。

「はあ？何言ってるの？あんた身の程ってもんをわきまえなさいよ、このポケ」

ルーテネがロアに毒づく。

「ははは、なんか突然言葉悪くなったな。さっき助けてやったじゃないか？」

「私もあんたをさっき助けたあげたんでしょ。これで貸し借りプラマイゼロ。助けてやる義理なし」

「甘いな。ダルフェンディアで貴族にからまれているのを助けてやったのを忘れたか。これで俺に貸しプラス一だ」

「あんなのが貸しになるか！私一人でなんとでもなったわよ！」

ルーテネがロアにぶら下げられたまま怒鳴る。

「わははは、それでも貸しは貸しよ。さあ、おとなしくお縄につけ」

「コラ、ちょっと、放せ、放してよ」

ロアは暴れるルーテネを掴んだまま、笑って走り出した。

ロアとルーテネが部屋に入る。リユネットは目をつぶり、荒い息をして横になっていた。額に汗が光る。ロアがリユネットに近づくとゆっくり目を開いた。

「……それ誰？」

リユネットがロアにぶら下げられたままのルーテネを見て、消えそうな声で言った。

「あ、これ？こいつはちょっとした知り合い」

ロアが襟元を掴んでままのルーテネをぶんぶん振って言う。ルーテネはふてくされた顔のまま大人しくロアに吊り下げられていた。能天気なロアにはルーテネも言い返す気もなくなったようだった。

「それよりちょっとやばいことになった。いったんこの城を出るぞ」

ロアがルーテネから手を放し、かわりにリユネットを抱き上げていった。リユネットは黙って目をつぶる。答える元気もないようだった。

「急いだからいいわよ。あの女、すぐそこまで来ているはずよ」

ようやくロアから解放されたルーテネが不機嫌な顔で言う。

轟音と共に壁の石壁が砂煙を上げて崩れ、そこからカーリアが姿を現した。素手で石壁を破壊したようだ。彼女の細腕からは想像もできないの様な力だった。

「うわっ、なんて非常識な奴だ。ドアから入ってこいよ」

ロアが素っ頓狂な声を上げる。カーリアはもちろんそんな声には答えず、ガラスの様な冷たい瞳でロアとルーテネを見た。カーリアの方が部屋の出口に近い。それに今のカーリアは立っているだけで異様な威圧感を発している。ドアから逃げるのはまず不可能だった。

「おい、こいつ頼む」

ロアはカーリアを見つめながらそう言うと、抱いていたリユネットをルーテネの方に投げつけてよこした。

「ちょっと、どうする気？」

不平顔ながらもリユネットを受け止めるルーテネ。

「俺がこいつの相手をしている間に城の外まで逃げろ。こいつが城を守っているって言う以上、城の外に出れば追ってはこないだろ」

ロアがカーリアの方を見て、身構えながら言う。カーリアもロアに向って見まがえた。拳を軽く握り、腰の辺りで構えるというロアには見た事もない構えだ。

「あんたねえ。そんな重症でその女とやり合ったらほんとに死ぬわよ。まだ私の方が傷が軽い。どうしてもっていうんなら私が時間を稼いでやるわ。感謝しなさい」

ルーテネがロアの肩口の傷を見て言う。どう見ても軽傷ではない。血が溢れていた。

「貸しがあるって言ったろうが。いいから俺の言うこと聞いてさっさと行け。それに不死身の俺様はこんなところでは死なん。どうにかなるさ」

ロアが自信満々に言う。ルーテネが呆れたように首を振った。

「……その不死身とやらを信じさせてもらうとするわ。言っとくけど、こんなお荷物私に預けたまま死んだら承知しないわよ。さっさと迎えに来てよね」

そう言うのとルーテネはリUNETTを抱きかかえたまま窓から飛び降りた。

ルーテネが飛び降りたのを見て、ロアが構えを解き、ポケットから煙草を取り出し吸い始めた。突如として隙だらけになったロアを不審気に見るカーリア。ロアが天井に向って煙を吐く。「さーて、ほんとにどうにかなるか、いっちょ試してみるか」

ロアが苦笑いして煙草を投げ捨て、カーリアに飛び掛っていった。

激しい音がしてロアが床に叩きつけられる。口の中に苦い鉄の味が広がる。

「……ちっ、やっぱりそんなに人生甘くないか……」

口から血を流し、ふらつく足取りで立ち上がるロアが自嘲気味に笑う。カーリアの操る奇妙な武術に殴られ、蹴られ、おまけに投げられ、ロアは満身創痕だった。それに対し、ロアはカーリアに触れることすらできない。

（こいつほんとに強いぜ……動きがまったく見えない。ボールスの動きでさえ、ここまで速くはなかった……）

カーリアが再びロアの間合いに飛び込んでいく。すでにロアは立っているのが精一杯で身かわす力など残っていないかった。

(あーあ、俺の人生もここまでか……まあ、悪い人生じゃなかったな……)

ロアが迫り狂うカーリアの拳を呆然と見つめたまま思う。

カーリアの拳がロアの鼻先でぴたりと止まる。

カーリアは突然身を返し窓際に向うと、窓から外を見つめた。外を見つめたまま、カーリアがゆっくり目を細める。ようやく窓の外から目を逸らすと、そのままロアに見向きもせずに部屋から立ち去った。

わけもわからないままカーリアを見つめていたロアだったが、カーリアが部屋から出て行く時、どさりと腰から崩れ落ちた。

「なんなんだ？ いったい」

腰を下ろしたまま呟くロア。ゆっくり立ち上がると足を引きずって窓際まで歩いていく。

ロアが外を見ると、ネグロード城は数千の軍勢に囲まれていた。

(ちっ……まじったわ……)

ルーテネがリュネットを抱きかかえたまま、自分達を囲む大勢の兵士を睨んだ。

ネグロード城から脱出したルーテネ達だったが、ネグロードから数百メートルも進まないうちに、いきなり現れた数千の軍勢と鉢合わせしてしまったのだ。

(……軍旗を見る限りモードレッドの軍か)

ルーテネが後方にはためく軍旗を見る。どうやらモードレッドがネグロードを制圧するため

に派遣した軍勢と鉢合わせになってしまったらしい。運が悪いとしか言いようがなかった。

「へへへ……お嬢ちゃん。こんなところで何してんだ？」

兵士の一人が槍を肩に担いだまま、無用心にルーテネに近づく。ルーテネは幼い少女の姿だし、おまけに両手はリUNETTを抱きかかえて塞がっている、兵士が油断するのも無理もないことだが、それがこの兵士の不運だった。

「ああん？誰がお嬢ちゃんですって？ふざけた呼び方で呼ばないでよ、このゴミ！」

ルーテネの首元から大蛇が生えると、近づいて来た兵士の首元に喰らい付く。兵士は絶叫を上げた。大蛇は噛み付いたまま凄力で兵士を振り回すと、そのまま回りの兵士達に向けて投げ飛ばした。大蛇に噛まれた兵士は地面に叩きつけられ転がる。すでに絶命していた。

ルーテネを囲んでいた兵士達は驚いて槍を構える。だが誰もかかってこようとしない。ルーテネがただの子供ではないとわかって恐怖したようだ。

「あん？誰かと思えばルーテネじゃねえか」

一人の男が兵士達を掻き分けてルーテネの前に現れる。骸骨の兜をかぶり、獣の毛皮を纏った男。モードレッドの腹心の一人、ザーバックだった。

「てめえ、こんな所でなにしてんだ？」

「あははは、実はモードレッド様の密命でネグロード探りに来てたの」

ルーテネが明るく笑って口からでまかせを言う。

「ふざけんな。てめえがなにか企んでることは、とっくにモードレッドがお見通しだ。お前を

見つけたら半殺しにして連れてこいとき」

ザーバックは残虐な笑みを浮かべると、腰から二本の短剣を引き抜いた。

「あら、私も疑われたものね」

ルーテネも冷たく笑う。しかし、内心は笑っているような余裕などなかった。

（よりにもよってザーバックとはね……こいつには私のコピーがあと数体いても勝てるかどうか……）

ザーバックはモードレッドの配下の中でも随一の猛将で、その戦闘能力は十三使徒に匹敵するとさえ言われていた。おまけに殺人を好む戦闘狂で性格は残虐そのもの。仲間内からも恐れられていた。

「さーて、大人しくしてりゃ両手両足切り落とすだけで勘弁してやるぜ」

ザーバックが短剣の刃を舐める。短剣の刃はのこぎりの様にギザギザだった。あれで斬られるのは普通の刃物で切られるのとは比べ物にならない痛みだろう。

「ひひひ、やれるもんならやってみなさいよ、このサディスト」

ルーテネがリユネットを抱えたまま不気味に笑う。焦点の合っていないような瞳が爬虫類を連想させる。

ザーバックとルーテネが睨み合う。

突如、ザーバックの遙か後方で兵士達の悲鳴が上がる。ザーバックが振り返る。何処からともなく現れた謎の軍勢がザーバックの軍勢に攻撃を仕掛けていた。ザーバックの軍勢の十分の

一にもみたくない数の彼らはすべて歩兵で軽装、短い槍や緩やかに曲線を描いた剣を振りかざし、ザーバックの軍勢に果敢に突撃していく。その少数とはいえあまりの凄まじい突撃を受け、ザーバック軍は浮き足立つ。

「なんだあ？」

ザーバックが後方を見て怒鳴る。リユネットを抱いたままのルーテネはその隙にザーバックから逃げ出した。

ルーテネが戦いの混乱に紛れながらうまくザーバック兵と戦わず移動していく。

「何処の軍勢かは知らないけど、ラッキーだったわ」

ルーテネが走りながら呟く。そのルーテネの前にロアが姿を現した。

「あー、やっとみつけた……」

ロアが疲れたように言う。

「あら生きてたの？でも全身ボロボロね」

ルーテネがロアを見て笑って言う。確かに酷いぎまだった。

一人のザーバック兵がロア達を見つけ襲い掛かる。

「邪魔よ」

ルーテネの伸ばした手が巨大なワニに変わり、兵士を頭から喰い殺した。

「さっさとここから離れましょ。誰が戦ってるのかは知らないけど、巻き込まれるのは御免だわ」

ワニの手で兵士をムシヤムシヤ食べながらルーテネが言う。

「だな」

ロアも頷く。

ルーテネとロアは走り出す。だが二人の前にザーバックが立ちはだかる。

「逃がすかよ」

ザーバックが楽しげに言う。

ロアがザーバックに飛び掛る。しかし、ザーバックはひらりとロアの攻撃をかわずと強烈な膝蹴りをロアの腹にくらわせた。ロアがぐったり倒れる。

「雑魚は引っ込んでな」

ザーバックはそう言うのとロアなど眼中に無いと言う様にルーテネを見る。

ルーテネが腕からワニを生み出し、ザーバックを噛み殺そうとする。ザーバックは飛び上がるとそのワニの頭を蹴り台にしてさらに高く飛び、あっさりルーテネの背後を取る。

「遅いんだよ」

ザーバックは笑みを浮かべる。

ルーテネが振り返る間もなく、短剣を振り下ろした。

ドスツを鈍い音がして、ザーバックの体がぐらつく。その衝撃で短剣の斬撃はルーテネから外れた。ルーテネが見るとザーバックの片腕に短い槍が刺さっている。

ザーバックが横を睨む。十数メートル先に一人の女性がザーバックを睨んでいる。今戦って

いる謎の軍勢の一員だろう。黒く長い髪をなびかせ、背が高く褐色の肌に銀色の瞳。美しく緩やかな曲線を描く剣を片手に持って、紺色で裾の長いみたくともない異国の衣装を身に纏っている。この女性がザーバックに短槍を投げつけたのだ。

「やってくれるじゃねえか！」

ザーバックは笑いながら片方の手で腕から槍を引き抜くと、そのまま片手でへし折る。凄い力だった。折れた槍を投げ捨てると、ザーバックは女性に襲い掛かった。片手で短剣を上段から女性の頭めがけて振り下ろす。

女性は両手で下段に構えていた剣を振り上げた。剣と剣が交錯し、ザーバックの短剣が真上に弾かれる。そのまま女性は肩からザーバックに強烈な体当たり当てた。

「うおっ！」

ザーバックがうめき声を上げる。女性にしては背が高いとはいえ、おそらくはザーバックの半分にも満たないような体重の女性の体当たりで数メートル吹っ飛ばす。ザーバック。

「撤退だ！」

女性が叫ぶ。その声を受け、謎の軍勢は鮮やかに退き上げていく。

「私と一緒に来い。ここにいと死ぬぞ」

女性が倒れているロアに手を伸ばす。ロアが女性の顔を見上げる。その顔は先ほどネグロド城内で戦ったカーリアールメリアと名乗る女性と瓜二つだった。

ザーバックが軍の隊列をまとめなおす。酷いざまだった。いくら奇襲だったとはいへ、五千の兵がたかだか三百程度の歩兵部隊に斬り込まれてこのざまとは……。

「退却した敵兵を追撃しますか？」

ザーバックのものに士官がやってきて聞く。

「おう、絶対に逃がすな。一人残らずぶち殺せ……と言いたい所だが、俺達の任務はネグロード制圧だ。むかつくが奴らの事は放っておけ」

ザーバックが苦々しく言った。ザーバックの脳裏に先ほどの謎の女性の顔が浮かぶ。油断していたとは言え、ザーバックにとってあのような女に遅れを取ったことは酷い屈辱だった。ザーバックが獣のような歯を覗かせて歯軋りする。

「隊列が整い次第、ネグロード城内に入るぞ！ポールの残党兵がいるかもしれん。今度こそ油断するなよ！」

ザーバックが怒鳴った。

アヴァロン城内、元エレイン付きの侍女であるエステルは掃除を終え、箒を持って自分の部屋に帰ってきた。部屋の中には同僚のナナがいた。エステルとナナは相部屋である。侍女に個室など与えられない。

ナナは椅子に座って本を読んでいた。エステルが部屋に入って扉を閉めた。

「お帰り、エステルちゃん」

ナナが本から顔を上げて笑顔でそう言った。ナナは同い年のエステルの事をなぜかちゃん付けで呼ぶ。別にエステルは何と呼ばれようとも気にもしていないようだが。

「ナナさん、またお仕事をさぼってたんですか」

エステルが言う。エステルとナナはエレイン姫の部屋の掃除をする事になっていた。

「そう堅い事言わないですよ。どうせエレイン様はいないんだから、部屋なんか掃除しても仕方ないじゃない」

「それでも、エレイン様がいつ帰っていらっしやってもいいように、お部屋は綺麗にしておかなければいけません」

「真面目ねえ、エステルちゃんは」

「私が真面目なんじゃなくて、ナナさんが不真面目すぎるんです」

真顔でそう言うエステル。その言葉を聞いたナナが苦笑した。エステルはそう言うが、ナナは自分がそう不真面目だとは思わない。侍女だって家政婦だって、人間なら誰でも少しぐらい仕事に手を抜くことはある。だが長い間ナナはエステルと一緒に仕事をしているが、エステルが仕事をサボった事など見た事がなかった。真面目というか几帳面というか、今時珍しい人間だった。

「で、お仕事をさぼって何を読んでいたんです？」

「ああこれ？『あいあむあじゃばにーずにんじゃ』って小説よ」

「なんです、それ？」

「『じゃぼん』という国の隠密が悪者を退治する、涙あり、お色気あり、猟奇ありの痛快スパイ小説です。知りませんか？」

「知りません。好きですね、ナナさんそういうの」

エステルが言う。エステルも本は読むが、そんな題名の本は知らなかった。大方、昔に書かれたB級探偵小説なのだろう。ナナはそういう本を好んで読んでいた。

部屋の扉がノックされた。ナナとエステルが扉の方を向く。

「はい、開いてますよ。どうぞ」

ナナが椅子から腰も上げずに言った。

扉が開いた。外に立っていたのはライオネルだった。エステルが丁寧に辞儀する。ナナも椅子から立ち上がりお辞儀した。

ライオネルは軽く会釈をすると部屋の中に入った。

「ライオネルさん、ご無事のご帰還によりです。旅の道中の大体の話は城の者達の噂話で伺っております。エレイン様も御無事と聞いて私もエステルも一安心です」

ナナが微笑んで言った。

「ああ、お前達も変わり無いようでは何よりだ」

ライオネルは相変わらず無愛想な面だった。

「それでライオネル様、このような所までどの様な御用でしょうか？」

エステルは真顔で言った。エステルもライオネルと同じで滅多に笑わない。

「少し頼み事があつてきた。ただし陛下の命令ではなく私の独断での命令だがな」

「本業の方ですね」

ナナが言う。瞳がきらりと光る。エステルの表情も固くなった。

ナナとエステルは表向きはエレイン姫の日常の世話をするただの侍女だが、本当はアヴァロン王からの密命を受けて働くエレイン姫の護衛も兼ねた諜報員であった。この事はアヴァロン王以下数名の腹心しか知らない秘密である。城内や城下町で他愛もない噂話から貴族同士の密談まで様々な調べ、報告するのが彼女等の仕事だった。

「ミリアムⅡエルドリッチという人物を調べて欲しい。お前達も聞いているだろう、先日ミル

チアから我が国に亡命してきた女貴族だ」

「あの人はですか……あれなら他の諜報員が身元を入念に調べ上げたようですが別に怪しい点はなかったようですよ」

ナナが言った。

「その様ですね。しかし、元々ミルチアの内部の情報は手に入りづらいから諜報部の方々もずいぶん困っていらしたようですけど」

エステルもナナに続けて言った。

「そこをもう一度徹底的に調べなおしてくれ。どうもあの女性は何か隠している気がする」

ライオネルが言った。しかし、ライオネル自身にも、なぜ自分がそう思うのか確かな確証など何も無かったが。ただの勘だった。だが戦場ではその直感が生命を左右する。日常でも同じ事だ。

「わかりました。なんとかやってみます」

ナナとエステルはお辞儀した。

ナナが一つの部屋の前に立った。ここが領地が決まるまでの城内におけるミリアムの仮住まいの部屋だった。

ナナが扉をノックする。中から「どうぞ」と声が聞こえたので扉を開ける。

「失礼します。ベットのシーツを取替えに参りました」

ナナが丁寧に辞儀を言う。ミリアムは鏡に向って化粧をしていた。体の線にぴったりと合った黒いドレスを着ている。横目でちらりをナナの方を見た。

「昨日の子と違うわね」

「はい、あの人は他の用事ができたようなので今日だけ臨時で私です」

ナナが笑顔で答える。ミリアムはそれを聞くと興味なさそうにまた鏡の方を向いて化粧を始めた。

ナナはベットシーツを手を抱えたまま部屋の中に入っていく。ベットのシーツを取り替え始めた。

「あなた随分不器用ね」

ミリアムが鏡越しにナナを見て言う。ベットシーツはぐちゃぐちゃになっているだけでまだ取り外せてもいない。

「すいません、生来不器用なもので……」

ナナが苦笑いで言う。

「随分おめかししていらしゃいますけど、何処かお出かけになるのですか？」
ナナがシーツと格闘しながらミリアムに聞く。

「ええ」

ミリアムが楽しみに言った。

扉がノックされる。ミリアムが返事をする、扉が開いてライオネルが部屋に入ってきた。

「ミリアム殿、迎えに来た」

ライオネルがぶっきらぼうに言う。

「ライオネル様、わざわざ迎えに来てくださるとはうれいしですわ」

ミリアムが鏡台の前から立ち上がって笑顔で言った。

「仕事でちょうどそこまで来ていたのでな。ツイでだ」

「そうですか。しかし、あのライオネル様から御昼食のお誘いを受けるなんて夢のようですわ」

ミリアムが男を溶かすような笑顔で言う。昨日、ライオネルがミリアムを食事に誘ったのだ。ミリアムを部屋から出すためだ。

「お出掛けですか。私の事は気にせずどうぞ。すぐに終わりますから」

ナナが言った。だがまだ古いシーツも取り外せていない。

ミリアムはそんなナナをちらりを見たがすぐにライオネルに向き直った。

「ではいきましょうか」

ミリアムはライオネルを連れ添って部屋から出て行った。

「……さて、それじゃ始めますか」

ナナがミリアムの部屋を見回して言う。すでにベットは綺麗に整えられていた。あんなに悪戦苦闘していたシーツの取替えも、ミリアムが出て行くとももの十数秒で終わらしてしまった。

不器用に見せていたのはミリアムが出て行くまでの繋ぎだったのだ。

しかし、ミリアムの部屋は豪華な部屋だった。部屋の入り口には実物大の男性の石像が置かれてあるし、金や銀の装飾品が至る所に並べられてある。おまけにどれも骨董品で目玉が飛び出るほど値が張りそうな物ばかりだ。アンティーク家具も沢山ある。この部屋の備え付けの物などではなく、すべてミリアムが持ち込んだ物だ。この眼の前のベット一つでも、小さな民家一軒ぐらゐは楽々買えるぐらゐの価値はあるはずだ。アヴァロン王の部屋でもこんなに豪華ではないだろう。ミリアムⅡエルドリツチはミルチアの中級地方貴族と諜報部からは聞いているが、どこからこんな物を買う金が出てくるのだろう。

ナナはしばらく部屋のあちこちを調べ回った。そして一つの机の前に立つ。これも細かい装飾の掘り込まれた高そうな物だ。

ナナは引き出しを開け、中に入っている書類に目を通していく。ミルチア国内の領地の権利書だとか、ミリアムの持つ領内の農作物の取れ高を示した報告書、領地内の領民の戸籍、それにミルチア国内の貴族達と交わした膨大な数の手紙。ナナは全てに目を通してが、どれも特に怪しいと思われる物は無かった。

しかし、ナナはある事に気付いた。引き出しのそこに小さなでっぱりがあるのだ。
「二重底ですか。ありきたりですねえ」

ナナがそう呟きながら、引き出しの底を外す。底にあったのは一枚の羊皮紙だった。なにやら文字がでたらめに書かれてある。暗号だった。

ナナの頭がフル回転で働く。推理小説の好きなナナにとって、暗号解読は得意中の得意だった。この程度の暗号など何でもない。ナナは頭の中で暗号を猛スピードで解読していった。

ライオネルの自室、ここでライオネルとミリアムは向かい合って食事を取っていた。

ライオネルの部屋はミリアムの部屋と比べると質素な部屋だった。この部屋には無駄な物が一切無い。部屋の中にある物といえば、最低限の日常生活品と数冊の本と武具ぐらいの物だ。部屋が広いだけに余計に侘びしく感じる。

ミリアムが机の前に置かれた皿を見る。殆ど色のない透明なスープに薄い玉ネギが浮かんでいた。スープをスプーンですくって口に入れた。一瞬間をしかめる。舌の肥えたミリアムにとってそのスープは口にできた物ではなかった。吐き出したくなる。ミリアムがちらりとライオネルの方を見る。ライオネルは無言でスープを啜っていた。ミリアムも仕方なく作り笑いを浮かべてスープを飲む。

「変わったお味のスープでしたね。何て料理ですか？」

「ようやくスープを飲み干したミリアムが言った。ライオネルはとくに食べ終わっていた。塩スープだ。戦場で兵糧が少なくなった時、一番階級の低い兵士達が取る食事だ」

ライオネルが言う。

「ここは戦場ではないし、貴方様も雑兵ではないでしょう。貴方様はかつてはレオデグランスの総大将であったお方であらせられます。貴方様のような方がとる食事ではありません」

ミリアムが少々腹を立てていった。

「人の上に立つ者は例え自分が腹をすかせても部下には腹一杯食べさせねばならん。それが貴族としての務めだ。それに私は軍人。戦場の厳しさを忘れぬために、時おりこのような食事を取っておる」

ライオネルが言った。

「……そうですか。ライオネル様は御自分にも厳しいお方ですね。でも今度から食事を御一緒する時は私をご招待致しますわ」

ミリアムが微笑んで言った。

ミリアムが目の前のグラスを手取る。グラスに口を付けてワインを飲もうとした。その時、ミリアムの動きが一瞬何かに気付いたように止まる。グラスがミリアムの手から落ちた。床に当ってグラスは粉々に砕けた。

「あ、失礼しました」

ミリアムがそう言いながら、自分のドレスを見る。ワインで裾が濡れていた。

「ドレスが汚れてしまいました。少し着替えてまいります。すぐに戻りますので、ライオネル様はここでお待ちください」

ミリアムはそう言うと、立ち上がった。ライオネルが声を掛けようとするが、ミリアムはそのまま部屋を出て行った。

ようやく暗号を解き終わったナナが一息つく。どうやらこれは帳簿のようだった。ナナの解読が正しければ、ミリアムの名前で銀行に莫大な金が預けられている。それは小国の一年の家予算にも匹敵する金額だった。とてもじゃないが中級貴族などが持てる金額ではない。

どうやらライオネルの読みは正しいかったようだ。ミリアムⅡエルドリツチはただの亡命貴族などではない。何か裏がある。ナナはさらに部屋を探索しようとした。その時、ナナの耳に部屋の外から誰かが近づいてくる足音が聞こえた。

ミリアムが自室のドアを開ける。部屋の中には誰もいない。ベットもきちんと整えられていた。

ミリアムが机に近づく。一番上の引き出しを開け、二重底の板を取り外した。彼女の帳簿の書かれてある羊皮紙は変わらず其処にある。机の上に並べられている物や部屋の調度品の位置も微塵の狂いも無い。

「気のせい……いや……」

ミリアムはそう呟くと、机にかけてあった魔法の結び目を見た。やはり破られている。ミリアムはこの机の二重底の部分に魔法を掛けていた。誰かが二重底を開けると、離れていてもミリアムが気付くような仕掛けだった。ミリアムにとっては簡単な魔法だが、高位の魔道師でもない限り普通の人間ではまず気付かない。誰がこの二重底を開けたかは知らないが、その者もこの魔法には気付かなかったようだ。

この机を調べた者は一体誰だろう。やはり一番疑わしいのはあのシートを変えに来たメイドだとミリアムは思った。しかし、ただのメイドが一体何のために私の身辺を探る。よくあるただのメイドの出来心と好奇心と言うやつだろうか。

亡命した直後、この国の諜報員が自分の事を詳しく調べたのはミリアムにもわかってはいる。だが、そう簡単に見つかるような証拠は残していない。結局は何も出なかつたはずだ。もう諜報員も諦めたと思っていた。

それにもう一つ気になることがある。魔法の結び目が破られ、ミリアムがこの部屋に来るまで僅か数分。その数分の間に侵入者は消えた。ただの偶然だろうか？それとも誰か他の者がその侵入者にミリアムの接近を知らせたか。

どちらにしろ、そう慌てる事は無い。僅か数分でこの長い暗号を写し取る事など不可能だし、まして解読するなどなおさら無理だ。疑いは強まったかもしれないが、ミリアムのの正体を知る手掛かりまでは掴めていないだろう。

だが慎重であるに越した事は無い。石橋を叩きすぎて困るといふ事は無いのだ。それがミリアム、いやセリーンの信条だった。そうやって魔界で生きてきた。魔族としてはたいした力も持たないセリーンが十三使徒の筆頭、モードレッドの副官の地位にまでに登りつめたのも優秀な智謀と緻密なまでの慎重さを持ち合わせていたからだ。

「……やはりあのメイド、殺しておくべきね」

セリーンが美しく残酷な笑みを浮かべて言った。

その晩、ライオネル、ナナ、エステルエステルの三人は城内の今は使われていない一室に集まっていた。

「よく見つからずにすんだな。ミリアムが急に部屋に帰ると言ったときはどうなる事かと思つたが……」

ライオネルがナナに言った。

「はい、あの時はさすがに少し焦りました。でも暗号の書かれた紙をすぐに机の二重底の下に戻して、とつさに扉の近くにあった石像の影に隠れたんです。灯台下暗しと言って、人は案外自分の近くにあるものには注意を向けないものみたいで、部屋の入り口に立って部屋の中を見回すミリアム様もすぐ側にある石像の影にまではよく見なかつたようです。で、ミリアム様が部屋の中に入ってくると同時に、私は閉まっていく扉に身を滑り込ませました」

ナナが微笑んで言う。たいしたものだとライオネルは思った。簡単に言うが、急場で中々できる事ではない。

「でも、危険を冒したかいはありましたよ。面白い物が見つかりました」

ナナはそう言うのとポケットから一枚の紙を取り出した。

「この紙は？暗号の書かれた紙は元に戻してきたのだろうか？」

ライオネルが不思議そうに聞く。

「はい。でも私にとってこの程度の量の数字と文字を一時的に記憶するなんて別に難しい事で

はないですよ。暗号を解読して記憶したものを、そのままこの紙に書き上げてみました」

ナナが何でもない事の様に言う。超人的な記憶力だった。

「……帳簿のようだな」

「みたいですね。ミリアム様の銀行口座のお金の動きを記録したものとみたいです。誰からかはわかりませんが、ここ最近何度も口座に大金が入金されてますね。それが集まって凄い額になってますよ。ミリアム様はこの国全部を買い取ってしまわれるおつもりですかね」

ナナが冗談めかして言った。ライオネルが唸る。さすがに其処までは無理だが、それでも小さな国ぐらいなら本当に買えてしまえそうな金額だった。これだけの資金を集めて一体エステルは何を企んでいるのか。そもそもこれだけの莫大な資金をどうやった集めたのだろう。

「エステル、そっちは何かわかったか？」

ライオネルがエステルの方を向いた。

「こちらは特に何も……ミリアム様の身元をもう一度、一から洗いなおしてみました。疑わしき所は何も無いですね。ミリアム様が亡命時に持ってきたミルチア国における貴族の証明書も領地の権利書も本物です。我が国の諜報員が調べたところ、確かに亡命した後ミルチア内にあるミリアム様の領地はお取り潰しになっていますし。過去にもミリアム様と現ミルチア国王であるアルテオム王との特別親しい繋がりはないようです。むしろ、アルテオム王がミルチアの王位に着く前から、アルテオム王とミリアム様は国政における方針で対立していたようで、この事もミリアム様の亡命の動機としては十分です。ミリアム様がアルテオム王の密名を受けた

「作員であると言う可能性は低いと思います。ただ……」

「ただ、何だ？」

ライオネルがエステルに聞く。

「……ライオネル様はミリアム様を見てどう思います？」

エステルが控えめに聞いた。

「見てどう思う？それは容姿の事か？それなら確かに稀に見るほどの美人だと思うが……」

「そうですね。ミリアム様は見ての通り絶世の美女で、ミルチア国内でもちよっとした噂になるほどだったそうです。でも他に何か特徴は思いつきませんか？」

「？」

ライオネルが首をかしげる。

「そう言えばあの方は随分派手ですね。高そうな宝石や貴金属をじゃらじゃら付けてるし、部屋の中も金目の物だらけでしたね」

ナナが言った。

「そうなんです。でも私が今日見つけた、数ヶ月前までミリアム様の領地で暮らしていたという人に聞くと、ミリアム様は貴族としては随分質素な人だったそうです。その人はミリアム様の事は遠目で何度か見た事があるだけです。目に付くような派手な装飾品を身に付けていたところは一度も見た事が無いという事です」

エステルが言った。

ライオネルが考え込む。僅か数が月で人の性格がそれほど変わるだろうか。

「……今この国にいるミリアムと名乗っている人物はミルチア貴族のミリアムⅡエルドリツチとは別人だという事か？何者かがミリアムという人物になり代わっている……」

「その可能性はあると思います。なぜそんな事をしているのかまではわかりませんが……やはりミルチアの工作員でしょうか？」

エステルが答える。

「……ナナ、その帳簿に書かれているミリアム名義の口座は何処の銀行かわかるか？」

ライオネルがナナに言った。

「この紙には銀行の名前までは書かれていませんけど、これほどの大金が動いていれば、レオグランデス国内にある銀行なら調べればすぐにわかると思います」

ナナの言葉にライオネルは頷いた。

「ナナはまずその銀行を特定してくれ。エステル、君はそのミリアムの領内に住んでいたという元ミルチア人を連れてきてくれ。その者にミリアムの顔を見てもらえば偽者かどうかはつきりする」

ライオネルが立ち上がった。サンダルークに向う援軍の準備が整いライオネルが再びこのレオデグランデスを旅立つまで後数日、その間にミリアムの尻尾をつかめるだろうか……なんとしても化けの皮を剥がしてみせる、ライオネルの表情が物語っていた。

「いやー、美味しいな。見た事もないような料理だけど」

ロアの前に空になった皿が積み上げられる。ロアが満足げにお腹に手を当てた。

「……南国人の者はみなこんなに食べるのか？」

先ほどロア達を助けてくれた謎の女性が驚いたようにロアを見ている。もちろんロアの横にいるルーテネはそんなに食べていない。

「さて、そろそろ聞かせてくれない。貴方達何者？」

ルーテネが女性に聞く。

ザーバックの軍勢から逃れたロア達は、謎の女性に連れられ夜通し歩き昨晚遅くこの集落にたどり着いた。渓谷に囲まれた秘境のような集落だった。ロアが、おまけにルーテネもだが、驚いたのはそれが自分達にはまったく見慣れぬ文化を持つ人々だったことだ。建物は木と藁と土を主としてできている。服装もロアたちの着ているものとはずいぶん違う。

集落についたロア達は連れられるままに一つの屋敷に入り、その一室で病人のリユネットを寝かせた。ロア達が黙って座っていると一人の老婆が部屋に入ってきた。ロア達の体の傷に怪しい薬草を塗り込み、包帯で巻いた。治療が終わり老婆が出て行くと、代わりに食事が運ばれてきた。それをロアはばくばくと食っていたというわけだ。その間部屋の中にはロアとリユネット、それにロア達を助けてくれた謎の女性。

ルーテネの問いにマユラが口を開いた。

「私の名前はマユラⅡアルⅡメリア。ヴァルナの戦士にして族長」

「ヴァルナですって！」

ルーテネが驚きの声を上げる。

「なんだこの人たちのこと知ってるのか？」

「古い書物に名前だけが残っている伝説の部族よ……ただの伝説だと思ってたけど、まさか実在するのわ……」

ロアに答えるルーテネ。

「南国人達にとつては我等はすでに忘れられた存在なのだ。もつとも我等もずっと他の種族に存在を隠して生きてきたのだから仕方なきことか。この地を治めている者どもも我等の事は知らん。ただ一人を除いてはな……」

マユラが呟く。確かに魔族の幹部であるルーテネでさえ、自分達が治めている魔界の地にこんな部族が存在していることなど知らなかったのだ。他の魔族達も知らないだろう。だがそれも当然といえば当然だった。ここは魔界の中でも僻地も僻地。自然環境は厳しく、荒れて乾いた大地以外何もない。こんな地に誰も好き好んで来ないだろう。強いてあげるとすれば少し離れたところにポールの居城ネグロードがあるくらいだ。

「我等はずっとこの地で暮らしてきた。気が遠くなるような長い年月。もう何千年もな」

「ふーん、でもこんな土地じゃ生きていくのは大変だろ。土地は痩せてるし、水確保するだけでも大変だ」

ロアがマユラに向かって言う。

「そうだな。確かにこの土地では雨は非常に少ないし、気温の変化も激しい。ろくな作物は育たないし、狩りとなる獲物もほとんどいない。だが、我等はこの地を離れるわけにはいかん」
「へえ、なんで？」

「それは話してはならんことになっておる」

マユラが言う。その時、部屋に一人の老婆が入ってきた。異国の衣装を着て体中に装飾品をつけている。マユラがその老婆を見て立ち上がる。

「ほほほ。マユラや、そう硬いことを言わんでもいいじゃろう。こうして異国の民を客として迎え入れるのは数百年ぶりじゃ。これも何かの縁かも知れん」

「これはラト様。どうしてこのような所に」

「ほほほ、異国の客が来ておると聞いての。ちよいと会ってみたくなったのじゃ」
ラトと呼ばれた老婆は人のよい笑みを浮かべてロア達を見た。

「だれだ、このばーちゃん？」

ロアがマユラに聞く。

「無礼者！最長老様だ」

マユラがロアに言った。

「異国のかたや、貴方達はなぜ我等がこの土地を離れられない理由を聞いたが、実を言うとの我等もとつくにその理由は忘れてしまった。遠い昔、我等はこの世界で繁栄を極めた民族だと伝えられている。だが我等は一つの罪を犯した。その罪を贖うために我等はこの土地に隠れ住

むことになった。そうして罪が許されるまで二度とこの土地を離れてはならんと言われている。だがどんな罪を犯したのか、いつになればその罪は許されるのか、そのことはもう伝えられておらん。あまりに古すぎて、もう忘れ去られてしまったのじゃ。そうして今では我等の民族もこの集落におるわずか三千人程度になってしまった」

ラトが笑って言った。

「伝承では」

マユラがラトに続けて言った。

「ふーん、気の長い話だな」

ロアが興味なさげに言う。

「そうじゃ、異国の方々、おつれの若いお嬢ちゃんの事じゃがの……ひとまずは落ち着いたが、容態はよくない。おそらくは吸血鬼に噛まれたんじやろうか、このままでは死んでしまうぞ」
ラトがリユネットの事について静かに言った。

「吸血鬼の事を知っているのか？」

ロアが驚いたように言った。

「もちろんじゃ。我等にとつては非常に縁深き者どもよ」

「ネグロードの城であなたとそっくりの吸血鬼を見たけど、そのことと関係あるの？」

ルーテネがマユラの顔を見て言う。ロアもマユラの顔を見た。確かにネグロード城で出会ったカーリアと名乗る女性と今日の間にいるこのマユラは他人とは思えない。二人は兄弟と言っ

てもいいほどよく似ていた。

マユラが複雑な表情でラトの顔を見る。

「そうか……カーリア様はまだあの城にいらっしやるのか……お勞しき事よ……」

ラトが悲しげに呟いた。

「どういふ事？私達にもわかるように言ってくれない？」

ルーテネがラトに向つて言う。

「カーリアは六百年前、我等の族長だつたお方だ」

マユラが言つた。

「うむ、まだこの婆がまだ右も左もわからぬような小娘だつた頃にお使えさせていただいた方よ」

ラトが懐かしげに言つた。ロアが指を繰つて、驚いたような声を上げた。

「ちよつとまでよ！六百年前だろ。婆ちゃん、いったい何歳なんだ？」

「ほほほ、我等の一族はお主等南国人と比べて少しばかり長生きでの。この婆はかれこれ六百年三十二歳になるかの」

ラトがなんでもないことのように言う。ルーテネが低く呻いた。魔王モートから力を与えられた十三使徒は別格にしても、普通の人間で平均寿命は7、80歳程度。他の種族でも600年も生きる種族はそういない。このヴァルナとかいふ民族は見たところ種族としては人間だ。なのになぜそんなに長寿なのか。

「六百年前……そうか！ポールスが発明した吸血鬼とは、貴方達の遺伝子を使っているのね」
ルーテネが言う。ラトが頷いた。

それならポールスが六百年前に突然吸血鬼へと進化したこと、そしてポールスの居城がこんな魔界の僻地にあることも納得がいく。魔族の中でも彼だけはこの秘境に住む民族を知っていたのだ。ポールスは彼らの遺伝子を使い吸血鬼という種族を作り出した。そうしてこの秘境を誰にも言わず隠していた。

「確かに我等は普通の人間よりも寿命も長いし、肉体的にも優れているようじゃ。我等は別に血など吸わんがの。ポールスはその我等の血、それもよりにもよってカーリア様を実験台にして忌まわしき吸血鬼という種族を作り出したのじゃ」

そう言うラトは静かに語りだした。六百年前の話を……。

太陽が顔を出したばかりの清々しい早朝。まだ成人する前の幼きラトは水の入った木の盆を持ち一つの部屋の前に立った。木と紙でできた戸を叩く。

「失礼します」

ラトが戸を開けて部屋に入る。中では一人の女性が着替えていた。

「おはようございます。カーリア様」

ラトが深々とお辞儀をする。

「おはよう、ラト。今日もいい天気みたいね」

着替え終わったカーリアが窓から空を見る。カーリアの横顔が朝日を受けてまだ薄暗い部屋に照らし出される。

カーリアはこのヴァルナの一族の族長だった。だがまだ若い。美しく凛々しい顔立ちだった。伝えられている中では最年少で族長に就任したそうだ。彼女が若くして族長の座に推されたのは何より強かったから。カーリアは剣の天才といわれていた。カーリアの父といつていい歳の戦士達でも剣を持てばカーリアの足元にも及ばない。

ラトはそんなカーリアの屋敷に奉公人として働いていた。ラトの両親はラトが幼い頃、村を襲った獣に殺された。カーリアは身寄りのいないラトを引き取り、弟子として時たま兵法などを教えている。

「このところ雨が少ないですね」

ラトが窓の外を見て、そう言いながら机の上に水の入った盆を置く。

「雨が少ないのはいつものことだろう」

カーリアはそう言ってラトの持ってきた水で口をゆすぎ、顔を洗う。ラトが白い布を差し出した。カーリアが受け取って顔を拭く。

「でも少なすぎます。田の土にひびが入ってきてますよ。このままでは今年の作物は全滅です」

ラトが心配そうに呟いた。

「我々はずつとこの土地で暮らしてきた。なんとかなるさ」

カーリアがラトの頭を撫でて言う。

「今日のご予定は何かございますか？」

ラトがカーリアに聞く。

「特に無いな。いつも通り兵法の鍛錬だ」

カーリアはそう言つて腰の帯に剣を下げる。

「長老様方がカーリア様をお呼びになっています」

「そうか。なら今から行こう」

カーリアが部屋を出る。ラトもその後続いた。

カーリアは最長老の部屋に入って正座をする。カーリアの前には5人の老人が胡坐を組んで座っていた。カーリアが軽く頭を下げる。

「何か御用でしょうか？」

「ふむ。実は、南の森に異形の獣が出ての。今朝早く木の実を取りに行つておつたササとリャンが襲われた。ササは無事だったが、リャンはその獣に殺されたそうじゃ」

「リャンが？」

カーリアが驚いて声を上げる。リャンとササはカーリアの友人だった。

「それでの、族長のお主にその獣を退治して欲しいのじゃ」

老人の一人が言う。カーリアは頷いた。

「わかりました。すぐに行ってまいります」

「頼んだぞ。それで供には誰を連れて行く?」

「私一人で行くつもりです。たかが獣一匹、どうということもないでしょう」

カーリアが長老に言う。

「お主がそう言うならかまわんが。お主は我等ヴァルナの戦士の中でも最高の戦士じゃからの。だが気をつけよ、カーリア。最近、天の星の動きを見るとどうも不吉な前兆が現れておる」

老人の一人が心配そうに言った。

「はい。十分気をつけます」

カーリアは老人達に一礼すると、立ち上がって部屋を出た。

部屋の外で待っていたラトがカーリアに駆け寄る。

「何のお話でした?」

「南の森に獣が出てな。リヤンが死んだらしい」

「リヤン様が……」

「私はこれからその獣を退治に行く。ラト準備をしてくれ」

ラトは何か考え込んでいたが、意を決したように口を開いた。

「カーリア様、私も連れて行ってください」

「何を言う。おまえはまだ戦士集団にも入れぬ歳だ。危険すぎる。連れて行くわけにはいか

「毎日剣の稽古は続けています。お邪魔はしません。どうかお願いします」

ラトがその場に土下座する。

「……わかった。だが私の側を離れるなよ」

カーリアが諦めたように言った。

「はい。ありがとうございます」

ラトがうれしそうに顔を上げた。

「リヤンが殺されたというのはこの辺りか……」

カーリアとラトが立ち止まる。そこは南の森の中の奥地。地面には血が広がっていたが、リヤンの死体は無い。

「血はこちらに続いているようだな……」

カーリアが地面についた血の後を追って草むらを掻き分けていく。ラトも剣を握り締めてその後が続いていった。

「あそこか……」

カーリアが洞窟を見て呟く。血はその洞窟に続いていっていた。

「ラト。たいまつを用意だ」

ラトが荷物袋の中からたいまつを取り出す。火打石で火をつけた。

カーリアとラトはたいまつをかざし、洞窟の中に入っていく。ひやりとした空気が肌を流れ

ていく。カーリアはたいまつを持ってずんずんと進んでいくが、ラトは逃げ出したいぐらい恐ろしかった。

どれくらい進んだらうか、突然カーリアが足を止めた。ラトが前方を見る。暗闇の中に光る六つの目。

耳を塞ぎたくなるような咆哮が洞窟中に響き渡り、異形の獣がこちら歩いてきた。ラトは驚いて地面に腰をつく。

驚いたことにその獣は目が六つあった。全体的な姿は虎の様だが二本足で立っている。おまけに足とは別に手が4本あった。耳まで避けた口からは不ぞろいの尖った牙が見えている。そしてなにより虎よりかなり大きい。立ち上がった姿は5メートル近くあった。こんな獣ラトは見たことが無い。少なくともこの地域に生息する獣ではなかった。

「ラト。下がっている」

カーリアがたいまつを投げ捨て、腰から刀を抜いた。獣の目を睨み、すり足で進んでいく。ラトはというと恐怖のあまり腰が抜けてしまって立ち上がることもできなかった。

獣が喚き声と共にカーリアに向って腕の一本を振り下ろす。カーリアは身を屈めてかわすと、すぐさま襲い掛かってきた第二撃目の獣の腕を刀で切り落とす。獣の悲鳴が洞窟内にこだまする。獣は残った三本の腕を滅茶苦茶に振り回し始めた。カーリアがいったん獣と距離をとる。(さすがはカーリア様だ)

ようやく立ち上がったラトが思う。最初はあんな大きな獣にどうやって立ち向かうんだろう

と心配だったが、どうやら獣はカーリアの敵ではなさそうだった。ラトが安堵の溜息をつく。その時、獣が一際大きく吼えた。獣の前に数本の炎の矢が現れる。炎の矢は凄まじいスピードでカーリアに向っていく。

「危ない！」

ラトが驚いて叫んだ。

だがカーリアは冷静だった。美しい動作で刀を振りすべての炎の矢を打ち落とすと、跳躍した。

あっさり獣の頭より高く飛ぶと、獣の額に向けて刀を振り下ろす。獣の頭が二つに割れ、獣は悲鳴も上げることができずどさりと倒れた。そのままピクリとも動かない。

ラトがカーリアに駆け寄る。カーリアは懐から紙を取り出し刀についた獣の血を拭き取った。血で穢れた紙を投げ捨てると、獣の死体を見下ろした。

「この獣は一体なんだ？魔術を使う獣など聞いたことが無い」

カーリアが呟いた。

ラトもこのような獣は聞いたことがなかった。カーリアは獣から目を離すとさらに洞窟の奥へと進んでいく。やがて洞窟の一番奥へと到達する。そこには様々な動物、そして人間の骨が山のように積まれていた。ここがあの獣の住処だろう。

「カーリア様！あれを！」

ラトがたいまつをかざし、前方を指さす。積み重なる骨の間に一人の人間が倒れていた。

カーリアが駆けよる。

「まだ息があるな」

カーリアが男の顔を見る。どう見てもカーリア達ヴァルナ人とは肌の色や顔の造りが違う。これが話に聞く南国人という奴か。カーリア自身もう百年以上も生きてきたが、ヴァルナ人以外の人間を見るのはこれが初めてだった。南国人の顔は我々ヴァルナ族より彫が深いようだ。南国人の年齢というのはよくわからぬが、まだ成人してまもない位だろう。男は額から血を流しているが、それほど大きな怪我ではないようだった。

カーリアが男を抱き上げる。

「どうするんです？」

「ここに放っておくわけにもいくまい。集落に連れて帰る」

「これが南国人という奴ですか……ずいぶん変わった顔していますね」

ラトが男の顔を覗き込んで真剣な表情で呟く。

「私も実際に見るのは初めてだがな。まあ、顔の造りは違っていても同じ人間だろう」

カーリアはそう言って男を担いで歩き出した。

洞窟から連れ帰った男は意識を取り戻すことなくすでにまる一日。カーリアの自宅のあいだにある部屋に寝かせていた。ラトが男の顔を覗き込む。静かに寝ているが、この男はいつになつたら目を覚ますのだろう。

ラトがそう思っていたところ、ラトの眼の前で男がゆっくりと目を開けた。ラトが驚いて離れる。男はしばらく呆然と天井を見つめていたが、やがて上半身を起こした。ラトの顔をじつと見る。

「……ここは？」

「え、えっと、ここは……」

ラトが慌てて何を喋っていいかわからない。その時、部屋にカーリアが入ってきた。

「気付いたようだな。ここはヴァルナの集落だ」

カーリアが男を見ていった。今までこの男の顔をよく見なかったが、こうして見ると中々ハ
ンサムだ。背も高い。しかし、やつれた顔、落ち窪んだ目が見ている者に陰気な感じを与える。
「ヴァルナ……そうか……ついに見つけたのか……」

男がカーリアの顔を見つめて言った。珍しい物でも見るかのようにじつと目を離さない。ラ
トからすればこの南国人の方がよほど珍しかった。ラトも少し怖いような気持ちで男の顔を見
る。

「カーリア様。集会の方は？」

「ラトがボールスから目を離して言う。」

「意見がばらばらで、まるで収拾がつかんな」

カーリアが疲れたように溜息をついた。カーリアが男を連れ帰ってからというもの、ヴァル
ナ族の中では男の処遇について様々な意見が対立していた。もっとも男を即刻集落から追い出

せという意見が大半だったが。それも仕方ないことだとカーリアは思う。なにせこの数百年、このヴァルナの集落に異国の者が入ったことはないのだ。みんなこの招かれざる訪問者をどう扱ってよいかわからずにいた。中には男を殺してしまえという強硬な意見もあった。

「……」

「お主は何も心配することはない。傷が治るまでここでゆっくりしていけばよからう」
無言でカーリアを見つめ続ける男にカーリアが言った。

「お主、名前は？」

「……ボールス」

男が言う。

「変わった名前だな。ずっと南から来たのだろうか？」

「……そうだが」

「南の国々とはどんなところなのだ？ 私はこの土地から出たことがないから、外の世界のこと
はまったく知らないんだ」

カーリアが興味ありげに聞く。

「君達はヴァルナ人か？」

ボールスはカーリアの問いには答えず、逆に質問する。

「そうだが？」

カーリアがそう答える。そのカーリアとその側でおどおどとしているラトを頭の上から足先

まで見つめた。

「……なるほど、我々とそれほど変わらん」

ボールスがぼそりと呟いた。そのまま黙り込む。

「……」

ラトのボールスに対する第一印象は暗い奴というものだった。

カーリアの前にはヴァルナの長老が並んで座っている。カーリアの横にはボールス。彼は正座に慣れていないようだった。正座したまま、時たま足を動かす。

ボールスが長老達に呼び出されたのだ。ボールス一人では心配なのでカーリアも着いてきたというわけだ。

「ボールスとやら、お主が獣に襲われ怪我をしたという事はわかった。それでお主はこのような僻地に何をしに来たのだ？」

長老の一人がボールスに向って言う。

「私は独自に生物学の研究しています。ある古文書で貴方達ヴァルナという伝説の民族の存在を知り、ぜひともこの目で見たいとずっと貴方達を探して旅してきました」

ボールスの答えに老達がざわつく。

「南国の者達にまだ我々の事が伝わっておるとは……」

「由々しき事態じゃな」

「どうする？」

長老達が其々話し合う。長老達の真ん中に座る老人、ヴァルナの最長老が口を開いた。

「我々ヴァルナもほんの二千年ほど前までは南国人達と細々とながら交流があったと聞く。驚くほどのことでもないじやろう。ポールスとやら、その古文書とやらにはこの地の詳しい位置が書かれてあったかの？」

「いえ、ただ北の果ての地にあると書いてあっただけです。我々南部の間でヴァルナの名を知っている者はごく少数でしょうし、その存在を信じているのはさらに僅かでしょう」

「そうか。ならば心配は要るまい。あとはこの者の処遇をどうするかじゃが……」

最長老がカーリアを見て言った。カーリアが頭を下げる。

「最長老様には寛大な御処置を願います」

カーリアが言った。

「うむ。一度助けた以上、見捨てるのは我々ヴァルナの信義に反する。若い者の中には血気にはやっている者もいるようじゃがの。怪我が完全に治るまではお主の所で保護してやるがよい。ここから出て行ってもらうのはその後でもよい。ただし、ポールスとやら。南国に帰っても決して我等の事を話してはならん」

「はい」

ポールスが言った。

「話は以上じゃ。下がってよい」

ポールスとカーリアが立ち上がる。

「カーリアはまだ少し話がある。この場に残れ」

最長老が言った。カーリアが立ち止まる。ポールスは最長老とカーリアをちらりと見て、部屋から出て行った。

「なんででしょう？」

カーリアが再び座って言った。

「あのポールスとかいう男、お主はどう思う？」

最長老が静かに言った。

「なんとも答えられませぬが……」

「わしが空の星の動きを見るに、何か南の地で大きな動きが起こっているようじゃ。その動きが我等にどう影響を及ぼすかはわからぬが……何か胸騒ぎがする。我等ヴァルナにも大きな変革が起こりそうな気がするのじゃ。古き予言では遙か南から来た南国の王が我等の罪を許し、我等をこの地から解き放つとされておる。どうみてもあの男は王には見えぬがな」

「何を考えているかわからぬ男のようですが、それほど邪悪な男には見えませぬ。あの程度の獣に怪我を負わせられる事から考えても、それほど戦士というわけでもないようです。まず案ずるほどのことは無いかと」

「……そうか。お主がそう思うならそれでよい」

最長老は静かに言った。そのまま黙り込む。

「しかし、万一あの男が将来この里を征服するために軍勢でもつれて来たらどうする？」

別の長老の一人がカーリアに言った。

「戦うまでですな」

カーリアが当たり前のように言った。

「勝てるという保障は？」

「そんなものではありません」

「ならやはり万が一を考えてボールスという男はここで殺した方がよいのではないか？」

「それはヴァルナの信義に反します」

カーリアがきっぱりと言った。

「だいたい戦士たる者、あんなつたらどうしようとか、こうなつたらこうするとか、そんなつまらぬ事は考えぬがよいと思います。戦士に必要なものは考えではなくて実行です。ここでボールスを助けて、それが元で将来南国から軍勢が押し寄せてきてもいいではありませんか。我等は戦って死ぬだけです。恥ずべき事は何も無い。だがもしここでボールスを斬れば我等ヴァルナにとっては恥です。恥は我等ヴァルナにとって死よりも忌むべき物の筈」

カーリアの堂々とした口調に長老の一人は閉口してしまった。

「カーリアの言うとおりじゃ。我等は自分の信義と良心に従えばよい。ボールスという者は助ける。これは決定じゃ」

最長老がびしやりと言った。他の長老達は黙り込む。

「ありがとうございます」

カーリアが平伏する。そして最長老の元から下がった。

カーリアが部屋から出るとボールスの姿は其処にはなかった。慌てて屋敷の外に出る。ボールスは集落内を物珍しそうに見歩いてた。ボールスを遠巻きに取り囲むように人だかりができた。やはりみな南国人が珍しいのだろう。ボールスはというとそんな自分を見つめる沢山の視線などまるで気にしていないようだ。

カーリアが軽く走ってボールスに追いつく。

「ボールス、外に出るときは私に声を掛けてくれ」

「何故？」

「何故って……先ほど最長老も言っておられただろう。お主を危険人物と見て隙あらば害をなそうとするものもおらぬとは限らぬのだ」

「つまらんことだ」

ボールスがどうでもいいことのように言った。

「……ずいぶん腕に自信があるのだな。お主はどう見ても戦士とは思えぬが……」

「私は野蛮な戦士などではないよ。強いて言うなら学者だ」

ボールスはどんどん先に進んでいく。カーリアも早足についていった。

「この住民は勤勉だな。みなよく働く」

ボールスが集落内を眺める。男性も女性も人々はみな農業、鍛冶、または武術の稽古に精を

出している。

「そうか？いたって普通だと思うが。お主等南国の国々ではどうなのだ？」

カーリアがボールスに聞く。

「酷いものだ。貴族どもは働きもせず、下々の税で贅の限りを尽くし、国家の役人どもは自国の危機も考えずに腐敗しきっている。そのしわ寄せで最下層の奴隷達の生活は酷いものだ」

ボールスが言う。カーリアはその言葉を聞いて黙りこんだ。

「……私はいつかは南国の国々に行ってみたいと思っていたが、今の話を聞くとどうもそれほど良い所ではないようだな……」

「ああ。もっとも今はそれよりさらに酷いことになっているがな」

「とうとうと？」

「戦争だ。君は本当に何も知らんのか？」

「……」

「まあ、こんな北の奥地に閉じこもって、情報は情報が入ってこないのも当たり前か。今南方では大規模な戦争が起こっている。二十以上あった国々が、たった一人の奴隷出身の男の手によって制圧されようとしているんだ。彼はまさしく英雄だよ」

「ほう、南国にも凄い戦士がいるようだな。その者の名は？」

「モート。今では霸王モートと呼ばれている」

ボールスが言った。

「すでに南方の国々の半数はモートの手に落ちた。今では彼の有する軍勢は百万を超える。残った諸国は同盟を組んでモートに対抗しているようだが、私が見るに霸王モートの大陸制圧は時間の問題だな」

「……」

カーリアが暗い顔で考え込む。

「心配することはない。まさかモートもこんな僻地に君達のような民族が住んでいるとは思わないだろう。ここは見つからんよ」

ポールスがカーリアに言った。しかし、それでもカーリアの表情は暗いままだった。

「……我々ヴァルナは気が遠くなるような昔から存在しているが、外の世界から忘れ去られた化石のようなものだ。私だってもう百年以上生きているが、いまだにこの集落から歩いて五日程度の距離までしか行った事が無いのだから」

そのカーリアの言葉を聞いたポールスが驚きで目を見開いた。

「百年だと！君は一体幾つなんだ？」

「百二十一歳だが。それがどうかしたか？お主も同じような歳だろうか？」

「まさか！私はまだ二十を少し過ぎたばかりだよ。普通の人間はせいぜい生きて百までだ」

「……驚いたな。まさか南国の人間はその様に寿命が短いとは始めて知った」

カーリアが言う。

「……それに君は昨日あの獣を倒した。あのような獣は南方の戦士達なら十人がかりでも倒せ

ぬだろう。君達ヴァルナ人は身体能力でも我々より遥かに優れているようだな。見た目はそれほど違わないのに何故こうも違うのだ。そんなこと進化の論理から考えるとありえんのだが……」

ポールスがカーリアを見つめ唸った。そのまま何か考えるように黙って先に進んでいく。

「……そうだ。昨日君が倒した獣を見てみたいのだが」

ポールスが突如として言った。

「ああ、あれか。あの獣の死骸なら村の連中が持ち帰ってそのまま捨て置いてあるはずだが。あんなもの見てどうする気だ？」

「案内してくれ」

ポールスは立ち止まってカーリアに言った。

「君はこんな獣を見たことあるか？」

獣の死骸の元までやってきたポールスが言った。目が六つ、腕が四本あるこの奇妙な獣は死んでいても気味が悪い。そんなことはお構いなしに、ポールスは懐から細いナイフを取り出すと、死骸の側にしゃがみこんで獣の腹を切り開き始めた。カーリアがなぜそんなことをするのかといった表情でポールスを見ている。

「見たことがないな。少なくともこの地に生息する獣ではない。南国の獣ではないのか？」

「まさか。こんな奇妙な生物は南国にはいないさ。私は生物学者だがこんな生物は見た事も聞

いたこともない」

「ならこの獣は何処から来たのだ？」

「おそらくこれが今噂になっっているモートの魔物なのだろうな」

「魔物？」

「ああ。噂ではモートは軍の増強のために、自らの強大な魔力を使って異界から異形の生物を召喚しているようだ。それが時たま野生化し、人を襲うと聞いたことがある」

ボールスが一通り獣の死骸を調べ終わり、立ち上がった。

「異界から生物を召喚だと？そのようなことが人間に可能なのか？」

カーリアが驚いて言う。

「わからん。だがこの獣の生体は明らかにこの世界のものではない」

ボールスが獣を見つめていった。

「私はこの集落にしばらく滞在しても良いのだな？」

「ええ、怪我が感知するまではな。それまでは私の宅に住めばいい」

「そうか。ならばこの獣の死骸を君の自宅まで運ばせるように言ってくれないか。こいつをもう少し詳しく調べてみたいんでね」

ボールスが暗い顔でにやりと笑った。

ボールスがこの村に来てから数日たった。ボールスは昼間は何処か外を出歩き、集落の周り

の植物の採集や小動物を捕まえてきた。夜は部屋にこもりつきりで、何をしているのかは知らないがほとんど寝てもいないようだった。

その日の早朝、ラトが朝食をボールスの部屋まで運んでいった。扉をノックする。

「ボールス殿、朝餉をお持ちしました」

ラトが扉越しに言う。部屋の中から低い声でどうぞと返事があった。

ラトが部屋の中に入る。ボールスは机の前に座って、試験管を振ったり紙に何か書き込んだりしていた。ラトが机の上まで食事を持っていく。ラトが紙を覗き込んだ。

「あれ？それ何です？」

ラトが興味深げに聞く。

「なにがだね？」

「それです。その紙に書いてある記号みたいなものですよ」

「記号……まさか君達は文字というものを知らんか？」

「へえー、それが文字ですか。話には聞いたことがあります。見たのは初めてですけど」

ラトが紙をまじまじと見つめる。ボールスが驚いた表情を浮かべる。

「見たのも初めてだと？まさか君たちは……」

「はい、我々ヴァアルナの一族は文字を使うことを禁じられています。もちろんこの村に文字の書かれたものなど一切無いでしょう。文字の読める人も一人としていません」

「それも君達がかつて犯したという罪の罰なのか？」

「はい。そう伝えられています」

「しかし、それだと君達が伝えている自らの歴史や伝承はどうして残っているのだ？」

「すべての伝承は長老から次の長老へ口伝で伝えられていきます」

「なるほど。道理で君達の伝承がほとんど残っていないわけだ。あまりに非効率的すぎる」

ボールスが呟く。

「しかし、妙な話だな。なぜ文字の使用を禁止する。一体誰が何の為に？君達に罰を与えた者とは誰だ？」

「さあ？古すぎて誰も覚えていません」

ラトが微笑んで言った。その時、扉が開いて部屋の中にカーリアが入ってくる。

「あいかわらず研究という奴か……ご苦労なことだが、部屋の中ばかりにしていると健康に悪いぞ」

カーリアがボールスに言った。ラトは礼をしてボールスの部屋から出ていった。

「日光に当るより、私はこうやって部屋にこもっている方が好きなのだ」

「変わり者よな。まあいい。それであの獣について何かわかったのか？」

「……実に面白いサンプルだった。この世界の生物とは遺伝子レベルからまるで違う」

「ほう？」

「あんな魔物が野生化しているのなら、この世界の生態系は大きく破壊されるだろう」

「……それは困るな。あの獣は食えるのか？」

「なぜ？」

「狩りは我等の重要な食料源だ。あんな怪しき獣が増えて他の獣が減ると、狩りの獲物が減って困る」

カーリアが真顔で呟くと、ポールスは笑った。

「ははは、それもそうだな。まあ美味いかはわからんが、食べれんこともないだろう」
「それを聞いて安心して」

そこにまたラトが部屋に入ってきた。まずカーリアに一礼する。その後、ポールスのほうを向いた。

「ポールス殿、お客様です」

「客？誰だ？」

ポールスではなくカーリアがラトの言葉に反応した。

「ヨウレン様です。それとコウ様」

「ヨウレンか……」

カーリアがあまりおもしろくなさそうに呟いた。

ヨウレンはカーリアより少し年上の男である。一応戦士団に所属している者だが、剣の腕よりもヴァルナ人の中では珍しい学者として通っている。もちろん剣の腕も相当なものだ。特に槍の扱いに長け、槍を使わせたら右に出る者はいないといわれていた。ヨウレンは文武両道で一部の若いヴァルナ人達に異様な人気がある。コウはそんなヨウレンの弟子で、熱狂的な信者

だった。こちらも劍の腕はかなりのものだ。

「……あのどうしましょう？奥の部屋で待つていただいておりますが……」

考え込んで黙ってしまったカーリアにラトが言った。

「……帰ってもらえ。ボールス殿は今日は体調が優れぬとでも言つて」

カーリアはヨウレンが嫌いだった。何より戦士なのに学者風を吹かしているところが気に入らない。

一方のヨウレンもカーリアの事を嫌っているようだ。もつともそんな仕草はまるで表に見せない男だが。どんな嫌いな相手にもその者の前では丁寧な物腰を崩さない。そういう所もカーリアの気に入らないところだ。

昔、カーリアがまだヴァルナの族長になる前、カーリアとヨウレンのどちらを次の族長にするかで里中の意見が割れた事があつた。一方は劍の天才。もう一方は万事に明るい秀才。中々事は決まらなかつたが、結局最長老の一言でカーリアが次の族長に決まつた。ヨウレンはその事でカーリアだけでなく最長老まで恨んでいるという話もあつた。あくまで噂であるが。

「はい、わかりました。その様に申しておきます」

ラトが一礼して部屋から下がろうとすると、突如部屋の戸が開いた。

「おう、ここにいらしたか。貴方がボールス殿ですな。それにカーリア殿も」

そう言いながら、部屋にヨウレンが入ってくる。その後ろにコウも付き従っている。

ヨウレンとコウは腰を下ろした。

カーリアがヨウレンをジロリと睨む。

「ヨウレン殿、無礼でござろう。人の屋敷を勝手に歩き回り、おまけに断りなしに部屋にずかずか入ってくるなど」

「いや、失礼。どうしても南国人というものを見てみたくな。待ちきれませんでした」

ヨウレンが言う。線の細い端正な顔だった。身だしなみもきちんとしている。

「ボールス殿、お初にお目にかかる。ヨウレンです。今日は南国の事など色々聞かせていただきたく邪魔しました」

ヨウレンが丁寧にボールスに礼をする。ボールスは軽く会釈を返した。

「……あの、今お茶をお持ちいたします」

「招かれざる客だ。別に茶など出さずともよい」

厳しいカーリアの言葉にラトは慌てて一礼して部屋から出て行った。

無礼なカーリアの言葉にヨウレンの後ろに座っていたコウが目を怒らせる。だが当のヨウレンはカーリアの言葉を気にもしていないようにボールスに話しかけた。

「ボールス殿、一体南国にはどれ位の人が住んでいるのでしょうか？我等ヴァルナ人はせいぜい六千というところですが」

「……さあ？正確な数は誰にもわからんでしょうが、数千万人はいるでしょう」

「ほう、そんなにいますか。それでは軍隊の方もさぞ強大なものがあるでしょうな」

「まあ、ありますな」

「なるほど。そんな軍隊がヴァルナに侵攻してきたら我等は終わりだ。南国人にはこの地を征服しようとする動きなどはありませんか」

「ないでしょう。貴方達ヴァルナ人の存在を知る者も稀です。一部の冒険家が信じているぐらいで、他の者はヴァルナなどが本当にいるなど信じてもいないでしょう」

「聞くところによると、今南国では一人の英雄が南国全土を平定しようとしているとか。もし南国が平定し終われば、北にも来るでしょうし、そうなればこの地もいづれ見つかるのでは？」

何処から聞いてきたのか、ヨウレンは先日ポールスがカーリアに話した霸王モートの事まで知っている。

「その可能性もないとは言えません」

ポールスが答えた。

「そうですか。話は変わりますが、ポールス殿は学者だとか。ぜひ今度、私に南国の文字や技術を教えていただけませんか？」

「ヨウレン！」

カーリアが怒鳴った。文字を扱うことはヴァルナにとって絶対の禁忌だった。昔からそう伝わっている。

「……カーリア殿。今のポールス殿の話は聞いただろう。南国では大きな動きが起こっている。このままではいづれ遠からずヴァルナの地も南国人に制圧されるだろう。そんなことになる前

に我等もそろそろ変わるべきだ。理由もわからぬ下らぬ言い伝えを守っている時勢ではない。ヴァルナ人も南国人と同様、知識と思想を持ってもつと繁栄していかねばならん」

「思想だと？思想など戦士にとっては毒にしかならん」

「何と固い頭だ。刀一本振り回してこの土地を守る時代はもう終わったのだ。いくらお主が無双の兵法者でも、百万の軍隊の前には大鎌に立ち向かう蟻螂のようなものだ。私は断言する。このままではいずれヴァルナ人は滅びる。そうなる前に私はこの地以外の土地でもヴァルナ人の集落を作っていこうというのだ。そうしていずれは南国人のように我等ヴァルナも国を持ちたい」

「我等はこの土地以外の場所では住めん。掟でそう決まっている」

「その掟が古いというのだ。この土地は環境としては最悪だ。食料も水も僅かしか得られない。そのために我等ヴァルナ人は三千年以上も昔から人口はほとんど増えていないそうだ。飢饉が来るたび、一体何人の人間が餓死しているのかお主はわかっているのか」

「……わかつているさ。しかし、仕方がない。我等ヴァルナはそうやって生きてきたのだから」

「仕方なくなどない。我等ヴァルナ人はもつとこの世界で繁栄していい種族のはずだ」

ヨウレンがきっぱりと言った。

カーリアとヨウレンが無言で睨み合う。コウが刀を握んだ。

「……長居をしすぎたようだ。我等はそろそろお暇しよう」

ヨウレンがカーリアよりもむしろ後ろのコウに言い聞かせるように言った。ヨウレンが立ち上がる。コウも慌てて立ち上がった。

「ではポールス殿、これで失礼いたす。今度はカーリア殿のいない所でゆっくりお話を伺いたいですな」

ヨウレンとコウが部屋から出て行った。

「相変わらず口だけは達者な男だ」

カーリアが言い捨てた。

「中々、才のある人物のようだな」

ポールスがニヤリと笑って言った。カーリアが不機嫌な顔をする。

「あのような才知ばかり長けた人間にろくな者はいない」

「では私もろくでもない人間ということになるな」

ポールスは笑った。

「お主は戦士ではなからう。だが奴はヴァルナの戦士の一員だ。戦士に思想や知識は不要。ただ戦う技術さえあればよい。なまじ頭がよいから先のことを考え、先の事を思うから臆病になる。臆病になれば行動は鈍る。戦士に無駄な考えなどいらぬ。ただ目の前の戦いの事だけ考えればよい。命も勝敗も二の次よ」

カーリアが言った。

「君は純粹だな。今時君みたいなのも珍しい」

ポールスが笑って言った。

ヨウレンの屋敷。ヨウレンを中心に若いヴァルナの戦士達数十人が集まっていた。皆、ヨウレンを新しきヴァルナの指導者として仰いでいる者達だった。もちろんコウもいる。

「……まったく、話にならない。あのような無能な人物が我等ヴァルナの族長だとは……」
コウが言った。

ヨウレンはただ目を閉じ、黙って座っている。

「まったくその通りだ！カーリアなどに任せてはヴァルナの未来はどうなるのだ！」

「ここにいるヨウレン先生こそヴァルナの未来を背負っていくにふさわしい人ではないか！」

「そうだ！カーリアを引き摺り下ろして、ヨウレン先生を族長に！」

「そうだ！そうだ！」

部屋が騒がしくなる。

ヨウレンがゆっくり手を上げて、周りを鎮めた。

「そう物騒な事を言われても私が困る。第一、カーリアは君達が少し騒いだくらいで族長の座を退かん。長老方も許さんだろう」

「ならば斬りましょう。カーリアが死ねば後につく者は先生しかない」

「斬れるか、君に？」

ヨウレンがじっとコウの目を見る。コウは言葉に詰まった。

「才知はともかく、カーリアは剣を取らせれば古今無双の腕前。そう簡単に斬れるような奴ではない。だから諸君からも軽々しく騒がん事だ」

ヨウレンが静かに言う。一同は押し黙った。

「それより当面の問題なのがあの異人だ」

ヨウレンが言う。

「どのような人物でした？やはり南国の密偵でしょうか？」

一人のヴァルナ人がヨウレンに聞いた。

「相当、頭の回る男のようだな……大人しくしているが、腹の中では何を考えているかわからん。本人は生物学の研究のためだけにこの地に来たといっているが、本当のところはどうか……カーリアはボールの事を全面的に信用しているようだが、奴は必ず南国へ帰ったらこの地の事を話さだろう。そうすればこの土地も今の南国の王、モートと申すものに侵略される。奴こそ早急に斬らねばならん」

「しかし、長老方はあの物に危害を加える事は許さんと」

「奴は日中、よく一人で里の外に出て辺りの生物の捕獲や生態の観察をしているようだ。その時を狙って斬ればいい。死体は山にでも捨てれば見つからん。奴は一人で出て行って、そのまま里には帰ってこなかったことになるだろう」

ヨウレンがニヤリと笑った。

「さて、あとの問題は誰がやるかだが……あまり大人数でやるのは好ましくない。我等がそ

ろって里の外に出れば、カーリアも我等がボールスを殺したと気付くだろう。できれば一人がいいが……」

ヨウレンが一同を見回す。

「私がやりましょう」

一人の男が立ち上がった。長身で筋肉質の大柄な男だ。名をゲンコウと言う。剣の腕は一流。怪力無双で聞こえた戦士だった。

「お主が行つてくれるか。お主なら間違いはない。しかし、ボールスの傷はもうほとんど完治している。あの男は数日中にもこの里から出て行くだろう。時間がない。斬るなら早い方がいい」

ヨウレンが言う。

「わかつております。ボールスが里の外にでるなら明日にでもやるつもりです。お任せください」

「うむ、頼むぞ」

ヨウレンが頷いた。

次の日、もう日も昇った頃、ラトが玄関前の掃除をしているとボールスが屋敷から出てきた。ラトがちよこんとお辞儀する。

「ボールス殿、また『ふいーるどわーく』というやつですか？」

「ああ。夕暮れまでには帰る」

「本当は一人でその辺を出歩いて欲しくありませんけどね。カーリア様も心配してました。最長老様の言い付けが出ているとは言え、若い方の中には貴方を害しようとする者もいないとは限りませんから」

ラトが竹の箒を手を持ったまま言う。

「心配いらんよ」

「カーリア様がいれば一緒に付いて行っていただけなんですけど。あの御方も忙しい身ですから。今日も朝早くから寄り合いに行っていていらっしやるし……そうだ！」

「……？」

「私が警護役として一緒に行きます。もうすぐこの掃除も終わりますし」

「君が？」

ポールスは思わず苦笑した。ラトはまだ子供だ。ヴァルナ人だから年齢はわからないが、南国人に換算してみればまだ十三、四歳といったところだろう。二十歳を越えているポールスがこんな子供に守られるとは可笑しかった。

「今、笑いましたね。私だってヴァルナの戦士です！……まだ戦士団に所属できる歳ではないですけど……それでもカーリア様から剣の稽古は毎日受けています。カーリア様もお前は剣の才能があると仰ってくれます！」

ラトがむきになって言った。

「わかった、わかった。それじゃあ、ご一緒してもらおうかな」

ポールスが笑って言った。

「本当ですか！すぐに用意してきます！ここで待っていてくださいね」

ラトがうれしそうにそう言うと、箒を持って屋敷の中に駆け込んでいった。ポールの警護なんてことは二の次で、本当は南国人のポールスがどんな研究をしているのか興味があるのだ。それに里の外にも出てみたかった。まだ子供のラトは危険だと言う事で大人の同行無しに一人で里の外に出ることを禁じられていた。ポールスは南国人だか、大人である事は間違いない。帰ってきてカーリアに叱られたら、それを言い訳にするつもりだった。

やがてラトが屋敷から走り出てくる。腰には一本の刀が差されていた。真剣よりは短い。いわゆる脇差と言うやつだ。赤い鞘に収められ、鍔には細かな装飾が施されている。見事な刀だった。

「美しい刀だな」

ポールスが苦笑して言う。こんな子供には過ぎた武器だと思つての笑いだった。ラトはそんな事には気付かない。うれしそうに刀を抜いて見せた。細身の刀身がきらりと光る。品格を漂わせる美しさだった。

「カーリア様から頂いたんです。大変由緒ある刀だそうで、こんな見事な脇差を持っているのはヴァルナの戦士の中にもそう多くはいません。『刀は戦士の魂だ。おまえもこの剣に見合う立派な戦士になるように』ってカーリア様は仰いました。私の命よりも大切な宝物です」

ラトが自慢げに言った。刀身を鞘に戻す。

「そうか。なら警護の方はよろしく頼むぞ。そろそろ行こうか」

「はい」

ボールスとラトは歩き出した。

ボールスは山の中で薬草を採取していた。ラトは虫を追いかけて遊んでいる。

「……驚いたな。これも絶滅種だと記録されている植物だ。まさかこんな最果ての地に自生しているとは……この地には魔法薬の原料となる貴重な植物がいくらでも生えてる……錬金術師にとってはまさに宝の山だな」

ボールスが薬草を手に取りながら呟いた。この地には南国では絶滅したと思われる動植物が幾らもいた。まさにこの地は外界から隔離されていた秘境だった。

「いい眺めだなあ。ねえ、ボールス殿の国はここから遠いんですか？」

ラトが崖の上に立って南方を眺める。山々がどこまでも続いていた。

「遠いな。ここから歩いて南に一、二ヶ月は掛かる」

「へえー、いつか行ってみたいなあ」

ラトが言った。

その時、ボールスの背後の草むらが不自然に揺れた。

ボールスがふと気配を感じて後ろを振り返る。刀を持った男が草陰から飛び出してきた所

だった。ゲンコウだった。ボールスが里を出た時からずっと尾行していたのだ。

ボールスがとっさに後ろに飛び退く。

ゲンコウの振り下ろした刀はボールスの胸を切り裂いた。

血が飛び散る。

ボールスは後ろに倒れた。

「貴様ッ！」

ラトが腰から刀を抜いて、倒れたボールスとゲンコウの間に割って入った。そんなラトをゲンコウが睨みつける。

「……なるべくなら同族の者は斬りたくなかったが……今日に限ってその南国人と行動を共にした事を後悔するがいい」

ゲンコウが刀をラトに向けた。刀身がぎらりと鈍く光る。ラトの細身の脇差と対極的に、ゲンコウの持つ刀は厚重ねで反りは浅く、いかにも人斬り包丁という凄みがある。

「黙れ！ 貴様の顔は知ってるぞ。ヨウレン一派のゲンコウだな。ボールス殿を斬ろうとしたのもヨウレン殿の命か！」

「今から死ぬものには関係ないことだ」

ゲンコウが言い放つ。

ラトが地を蹴った。

刀を振る。

ゲンコウが片手で刀を振るう。

刀身と刀身がぶつかる。

所詮、大人と子供の腕力の差だった。強力な一撃を受け、ラトの手から刀が離れ飛んだ。

刀は弧を描いて崖の下に落ちていく。

刀を失ったラトにゲンコウが剣を突きつける。

「子供が戦士の真似事などするからだ。子供など斬りたくはない。歩け」

ゲンコウが刀をラトに突きつけたまま、前に進む。ラトは後ずさった。

やがて崖の端まで達する。ラトの後ろにもう地面はない。あるとすれば数十メートル下だ。

「飛び降りろ。この高さなら苦しまずに死ぬる」

ゲンコウが言った。ラトの足が震える。

「嫌だ！斬るならさっさと斬れ！貴様は人一人斬る度胸もないのか！」

ラトが叫ぶ。

「……そうか」

ゲンコウは刀を振り上げた。ラトは恐怖で目をつぶる。

「『闇の獣』よ！」

ラトの後ろで立ち上がったボールスが叫んだ。

地面に映るボールスの影から真っ黒な狼が飛び出す。

黒い獣がゲンコウに飛び掛る。

「ぬッ？」

ゲンコウがとっさに黒い獣を刀で薙ぎ払う。黒い獣は音のない悲鳴を上げて消えた。ゲンコウがラトのいた位置を見る。そこにはもうラトはいなかった。

ラトはいつの間にかゲンコウの背後に回っていた。

ラトが全身で体当たりする。

ゲンコウの巨体がよるめいた。

ゲンコウが崖から足を踏み外す。

ゲンコウは悲鳴を上げて落ちていった。

夜、カーリアは自室で座っていた。昼過ぎに屋敷に帰ってきてみるとラトもボールの姿もなかった。何処かへ出かけたのだろうと思っていたが、帰りが遅すぎる。もう日が沈んでだいぶ経つのだ。ボールスはともかく、ラトが無断でこんなに屋敷を空けたことはなかった。

カーリアの頭に悪い予感ばかり浮かんでくる。不吉な事は考えず、無心でいようとするのだが中々うまくいかなかった。

玄関で物音がした。カーリアは立ち上がり、急いで玄関まで行く。

ラトとボールの姿があった。

「ラト！こんな遅くまで何処に行っていた！」

カーリアがボールの姿をよく見る。暗くてよく見えなかったが、胸の部分が血で酷く濡れ

ていた。カーリアにはすぐに刀傷だとわかった。

「ボールス！その傷はどうした？誰に斬られた？」

「なんてことはない。胸の肉を少し斬られただけの軽傷だ。骨までは達していない」

ボールスが言う。

ラトが突然、カーリアの前に平伏した。

「カーリア様、申し訳ありません！貴方様から頂いた大事な刀を失くしてしまいました」

ラトが泣きそうな声で叫ぶ。

「何？」

カーリアがラトの腰を見ると朱塗りの鞘だけが腰に差してあった。

「敵に、敵に刀を弾き飛ばされて……崖から落ちて……探したんですけど、見つからなくて……申し訳ありません。切腹してお詫びをしようとも思いましたが、刀がなくてはそれもできない始末。それでおめおめと戻ってきてしまいました……」

ラトが言う。

「こんな時間まで刀を探していたのか……？」

「……はい……」

ラトが答える。

カーリアはラトの腕を強く掴むと、無理やり立たせた。

乾いた音が屋敷に響く。

カーリアの平手がラトの頬を打っていた。

「この馬鹿者が！私がどんなに心配したかわかっているのか！刀の事など抛っておいて、なぜすぐに帰ってこなかった！」

ラトが涙ぐむ。叩かれた頬は真っ赤に腫れていた。

「でも……でも……刀は戦士の魂だって……命よりも大切な物だって……」

「……馬鹿。刀は確かに戦士の魂だ。しかし、刀その物はただの金属の塊に過ぎん。刀は戦士が持つて始めて魂が宿る。だから、魂があるとは刀が戦士の手の内にあること。失くしたたかが刀一本のためにお前の身に何かあったらどうする」

カーリアの言葉を聞いてラトはわっと泣き出した。

「……すいません……すいません……」

泣きじゃくるラトをカーリアが抱きしめる。

「……もういい、ラト……刀などまた幾らでもやる。とにかくお前が無事でよかった……お前の身に何かあったら私は……お前は私の家族だ。何よりも大事な家族だ」

抱きしめたまま、カーリアがやさしくラトの頭を撫でる。ラトはカーリアの胸で泣き崩れた。

「……ポールス、お主とラトを襲ったのは誰だ？」

カーリアがラトを胸に抱いたまま静かに聞く。

「……ラトはゲンコウとか呼んでいたな。確かヨウレン一派の……」

ポールスの言葉がそこで途切れる。カーリアの目を見たからだ。先ほどまでの優しい表情で

はない。氷のように冷たい目。側にいるボールスの背筋が震えるほどの、カーリアの怒りと殺気だった。

ほぼ同時刻、コウの屋敷の一室にヨウレン一派が集まっていた。ヨウレンの屋敷に集まらず、わざわざコウの屋敷にしたのは同じ場所で何度も集まると、要らぬ疑いを招くという配慮だった。

「遅い、遅すぎる。ゲンコウ殿は何をしているのだ！」

コウが苛立たしげに怒鳴った。他の者達もそれぞれざわざわと騒いでいる。静かに座っているのはヨウレンただ一人だった。

そこに男が一人、部屋に駆け込んでくる。

「大変です！カーリアの屋敷にボールスが戻りました！」

部屋がさらに騒がしくなる。やはりゲンコウが仕損じたと知ってにわか慌てだしたのだ。

「それと、もう一つ大変な事が……」

「なんだ！」

コウが荒だたしく聞く。

「どうやら今日に限ってボールス一人ではなかったようで……カーリアの所の奉公人のラトもボールスと一緒に里の外に出てボールスと行動を共にしていたようです。となると……」

「ラト？ちっ、あの小娘か！」

コウが怒鳴る。ラトなら里の者の顔を知っている。当然、ゲンコウの顔も知っているだろう。厄介な事態だった。

「……騒ぐな。下手人はゲンコウ。我等は関係ない。知らぬ存ぜぬで通せばよい」

ヨウレンが静かに言った。

「しかし、カーリアは我等を当然疑って掛かるでしょう」

「我等がゲンコウに命じたという証拠は何もない。カーリアも何もできん。案ずるな」

そう言うときヨウレンは立ち上がった。

「今夜は早めに解散した方がよいな。このような大勢で密談をしていると長老方にわかると、怪しまれる。私は自分の屋敷に帰る。諸君等も帰るがいい。しかし、一度に大勢この屋敷から出るのが目立つ。少しづつ出て行くんだ」

ヨウレンはそう言うとき部屋を出て行くこととした。コウが立ち上がる。

「先生。御屋敷まで私が御一緒にします」

「いらぬよ。今夜は月も明るい。今夜は君と一緒に歩いているのを誰かに見られるのはまず
し」

そう言うときヨウレンはコウの屋敷から出て行った。

ヨウレンがゆっくりと里の道を歩いていた。

少し離れた民家の影から人影がゆっくり姿を現した。手に槍を持っている。ヨウレンは立ち

止まった。陰になって顔は見えない。

雲から月が顔を出した。淡い光りが人影の顔を浮かび上がらせた。カーリアだった。

「ヨウレン。……」

カーリアは手に持っていた槍をぼんとヨウレンの元に投げた。

「立ち会ってもらおう」

「なんだと？」

ヨウレンが槍を拾いながら、油断なく目を光らす。

「理由は自分が一番よくわかっているはず」

「さあ？何の事かわからぬが……」

「しらを言い通すつもりならばそれでもいい。だが貴様もヴァルナの戦士の端くれなら、挑まれた決闘をまさか背を見せて逃げ出しはしまい」

「……カーリア、わかっているのか。同族殺しは最も重い罪だぞ」

「覚悟の上だ」

カーリアが言う。

ヨウレンは握った槍を見る。

確かにカーリアは剣の天才だ。しかし、ヨウレンも若くして門人を持つほどの剣の腕。それに槍の腕はヴァルナの戦士一と言われていた。おまけに今は剣と槍。当然の事だが槍の方が圧倒的に有利だった。普通、剣と槍とで勝負する時、剣を扱う者は相手より三つは上手でない

勝つのは難しいと言われている。自分とカーリアにそれほどの実力差があるか？いや、あるわけはない。ヨウレンは思った。

「よかろう、こいつ！」

ヨウレンが槍を構えた。

カーリアは刀も抜かず、悠然とヨウレンに近づいていく。

隙だらけと見たヨウレンは気合と共に槍を繰り出した。カーリアはその槍を抜きうちで叩き、槍に刀を付けつつすっと手元につけ入った。

ヨウレンが槍を引こうとした。

が、遅かった。

いや、カーリアの動きがあまりに速かったのだ。

一刀でヨウレンは顔から胸まで斬り下ろされていた。

カーリアはヨウレンを殺した罪で、最長老に自分の屋敷の一室で蟄居を命じられていた。ヨウレンが殺された事で、ヨウレン一派の反カーリア運動が一気に激しくなった。今もヨウレン一派の連中がカーリアの屋敷の周りを取り囲んで、カーリアを出せと騒いでいる。最長老から命じられて屋敷の周りには警備が立っているからいいようなものの、そうでなければヨウレン一派はすぐにでも屋敷内に踏み込んでくるだろう。窓から外の様子を眺めるラトは気が気でなかった。ボールスはというと、外の騒ぎなど全く気にしていないようだ。さすがに屋敷の外には出歩かないようだが、あいかわらず自室にこもって何か研究している。胸の傷もたいした事はなかったようだ。

ラトがカーリアのいる部屋に入った。カーリアは相変わらず目を閉じて正座している。もう朝からずっとだ。身動き一つしていない。

「……カーリア様、最長老様がお見えです」

「……そうか。お通ししてくれ」

カーリアが目を閉じたまま静かに言った。

ラトは部屋から下がる。やがて最長老が部屋に入ってきた。カーリアがゆっくり瞳を開ける。「カーリアや、また随分早まった事をしてくれたのう。ラトとあの南国人が襲われたのは確かに由々しき事じゃが、まずは我等の裁きを待つべきじゃったな。怒りに駆られて斬り合うなどヴァルナの民を背負う族長の取るべき行動ではない」

最長老が穏やかに言った。

「……弁解はいたしませぬ。どの様な裁きも受ける覚悟はあります」

カーリアが言った。自分の取った行動は間違つてはいない、だが確かに軽率だった。

「ふむ。ヨウレンの弟子どもはお前を引き渡せと騒いでおる。里の大人連中が諫めておるが、これが中々収まりそうにない。かといってお前を奴等に引き渡すわけにもいかん。奴等はお前を殺すつもりだろうからの。他の長老達と話し合つての、間を取つてお主には族長の座を退いてもらう事になりそうじゃ。異存はあるか？」

「……」

カーリアは答えなかった。こうなることは大方わかつていた。

「……異存はないようじゃの。後任はまだ決まっておらぬが、おそらくコウあたりになるじやろう」

「……まだ若すぎませぬか」

カーリアが言った。

「お主も族長の座に着いた時は、今のコウよりもっと若かつたじやろうが」

「……」

カーリアが黙り込む。カーリアが言うのは歳の若さではない。分別と言う事だ。まだコウに族長としての任を行うだけの分別があるとは思えない。さらに言えばカーリアにはコウが族長としての器があるとも思えない。

「……お主の言いたい事はわかっておる。確かにまだ早いかも知れぬ。だがコウもあれで見込みのある若者じゃ。族長になれば自然と分別も身に付くじやろう」

「……そうかもしれない」

カーリアが重い口調で言った。

分別が付こうと付くまいと、カーリアにはコウという人間自体が気に入らないのだ。その奥にあるのはヨウレンの思想に対するカーリアの嫌悪だ。

「……わしやお主の様な古い型のヴァルナ人は少なくなってしまった。そして外の世界は荒れ狂う風のように絶え間なく動いておる。我等がこの地で掟を守り静かに暮らそうと思っても、外の世界がそうはさせてはくれぬ。あのボールスという南国人の到来がよい例じゃ。ヨウレンやコウのような改革派が増えていくのも必然かも知れぬ」

最長老がしみじみと語った。

「……私はそれでも自分の信じる道を外れたくありません」

カーリアがきっぱりと言う。

最長老は何も答えなかった。カーリアも黙り込む。

しばらく重い沈黙が部屋を満たした。

「……話は以上じゃ。とにかく、早まった事だけはせぬようにの」

そう言うと、最長老は立ち上がった。ゆっくりりと部屋と出て行った。屋敷の外のヨウレン一派の騒ぎは、カーリアの耳にやけに遥か遠くから聞こえてくるような気がした。

ボールスは部屋で研究と続けていた。カーリアが部屋に入ってくる。

「ん？カーリアか。何か用か？」

ボールスはカーリアの方を振り向きもせず言った。

カーリアはそんなボールスの背中を見た。

この男が全ての始まりだった。この男はヴァルナの事など何も考えていない。ヴァルナの古い掟の外にいる異国人なのだ。勝手にずかずかと人の土地に入ってきて、騒がすだけ騒がして自分は関係ないという顔をしている。この男の頭の中にあるのは自分の研究だけだ。

そう思うと、カーリアはボールスの事が斬り殺したくなるほど憎くなった。

自然とカーリアの手が刀の柄に伸びる。

「……教えてくれ。私はどうすればいい？」

カーリアが擦れる声で言った。

「……どういう意味だ？」

ボールスは相変わらずノートに何かを書き込んでいる。カーリアの方は見なかった。

「……私は族長の座から身を退く事になりそうだ。後任の族長は古きヴァルナの手など守っていく気などない。このヴァルナをお主等南国人と同じように国にしたいと言っておる。私にはそんな事は耐えられぬ」

カーリアの苦しそうな言葉に、ようやくポールスは振り向いた。カーリアの苦悩に満ちた表情とは対照的に、ポールスは平然としている。

「結構じゃないか。その後任の族長とやらの言うとおりで。こんな古臭い土地にしがみついても良い事はない。族長とやらを辞める事になったのならちようどいい機会だ、お前もこんな土地を離れて外の世界にて行ってみればいい」

ポールスが言った。どうでもいい事のように。
カーリアの刀が鞘から抜き放された。

ポールスはとっさに椅子を蹴って背後に飛ぶ。

刀は美しい弧を描き、木製の椅子を両断した。

ポールスの額からは一筋の血が流れていた。

ポールスとカーリアは距離をとって睨み合う。

今の一撃は怒りに駆られ、衝動的な斬撃だった。刀を抜いてしまった後で悔の念が湧き上がってきたが、それでもカーリアの怒りは収まらなかった。カーリア自身にも何に対してこれほど怒りを感じているかわからない。ポールスの無神経さか、カーリア自身の無力か、ヴァルナの未来に対してか。

だが一方で、カーリアは内心舌を巻いていた。今のボールスの反応は常人にできる動きではない。

カーリアがその様な内心でボールスを見つめていると、ボールスはニヤリと笑った。

「まったく君は刀でしか物事を解決できない人間だな。まあそういう人間も面白い。興味があ
るよ」

ボールスは笑ってそう言うのと、床に転がる真つ二つに割られた椅子の代わりに部屋の隅に置かれてあった椅子を持ってきて、カーリアに背を向け、また机に向った。

カーリアはあつけに取られて呆然と刀を下ろした。これがたった今斬りかかってきた者に對する態度だろうか。

「……ふふふ、あははは、本当に南国人というのは変わっている。いや、お主だけがそんなの
かな」

カーリアも笑って刀を鞘に収めた。本当にこのボールスと言う男は変わっている。初めて会った時、やけに暗い人物だと思った。だが僅か数日一緒に暮らしてみると、ボールスは暗いのではなく、物事に全く興味を持たない人間なのだ。他人の事も自分の命ですら興味が無い。ただ一つ、自分の研究を除いて。あの男の頭の中にあるのは自分の研究の事だけだ。研究と成し遂げる事を己の信念とし、ただその事だけに己の生涯を費やしている。カーリアがただ剣の道を極めようとするように、ボールスは知の探求を求め続けている。

「……お主と私は似ているのかもしれない」

カーリアが微笑んでいった。無双の剣豪に似合わぬ優しい笑顔だった。

「……そうか？全く似てないと思うがな」

ボールスがノートに向いながら言った。

コウの屋敷。コウ以下ヨウレン一派約五十名が一部屋に集まっていた。皆文武両道の猛者ぞろいである。

「どうする？」

コウの横にいた男が聞いた。

「決まっておる。ヨウレン先生が殺されてこのまま黙っておれば戦士の名折れだ。必ずカーリアは討つ」

コウが言った。

「しかし、聞くところによるとカーリアは族長を退いて、コウ殿が次の族長に推されるとか。ここで騒げばせつかく族長の座も失いかねませんぞ。ここはひとまず族長就任を待って、それからカーリアを討てばよいのでは？」

「その様な事は悠長なことではできん。師の敵を討つのは弟子の務めだ。それをたかが族長の座が惜しいばかり先延ばしにしては沽券に関わる」

コウが厳しい口調でいた。

数日が過ぎた。カーリアはじっと自室で蟄居していたし、ボールスは相変わらず自室で研究三昧だった。コウで決まりと思われていたカーリアの後任の族長はまだ決まらない。どうやら長老会で意見が割れているようだ。コウの族長就任に反対しているのは最長老らしかった。

そうしてボールスの傷も癒え、ついにボールスがヴァルナの里から離れる時が来た。この日ばかりはカーリアも部屋を出て、ラトを連れて里の外れまでボールスの見送りに来た。

「もうこの辺でいい。では世話になった」

ボールスがカーリアとラトに言った。見送りといいながら、もう里から随分離れていた。「ああ、お主も達者でな。またいつかこのヴァルナに来てくれ」

カーリアが言った。

ボールスはしばらく何か考えていたが、やがて意を決したように口を開いた。

「……カーリア、私と一緒に行かないか。君に外の世界を見せてみたい。世界は広い。まだまだ人の知らない事が沢山ある。私とその謎を解き明かしてみないか」

ボールスが言う。カーリアは無言で黙り込んだ。ラトは不安でカーリアとボールスの顔を交互に見た。

「……お主がそう言ってくれるのはうれしいが……私はやはりこの地を離れられん。私はヴァルナ人としてこの地で生きる。お前とは一緒になれん……」

カーリアが言った。苦しそうな言葉だった。

「そうか……」

ボールスが短く言った。

「別れの贈り物として、最後にお主に見せたいものがある。急ぐ旅ではないのだろうか？少し付き合え」

カーリアが言った。ボールスとラトが不思議そうな顔でカーリアを見る。

「悪いがラトは先に屋敷に帰っていてくれ。ではボールス、いくぞ」

カーリアはそう言うと、ボールスを連れてラトから離れて行った。

もうどれくらい歩いただろう。すでに太陽は頭上にまで上がっている。ボールスは額の汗をぬぐった。

「何処まで行くつもりだ？これが少しか？」

ボールスが言った。カーリアはすぐに着くと言っていたが、行けども行けども目的地に着く様子はない。

「もうすぐ着く。どうしても見せたい物があったな……見えたぞあれだ」

カーリアが指差す。ボールスがカーリアの指の先を見る。そこには巨大な都市がまるで墓場のように陰気に広がっていた。

ボールスとカーリアが都市の中に入る。その都市は悲しくなるような静けさだった。人っ子一人いない。生物の気配もしない。ボールスには見慣れぬ建築様式の建物が静かに建ち並んで

いる。もう何千年も誰一人ここを訪れたものはいないかのようだった。

「ここは……」

「我々は『楽園』と呼んでいる。ここにはヴァルナの族長か、長老しか立ち入ることは許されていない。我等ヴァルナの聖地だ」

カーリアが言った。ポールスは辺りを見回す。楽園と呼ぶにはあまりに寂しい。沈黙を守る建物と建物から伸びる暗い影だけがこの都市のすべてだった。楽園というよりは死の都と言った方がびつたりくるだろう。

風の音だけが聞こえるなか、二人は都市の中央にどんどん進んでいった。

「いいのか？ その様な大事な場所に私のような部外者を入れても」

ポールスが言う。

「かまわんさ。お前はヴァルナの人間ではない。ヴァルナのしきたりに従う必要は無い」

カーリアが微笑んで言う。

「ずいぶん古い都市のようだが。いつごろ建てられたものだ？」

「わからん。遙か遠い昔ということだけかな。ただこの都市を守ることが我等ヴァルナの使命だと伝わっている」

カーリアが言う。ポールスが町並みを見て言った。

「私に見せたいものとはこれか？」

ポールスが聞いた。別れの土産にヴァルナの聖地に連れてきてくれたようだが。

「いや、この先にあるものだ」

カーリアはそう言って先へと進んで行く。やがて都市の中央に位置する場所に巨大な城が見えた。それは山のように巨大で、長い影を落としている。二人は城の中に入ると、迷路のような廊下を歩き、やがて一つの階段をおり始めた。階段の通路は真っ暗で、カーリアの持ったいまっだけ先を照らしていた。

「ずいぶん長い階段だな……」

ボールスが呟く。もうかなり階段を下っているはずだ。地下何十、いや何百メートルか見当もつかない。

やがて階段が終わる。前方に何も無い空間が開けた。たいまつの光でも真っ暗闇で先は見えない。

「明光」

カーリアが呪文を唱える。彼女の手から光り輝く光球が放たれ、暗闇の中を進んでいくと光が弾け辺りを明るく照らした。

「何なのだから……」

ボールスが呻く。彼の眼下には直径一キロメートルはあろうかというドーム状の空間が広がり、その中央に四角い巨大な建物が建っていた。

カーリアとボールスが下まで降りる。近くで見るとその四角い建物はさらに大きく見えた。

ボールスの眼前にそびえ立っている。今までボールスが諸国で見てきたどんな建築物よりも巨大だった。四角い建物の壁は一面黒光りする石のような材質でできていた。ボールスが壁に触れてみる。だが驚いてすぐに手を引っ込めた。壁は一見すると石のように見えるのだが触ってみると石でも金属でもない。石や金属に似た他の何かだった。そして一番驚いたのは冷たいだろうと触ったその壁が生暖かかったことだ。ぼんやりとした温もりがボールスの掌に残っている。気味が悪かった。

「石でも金属でもない……見た事もない物質だ」
ボールスが呟く。

「お前に見せたいものはこの中にある」

カーリアは四角い建物の中に入ってしまった。

たいまつの明かりによって照らされた薄暗い通路をもうどれくらい進んだだろう。いや、たいまつの明かりだけではない。通路の黒い壁それ自体が微かに青白い光を発していた。やがてカーリアが立ち止まる。

「これだ」

ボールスが見上げる。それは直立した巨大な石版だった。石版は青白い光を発し、表面には細かな文字がびっしりと刻み込まれてあった。

「これは……」

「お前にこれが読めるか？文字を扱うことを禁じられた我等ヴァルナにはこれを読むことはで

きん」

ポールスは石版に近づいて文字を見る。

「見た事もない文法だが……使われている文字は古代文字に似ているな。この単語は偶然という意味か……確率……怒り……クロトー、メギドの光……崩壊、絶望……人間……再生と希望……新世紀……」

ポールスが単語を読み上げていく。じつと考え込んだ。

「……時間を掛けて研究すればなんとか読めそうだ」

ポールスがポケットからノートを取り出す。石版の文字を写し取り始めた。カーリアがその作業をじつと見つめていた。

「しかし、これはお前達が守ってきたものなのだろうか？そんな大事なものを部外者の私に見せていいのか」

ポールスが石版とノートを交互に見ながらカーリアに言う。

「……我々はずっとこの土地を守ってきた、気の遠くなるほど長い年月を……あまりに長すぎた……我等にこの石版の文字は読めぬが、別にもう何が書いてあるかを知りたいとも思わぬ。ただ少しでもお主の研究の糧になればと思つてな」

カーリアの表情に一抹の寂寥が過ぎる。暗く沈んだ目だった。

「そうか……」

ポールスは静かにそう言うと、黙って石版の文字を写し続けた。重い沈黙が辺りを満たして

いた。

日も暮れる頃、カーリアとボールスは『楽園』から出た。夕日に照らされて二人の長い影が地面に映っている。

「では、これで本当にさよならだ」

カーリアが言った。

「……ああ」

ボールスの口調はなぜか暗く重かった。『楽園』の地下を後にしてからずっとそうだった。

二人はそれきり無言で別れた。

カーリアはふと振り返った。紅に染まる夕暮れの中、とぼとぼと歩いていくボールスの背中が見える。

おそらく彼ともう二度と会う事はないだろう。そう思うと寂しかった。

だが、これでヴァルナの混乱も収まる。

ボールスがこのヴァルナの地に来た事で、私の中に何か熱いものが生まれ、そしてボールスが去ると共にその熱く大事なものも彼と一緒に私の元から去っていった。

私は大人しくコウに族長の座を譲ろう。ヴァルナの行く末はコウ達新たな考えを持つ人間に任せて、私は何も考えず剣の道を極める事だけを考えて過ごしたい。もう煩わしい事にはうんざりだった。同じヴァルナ人同士で争うなど愚かな事だ。今の屋敷は引き払って、里から少し

離れた山の中に隠居するのもいい。これからはラトと二人で静かに暮らそう。

カーリアはそう思った。

日も落ちた暗闇の中、カーリアが一人里への岐路を歩いていた。里までもう少しだった。

随分遅くなってしまった。ラトも心配しているだろう。自然とカーリアの歩調も早くなった。里の外れまでもう数十分というところで、カーリアの目の前に一人の男の姿が見える。

コウだった。

カーリアが立ち止まる。辺りの茂みから続々と人が姿を表した。カーリアを取り囲む。皆、目が殺氣立っている。手には刀が握られていた。

「……そうか。運命は私に静かな暮らしはさせてはくれないようだな。やはり私が行くのは修羅の道か」

カーリアは自嘲気味に笑った。

「待っていたぞ、カーリア。ヨウレン先生の仇、ここで討たせてもらう」

コウが刀を抜いて言った。カーリアと見つめる目に憎しみの色が見える。

「長老方の命を破ってまで師の仇を討とうとは中々感心な奴だ。私に果し合いを避ける理由はない。遠慮は要らん、全員で存分にかかってくるがいい」

カーリアはそう言うと、腰から刀を抜いた。

カーリアを囲むヨウレン一派はじりじりとカーリアに近づいていく。

カーリアは突然コウに背を向けて走り出す。カーリアの目の前に数人の戦士達が立ちはだかる。

カーリアが刀を振るった。

カーリアの前にいた者は血飛沫を上げて倒れる。囲みを突破したカーリアはそのまま走っていく。

「待て！逃げる気か！」

コウが叫ぶ。ヨウレン一派はカーリアを追って走り出した。

数百メートルも走ったところで、カーリアが立ち止まる。今度は逆にヨウレン一派に向って行った。

カーリアの剣が流れるように動く。

カーリアが剣と一振りするたび、ヨウレン一派の戦士達は倒れていく。

見事なまでのカーリアの剣技だった。ヨウレンの弟子達は皆ヴァルナの戦士達の中でも指折りの猛者達ばかりなのだ。その彼等がカーリアの前には為すすべもなく倒れていく。

ほんの数分で、ヨウレン一派の五十名の戦士はただ一人コウを残してカーリアに斬られた。

カーリアが冷たい目でたった一人残ったコウを見る。

コウが唸り声を上げて斬撃を繰り出した。

カーリアが身をかわす。

仲間を全て討たれての背水の陣だからか、それとも師を討たれた怒りからか、コウの剣撃は

カーリアが目を見張るほどの鋭さと剣圧だった。

コウが猛虎の様な激しさで剣を振っていく。それは剣技と呼べるような優雅なものではなく、まさに生物の戦闘本能の現われとでもいふべきものだった。さしものカーリアもそのコウの氣迫に圧され、避けるだけで精一杯だった。

突如、何かがカーリアの背に当る。木の幹だった。もう避ける事もできない。

コウの刀が空を裂く唸り音を立て、カーリアに襲い掛かる。

カーリアがとっさに刀身でそれを受ける。

火花が散った。

鏢迫り合いの中、コウとカーリアの瞳が見つめ合う。

師を殺され、仲間を討たれ怒りと憎しみに燃えるコウの瞳。

澄み切った、無感情とも見えるカーリアの瞳。その瞳はコウの憎しみの炎を吸い込んでしまふかのように冷たく深かった。

カーリアが剣を跳ね上げる。コウの体勢が崩れた。

時間にすれば僅かコンマ何秒だろう。体勢の崩れたコウの瞳を見るその一瞬の間、カーリアはすべての動きがスローモーシヨンのように感じた。

剣とは何なのだろう。

私は生まれてからずっと剣の腕を磨いてきた。何も考えずに。

だが何のために？

私は強くなった。無双と呼ばれるほどに。

だがそれに何の意味があるだろう。

いくら私一人剣の道を極めたところで、いくら私一人強くなったところで、何も変わらない。コウが体勢を立て直した。カーリアはただコウの瞳を見つめている。カーリアの目にはコウの刀がゆっくりと自分に迫ってくるのが見えた。

おそらく、あと瞬きほどの一瞬で勝負は決まる。

どちらかが死ぬ。

いや、いかなる戦いにも負けぬよう、私は鍛錬を重ねてきたのだ。そう、今この瞬間勝者となるために。生き残るために。

だが今、私が生き残ろうと、コウが生き残ろうと、それにどれほどの違いがあるのか。

どちらが勝者になっても、どちらが生き残っても、何も変わらないのだ。

世界はこんなにも虚しかったのだ。

カーリアは刀を下ろした。

馬鹿らしかった。戦う事が。

ゆっくりと目を閉じた。

その時、カーリアの身体を痺れるような感覚が突き抜けた。

それは熱かった。

酷く熱かった。

カーリアははっとして目を開けた。

コウの刀がカーリアの首筋に喰い込んでいた。

カーリアの剣が一閃した。

月夜。血だまりの中、コウが倒れている。まだ微かに息はあった。

カーリアは自分の手を見た。信じられないといった表情で。

首筋からは微かに熱い血が流れている。その熱さだけが生きているという実感だった。随分と奇妙な感覚だった。

「……勝負はついた。今、誰か呼んで来よう。運がよければ助かるかもしれん」
カーリアが言った。感情のない声で。

「……師の仇も討てず、その仇に助けられたとあっては戦士の恥辱だ……」

コウが擦れる声でそう言うと、胸元から短刀を取り出し、自分の首に当てた。

コウがさっと刃を引く。

暗闇に血飛沫が上がった。

カーリアの顔に血雫が飛んだ。カーリアは顔についたそれを拭いもせず、コウを見下ろしていた。もうコウは死んでいた。

カーリアが顔を上げた。月の光りが返り血を浴び、真っ赤に染まった彼女を照らしている。何の昂ぶりも感じなかった。

五十人の戦士を相手に命の取り合いをしても。

コウほどの強敵を殺しても。

ただ虚しさと寂寥だけが彼女の心にあった。

自分は勝ったのか、それとも一人の仲間を殺してしまっただけなのか。

カーリアにはわからなかった。

数日が過ぎた。ようやく里の混乱も収まってきた頃だった。

カーリアとヨウレン一派の一件は、カーリアがヨウレンを殺した事も含めて、全て両者合意の決闘として長老会の見解が決まった。

全ては不問に付された。

長老会はカーリアに族長の任を続けるようにと要請したが、カーリアは断った。

カーリアは里から少し離れた山中に隠居するつもりだった。

次の族長はヨウレンの一族の中の一人に決まりそうだった。

その事で生き残っていたヨウレン一派も一応の収まりがついた。

またいつもの日常が始まった。

「片付いたか？ラト」

カーリアが額の汗を拭きながら、ラトに言った。カーリアとラトは荷造りをしていた。今の

屋敷から山中の廃屋に引越すのだ。

「はい。だいたいは」

ラトが言った。周りを見渡す。屋敷の中にはほとんど物は残っていなかった。ほとんどの家具や日用品はすでに廃屋に移されていた。

「……少し寂しいですね。住み慣れたこの屋敷を離れるなんて……」

ラトが言う。

「そうだな……お前はこの里に残っていいんだぞ。お前のような子供がわざわざ山奥にこもる事なんてない。里の友達にも滅多に会えなくなるぞ」

「いいえ、私はカーリア様に着いて行きます。どこまでも。だって私はカーリア様の家族ですから」

ラトが笑って言った。

「そうだな」

カーリアも微笑んだ。

「では、私は里の者に別れの挨拶をしてくる」

「はい。私は屋敷の掃除をしておきますから」

「うむ」

そう言うとカーリアは屋敷を出て行った。

カーリアは里の道を最長老の屋敷に向っている。まず彼に挨拶するつもりだった。最長老には今回の件で色々迷惑を掛けた。

里はなぜか慌しかった。

一人の男がカーリアの姿を見つけて、カーリアの方に走ってくる。カーリアも知った顔だった。

「カーリア様！大変です！今屋敷にお呼びに行こうとしていたところで……」

男がカーリアに言った。

「そんなに慌ててどうした？」

「それが、あの南国人が」

「南国人？ボールの事か！あいつがどうした？」

カーリアが驚いたように言う。ボールはもう数日も前に故郷の国に帰っていった。今頃この地にいるはずがない。

「あの南国人がまたこの里に現れたのです。不審に思った者が呼び止めようとなりました。それで……」

男が早口で言う。

「それでどうした？」

「呼び止めようとした者が南国人の魔法でやられました。二人は死んで、一人は重傷です」

「何だと！」

カーリアが叫んだ。

一体どうなっているのだ？なぜボールスは帰ってきた？それに里の者を殺しただと？なぜ？

「あの南国人は正気を……」

さらに何かを言おうとした男を捨てて、カーリアは自分の屋敷に向って走り出した。ボールスは自分に会いに来たのだ。何のためには知らないが。カーリアには確信があった。

ラトが一人で屋敷の掃除をしていた。

玄関で音がした。

カーリア様が帰って来たにしては早すぎるとラトは思った。まだカーリアが屋敷を出てから数分しか経っていないのだ。

誰か尋ねて来たのだろうか？

ラトは竹箒を持ったまま玄関に向った。

誰もいなかった。気のせいだったのだろうか？

その時、屋敷の奥でまた音が聞こえた。

ラトがはっと振り向く。

ラトが重い足で音のする方に向っていく。足が進まなかった。なぜか恐ろしかったのだ。音はカーリアの部屋から聞こえていた。

やはりカーリア様が帰ってきたのだろうか。それとも……。

ラトがカーリアの部屋の戸を開けようとする。

その時、部屋の中から声が聞こえた。

ラトが手に持っていた竹箒を落とす。だが、ラトは落とした箒を見ようとしなかった。恐怖で体が動かなかったからだ。部屋の中から聞こえたのは動物とも人間ともつかぬ笑い声のよな唸りだった。

ラトが震える手で戸を少し開く。隙間から中を覗き込んだ。部屋の中央に立つボールスの背中が見える。ピクリと動きもしない。ただ不気味な、狂気めいた笑い声だけがボールスから聞こえていた。

突然、ボールスがラトの方に振り向いた。

ラトは恐怖で腰を抜かす。床に座り込んでしまった。

ボールスが青白い顔で立っている。

元々は神経質そうな顔立ちで、引き締まった顔をしていたボールスだった。だが今のボールスはやせ細り、頬骨は浮き上がり、それでいて口元は笑みを浮かべ、目は狂人のようにギラギラと光っている。正気を保っているか怪しい瞳の光りだった。

ボールスがラトの方にずんずんと進んでくる。

ラトはあまりのボールスの変わりように怯えて声がでなかった。

「……カーリアは？」

無言のラトを見下ろしてポールスが聞く。いつもの暗くて低い声ではない。妙に上ずった、気味の悪い声だった。

「……い、いません……で、出て行っています……」

ラトが何とかそれだけ声を出した。

「そうか……カーリアが帰ったら伝えてくれ。最後に別れた場所で待っていると」

ポールスはそう言うと、地面で腰を抜かしたままのラトに見向きもせず、部屋を出て行った。ラトはポールスが屋敷を出て行った後も立ち上がることができなかった。まだ体が震えている。

しばらくしてカーリアが屋敷に走りこんで来た。

「ラト！ポールスが来たんだな？」

座り込んだままのラトを見てカーリアが叫んだ。

「カーリア様！た、大変です！ポールス殿が！」

カーリアの姿を見て、やっと少し安心したのか、ラトが何とか立ち上がって言う。

「落ち着け、ラト。ポールスは何処だ？」

カーリアが静かに言う。

「そ、それが……その……おかしくなって……最後に会った場所で待っていると……」

その言葉を聞いたカーリアの顔付きが変わった。

「……ラト、お前はここにいろ。私は少し出かけてくる」

カーリアが厳しい表情で言った。

ラトの返事も聞かず、カーリアは屋敷を走って出て行った。

里の道中を走り抜ける。何人かの里の者がカーリアの姿を見て声を掛けたが、カーリアは止まらなかった。

あの最後の日。別れた後、ボールスは再び『楽園』に行ったのだ。そこで何かあった。それしか考えられない。

何がボールスをそこまで狂気に追い込んだのだ。

一体何が？

カーリアの足は自然と速まった。

一人屋敷に残ったラトは意を決して走り出した。カーリアの後を追い出したのだ。ラトはこの先に何かあるか知りたかったのだ。

数時間も走り続けた。ラトは荒い息で、重たい足を上げながらカーリアの後を追っていく。カーリアは息も切らさず、ペースも乱さず、それでいて驚くべき速さで駆けていく。村の若い者達の中で最も足の速いラトがついていくのが精一杯だった。

やがてラトの目の前に巨大な荒廃した都市が見える。『楽園』だった。ラトは『楽園』に来たことはないが、話に聞いてその存在くらいは知っている。カーリアが『楽園』の中に走っていく。ラトは立ち止まった。族長でも長老でもないラトには『楽園』に立ち入ることは許され

ていない。しかし、一瞬躊躇した後、ラトは意を決して『楽園』に入ってしまった。

ラトは建物に視界を阻まれ、すでにカーリアの姿を見失っていた。ラトがしゃがみ込んでカーリアの足跡を探す。たとえ夜でも足跡を追跡することなどヴァルナの者ならラトより遙かに幼い者でもできる。ラトがカーリアの足跡を追っていく。やがて『楽園』の中央にある城にラトは入っていった。城の中に入ると下はすべて石の床だ。おまけに月の光もほとんど届かぬ。足跡を見つけることは遙かに難しくなったが、それでもラトは床に積もった埃の状態を調べ、何とか進んでいった。

どんどん地下に進んでいった。辺りは暗闇に包まれ、気温が急に下がった気がする。もうラトは引き返したかった。それでも意思に反して足はかかって前に進む。やはり心のどこかでこの先がどうなっているのか見たいのだ。この結末を。

長い階段が終わり、やがて球状の広い空間に出た。眼下に巨大な黒い正方形の建物が見える。人が作ったものとは到底思えない奇妙な建物だ。何故ここにこのような奇妙な建物があるか、そんな事は今のラトにとってどうでもよかった。恐怖と好奇心が競り合いながら、ラトは正方形の建物に向かって進んでいった。カーリアはあそこに入ったはずだ。

正方形の建物に入り、しばらく進むとカーリアの声が聞こえた。ラトは音を立てず、慎重に先に進んでいく。なぜ足を忍ばせねばならないのか、ラトは自分でもわからなかった。

やがて、カーリアの姿が見えた。そしてボールスも。ボールスは巨大の長方形の石版の前に立ち、笑っている。あの不気味な笑みはもう狂っているとしか思えない。血走っていないが、

異様に虚ろな目。大きく開いた赤い口からは、聞くに堪えぬ気味の悪い笑い声が流れている。ラトは今まで恐ろしい姿の人間を見たことが無い。ラトは腰が抜けたようにその場にペタリと座り込んでしまった。

さすがにこのボールの異常な状態に何か感じたのか、カーリアが腰の刀に手をかけた。

「ボールス！血迷ったか。里に戻ってくるばかりでなく、里の者を殺すとは！」

カーリアが怒鳴る。ボールスの笑い声が止んだ。しかし、その表情には笑みを湛えたままだ。「狂ってなどいない。私は正気そのものだ。よく来てくれた、カーリア」

ボールスが笑っていった。カーリアの表情に殺気が漲る。腰から刀を抜いた。

「よく来てくれただと、ふざけるな！よくも里の者を殺してくれたな！貴様を信じた私が愚かだった。何を企んでこの地に戻ってきたか知らんが、お前は今ここで私が殺す」

カーリアが刀を抜き、ボールスに滲み寄る。だが、獅子さえも怯えさせるカーリアの眼光を受けても、ボールスの表情は変わらなかった。

「里の者を殺しただと？そんな些細な事はどうでもいい」

そう言うときボールスは暗い笑みを宿した。暗闇で彼の瞳だけが妖しく光っている。

「ここには全てがあった。世界の歴史と知識の全てが。かつて我々人類が何をしたのか、ヴァルナの罪とはなんなのか、全てこの石盤に書かれてある」

ボールスが石版を仰いで言う。ヴァルナの罪という言葉聞いてカーリアの動きが止まった。「カーリア。俺と一緒に人類の新たな歴史を作らないか？」

気付けば、ラトは自室にいた。朝日が窓から差し込む。昨日、あのまま意識を失ってしまったのか……。

ラトは慌てて起き上がった。カーリア様はどうなったのだろうか。ボールス殿は……。

ラトが自室から出た。屋敷の中は騒がしかった。どうやらカーリアの部屋に大勢の人間がいるようだ。

ラトがカーリアの部屋に入った。

部屋の中ではやはり、大勢のヴァルナの戦士達が騒いでいた。その中央にカーリアの姿も見える。ラトはほっと安堵の溜息をつく。カーリア様は無事だったのだ。

カーリアが部屋に入ってきたラトを見た。だが無言だった。

「やはりあのような男、助けるべきではなかったのだ」

ヴァルナの戦士の一人が言った。

「やはり南国人は信じられぬ。これからは異国の者など一步もこの地に足を踏み入れさせてはならん」

「それよりあのボールスという男、このまま逃がすわけにはいかん。何処に隠れているか知らんが、見つけてたつ斬るべきだ」

ボールスの行方は知れなかったようだ。だがラトにはわかっている。ボールスはまだあの

『楽園』にいるはずだ。さすがに他の者にはボールスがヴァルナの聖地である『楽園』にいる

などとは思ひもしなかっただろう。

それともカーリア様が昨日、ボールスを斬ってしまったのか。

「おう！そうと決まれば、カーリア殿、お指図を」

戦士達の言葉を聞いているのかいないのか、カーリアは評議の間ずっと遠い目をしていた。

「カーリア殿！お指図を！」

「……お主等に任せる。好きなようにせよ。私は部屋に下がる。ラト、私の部屋には誰も入れるな」

そう言うときカーリアは呆然としているヴァルナの戦士達を部屋に残して自分の部屋に下がってしまった。

「……どうしたというのだ？今日のカーリア殿は少しおかしいぞ……」

「うむ。心ここにあらずといった感じじゃな。どこか悪いところでもござるのか……」

「仕方あるまい。我等だけでボールスを見つけ出すぞ。見つけたら問答無用、たたっ斬ってしまえ！」

広間で騒いでいる戦士達。ラトも広間から出て行った。カーリアの部屋の前に正座し、カーリアが出てくるのを待った。しかし、部屋の中からは物音一つせず、カーリアが部屋から出てくる気配も無かった。あまりに静かなので、もしかしたら眠っているのではと、一度だけラトはそっと戸を開け、部屋の中を覗いてみた。カーリア部屋の片隅に正座し、目を閉じていた。身じろぎ一つしない。静寂と清廉が部屋を満たしていた。ラトが気まぎらくなって、またそっと

戸を閉じようとした。

「ラト」

カーリアの声。静かだが、鋭い声だった。

「は、はい」

ラトが慌てて戸を開き、返事する。カーリアは目を開いていた。

「お前は今、刀がないんだったな。これをやる」

そう言うと、カーリアは自分の側に置いていた刀を取ってラトの方に差し出した。それは

カーリアがいつも用いている愛刀。二千年も昔にヴァルナの名匠が鍛え上げた大業物で、それだけの時を経て刀身に傷一つ付いていない名刀だった。

「え、でも……」

ラトがとっさに受け取りかねて、言う。カーリアにとっては命よりも大事な刀のはずだった。「構わん。受け取れ。お前もそろそろ一人前の戦士ならばならぬ歳。刀がなくては困るだろう」

カーリアが言う。有無を言わさない、カーリアの厳しい口調だった。

「ち、頂戴します」

ラトがうやうやしく刀を受け取った。腕にずしりと刀の重みを感じた。

カーリアは刀を渡すと何も言わず、また静かに目を閉じた。

ラトも何も言えず、部屋を下がろうとした。

その背中に、カーリアの声が静かに響いた。

「……ラト。強くなれよ。誰よりも。私よりも」

それは重く、しかしはつきりと突き通るような声だった。

ラトが振り向く。

カーリアはやはり無言で目を閉じていた。

ラトは自室に戻った。

一体昨日、あの後何があったのか。

カーリアに聞いたかったが、今のカーリアにはラトですら近寄り難い雰囲気があった。

何も心配する事はない。ラトは自分に言い聞かせた。昨日、カーリア様とボールス殿の間に例えどの様な事が起こったにせよ、カーリア様は今ここにいます。

ラトはカーリアに貰った刀を見つめた。

その夜、カーリアはヴァルナの里から姿を消した。

それから数十年の月日が流れた。ラトは成長し、立派な大人になった。ヴァルナの戦士に入隊し、優れた戦士となった。カーリアに憧れ、カーリアが姿を消した後も厳しい修行を続けた彼女はいつしか集落の若者の中で右に出る者のいないほどの武術の腕になっていた。カーリアの後の族長は男だったが、その次の族長はラトであろうと集落の若い者の間では噂になっ

ていた。

そんな時だった、ヴァルナの集落に再びボールスが現れたのは。人形のような瞳となったカーリアと数万の軍勢を連れて。後からラトが知ったことだが、この時ボールスはすでにモートの配下となり、この軍勢はモートから借り受けてきたものだった。

ボールスの目的は『楽園』の奪取だった。ヴァルナとボールスの軍勢の間で凄まじい戦闘が行われた。ラトも戦士の一人として懸命に戦った。ただカーリアの姿を求めて。

自分達の十倍近い兵数差のあるヴァルナに勝ち目は無かった。おまけにボールスは人外の強さを手に入れていた。勇敢なヴァルナの戦士達ですら、ボールスの前には為すすべもなく討たれた。

戦いは長引き、ヴァルナの陣営の中に奇妙な現象が起り始めた。死体が生き返り、味方を襲い出したのだ。吸血鬼だった。ボールスはなんと恐ろしき、呪われた怪物を作り出してしまったのだろうか。しかも、ラトにはわかっていた。この化け者達の血は我等ヴァルナと同じものなのだ。この化け物を作り出すためにボールスはカーリアを利用したのだ。

双方おびただし数の死傷者を出し、ついにヴァルナは敗走した。『楽園』もヴァルナの集落もボールスの手に落ちた。ラトは生き残った僅かなヴァルナ人を率い、ヴァルナの隠れ里に隠れた。この里だけはボールスも知らなかったようだ。以来五百数十年、ヴァルナ人はこの里にずっと隠れ住んできた。いつの日か、『楽園』、ボールスが死の都ネグロードと名づけたヴァルナの聖地を奪還するために。

「これが我々ヴァルナとポールスについての因縁じゃ。この婆の知る限りのの」
ラトが長い話を話し終え、一息ついていった。

「じゃあ、さっき助けてくれた軍勢は……」

ルーテネがザーバグから自分達を救ってくれた軍勢について言う。

「うむ。ポールスが死んだという噂を聞いての。それが事実なら我等ヴァルナの長年の悲願、『楽園』を取り戻す絶好の機会じゃからな。噂が本当かどうか、斥候もかねて少数部隊で軽く当たってみようとなったわけじゃ。そこでお主達とこのマユラが偶然鉢合せたというわけじゃな」

ラトが言う。マユラが頷いた。

「さて、もう夜も遅い。この婆はもう眠いわ。御主等も聞きたい事はまだ山ほどあろうが残り
は明日にして、そろそろ床に着くがよい。マユラ、客人に部屋を用意してあげなさい」

そう言うラトは部屋から出て行った。

「冗談じゃないぜ……」

月夜の下、ザーバグが呻く。彼は森の木々の上を飛び跳ねながら移動していた。たった一

人でだ。彼の連れてきた五千の兵はおそらく一人も生きていないだろう。ザーバッグには未だにほんの数時間前に見た光景が信じられない。ネグロードに攻め入った五千の兵がたった一人の女性と、まったく同じ白い甲冑で全身を包んだ十三人の戦士に皆殺しにされたのだ。女性も白い甲冑の戦士たちも何の武器も持たず素手で鎧を着たザーバッグの兵士達をバラバラにしていく。まさに虐殺だった。ザーバッグだけがなんとか戦場から脱出できた。

「こんなさまで帰ったらモードレッドに殺されるぜ……なんとかあのリーダー格の女だけでもやらねえとな」

ザーバックが呟く。突如、後ろに気配を感じて木の枝から飛び降りるザーバック。ほぼ同時に重い音を立てて、白い甲冑の戦士が四本足の獣のような姿勢で地面に降り立った。ゆっくりと上体を起し両手を地面から放す。中腰、猫背で両手を前にだらりと垂らし、実に気味の悪い構えだ。見た目はというと頭からつま先まですべて白い甲冑で覆われている。頭部を覆う兜は狼の頭を模したようなデザインで、狼の口から中にいる人間の口元が僅かに見える。

「けっ！しつこい野郎だな」

「ザーバックが腰から二本の短剣を抜く。

「……」

「だんまりかよ。まあいいさ。こっちもいつまでも逃げ回るつもりはないんだ。まずはてめえを血祭りにあげてやるぜ」

ザーバックが二本の短剣を構える。

白い甲冑の戦士の兜の狼の口が笑ったように開き、暗闇の奥に見える瞳が金色に光った。

月の光がネグロードの周りに築かれた死体の山を冷たく照らす。カーリアがネグロード城内の窓から月を見上げる。欠けた月だ。数日後には満月になるだろう。

石造りの部屋にはカーリアの他に白い甲冑の戦士が十二人いた。そこに最後の一人が帰ってくる。白い甲冑は所々無残に切り裂かれ、血に汚れていた。片腕は奇妙な方向に捻じ曲がってしまっている。

「……手酷くやられたな。あの大男、中々の腕のようだな。で、仕留めたのか？」

カーリアが聞く。白い甲冑の戦士は何も答えなかったが、兜の下の微妙な変化をカーリアは読み取ったようだった。

「……そうか、逃したか」

カーリアが呟く。どうでもいいことのようにだった。

血に汚れた白い甲冑の男が無事な方の手で折れた片腕に手を掛けた。メキメキと音を立てて鎧ごと曲がった腕を正常な方向に戻した。呻き声さえ上げない。それどころか口元は笑っていた。痛みを感じていないのか。

「ボールスが死んでしまった以上、すべての計画はお終いか……未完成の十三体だけが止むえまい……せめて計画の半分……我等だけでなんとしても『奴』を殺さねばならん……」

カーリアが独り言のように呟いた。白い甲冑の戦士達は無言で各々其処に並べてあった十三の棺桶に自ら入っていく。棺桶の蓋が閉まる。広い部屋にカーリアだけが残された。

カーリアが窓から遠い景色を眺める。

それはヴァルナの隠れ里がある方向だった。

カーリアの氷の様に冷たい目。その瞳の奥で、一体何を思っているのだろうか。

森の中でザーバグが肩を押さえて木に寄りかかっている。肩の肉が深く抉り取られていた。傷口から血が吹き出す。

「……クソが！一体此処はどうなってやがる！ポールスにあんな部下どもがいたなんて聞いてねえぞ！」

サーバグが歯軋りして呻いた。唇が噛み切れ、血が流れる。

白い甲冑の戦士と戦ったときに感じたあの異様な雰囲気。人間と戦っている気がしなかった。ザーバグが斬りつけても斬りつけても、怯まず襲ってくる。痛みも恐怖も感じていないようだった。戦い方が人間離れしている。

それにかかなりの強さだった。この魔界でも指折りの猛将ザーバグにここまで深手を与えるのだから。この数百年、どんな乱戦や死地にも恐怖を感じなかったザーバグが初めて恐怖を感じた。ザーバグは逃げるだけで精一杯だった。ザーバグが生まれて初めて感じた屈辱

だった。

ザーバグが月に向って獣のように吠えた。咆哮が森に響いた。

エステルはライオネルの命を受けて、その昔のミアムを知っているという老人を連れ添ってレオグランデス城内を歩いていった。

「ミアム様はどの様な方でした？」

エステルが廊下を歩きながら聞く。

「はい。ミアム様は逸れは大変お優しい方で、いつも我等領民の事をお考えでいてくれました。御貴族様でありながら奢らず、時間がおありになる時など、御自分が鋤を持って領民達と畑を耕すというのですから」

老人は答えた。背の曲がった、いかにも田舎の農夫といった感じの老人だった。城の中など入った事が無いのだろう。きよろきよろと物珍しげに辺りを見回しながらエステルの後について来た。

「ミアム様の領内は他の貴族様達の領内より遥かに税も安いですし、兵役も志願制です。それもこれもすべてミアム様のおかげ。ミアム様ほど領民の事を考えてくれる貴族など他にはいません」

老人が自慢げに言った。

「そうですか」

エステルはそう言いながら、ある一室に老人を招き入れた。

「ここで少しお待ちください。すぐに戻ります」

エステルがお辞儀して部屋を出た。ライオネルを呼びに行くつもりだった。扉を閉め、念のために鍵を掛けようとする。その時、部屋の中で何か音がした。

「どういたしました？」

エステルが再び鍵をポケットに戻し、部屋の扉を開けてそう言った。

ヒュンと音がした。

エステルがとっさに身をよじる。

部屋の中から矢が飛んできて、エステルの背後の壁に突き刺さった。壁に掛けてあったタペストリーが矢の刺さった部分だけ茶色く変色していく。毒矢だった。

部屋の中には背中に矢を受け、倒れている老人と弓を持った黒ずくめの男。

エステルが部屋の中に駆け入る。

黒ずくめの男が弓を捨て、腰から短剣を抜いた。エステルは構わず男に飛び掛る。

黒ずくめの男が短剣をエステル目掛けて突き出した。

エステルは上体を屈めてそれを避けると、伸びきった男の腕を掴んで男の身体を地面に投げつけた。侍女の姿からは想像もつかない、素早い身の動きだった。

エステルは男を地面に押さえつけたまま、男の腕を捻り上げる。男の手から短剣が落ちた。それでも黒づくめの男はエステルを振り解こうと足掻く。

「大人しくしてください。でないと腕の骨を折ります」

エステルが男を見下ろし、冷静に言う。

突然、男が動かなくなる。エステルが掴んでいる男の腕にもまったく力が感じられない。エステルはハツとすると掴んでいた腕を放し、男の顔を覗き込んだ。

もう死んでいた。

口から血を流し、肌の色は土色に変わってしまっている。死因は何かの毒のようだった。

エステルは男から離れ、老人に駆け寄った。老人ももう息をしていなかった。

ナナは自室にいた。机の前に座り、目の前には沢山の報告書が積み上げられている。諜報員を使ってレオグランデス中の銀行を調べさせた報告書だ。報告書から目を離し、ナナがようやく一息つく。

案外ミリアム口座がある銀行はすぐに見つかった。キャメロン都市内に本部のある『イダン両替商』だ。レオグランデス国内でも有数の銀行だった。レオグランデスの多くの貴族がここに資産を預けている。

ナナが直接イダン両替商まで行って、詳しく調べてみると、ミリアムがその口座を作ったのはほんの数ヶ月前。これも妙な事だ。数ヶ月前といえばまだミリアムは亡命していない。鎖国

国家のミルチアでどうやって国外の銀行に口座を作ったのだろう。まったく不可能というわけではないし、亡命するための準備と言われればそれまでだが、ただの亡命先の生活資金としては預けられている額があまりに大きすぎる。

この口座に頻繁に多額の金を入金している男についても結局わからなかった。イダン両替商の支配人に聞いただしてみると、入金に來た男の名前はロキア、三十代から四十代くらいの長身で貴族風の男だったそうだ。あまりに多額の入金なので支配人もよく覚えていたそうだ。

当然ながらロキアというのは偽名だろう。一応、レオグランデス国内の戸籍簿を調べさせてみたがその名前に該当する男はいなかった。あとは外国人かそれとも戸籍に乗っていない人間という可能性があるが、どちらにしても長身の三十代から四十代というだけでは調べようがない。

それ以上の事はわからなかったので、ロキアという男がもう一度來たら、店内に呼び止めておいてすぐに自分に知らせるようにと支配人に強く言って、ナナは銀行から帰ってきた。

ナナは疲れたように椅子の上で背伸びすると、立ち上がって水差し持ってきた。硝子のグラスに水を注ぐ。

ミリアムを疑うべき証拠は十分にある。だが決め手になる証拠は何一つ無かった。そんな事を考えながら、ナナはグラスに口を付けた。

急にナナが顔をしかめる。口の中の水をすぐに床に吐いて捨てた。

「……アカガミ草の根ですか。ま、私を毒殺しようなんてのが間違いですけど」

ナナはそう呟くと、椅子から立ち上がり、部屋の隅にある棚の戸を開けた。中には様々な種類の薬草が瓶詰めにして所狭しと並べられていた。ナナはその中から一つのビンを取り出すと、蓋を開けた。瓶の中には葉を磨り潰して粉状にした物。ナナはそれを手のひらに少量取り出すと、水も無しに口の中に流し込んだ。アカガミ草の根の毒に対する解毒剤だった。

ナナは薬草学に深く通じている。もちろん、毒草と呼ばれる植物に対しても非常に広い知識があった。ほとんど無味無臭と言われるアカガミ草の根の毒に気付いたのも、数百種の毒とその治療法に通じているナナだからできた芸当だろう。普通の人間なら気付かず水を飲み干して、数時間後にはまるで自然死の様に死んでいただろう。

「……まったく……やってくれますね。これを飲んだのがエステルちゃんならどうなった事か……軽く当っておいた方がいいですね」

ナナは微笑んだ。

ミリアムの部屋の扉がノックされる。ミリアムは返事をした。

「失礼します。シーツの交換に参りました」

ナナが扉を開けて中に入ってきた。

ナナがベットの方に進みながら、ちらりと横目でミリアムを見る。

ミリアムは机に向って何か書き物をしていたが、たったいま気付いたかのようにナナを見た。

「あら、今日も貴女なのね」

「はい」

ナナは短く答えると、ベットのシーツを外し始めた。今日は手早い。

ミリアムはとうとうと、そんなナナには気も向けず、また机に向つて何か書き始めた。おそろく手紙だろう。ナナの位置からは何が書いてあるかまでは見えない。

ミリアムは筆を置き、机の上のワイングラスに手をかけた。

「お気を付けてください」

ベットメイクをしている突然ナナが言った。ミリアムがグラスを手にしたまま動きを止める。「実は先ほど、私の部屋の水差しに毒が入れられていました。私ももう少しで死ぬところでした。ミリアム様も用心なさった方がよいかと」

ナナが淡々と言う。

ナナの言葉にミリアムの表情が変わった。それは注意していなければ見逃すほどの一瞬だった。だがナナはその変化を見逃さなかった。やはり先ほど自分を毒殺しようとしたのはミリアムだ。ナナはそう確信を持った。

ミリアムはすぐにナナに微笑み返した。

「あらそう。アトラースの中心にして最大の都市であるこのキャメロン城内も最近は何騒ですのね。そういえば、つい先ほど城内で殺人があったとそうですね。なんでもこの城の侍女とその侍女が連れてきた老人が襲われたとか」

ミリアムが楽しそうに言う。ワイングラスに口を付けて、ワインを飲み干した。ナナの表情

が強張る。そんな話は初耳だった。そういえばこの部屋に来る途中、随分城内が騒がしかった。その侍女と老人と言うのは、エステルとエステルが見つめてきたミアムを知る老人だろう。ナナの脳裏に最悪の光景が浮かぶ。

「……運良く侍女の方は助かったようですけどね。その老人は殺されたそうですよ」

ミアムがナナの目を見て言う。ナナは表情は変えなかったが、心の中では安堵していた。
「……犯人はどうなりました？」

ナナが静かに聴く。

「死んだそうですよ。どうしてかは知りませんけど」

ミアムが言う。

面の皮の厚い女ね、とナナは思った。どうせミアムが口封じに殺したに決まっている。そう思ってナナはミアムの瞳を見るのだが、ミアムの表情には変化がない。自分が殺した人の事をこうも平然と言えるところは大したものだ。もともと、面の皮が厚いという点ではナナも負けてはいない。自分を毒殺しようとした女に、こうも冷静に話をしているのだから。

「……さて、終わりました」

ナナがベットメイクを終えて言う。

「あら、今日は早いのね」

「ええ、本当は私手先が器用なんです。昨日遅かったのはわざとです」

ナナが微笑んで言う。

「……どうして？」

「貴女様が部屋を出て行くまでここにいたかったからですよ」

「……」

ナナが微笑みながら、かなり危険な事を言う。これにはさすがにミリアムも言葉を失ってしまった。何のためにこんな事を言うのか。

ナナにとってこれは安全圏ギリギリの捨て身の挑発でもあり、またなぜ自分が毒殺されかけたのかという疑問を解くための行動だった。ナナは昨日、あの二重底の下の帳簿を元通りに戻して部屋から逃げたはずだった。部屋中の他の調度品の位置も一センチとしてずらさず元の位置にある。それでもナナは毒殺されかけた。ナナ自身には何処でミスをしたかわからないが、それはおそらくナナが帳簿を見たという事をミリアムが気付いているという事だろう。その確信が欲しかった。

思ったとおり、ミリアムはナナの言葉を聞いても、あの二重底の机を見なかった。普通なら帳簿を見られたかと心配になり、例え一瞬でも無意識に机の方に視線がいつてしまう筈だ。視線がいかないのは、ミリアムが帳簿を見られたということに気付いているから。

「さて、長居をしてみました。今日は昨日と違ってもう出て行くのでご安心を」

ナナがお辞儀を言う。

無言だったミリアムはようやく微笑む。

「……なるほどね。貴女のような者と話すのは楽しいわ。刺激があつて」

ミリアムが言う。

「それはそれは。ではまた」

ナナは部屋から出て行った。

一人部屋に残ったセリーンはじつとナナが出て行った扉を見つめていた。

メイド一匹ぐらい簡単に殺せると思ったがどうやら甘かったようだ。どうしてかは知らないがナナは毒に気付कि、エステルとか言うメイドもセリーンが雇った殺し屋では殺し損ねた。

それにあのナナとかいうメイド、驚くほど頭が回る。魔界屈指の策士と言われるセリーンが舌を巻くほどだ。

このキャメロン城中で自分にとって一番危険な人物は、アヴァロン王でもライオネルでもなく、あのナナというメイドではないだろうかとセリーンは思い始めていた。

「……まあいいわ。こういうのもたまには楽しいでしょう」

セリーンが呟いた。ナナというメイドがどうあっても私の正体を探るといふなら、セリーンも受けて立つだけだ。セリーンは知能戦で自分が負けるとは思わない。

セリーンは不敵な笑みを浮かべた。

今夜も城内の一室にライオネルとナナ、エステルが集まっている。

「申し訳ありません。私が目を離れたばかりに……」

エステルが言う。ミリアムの顔を知っているという老人が暗殺された件だ。

「お主のせいではない。まさか城中にまで私も暗殺者が入り込んでくるとは予想もできなかった」

ライオネルが苦虫を噛み潰したように言う。アトール大陸の中で最も権威ある城が賊に進入されてしまったのだ。レオデグランス国家の信用を落としかねない事態だった。

「それで、その暗殺者の身元はわかったか？」

「現在、諜報員が捜査中ですが、身元の特定には時間が掛かると思います」

エステルが答える。その暗殺者の人相書きをレオデグランスの町々に配つてある。しかし、反応はかんばしくない。簡単に身元が特定できそうになかった。

「そうか……」

ライオネルが重い口調で言う。

ミリアムを知る証言者も殺され、その老人を殺した暗殺者も死んだ。これで振り出しに戻ってしまった。

「……そもそも、どうやって老人がエステルに連れられてこの城に来た事をミリアムに知られたのだ。お主等、この事を誰かに話したか？」

ライオネルが言う。ナナもエステルも首を横に振った。

「今日、老人が連れられて来る事を知っていたのは私達三人だけです。陛下ですらこの事は知りません。それにミリアム様は今日は城から一歩も出られていません」

ナナが言う。ライオネルにはこの二人が嘘を言うとは到底思えない。

「……ならば我等の行動は何者かに監視されていると言う事か……それもおそらく城内の者だ。内通者がいる」

ライオネルが言った。できれば考えたくない事だった。

今回の老人暗殺にしても、ナナの部屋の水差しに毒が入れられていた件に関しても、まず城外の賊の手だけでできることは思えない。城内を自由に歩きまわれる人間がライオネル達の行動をミリアムに報告し、そこから今日の老人暗殺と毒の事件がミリアムから命じられたと考えるべきだ。

「ナナ、エステル、ミリアムの行動を徹底的に監視しろ。奴から目を離すな。そうすれば内通者が誰かも自ずとわかる」

ライオネルが言った。

ロアが頭に激しい揺れを感じて目を覚ました。頭がくらくらする。

「おい！いつまで寝ているつもりだ。さっさと起きろ、もう朝だぞ」

ロアがぼやける目で声の主を見る。腰に手を当てたリュネットがロアの頭を蹴っていた。

「おまえ大丈夫なのか？」

ロアが驚いて聞く。昨日まで死に掛けていたとは思えないリュネットの元気さだった。

「当たり前だ」

そう言い放つリュネット。部屋の戸が開いてマユラが入ってきた。

「リュネット殿。あまり無茶をなさらないでください」

マユラがリュネットを見て言う。リュネットがマユラを見て、仕方なさそうにロアを蹴るのを止めた。

「あんたら吸血鬼に嘯まれた者を治療できるのか？」

ロアが聞く。

「いいえ、できません。だが昨日も言ったように我等ヴァルナは吸血鬼と深き因縁があります。

それなりの対処法は研究してきました。完全に治すことはできませんが、特殊な薬で体の中に入った吸血鬼の血をしばらく抑えておくことはできます。もっともそれもほんの数週間でしょうが……」

マユラが言った。

「結局は根本の治療を探さなきゃならないってことか……」

ロアが暗く呟く。そんなロアの姿を見てリユネットが鼻で笑った。

「こうやって体が動くようになっただけでもだいぶました。これで自分でネグロードまでいける」

今にもネグロードに走っていきそうなりユネットだった。そんなリユネットをマユラが制止する。

「ネグロードに行くのはもう少しお待ちいただきたい。せめてロア殿の傷が治るまでは」

マユラが言う。昨日カーリアにやられたロアの傷はまだ痛々しく残っていた。

「俺の傷なら2，3日で治るよ」

ロアが言う。人間なら完治に2，3日どころか3ヶ月は掛かる傷だろうが、吸血鬼の自己治癒能力は半端ではない。

「そうですか。我等もその内には準備が整います」

「準備？」

マユラの言葉にロアが聞く。

「はい。戦の準備をしております。ロア殿がもう一度ネグロードに向うというなら、我等ヴァルナの戦士も協力します」

マユラが真面目な顔で言う。

「え、そりゃありがたいけど……」

「御気になさらずに。リユネット殿のためばかりではござりませぬ。我等ヴァルナにとっても『楽園』奪還は悲願でござる」

「そっか。助かる」

ロアが言った。

「まずは怪我をゆっくり治して頂きたい。すべてはそれから。里には温泉もござる。傷の治療にも善いようなので、よかったら私が案内いたすが」

「なぬ！温泉！」

マユラの言葉に目を輝かせるリユネット。温泉好きのようだ。

「……：：：：：そういやルーテネは？」

ロアが聞く。

「ルーテネ殿は朝早くからラト様の所に押しかけておられる。色々聞きたいことがあるようではないの？」

マユラに案内されて温泉に行く事になったロアとリユネット。里の中を歩いていく。里で仕

事をしているヴァルナ人の好奇の視線を感じる。異国人は珍しいのだろう。

ロアが里の風景を見回す。広場で大勢の人間が武芸の稽古をしていた。剣、槍、弓、素手で組み手をしている者達もいた。年齢はまだ年端のいかぬ子供から髪の毛の白くなった老人まで様々。掛け声と共に厳しい修行に励んでいた。

「ふーん、すげえなあ。軍でもこんなに厳しく訓練しないぜ」

ロアが感心して呟く。

「我等ヴァルナは戦士の一族。戦いがあるうとなかろうと、常に鍛錬は怠りませぬ」
マユラが言う。

「武芸の訓練の割には馬に乗ってる人間が一人もないけど？」

リュネットが聞く。当然の質問だった。戦で馬上の戦闘は必須だ。

「我等は馬には乗らぬ」

マユラが当然のように言う。リュネットが驚く。

「馬に乗らない？それって戦闘では馬は使わないの？それともまったく乗らないって意味？」

「絶対ということはないが、まず乗らぬな。里にも何頭かいるが荷を運んだり、田を耕すために飼っているだけだ。むしろ我等の方に疑問がある。なぜ南国人はわざわざ馬に乗るのだ？自らの足で走ったほうが速いではないか」

「馬に乗るより自分で走ったほうが速いですって！それって本気で言ってるの？」

リュネットが目を見開いて言う。

「……本当だが。何故そのように驚くのだ？」

マユラが怪訝な顔で聞き返す。

「あ、俺も馬に勝つ自信あるぜ」

ロアが自分の顔を指さして言った。ロアとマユラの顔を交互に見て、リユネットが溜息を付く。

「まったく人間離れしてるわね……」

まあ、リユネットの感覚が普通だろう。瞬発力だけの必要な短距離ならともかく、数百メートル以上となると人間の足では馬の速さに到底敵わない。おまけに持久力も人間は馬の足元にも及ばない。それをこの二人は勝てるといっているのだ。いや、マユラの話が本当だと、ヴァルナ人なら誰でも馬に勝てるということだ。まったく驚くべき民族だった。

「お、あれなんだ？」

ロアが見慣れぬものを見るとすぐ走りよっていく。まるで子供だった。

「おい、私達は温泉に行くんだぞ。寄り道ばかりするんじゃない」

リユネットがロアに向かって怒鳴る。しかし、マユラはいちいちそんなロアの方に歩み寄って色々説明していた。

「いつまでたっても温泉に着かないじゃない！」

リユネットが叫んだ。

「ああ、いい湯だったわ」

温泉帰り、リュネットは上機嫌だった。そのまま三人はラトの屋敷に向う。

「ほんとだなあ、温泉のおかげで、ぼっちり傷が完治したぜ」

「お前馬鹿か？いくらなんでも温泉につかっただけで傷がすぐ治るわけないだろう」

ロアの言葉に呆れて答えるリュネット。

マユラの屋敷の廊下で三人はルーテネと会った。どうやらもうラトの屋敷からは帰ってきていたらしい。上機嫌だったリュネットの顔が明らかに不機嫌な表情に変わる。

「元気になったんですってね。ちゃんと顔を合わせるのこれが初めてですね。ルーテネです。よろしく」

ルーテネが笑って手を差し出す。

「ふん、魔族ふぜいが馴れ馴れしくしないで欲しいわね。私は神に仕えるものなんだから」

リュネットが差し出したルーテネの握手を無視して言った。

「あら、イーリアス教の方でしたの。それはそれは。あまりに下品な言葉遣いでしたのでわかりませんでしたわ」

ルーテネが差し出した手も下ろさず、笑みを湛えたままで言った。今の言葉は嘘だ。リュネットの服装や装飾品には至る所にイーリアスの紋章が描かれている。これでわからない馬鹿はいない。

「それより、イーリアス教の方は出された握手も返せないほど礼儀知らずな方ばかりなのです

か？」

ルーテネが冷たい目で微笑みながら言う。怒りでリュネットの口元がひくつく。力任せにルーテネの掌を握る。リュネットが無理に笑顔を作った。

「あなたこそ、魔族の癖に幼い少女の姿して気持ち悪いのよ」

「いえいえ、貴女の顔にはかいませんわ」

「だいたい貴女、なんでここにいるのよ？ さっさとこの里から出て行ったら。目障りなのよ」

「ごめんなさい。でも、昨日さんざん私とロア君のお荷物になった方の言葉とは思えませんわ」

「ふふふふ」

「あははは」

握り合った二人の手がギリギリと音を立て、二人の視線が火花を散らす。二人の様子にロアは何と言っていないかわからず立ち尽くし、マユラは我関せずといった様にさっさと自分の部屋に帰ってしまった。

「あ、あのさあ。こんなところで喧嘩するものなんだし、とりあえず部屋に入らない？ これからの相談もあるしさ」

マユラの屋敷には何人かの若い奉公人がいるのだ。こんな廊下で大声で喧嘩しているので、通りかかる奉公人達がくすくす笑っている。

リュネットとマユラの二人は握り合った手を強引に振り払うとそこから一番近かったロアの

部屋に入っていた。ロアも後から続いて部屋に入る。

「で、あんたこれからどうするつもり？」

部屋の中に入り、床に直接座ったリユネットがルーテネを睨んで言う。

「しばらくはロア君と一緒に行動しようかしら。ヴァルナの連中もロア君の手助けにネグロードに行くんでしょ。一緒に行動した方が何かと得だわ」

ルーテネが言う。一人ではあのカーリアには勝てないと計算してのルーテネの言葉だった。

「迷惑よ！」

「まあまあ、旅は道ずれ世は情けっていうじゃないか。仲間は一人居ても多い方が俺達も助かるだろ。それにこいつこう見えて結構強いんだぜ」

ロアがリユネットをなだめる。リユネットはまだ不満げだ。

「そういやルーテネにはコピーが沢山いるって言ったけど、ここには他にいないのか？」

「いないわ。まさかネグロードの研究室一つ調べるのにこんな手間取るとは思っていないから、他のコピーは連れてこなかったの。今こっちに向っているとこだけ、他のコピーが此処に着くのはいつになるかわからないわ」

ルーテネが言う。

「ふーん、じゃあいつ来てもいいようにお前の名前決めとこう」

「は？」

ルーテネが聞き返す。

「だってお前と同じ顔の奴が沢山来たら、どれがおまえかわからないじゃないか」

ロアが言う。ルーテネが呆れた顔をする。

「馬鹿らしい。コピーは私と同じ顔してるんじゃないかって、私そのものなの。みんなルーテネなのよ」

「いや、おまえはおまえじゃん。他のとは違うだろ」

「いやだから……」

「なありユネット、なんかいい名前ないかな？」

説明するルーテネを無視してロアが話をリユネットに振る。

「ボケ、それが嫌ならナス」

リユネットが適当に言う。微笑んでいるルーテネのこめかみに青筋が浮かぶ。

「さすがにそれはなあ……じゃあネーテルなんてどうだ？響きも悪くない」

「ルーテネをひっくり返しただけじゃない……」

眩くルーテネ。あまりに捻りのない名前だ。

「うん、いい名前だ。これからお前はネーテルに決定」

ロアがルーテネ、もといネーテルを指差して言う。満足気だ。

「ネーテル……」

ネーテルが小さく呟いてみる。なぜだろう、妙にむず痒い気持ちだった。

その夜、ロアは夢を見た。

此処は何処だろう。空が赤く染まっている。夕暮れの草原。草が風になびく。音はない。目の前にルーテネが立っている。いやネーテルか。どちらも同じもの。でも違うもの。

「貴方誰？」

「ロア。ロアIIソア」

「本当に？」

「本当に」

「何故そういいきれなの？」

「俺がそう名付けたから。人がそう呼ぶから」

「なら、名付けられる前の貴方は誰？」

「わからない……覚えてないんだ」

「貴方の過去には何があるの？」

「覚えていない……本当に思い出せないんだ」

「貴方の後ろには何があるの？」

ロアが後ろを振り返る。世界は其処で途切れていた。真つ暗な世界。何も無い世界。

「これは……」

「そう。何も無い世界。虚無。極小の行き着く先。Limit・∞。貴方も私も誰も存在しない世界」

「誰も……」

「そう。神さえも存在しえぬ世界」

暗闇を見つめるロアの背後でネーテルが言う。

「でも私はかつて此処にいた。貴方もかつて此処にいた」

暗闇の中にネーテルが現れる。ロアは驚いて後ろを振り返る。其処にはもう何も無い。夕焼けの草原は消えていた。ただひたすら闇が続く。暗黒の世界。何も無い世界。

ロアが自分の手のひらを見た。指先が闇に溶けていく。

「なんだこりゃ？」

「ここは誰も存在しえぬ世界。全ては無へと還っていく」

ネーテルの体も半分以上闇に侵蝕されていた。

「こんな世界はごめんだ！何も無い世界なんて……」

ロアは叫ぶ。

恐ろしい。そんな世界は。

「貴方がそう望むなら」

ルーテネの姿が歪む。暗闇が歪んで。世界が歪んでいく。もう何も見えない。突然、光が溢れた。

いつの間にか夕焼けの草原に戻っていた。

「ここは……」

ロアが目の前を見る。ボールスが立っていた。

「貴様も私も神さえも存在する世界。定められた束縛の世界だ」

ボールスが言う。

ボールス、十三使徒にして吸血鬼の祖。俺の宿敵。

宿敵？なぜ宿敵？

奴を見ると心が憎しみと恐ろしさと愛情を感じるから。

「……お前誰だ？」

「貴様こそ誰だ？」

誰？俺は一体誰なんだろう？

「馬鹿か？お前はロア。私の宿敵。私の恩人。そして私の……」

後ろに立っているリUNETTが言う。

ロア？そうなのだろうか……みんなは俺のことをロアと呼ぶ。でも誰も俺をロアと呼ばなく

なったら？俺自身でさえもロアという名を忘れたら？

彼の記憶はある時点を境に途切れている。人の心は記憶によって作られる。ロアの心はぼっ

かりとした大きな穴が開いていた。その穴の奥にある物は何なのか。

ロアはその穴を覗き込んだ。どこまで真っ黒な闇が続いていた。底が見えない。そもそもこ

の暗闇に底などあるのか。身を乗り出し、闇に手を伸ばす。何の感触もない。完全な闇だ。動

く物も音をする物もない。そこには何も無いのだ。

ロアは頭を抱えた。辺りに光が溢れる。ポールスもリュネットも消え、ただ白い世界が広がっていた。光りが溢れているのにこの寒さはなんだろう。

「人の手によって創られし忌むべき者よ」

目の前に立っていた白髪の老人が震えるロアに言った。

リュネットは夢を見た。

此処は何処だろう。壁が赤く染まっている。夕焼け。赤は嫌いだ。石造りの壁、豪華な家具。幼い私の部屋だ。

目の前に一組の夫婦が立っている。温かい、慈愛に満ちた顔。懐かしい顔。リュネットの目に涙が溢れた。

「お父様！お母様！」

「おかえり、リュネット」

「おかえりなさい、リュネット」

リュネットが二人に抱きついた。両親の胸で泣きじゃくる。

「どうして……どうしてこんな所に……」

リュネットの声が涙で詰まる。

「何言ってるの。ずっと一緒にいるじゃない」

リユネットが駆け寄って、ロアの首を抱きかかえた。

ああ、なんてことを。ロアは、ロアは私の……。

「どうして……どうして、こんなことに……神よ……」

「また神に祈るのか？」

いつの間に目の前にいたのか。茶色のローブを纏い、白髪の老人がリユネットの前に立っていた。

リユネットは驚いてロアの首を抱きかかえたまま後ろに飛び退いた。壁に背をあてる。

「だ、だれだ？」

「誰だ、か……中々難しい質問だな」

老人が其処にあった椅子に腰を掛ける。

「何故神に祈る？」

「知らなかったとはいえ、ロアを殺してしまった罪とロアの安らかな死を願うためだ」

「なるほど。なかなか感心だな。ではついでにそいつの事も祈ってやれ」

老人がリユネットの抱きかかえているロアの首を指差す。リユネットが自分の腕の中を見る。その首はロアのものではなく、知らない誰かに代わっていた。腐りかけて蛆が湧いている。

リユネットが悲鳴を上げて首を投げ捨てた。生首が地面を転がる。

「誰だ！誰の首だ？」

「ふむ、覚えてないか……お前が神聖騎士団に入隊して初めて邪教徒狩りの際、お前が捕らえ

た人間だ。結局その後、斬首されてこのような姿になった」

足元まで転がってきたその首を老人は挿んで言った。リユネットのほうに投げ返す。投げ返され、足元まで転がってきた生首を見てリユネットが後ずさりする。

「なぜロアの事は祈って、この男の事は祈ってやらん？」

「そ、その男は邪教徒だ！それにロアは、ロアは私の……」

私の……声が詰まる。

「……愛する人か」

老人が言う。ずっと心の奥に隠していた言葉。自分自身にさえも嘘をついてきてまで隠していた言葉だ。

「神に仕える者であるお前が命の差別をするのか？一方は天国に行って、一方は地獄に行けど？どちらも同じ人間なのに？」

「そ、そうだ！こいつは邪教徒だ！死んで当然の人間なんだ！罪に塗れているのだから……」

リユネットが叫んだ。

「自分が罪に塗れていないとも思っているのか？自分の体を見ても」

リユネットが自分の手を見る。真っ赤だ。血に濡れている。足も腰も胸も、髪までぐっしょりと血に濡れている。

リユネットの体が恐ろしさのあまり震える。歯がガチガチと鳴った。

「お前が殺してきた人間の血だ。神の名を騙ってな」

「死んで当然の奴らなんだ！邪教徒も魔族も……それが神の意思だ！」

「ほう？お前には神の声が聞こえるのか」

「……聞こえない。でも教会は神の代弁者だ！」

「神の言葉は神のみのものだ。お前や教会のものではない。人の生死を決定するのはお前や教会ではない」

老人が静かに言った。

「お、お前は誰なんだ？」

「さっきも言ったが、なんとも答えづらい質問だ……まあ、ただのお前の夢とでも言っておこうか」

リュネットが地に膝を着く。

「神よ。全知全能にして、慈愛と光に満ちた創造主イーリアスよ。私をこの悪夢から救ってください。彼方の子にして、迷いの羊は今恐ろしい悪魔に惑わされています……」

「また祈りか……祈りなら私が聞いてやろう。確かお前達の神はこのような姿をしているのだったな」

そう言うと、老人の姿が美しい女性の姿に変わった。聖都ラヴィーンに祭られてある創造主イーリアスの石像の姿そのものだ。

「貴様っ！神を冒瀆する気か！」

その姿を見たりユネットが立ち上がって叫ぶ。もう目が血走っている。

「神を冒瀆しているのは貴様達の方だ。神の名を騙り、自分達の都合のいいように人々を扇動する。それでいて自分達が苦しいときだけ祈りを捧げる。そうすれば助けてくれる。そんな都合のいい神が本当にいると思っているのか？そんな血に汚れたお前を救ってくれる神が何処にいる？」

イーリアスの姿から再び老人の姿に戻った男が言った。

「五月蠅い！五月蠅い！私だって殺したくて殺してるんじゃない」

「神のためか？違うな。お前は神のために戦っているのではない。全て自分のためだろう。お前は自分の両親を殺した魔族に復讐したかっただけだ。その行為の正当性のために神の名を利用したに過ぎない」

「五月蠅い！もう聞きたくない！」

リュネットは耳を塞いでうずくまった。

「そうやってまた逃げる。都合の悪いことにはすぐ耳を塞ぐ。そんな事で本当にお前はいいと思っているのか？」

「止めてくれ！もう何も聞きたくないんだ！」

リュネットが泣き叫んだ。

ネーテルは夢を見た。

此処は何処だろう？一面鏡張りの部屋。光が反射して眩しい。

鏡にネーテル自身が映っている。いや、これは私だろうか？鏡に映った私は笑っている。嫌な笑みだ。

「あなたは？」

鏡の中の私が私に言った。

「ネーテル」

「ネーテル？ルーテネでしょ？」

「それも私の名前。でも新しい名前を貰ったわ」

「貴女、わかっているの？名前が変わるって事は存在そのものが変わるって事よ」

「名前が変わっても私は私だわ。何も変わりはない」

「いいえ。はじめに名ありきというわ。存在と名は密接に関わりあっている。無関係ではない」

「あなたは？」

「私はルーテネ」

「私はルーテネ」

「私はルーテネ」

「私はルーテネ」

鏡に映った無数のルーテネが一斉に言った。声が重なる。

「私のコピーね。みんな私なの？いつもながら奇妙な感覚ね」

ネーテルが呟く。この感じ。何度も味わってきた感覚。私が私でなくなる感じ。広がって溶けていきそうな感覚。肉体も魂も形を保てなくなりそうな不安定な心だった。

「そう、みんな私よ。みんなルーテネ。ルーテネと呼ばれるもの。でもあなたはもうすぐ私でなくなるわ。だってあなたはネーテルになっちゃうんだもの」

「そうなのかしら？」

「そうよ。抽象から具現に。永遠を捨てて死を得る。無様ね」

「死？私は死ぬの？」

「そうよ。だってあなたはたった一人なんですもの。死んだら代わりはいないわ」

「それも悪くないかもしれない。もう私は疲れたの……違う体に無理やり記憶を詰め込み、それを私と思うことに……」

ネーテルが言う。その言葉に遠くの鏡の中で黒い影がうごめいた。

「嫌だ！」

鏡の中から叫び声が聞こえる。ネーテルがその鏡に近づいて目を凝らす。この鏡だけ、ルーテネとは違う者が映っていた。陰気な表情の髪長い若い男。ネーテルはこの男を知っていた。この男は……。

「ヘンギスト……」

鏡の中のヘンギストが暗い顔を上げる。

「……そう。ヘンギストだ。十三使徒の一人にして、稀代の天才錬金術師。そしておまえ自身でもある」

鏡の中のヘンギストがネーテルを見つめて言った。

そう、私はヘンギストだった。かつて偽りの身体に記憶という魂を詰めた。すべては永遠の生命を得んため。人間を超え、神の領域にたどりつく為だ。

「死が怖いのか？」

ネーテルが鏡の中のヘンギストに聞く。

「当たり前じゃないか。貴様は怖くないとでも言うのか。私は死にたくないんだ。この私の長きに渡る人生の経験も、如何なる者も及ばない膨大な知識も、全ては死によつて儚く消える。私は世界の成り立ちの謎を解き明かさんがために、この世界に隠された数々の数理公式を導かんがために気の遠くなるような時間を費やしてきた。それが全て無に還るのだぞ。そんな事に私は堪えられない。死は闇だ。生命の光りを飲み込む無限の闇。そこには何も無い。人も魔族も、いかなる物理法則も数理公式も、神さえも存在できない虚無の世界なんだ。私はそんな所に行きたくはない……私は光り輝く生命の温もりの中に居たいんだ……」

ヘンギストが頭を抱えていった。その姿は人間の生への執着。無様で醜く、しかし生きる物としての当然の欲望。それは醜悪であるも温かく、どこかネーテルの心を揺さぶるものがあった。

「可哀想な人……でも人はいつか死ぬのよ。ううん、人だけじゃない。エルフもドラゴンも魔

族も、木や石でさえも、形ある物は皆いつか死ぬのよ。それだけじゃ変えられない」

「いいや！私は死なない。私は気付いたんだ。記憶こそ命の、魂の本質であると。私は自分の記憶を永遠に伝えていく。そのためのお前なんだ。お前は魂の受け皿だ。お前がいる限り、私は死なない。なのにお前はルーテネをやめ、ネーテルになるという。なぜだ！お前が死ぬとお前の中の私も死ぬのだぞ！」

「私は名前を変えるだけよ？」

「……お前は何もわかっていない。お前はルーテネのという名で括られた抽象記号の中にいてこそ、永遠の生命という機能も働くのだぞ。そこから一步であれば、お前は世界の中に投げ出された孤独でひ弱な一つの生命に過ぎなくなる」

「林檎は林檎。二つあっても、それは二つの林檎。でも二つとも同じ『林檎』だけど、よく見ればやっぱり違う。この世に一つとして同じ林檎なんてないわ。私気付いたんだけど、やっぱり私達ルーテネは皆それぞれ違うのよ。例えばそれがヘンギストの記憶を持っていたとしても、それはやっぱり貴方じゃない。貴方はもうとっくの昔に死んだのよ」

「違う！確かにこの世に一つとして同じ林檎なんてない。お前達ルーテネも同じく、皆それぞれ微妙に違うかも知れん。しかし、抽象化することでその差は問題でなくなる。数学者が普遍的に数字を扱うのと同じだ。人が1+1を計算する時、誰が書いた1かで計算結果が変わるか？変わりはしない。誰が書くかによって1という文字の姿は微妙に違うのだろうが、誰が書こうとその1は正真正銘『1』だ。その意味は普遍的で、永遠に変わることなど無い。だがあ

て窓から飛び出した。地上十三階からね。そこでヘンギストという生命は死んだのよ」

ネーテルは言う。彼女の中にあるヘンギストの記憶だった。

「……化け物……あれは化け物だ……あんな命、作り出すんじゃないかった……あんな怪物が自分と同じ記憶を持っているなんて、私と同じヘンギストだなんて考えただけで気が狂いそうだった……今の私にはわかる、だから神も気が狂ったんだ。人を作り出し、その姿を見たときに……」

ヘンギストが頭を抱えてうずくまった。

「そうかもね……もし神なんてものがこの世にいるなら、その神は狂ってるとしか思えないわ。こんな人と人が憎しみあって殺しあう世界……人も魔族もエルフもドラゴンも……みんな同じこのアトラーズに生きる一つの命なのに……」

ネーテルが恐怖で苦しむヘンギストの姿を見た。なぜ人はこんなにも弱く脆いのに、互いに争うのだろう。争いが憎しみを生み、憎しみは恐怖を生む。恐怖から狂気は生まれる。かつて、ヘンギストはずっと死を恐れていた。当時は酷い戦乱の時代、人の命など吹けば飛ぶ塵のように軽かった。死は至る所に無造作に転がっていた。その死の恐怖に堪えられなくなったヘンギストは永遠という名の狂気に見せられ、ルーテネと呼ばれる命を生み出した。

ネーテルは思う。私は人の狂気から生まれた。なんて歪で不安定な、呪われた存在だろう。私のコピー達はみんな狂ってる。おそらく私も。でもそれは仕方ないのだ。ネーテルの、ルーテネの狂気はヘンギストの死の狂気から生み出ている。それは全ての人の持つ心の暗い影なの

だ。

「そうだな。それが人間の愚かさだ。なぜ死という運命を静かに受け入れない？お前は人間の罪そのものだ」

いつの間にかネーテルの前に立っていた老人が言った。

ネーテルが目を覚ます。嫌な夢だった。頭がズキズキと痛む。最近よく夢を見る。ネーテルにあるルーテネとヘンギスト、二つの人格。それが混ざり合って生まれた多数の人格。ごちゃ混ぜに混ざり合ったそれら。自分が統一された人格なのか、それとも自分の中に複数の人格があるのか。ネーテルにはもうわからなかった。現実が夢のように思える時がある。ぼやけた頭に目の前の全てがスーッと過ぎ通っていく感じ。夢と現実の違いはなんなのか。その世界を主観として体感している自分にとっては、その二つはどちらも同じ現実ではないのか。ネーテルにはわからない。おそらくヘンギストにも答えられないだろう。

ネーテルが身支度を済ませて部屋から出た。今日も最長老ラトに会いに行くつもりだった。聞きたいことが山ほどあるのだ。

部屋から出たところでロアに会った。縁側に座って庭をぼんやりと眺めている。苔の生えた岩が置かれ、小さな池のある庭だった。池の中で小魚が泳いでいる。水面がキラキラと光った。「何やってんの？それに早起きね」

「……うん？」

ロアがネーテルの方を振り向いて聞き返した。寝惚けてんのかこの野郎。

「いや、この魚見てた」

「……おもしろい？」

「……まあまあかな」

ロアが再び池の方に視線を移していった。相変わらずブーツとしている。

「じゃあ、私、最長老様のところに行ってくるから」

「……おう。いつてらしゃい」

ロアがルーテネの方も見ずに手だけ振って、言った。

「気分が優れぬようだな」

廊下を歩いていたマユラがロアの後ろで立ち止まって言った。

「ああ、おはよう」

「悪い夢でも見たか？」

「……悪い夢かな？まあ、よくわからん夢だったな……」

「夢は現実と無関係ではないというが、あまり気になさらん方がよい。所詮、夢は夢に過ぎぬ」

「そうだな。そーいやマユラは今朝どんな夢を見た？」

ロアの言葉にマユラは首を振った。

「我らヴァルナ人はほとんど夢というものを見んのだ。たとえ見たとしても、目覚めた時にはそれがどんな夢だったか忘れている。いや、もし覚えていたとしてもすぐに忘れるように言われる。我らヴァルナ人にとって夢とは不吉なものなのだ。我等の中で夢を見ることを許されているのは夢見の者だけだ」

「夢見？」

「ああ、夢を見る事を特別に訓練された者達だ。彼等は夢を見て、そこからヴァルナの運勢を占う」

「ふーん、変わった職業もあるんだな」

ロアが呟いた。

「私は今から道場に稽古に行くのだが。気分転換にお主もどうだ。傷はまだ治ってないだろうから見学だけになるだろうが」

「道場か……よし、いくか」

ロアが立ち上がった。

「リユネット殿も誘いたいのだが。一人で屋敷に残っても退屈だろうしな」

「ああ、あいつなら部屋に閉じこもって出てこないぜ。俺もさつき会いにいったんだけど、気分が悪いんだって」

「……そうか。なら仕方ないな」

マユラが残念そうに言った。

広い道場の中には大勢の人がいた。男、女、年を取っているものから、マユラよりも若くまだ少年、少女を呼べるような歳の者まで様々だ。素手で組み手をする者、木刀、棍を使っている者もいた。

ロアとマユラが入ってくるとみな一斉に動きを止め、マユラに向かい礼をした。そしてまた各自鍛錬に戻る。マユラはロアに道場の隅に座っているように言うと、近くにいた少女を呼び、素手の稽古をつけ始めた。

ロアは二人の組み手を眺めている。マユラは受け手にまわり、少女の攻撃を受け流し、ときたま攻撃して少女にアドバイスを与えていた。

少女の動きは歳の割には素早かった。激しい攻撃をマユラに向って繰り出していく。この歳でこれだけ動ける人間をロアは知らない。おそらくこの少女は毎日厳しい稽古を欠かさず続けているのだらう。しかし、それを受けるマユラの動作はまさに感嘆の一言に尽きた。どれも紙一重でかわしていく。どんなに少女が激しく攻め立てようと、息一つ乱さずその攻撃に応じて動いていく。ロアがネグロードの城で見たカーリアの動きそのものだった。

ようやく二人の動きが止まる。少女は肩で激しい息をしているが、マユラは汗一つかいてい

ない。少女をマユラに一礼して隅に下がる。

「すげえな」

ロアがマユラに向かって言った。

「この程度の動き、我等ヴァルナ人にとっては誇れる程のものでもない。むしろ私などまだまだ未熟な方だ」

「一つ俺にも稽古をつけて欲しいな」

ロアはそう言うのと、笑って立ち上がる。

「別に構わぬが……傷の方はもうよいのか？」

マユラが心配そうな顔で言う。

「ああ、こんな傷もう治ったよ」

「そうか。ならば一手お相手しよう」

そう言うのとマユラは構えを取った。

「おう。本気で行くぜ」

ロアも構える。背を丸めて腕をぶらりと下ろす、彼独特のスタイルだ。

ロアとマユラが互いに睨み合う。道場の中で稽古していた他の者達が腕を止め、二人を見た。二人はある一定の間合いを保ったまま動かない。ロアはマユラの目を見たまま、隙をうかがっていた。しかし、腰の辺りに軽く両の拳を握っただけの構えのマユラにまったく隙は見出

せなかった。迂闊な小技で相手の隙を誘い出そうとすれば逆にロアがカウンターを貰って、や

られるだろう。

二人はなおも動かない。マユラに先手を取る気は無いようだった。先ほどからロアがしきりにわざと隙を見せて攻撃を誘っているのだが、マユラは動く気配がない。

(隙はない、誘いにも乗らないか……こうなりや力技しかないな……)

ロアが床を蹴る。床板を踏み破りそうな強力な踏み込みだった。3メートルほどの距離は瞬きする瞬間に無くなった。ロアの拳がマユラの顔に迫る。ロアの視界からふいにマユラの姿が消えた。ロアの拳が当ろうかという瞬間、マユラが半歩踏み出し、身体を横にずらしたのだ。そのままロアの拳を受け流すと、そのロア自身のスピードを利用してロアを床に叩きつけた。

激しい音が道場に響き渡る。床に這いつくばったロアは肩を押さえ、なんとか立ち上がった。「……いったいどうなってんだ？ネグロード城のカーリアといいマユラといい、ヴァルナ人てのは化けもんだな。動きに目がついていけないぜ。どうすりやそんなに速く動けるんだ？」

ロアが苦笑して呟く。悔しくはなさそうだった。

「別に私の動きが速いのではない。おそらく身体能力から言えばお主と私にそれほどの差は無い。いやむしろお主の方が速いくらいだ」

マユラが言った。

「ならなんで俺の攻撃があんなにあっさりかわされて、マユラの動きは俺には見えないんだ？」

ロアが怪訝そうな顔で聞く。自分の方がマユラの動きより速いという事に納得のいかないよ

うだ。

「お主の動きには無駄が多すぎる。振りは大いし、動きも丸見えで次の動きが簡単に予測できる。だから私はお主の攻撃を簡単にかわせる。逆に私の動きには無駄が少ない。敵の動きの虚を付き、最小限の動作で最短距離を攻撃していく。だからお主の目には速く見えるのだ」

「そっか。ちょっと前にも、同じ様な事を知り合いに言われたぜ……」

ロアが自分の肩をさすって言う。思い出すのはダルフエンディアの町でライオネルに惨敗した事だった。人間であるライオネルと吸血鬼のロア、ロアの方が身体能力では遥かに勝っているはずなのに、ロアは手も足も出なかった。あの時のライオネルに同じような事を言われた。

「お主ははもつと動きの無駄を無くすべきだ。お主はまともな武芸の稽古は一度もしたことが無いのではないか？」

「うーん、無いなあ。戦い方なんて戦っているうちに、なんとなく覚えていったものだからな」

「それでは所詮獣と一緒にです。そんな自然に覚えた戦い方ではいつか限界がきます。武芸とは過去の偉大な戦士達が考え抜き、実戦の中から編み出した技を受け継いできたもの。全ての技に意味があり、無駄がありません。ロア殿も武芸を習い、兵法を磨くべきです。そうすればもつと強くなれます」

マユラが確信を持った口調で言った。

「それならちょっと教えてもらおうかな」

「ええ、ぜひそうしてください。言っておきますが、私に勝てないようではおそらくカーリアの足元にも及びませんよ」

「ああ、あいつ強いからなあ。一昨日身体で体感したよ」

ロアが背中中の傷を触って笑った。ネーテルをかばってカーリアに付けられた傷だ。

「カーリアは長いヴァルナの戦士の歴史の中でも指折りの戦士と言われています。ここ千年では間違いなく最強でしょう。一片の無駄も無く鍛えこまれた肉体に、長きに渡って積み上げられ、極められた技。素手で獅子を殺し、刀を持てば鬼神すら恐れて彼女を避けたと聞いています」

マユラが苦々しく言った。

「なんか不機嫌そうだな」

「ええ、本来ならこの名は口にしたくありません。いくら優れた戦士でも裏切り者は裏切り者。カーリアはポールスに我等ヴァルナを売ったのです。我が一族からあのような裏切り者が出るとは……彼女は一族の恥です。一族の恥は一族が拭きます。カーリアがまだあの城にいるのなら、生かしてはおきません」

マユラがネグロード城のある方角を睨んで言った。その表情からもマユラがカーリアを憎んでいることがわかる。家名と名誉を重んじるヴァルナの一族。その中で裏切りは最も重い罪だった。そのカーリアの血族としてマユラも幼い頃は辛い目にあってきた。マユラの家族はヴァルナの人々から冷たい目で見られ、マユラ自身は同じ歳の子供達からのいじめを受けた。

しかし、マユラはその程度の逆境に負けるような子供ではなかった。その時族長の座についていたラトが優しく守ってくれたこともあって、彼女の精神は健全に育っていった。マユラはただ武芸に打ち込んだ。朝から晩まで剣を振り続けた。一族の汚名を晴らすため。カーリアをこの手で討つため。マユラが成人する頃、すでに里には兵法でマユラに並ぶ者はいなかった。ラトが族長の座を退き長老の座に移った時、里の中で反対も多かったがラトの強い推薦もあり、マユラが次の族長となった。

そして今に至る。マユラはずっと『楽園』奪回の機会を待っていたのだ。そしてついに時は来た。あの城の偽りの王であるポールスは死んだ。ヴァルナ六百年の悲願を果たす絶好の機会だった。

「さて、稽古するなら昼までにしておきましょう。昼からはゆっくり休んでください。明日ネグロード城に攻め込みます。我等は戦の準備もありますから」

「おっけ」

ロアはそう言うと、マユラに稽古をつけてもらった。

エステルは今日一日、ずっとミリアムの行動を隠れて監視し続けていた。しかし、別段目立った動きはなかった。今日ミリアムが取った行動といえば、レオデグランスの中流貴族の数人に昼食を招かれたぐらいだ。エステルはメイドに扮してこの昼食会に立ち入ったが、特に怪しいことはなかった。あとはずっとミリアムは自室に閉じこもっていた。

ミリアムの部屋の前でずっと身を隠し続けるエステル。そうして数時間も粘っていた頃、ようやくミリアムが部屋から出てきた。

エステルの姿には気付いた様子もなく宮中の廊下を歩いていくミリアム。エステルは物陰から姿を現し、エステルの後をつけて行った。

しばらく歩いた後、ミリアムが一つの廊下の角を曲がる。エステルは数秒置いて、静かに廊下の角から顔を覗かせた。

ミリアムは忽然と姿を消していた。驚いて辺りを見回すエステル。廊下には身を隠せるような物陰も無く、部屋に通じる扉も無い。ただ廊下の遥か先には曲がり角がある。エステルの尾行に気付いたミリアムがほんの数秒であの曲がり角まで走っていったのだらうか。

エステルは廊下の角から身を出すと、先へ向って走っていった。

その様子をじっくりとミリアムは見つめていた。天井に蜘蛛のように張り付いて。実に簡単な事だった。ミリアムは廊下の角を曲がった瞬間、驚くべき跳躍力で床を蹴るとそのまま天井に張り付いたのだ。人間、自分の頭上には案外注意がいかない。エステルも簡単に引っかけたてしまった。

今日一日、何者かが自分を監視している事にミリアムは気付いていた。プロの諜報員であるエステルの尾行は完璧と呼べるものだったが、ミリアムにはある特技があった。一種の魔法の罫である。その魔法とは目に見えない魔法の糸のような物を張り巡らせて、それに誰かが触れば離れていてもミリアムにはそれが感じられるというものだ。ただ何気なく歩いている様に見えるミリアムは常にこの魔法の糸を自分の背後に設置しながら歩いていた。それによってエステルの尾行も簡単にばれてしまったというわけだ。

エステルが遠くに走り去り、辺りに人がいない事を確認すると、ミリアムは天井から音も無く舞い降りた。

「所詮二十年も生きていないような小娘が、私を監視しようなんて甘すぎる」

ミリアムは満足げに呟くと、ゆっくり歩き出した。

(さて、甘いのはどちらですかね)

そのミリアムの様子を天井近くの柱の影から覗っていたナナが心の中で微笑する。ミリアム

が歩き出したのと同時に、ナナも音も無く天井の近くの柱を飛び移りながらミリアムの後を追っていく。人間業とは思えない軽い身のこなしだ。

二重尾行だった。エステルにミリアムを尾行させ、そのエステルをナナが尾行していく。ナナは諜報員としてのエステルの腕は信頼していたが、ミリアムには尾行を感じられるとわかっていた。それでこの二重尾行を思いついたのだ。案の定、ミリアムはエステルには気付いたが、ナナに気付いた様子はない。

先日、ナナとエステルは暗殺されかけた。命じたのはミリアムだろうと想像はつく。ミリアムがナナとエステルの暗殺を命じたという事は、ミリアムにナナとエステルが周囲を嗅ぎ回っていると感づかれたという事だ。何処で感づかれたのか、ナナはずっとそれを考えていた。それはナナがミリアムの自室を調べ、あの帳簿を見つけた時としか考えられない。あの帳簿を見られたから、ミリアムはナナ達の暗殺を命じたのだ。しかし、あの時ナナはミリアムの部屋にある物はすべて元の場所に戻しておいた。一mmの狂いも無いはずである。帳簿も内容を記憶しただけで、帳簿その物はすぐにちゃんとあの机の二重底に戻しておいた。ナナは自分がミスをしたとは思えない。それでもミリアムに帳簿を見た事を気付かれたという事は、なにかしらあの机に仕掛けがあったとしか思えない。ナナにはそれが何らかの魔法の罫であると想像はついていた。

ミリアムが普通の人間には見えない何らかの魔法の罫をはっているすれば、それはミリアムの背後かつ人が通る場所に張っているはずだ。だからエステルの尾行はあても簡単に気付かれ

たのだ。だから今、ナナは床を歩いて尾行するようなことはせず、天井近くを移動しながらミリアムの後を追っている。さすがにミリアムもナナがこのような非常識な尾行の仕方をしているとは夢にも思わないだろう。

ミリアムは何処に向っているのか悠然と宮中の廊下を歩いていく。ナナはミリアムの後をこっそりと追いながら先ほどのミリアムの動きについて考えていた。エステルをまいたあの動き、床から高い城の天井まで跳躍するとは並みの人間業とは思えない。諜報員として血も滲む様な訓練を受けてきたナナでもあんな化け物じみた動きはできない。

ミリアムはやがて城門まで来ると、そのまま巨大な鉄の門を抜けて城の外に歩いていく。天井近くを身を隠すようにして移動していたナナも城門まで来てようやく、地上に静かに飛び降りた。突然目の前に女性が降ってきて驚く警備兵。

ここまでくれば道に人も多い。ミリアムの使う魔法の罫も効果をなさないだろう。ナナは人ごみに紛れながら町の中を歩いていくミリアムの後をつけていった。

ミリアムが向っていたのは町の端にある倉庫街のようだった。ここには古いレンガ造りの倉庫が立ち並んでいる。商人達が買い付けてきた穀物などを保存しておく場所だ。今はもう使われていない倉庫も沢山ある。その様な倉庫の一角は人通りも寂しかった。

ミリアムはそんな倉庫街の一角にある古い倉庫に立ち入っていった。ナナは慎重に倉庫に近づく。ナナは倉庫の周囲をしばらく観察していたが、やがて倉庫の壁に足をかけると器用にレ

ンガ造りの壁をよじ登っていった。二階に小さな窓がある。ナナは壁に張り付いたまま、小道具を使い窓の鍵を外す。するりを窓の中に身体を滑り込ませた。手馴れた泥棒のような手際だった。

ナナは身体を低くして辺りの様子を覗う。倉庫の中は大きな一つの部屋で、部屋全体を取り囲むように、二階に細い通路がある。ナナがいるのはこの通路だった。ナナは物音を立てないように身を移動させると、二階の通路に積んであった木製の箱の陰に隠れた。

ナナが身を隠しながら一階を見下ろす。そこには倉庫に入ってきたばかりのミリアムと、ナナも知っている驚くべき人物がいた。

(オクト大臣……なぜこんな所に……)

その人物はオクト大臣だった。初老を向えもうすっかり白くなった髪と髭を蓄え、緩んだ贅肉を豪華な衣装で包んでいる。アヴァロン王の親戚で、レオデグランスの最も有力な貴族の一人でもある。少なくともこのような倉庫の中でミリアムと会う必要などない人物である。やはり何か後ろめたい事があるのか……。

そしてもう一人、オクト大臣とミリアムの中間に一人の異様な男が立っている。いや、男か女か、年齢すらもわからない。顔は目の部分以外を黒の布で包み、全身も体の線にあった黒装束を着込んでいる。どう見てもまともな職業の人間とは思えない。

オクト大臣は両手を広げ、ミリアムを大仰に迎えた。

「おお、ミリアム殿。随分遅かったな。心配したぞ」

「尾行を撤くのに少し手間取った」

ミリアムが言う。

「……つけられてはおらぬだろうな？」

オクト大臣が眉をひそめて聞く。

ミリアムは顔をしかめ、何かを口にしようとしたが、黒装束の男が片手を上げてミリアムの言葉を遮った。

「……何？キリエ」

ミリアムが怪訝な顔でキリエと呼ばれた黒装束の人物を見る。

キリエ。その名前を聞いたとたん、ナナの背筋に冷たいものが流れた。ナナは諜報員だ。自然、都市の裏の部分とも多少なり繋がりがあある。そして裏の世界の者なら誰でもキリエという名を知っている。聞いただけで震え上がる。キリエは伝説のアサシンで、世界中で幾つもの歴史的な暗殺に関わったとされる人物だ。その正体はまったくを保持って不明で、年齢どころか性別すらもわかっていない。

もっともキリエはただの都市伝説だという者も大勢いた。暗殺者を恐れる貴族達が作ったただの噂、空想上の人物だと。ナナもそう思っていた。今では犯人が特定されなかった暗殺事件のほとんどこのキリエという人物の仕業にされていたからだ。なによりキリエという人物が実在しているという根拠は何もない。ただ人の噂にその名が上がるだけだ。だから各国から懸賞金すら掛けられていない。

だが今、ナナの目の前にその伝説の人物がいる。本物か、それともただキリエの名を騙っているだけの偽者か……。

ナナはごくりと唾を飲み込んだ。やけにその音が大きく感じた。

キリエはゆっくりと手を下ろすと、ミアムの瞳を見た。

「……つけられたな。鼠が入り込んでる」

低い男の声でキリエが言った。

キリエが顔を上げて、二階に隠れているナナの方を見る。

目が合った。

その瞬間、ナナは身を翻し、二階の窓から外に跳躍していた。猫のように柔らかく地面に着地するナナ。息つく暇もなく全速力で走り出す。

……あの目、あの殺気……間違いなく本物のキリエだ。

夕暮れの寂しい倉庫街の影に解ける様に走って行くナナ。後ろから追って来る者がいないことを確認すると、一つの倉庫の壁に背を預けて息を整える。たいした距離も走っていないのに、ナナの息は荒かった。

呼吸が苦しい。胸の鼓動が痛いほど響く。

キリエ……その名前をナナは心の内で読み返す。最悪の名前だ。ミアムとキリエが接触したという事は誰か重要人物の暗殺を計画しているという事。それにオクト大臣……。ミアムの口座にある莫大な資金……。

そこまで考えた時、ナナの脳裏に一つの考えが浮かんだ。まさに最悪のシナリオだ。もしミリアムがそれを企んでいるなら、なんとしても阻止しないと……。

ナナは唇を噛み締めて俯き、地面を見つめた。

影が動いた。

ナナはつとして、目を上げる暇もなく瞬時に眼前の地面に前転していた。

次の瞬間、先ほどまでナナのいた場所にキリエが音も無く舞い降りた。両手に見慣れぬ刃物が握られている。ナナはその刃物を知っていた。カタールとか言う異国の武器だ。ナナの動きが一瞬でも遅ければそのカタールがナナの胸に突き刺さっていただろう。

ナナは急いで体勢を立て直すと、キリエに対峙した。

キリエも無言でナナを見つめる。

ナナは油断無くキリエを見つめたまま、口を開いた。

「貴方、本物のキリエなの？」

「……」

キリエは答えない。

「……貴方が本物のキリエだとして、キリエとミリアム、それにオクト大臣までもが人目をはばかって会っていたとなれば貴方達が何を企んでいるか想像もつくわ」

「……」

「……アヴァロン陛下の暗殺。違うかしら？」

「……」

キリエは無言だ。黒い布で覆われたその表情にも変化は見られない。

「……無口なのね。そうだとか違うとか、少しぐらい何か喋ってくれてもいいんじゃない？」

ナナがニヤリと笑って言う。

そのナナの笑みを見て、ようやくキリエも口を開いた。

「……お喋りで時間を稼いで、誰か通りかかるのを待っているなら無駄な事だ。お前も殺すし、目撃した者もすぐ殺す」

「あらそう？」

ナナが笑って言う。だが内心は凶星だった。先ほどから逃げるか攻撃するか、とにかく隙を覗いているのにキリエには微塵の隙も無い。誰かが通りかかって、キリエの注意が一瞬でもそっちにいったくれれば少しは隙ができるのだが……。だが、ただでさえ人通りの少ない倉庫街の夕暮れ。運良く人が通りかかるとは思えない。

ナナはゆっくりと一歩下がった。

キリエはそれに呼応するように足を一步前に踏み出す。

ナナとキリエの視線が交錯する。

突然、ナナは身体を横にして走り出した。

キリエはナナを追う。

互いに一定の距離を置いて、睨み合いながら横に走っていく。

ひゅんと音がした。

ナナが袖口に隠していた短刀をキリエに向って投げつけたのだ。キリエはカタールで難なく短刀を弾く。

突如、キリエが跳躍した。一足跳びでナナとの間合いを詰める。驚くべき跳躍力だった。キリエのカタールがナナに向って振り下ろされる。

ナナはなんとかそれを避ける。今のはナナ自身、自分でも驚くような動きだった。背中に冷や汗が流れる。それほどに鋭いキリエの攻撃だった。今避けられたのは運が良かったに過ぎない。次は避けられないだろう。

ナナは間合いを取ろうと後ろ跳んだ。短刀しか武器の無いナナにとって間合いを詰められるのは避けたかった。何よりまともにやり合うには不気味すぎる相手だ。

ナナは倉庫の壁際まで下がると、壁に足を掛け、軽業師のような身のこなしで、瞬く間に二階建の倉庫の屋根に上った。キリエも後を追う。

倉庫の屋根上で再び対峙し合う両者。夕日が二人の影を長く伸ばす。

「しつこいですね……」

ナナが疲れたように呟く。

「……こちらこそ驚いた。何処で鍛えられてか知らんが、女にしてはたいした身のこなしだ」
キリエが言う。

「ねえ、もう止めにしません？ミリアムに幾らで雇われているかは知りませんが、こっちは

その倍出しますよ」

ナナが言う。

「仕事は仕事だ。私を雇いたいならこの仕事が終わってからにするんだな」

そのキリエの言葉を聞いてナナは笑って舌打ちする。ナナにもわかっていた。本物のプロが金で裏切るような真似をするはずが無いと。

笑ってはみたものの、ナナには状況を打開する策が思いつかなかった。ナナも体術には相当自信のあるほうだが、動きを見る限りキリエはそのナナより一枚上だ。逃げ切れるとは思えなかった。

「……運が悪かったと思って諦めるんだな」

そんなナナの心中を見透かしたようにキリエが言う。

「あいにく私は往生際の悪い方でして」

ナナが笑って言う。

キリエがナナに飛び掛っていく。

ナナはなんとか身をかわそうとしたが、やはりキリエの動きの方が速い。避けきれぬものはなかった。

迫り狂うキリエのカタールをなんとか受けようとナナが短刀を構える。だが所詮、男と女の力の差だった。キリエの一撃で簡単に短刀はナナの手から弾き飛ばされた。すかさずキリエがとどめに入る。

カタールがナナを切り裂こうかというその時、ナナが袖口から何かを出した。胡桃ほどの大きさの黒い球体のそれをとっさに地面に投げ付ける。

爆発が起こり、真っ黒な煙が辺りを包んだ。

キリエの視界が黒一色に包まれる。

野外の、それも倉庫の屋根という高い場所だったので、風がすぐに黒煙を吹き流した。

キリエの視界も戻る。だがそこにナナの姿は無かった。

「……煙幕か……あの女、一体何者だ……？」

キリエが呟く。煙幕というただでさえ珍しい道具を、まさか持ち歩いている女がいるとは……。

キリエは静かに地面を見下ろした。僅かに血が飛び散っている。

キリエはナナを追おうとしたが、やめた。

血痕を辿ればナナを追い詰める事など容易いが、この煙幕の煙を見てもうじき人が集まってくる。キリエは人に見られるような事は避けたかった。それにナナはすぐに死ぬ。

キリエは静かにその場を立ち去った。

ある倉庫の一室。そこではミリアムとオクト大臣が言い争っていた。いや、一方的にオクト大臣が何かまくし立てているようだ。

「ミリアム殿！この事が表立てばどうなるかわかっているだろう！それなのにああも容易く尾

行されてくるとは……あのメイドがこの事を誰かに喋ったら我等は破滅だ！」

贅肉の垂れた喉を震わせて怒鳴るオクト大臣。

「何をそんなに慌てているのです？心配しなくてもあの女はキリエが殺すでしょう」

冷静に言い返すミリアム。

「その前に誰かに喋られたら！？」

「そんな心配は無用です。キリエは世界一の暗殺者。貴方だって知っているでしょう。それともキリエの腕をお疑いですか？」

「そうではないが……」

あくまで静かなミリアムの言葉に、やや声を落ち着かせるオクト。

そこにキリエが帰ってきた。何処から入ってきたのか、いつの間にかミリアムの横に立っている。

「あの女は？」

「……殺した」

オクト大臣の言葉に何の感情も無く答えるキリエ。キリエのカタールには毒が塗ってあった。傷口から少しでもこの毒が体内に入れば、人間なら一分と経たずに身体も口も動けなくなり、3分もすれば死ぬ。

「そうか……」

その言葉を聞いて、ようやく胸をなでおろすオクト。それでいて人一人殺してというのに、

何の感情も表さないキリエを恐ろしく感じた。

「……邪魔者も消えたようですし、オクト大臣、準備の方はどうです？」

ミリアムがオクトに聞く。

「おう、もうまったく抜かりは無いわ。資金は十分集まったし、仲間の貴族達にも根回しはしてある。いつでも始められるぞ」

「そうですか。明日にはライオネルがサンダルークに向けて援軍を率いて行きます。そうすればレオデグランス国内はほとんど空。これであればアヴァロン王を殺すだけ。それで貴方がこのレオデグランスの王になれます」

ミリアムがうやうやしく言った。

オクト大臣はクーデターを起こすつもりだった。

焚きつけたのはミリアムだ。このレオデグランスの貴族の中には、魔族に強硬な姿勢を持ち、国家を上げて魔族討伐を行っている今のアヴァロン王に不平を持つ者は沢山いる。オクト大臣にはその貴族達に根回しをしてもらっている。

アヴァロン王を殺した時、大貴族と呼ばれる貴族達の三分の一でもオクト大臣の支持に回ればそれでいい。首都キャメロンは金で雇った傭兵達で占拠する。そのために集めた膨大な資金だった。すでにミリアムは手紙を飛ばし、大陸中の傭兵を集めている。首都キャメロンの制圧とクーデターに反発する貴族達を黙らせるには十分すぎる兵力だった。

首都が制圧され、大貴族の一部がオクト大臣を支持しているなら、オクト大臣が王座に就く

ことに反論できる力を持ったものはいないだろう。

「さて、一番難しいのが王の暗殺ですが……」

ミアムはちらりと横目でキリエを見る。大陸一堅固といわれるキャメロン城内に忍び込んで、それも警護の厳しい王を殺すなど簡単にできることではない。不可能といってもいい。

「……問題ない。仕事は必ず遂行する」

だが、キリエは静かに言った。

ミアムは頷く。それでいい。そのために大金を積んでこの男を雇ったのだ。

「そうか、そうか。これでわしもようやく王位につけるのだな」

オクト大臣が満足げに笑った。腹の肉がたぶたと揺れている。

そのオクトをミアムは冷たく残酷な目で見ていた。ミアムという亡命貴族ではなく、セリンという名の魔族の目だった。

ナナはふらつく足取りで倉庫街を歩いていた。肩の傷口が熱い、それに頭を割れるように痛かった。出血のせいではない。おそらくキリエのカタールには毒が塗ってあったのだろうとナナは思った。

ナナは腰に付けている中着から茶色の丸薬を取り出すと、口の中に放り込んだ。ナナが常時持ち歩いているある種の解毒剤だ。だが毒の種類もわからないのに、こんなものが効くかどうか

か……。

ナナは地面に倒れこんだ。

視界がぼやける。なんとしてもライオネルに、いや誰にでもいいからミリアム達の陰謀を伝えなければと思うのだが、もう体が動かなかった。

ナナの意識は暗い淵に飲み込まれていった。

夕暮れ、ラトの部屋。部屋の中にはマユラとラトの二人だけ。ラトの向かいにマユラが正座していた。

「準備はできたかの？」

ラトがマユラに向かって言う。

「はい。ヴァルナ二十七氏族、総勢三千人の戦士達すべて準備整っております」

「そうか。ついにこの時が来たの。我等が聖地を取り戻す日が」

「ロア殿達の話によればネグロード城には兵らしき兵もいないとか。この機を逃す手はありませぬ。『楽園』奪還は確実かと」

「……カーリア様は尋常な武人ではないぞ。あの御方の兵法はすでに神域に入っておる。まさに武神よ。カーリア様は一人で千の兵に匹敵する。いやそれ以上かもしれん。油断はならん

ぞ」

「わかっておりまする」

カーリアが言った。ラトがその顔を危なげに見る。

「お主はもし乱戦中にカーリア様を見つけたらなんとする？」

「決まっております。斬りかかって討ち取るのみです」

マユラの言葉を聞いて、ラトが首を横に振った。

「危うい、危うい。一兵卒ならそれでよい。だがお主はヴァルナの族長なのじゃぞ。大将は

軽々しく死んではならぬ。それに、おまえの未熟な腕ではカーリア様には勝てぬ」

ラトが言う。ロアを軽く下したマユラが未熟とは。

「カーリア様を見つけても、決して切り込もうなどと思ってはならん。冷静に兵を指揮して

カーリア様を討つのじゃ」

「しかし！」

「お前の気持ちはわかる。しかし、自重せよ。使命を軽んじてはならん。お主にヴァルナの命運が掛かっておるのだ」

「……わかりました」

マユラがうな垂れて答えた。マユラにとってカーリアだけはなんとしても自分の手で討ちたかったはずだ。

「わかればよい。出陣は明朝だったの……ん、外が騒がしいようじゃが……」

ラトが呟く。そう言われてマユラが耳を澄ます。確かに微かにだが、外が騒がしい。この歳でよくこの小さな音が聞こえたものだ。マユラは感心する。騒音はかなり遠く、里の端辺りだろう。マユラは立ち上がって障子を開けた。そこからマユラが外を見ると、里の端の民家が燃えていた。

マユラと武術の稽古を終えたロアは里の中を何気なく散歩していた。横にはリユネット。ロアが気分転換にと誘い出したのだ。二人は特に何を喋るといっわけでなく道を歩いていく。里は剣や槍を持った戦士達が慌しく走り回っていた。明日の戦の準備だろう。騒がしかったが二人の周りだけ静かだった。

「もう体調はいいのか？」

「ええ、ここの人達から貰った薬の御陰でね。体力はいつもと換わらないぐらいまで戻ったわ。まだ私の中に吸血鬼の血が残ってるとは思えないくらいよ」

リユネットは言った。彼女はそう言うが、身体の中にはまだボールスの血が残っているのだ。ヴァルナ人の薬は症状を一時的に抑えるためのものではない。根本的な治療をしなければいずれまた病状は悪化していくのだ。二人ともそれはわかっていた。

「ついに明日だな」

「勝てるかしら？あの城にはかなり厄介な敵がいるんでしょ？」

リユネットが言う。先日、ロアと一緒にネグロードに潜入した時、病状のため薄れいく意識の中、リユネットもカーリアを見ている。あの超人的な強さ、今度は数千のヴァルナ人の協力があるとはいえ、簡単に勝てる敵とは思えなかった。

「なんとかなるさ」

ロアが言う。そんな保証は何処にも無い。楽天的な性格だった。どんな時にも常に善い方に考える。悪いことは考えない。いつもは馬鹿とも思えるこのロアの性格だが、この時ばかりはリユネットにもロアの性格が救いに思えた。

「……悪いわね。私のせいで厄介なことになっちゃって」

歩きながらリユネットが下を向いて呟いた。いつもは虚勢という名の鎧を着ているリユネットの正直な気持ちだった。不器用な彼女なりの、精一杯の感謝の言葉だった。

「いいさ。お互い長い付き合いだからな。腐れ縁ってやつか」

ロアが笑った。

「覚えてるか？六年前の冬、あの橋の上での事」

「ええ、覚えてるわ。あれは酷かったわね」

リユネットが苦笑する。六年前、雪の降る寒い昼だった。ロアはある町にいた。盗掘してきた骨董品を売りさばきに来ていたのだ。商談も終わり、町を当ても無くぶらついていたらロアは橋の上で一人の少女と目が合った。銀の鎧と腰には剣を差していたが、まだ幼さの残る女の子だった。若き日のリユネットである。

ロアには見覚えの無い少女だったが、少女リュネットの方は驚きで目を見開いた。ついに探していた人に会ったのだ。かつての命の恩人、そしてリュネットの両親を殺した男と同じ種族である吸血鬼ロアに。リュネットの中では懐かしさと憎悪と愛しさが入り混じっていた。声を出すこともできずに呆然とロアを見つめる。そんなリュネットを不審げに見つめるロア。

「あの時に比べたらお前もでっかくなったなあ。あの頃はまだこんながきんちよだったのに」
「うるさいわね。私は吸血鬼じゃないのよ」

リュネットは呟く。初めて二人が出会った時、リュネットはロアの顔を見上げなければならなかった。数年後、橋の上で再開した時もまだ顔を上に上げなければならなかった。でも今では少し目を上げるだけでロアの瞳が見える。リュネットの身体が成長したという事だが、同時に歳をとったという事でもあった。リュネットは思う。十年後、私はどうなっているのだろう。吸血鬼の寿命は人間の三倍はある。リュネットは歳をとるがロアは若いままだ。リュネットは寂しく思った。いつまで私はロアの後ろを追いかけていけるのだろう。ロアは若いままずっと走り続けている。でも人間のリュネットはいつか立ち止まらなければならぬ。いつまでも若くはないのだ。いつかは何処かに落ち着かなければならぬ。私は何処に留まるのだろう。一体誰のもとに……。

「……あのね、ロア。大事な話があるんだけど……」

リュネットが立ち止まって、言い難そうに口を開いた。手に汗をかいているのがわかる。喉はからからだった。

「何だよ？あらたまって」

「もし全てが終わって、二人とも無事にレオデグランスに帰れたら……その時は私と……その……」

「ん？なんだありゃ？」

ロアがリユネットの言葉を無視して、遠くの民家の屋根を見た。真っ赤な顔をしたリユネットは慌てて咳払いをする。そして、ロアの視線の先を見た。

「何あれ？」

リユネットが呟く。民家の藁葺きの屋根の上に人の姿が見えるのだ。それも真っ白な鎧で全身を包んだ奇妙な人間だった。

白の甲冑の男が屋根から跳躍する。道を歩いていた一人のヴァルナ人の戦士の前に四つん這いで着地した。

「何だ貴様！」

いきなり前に奇妙な男現われ、驚いたヴァルナの戦士は腰の刀に手を掛ける。しかし、その刀が鞘から抜かれるより早く、ヴァルナの戦士の男の首が中を飛んでいた。白の甲冑の男が腕でヴァルナの戦士の首を切り飛ばしたのだ。辺りに悲鳴が上がる。一斉に辺りにいたヴァルナの戦士達が白の甲冑の男を取り囲んだ。すでにみんな刀を抜いている。

白の甲冑の男が身体を振り、反動をつけて腕を伸ばした。だが、周りのヴァルナの戦士達に腕が届く距離ではない。しかし、白い甲冑の男の腕が奇妙に伸びた。一人のヴァルナ人の顔を

驚掴みにする。甲冑の関節が外れ、白い甲冑の男の腕は2メートル近く伸びていた。掴まれたヴァルナ人の頭部がグシャリと潰れる。眼球と脳漿が飛び出した。

他のヴァルナの戦士達、正確な人数で言うとも5人の戦士は一斉に白い甲冑の男に斬りかかる。5人の男による四方からの完璧な攻撃だった。白い甲冑の男には避けようがない。為すべく五本の刀によって甲冑の上から前後左右串刺しにされた。白い甲冑の男は首をうな垂れ、ガクリと力が抜けたように動かなくなる。

「……あいつ笑ったぞ……」

遠くから戦いを見ていたロアが呟いた。甲冑に隠されて表情は見えないはずなのに、なぜかロアには白い甲冑の男が串刺しにされる瞬間笑ったように思えたのだ。

串刺しにされた白い甲冑の男が顔を上げた。生きているはずはないと思っていたヴァルナの戦士達は驚いて目を見開く。白い甲冑の男は前後に腕を振った。5人のヴァルナの戦士達の首が飛ぶ。頭を無くし、残った首から血が噴水のように吹き出す。どきりと5人のヴァルナの戦士達が倒れた。白い甲冑の男はゆっくりと身体に突き刺さった刀を抜いた。異常な光景に近くにいた他のヴァルナの戦士達も刀を構えたままどうしていいかわからず立ち尽くしていた。

「……何よ……あの化け物……」

リネットが呟く。背筋が寒くなった。辺りを見ると他にもまったく同じ格好をした白い甲冑の男が現れていた。辺りで見境なく人々を殺していく。ヴァルナ人の戦士達も次々応戦していく。

「ネーテルが心配だ。ラト様の屋敷に急ごう。そこにネーテルもいるはずだ」
ロアが言う。リュネットは頷き、二人は走り出した。

ラトの部屋にロアとリュネットが駆け込んできた。ちょうどマユラが窓から外を見た時だ。

「ネーテルは？」

ロアがラトに聞く。

「隣の部屋におるはずじゃ」

「私と呼んでくるわ」

ラトの言葉を聞いて、リュネットが言った。部屋から出て行く。

「南国人の方、外で何があった？」

「よくわからん。敵襲のようだけど……外ではえらい戦闘になってるぜ」

「敵襲だと！」

マユラが叫んだ。部屋から飛び出していこうとする。

「マユラ、お主はまだ動くな。ここにおれ」

ラトがマユラを呼び止める。何か考え込んでいた。部屋にまた一人駆け込んできた者がいる。
ヴァルナ人の男だった。

「ラト様！マユラ様！敵襲です！」

男は部屋に入ってきたなり叫んだ。

「慌てるでない。敵の人数は？」

ラトが言った。落ち着いた口調だった。

「正確にはわかりませんが、少数のようです。おそらく十人にも満たないかと。分散して里のあちらこちらで暴れております！」

「十人だと！ たった十人の敵に手こずっているのか！」

マユラが叫んだ。

「それが恐ろしい化け物です。戦士団総出で討ち取ろうとしておりますが、まるで手が付けられませぬ。すでにこちらは死傷者が数え切れぬほどでています。なのにまだ敵を一人も討ち取る事ができませぬ」

ヴァルナ人の男が無念そうに言った。

「ラト様！ 私に行かせて下さい。このままではこちらに被害がでるばかり。並みの者で相手にならぬなら、私が行って敵を討ち取って見せます」

「ならぬと言ったはずじゃ」

ラトが厳しい口調で言う。そこにリユネットとネーテルが部屋に入ってきた。

「カイよ。お主は戦士達がその敵を防いでいる間に、女子供を里の外に避難させるのじゃ」

「わかりもうした」

カイと呼ばれた男は頭を下げて、部屋から一歩出た。血飛沫が上がる。障子に血が飛び散った。カイの死体がどしりをラトの部屋に転がる。そのカイの死体を踏み越えて部屋に入ってきた。

た一人の女性。マユラそっくりのヴァルナ人だ。マユラが驚きの表情を見せる。マユラにとっては初めて見る女性だ。だが、マユラはこの女性を知っている。こいつは……。

「……カーリア様」

ラトが呟いた。カーリアはゆっくりとした歩調で部屋の中に入ってくる。マユラが腰の刀を引き抜いて構えた。そのマユラをカーリアが横目で見る。何気ない視線、しかし氷のように冷たい瞳だった。その目を見ただけで、マユラは金縛りにあったように動けなくなった。マユラの持つ刀の剣先が震える。敵との対峙においてマユラが恐怖を感じたことなどこれが初めてだった。マユラが肌で感じたものは殺気でも怒気でもない。一流の剣客だけが持つ鬨気とでも言おうか。押し潰す様なその鬨気の前に、マユラは蛇に睨まれた蛙の様な気分だった。

「下がっておれ、マユラ。まだまだお主が敵うようなお方ではない」

ラトが言った。カーリアがマユラの事などまるでそこにいないかのように、マユラの前を通り過ぎた。ロア、リユネット、ネーテルはどうするべきかと戸惑っている。カーリアがラトの前に立つ。ラトがカーリアに頭を下げた。

「……お久しゅうございます、カーリア様。かれこれ六百年近くなりますか」

「ラトか……おまえも歳をとったな」

カーリアが感情のない表情で言う。

「カーリア様は何もお変わりないようで。六百年前と何一つ変わっておられぬ」

ラトが言う。確かにカーリアの姿は六百年という年月が嘘のようだった。何一つ変わってな

い。マユラの双子の姉といつてもつうじるような若さだった。

「それでカーリア様、この度はなぜヴァルナの隠れ里を襲いなさる。やろうと思えば六百年前に襲えたはず。なぜ今になって？」

ラトがカーリアに尋ねた。六百年前、ボールスとの戦いに敗れたヴァルナ人達は今のこの隠れ里に逃げ込んだ。しかし、ボールスは知らなくても、ヴァルナの族長であったカーリアは当然この隠れ里の位置を知っていた。襲おうとおもえば六百年前に襲えたはずだ。当時のヴァルナ人達の戦力は瀕死の状態だった。ほとんどが戦で死んで戦士達の数は三百にも満たなかったのだ。もっと簡単にこの里を落とせたはず。

「私がボールスにこの里の位置を教えなかったのは、もはやヴァルナの戦士団は取るに足りない存在だと思ったからだ。止めをさすまでもないとな。しかし、ボールスが死んでネグロードの防衛力は皆無に等しくなった。そして、お前達ヴァルナの戦士団はこの六百年で再び力を取り戻した。お前達がネグロード奪還を目論んでいるのはわかっている。『楽園』は渡すわけはいかん。誰にもな」

カーリアが静かに言った。

「なるほど。それでこの度の奇襲というわけですか」

「ヴァルナの使命は『楽園』を守ること。しかし、その役目ももう終わった。もはやヴァルナ人は必要ではないのだ。むしろ今再び『楽園』を取り戻されても困る。だから私が全て殺す。同じヴァルナ人としての責務としてな。もう外では里の者全て殺し終わっているだろう」

何の温かみもないカーリアの言葉だった。氷のように冷たい。

「……そうですか。最後に一つだけ言わせていただきたい。貴女様はこのラトの憧れでした。獅子の様に強く、賢者達より賢く、神話の女神のように美しい。貴女様からどれだけのことを教わり、学んだか。カーリア様はこのラトの恩人です」

「……」

「だが許せぬ事もある。たった一度、生涯にたった一度だけこの愚かなラトに反抗する事をお許しいただきたい」

そう言うとき座布団の上に座っていたラトは立ち上がった。老人と思えぬ真っ直ぐした背筋だった。ラトが大きく目を大きく開いてカーリアを睨む。

「カーリア！この馬鹿者が！例えどの様な理由があれ、ヴァルナを裏切った貴様を私は許すことができません。かつての貴様の弟子としてこのラトがお前を討つ！」

「……」

ラトが怒鳴った。カーリアの表情は変わらない。

「マユラ、私の刀を持って来い。その上に掛けてある刀もじゃ！」

カーリアを睨みつけたままラトが言う。枯れ木のような老人とは思えぬ覇気だった。マユラがハツとして慌てて刀掛けに掛けてあった日本の剣を取る。ラトに手渡した。ラトがカーリアに二本の内の一本の刀を投げ渡す。カーリアが無言で受け止めた。

「お前が六百年前に『楽園』に落としていった刀じゃ。六百年間、このラトの宝じゃった」

ラトがそう言つて刀を鞘から抜く。そのラトをカーリアが冷たい目で見つめる。

「……ラト、下がれ。人の心を捨てた私もお前だけは斬りたくはない」

カーリアが静かに言つた。

「情けは無用じゃ。私が族長の座を退き、刀を置いて三百猶予年。しかし、まだ腕は衰えておらぬ！」

「……そうか」

カーリアが刀を抜いた。二人が無言で対峙する。ラトが足で燈籠を倒す。蠟燭の火が畳に燃え移り、炎が広がった。

「マユラ、お主は里から離れよ。こやつの手前は私がする」

ラトがカーリアと対峙したまま言つた。

「いけません！ラト様こそ逃げてください。そやつの手前はこのマユラが！」
マユラが叫ぶ。ラトが悲しげに首を横に振つた。

「……カーリアの言うとおり、もうヴァルナの運命は終わっておるのかもしれない。遙か遠い昔にな。おそらくお前がヴァルナ最後の戦士となる。これからお前はヴァルナの誇りを持って、しかし自由に生きよ。『楽園』奪還など考えるな。もうヴァルナを縛るものは何もない」

ラトが言つた。しかし、マユラは聞く耳を持たず、ラトとカーリアの間に割つて入る。マユラがカーリアに刀を向けた。そのマユラの首筋にラトが当身を当てる。マユラは声を出すこともできず、意識を失つて倒れた。

「南国人の方々、すまぬがマユラをよろしくお頼み申す」

ラトの言葉を聞いて、ロアが意識の無いマユラを抱き上げた。

「わかっている。でも婆ちゃん本当にいいのかわ？」

「本当を言うとの、こうしてカーリアと真剣勝負ができてうれしいのじゃ。この婆の長年に渡って磨き上げてきた技が、どこまで師に通じるか試せての。だからこの老いぼれの最後の願いを聞いておくれ」

ラトが笑って言った。壁に燃え移った炎の揺らめきで、なんだかその笑みは悲しげに見えた。ロアは頷くとラトとカーリアの顔を交互に見て、そして部屋を出て行った。ネーテルが後に続く。リユネットは最後までラトを見ていたが、やがて意を決したように部屋から出て行った。

部屋の炎はすでに天井まで達し、辺りは皮膚を焦げ付けさせるほどの熱気に満ちていた。それでもカーリアとラトは動かない。

「……礼を言います、カーリア様。マユラを見逃してくれて。貴女がその気なればここにいた五人、すべてもう殺されていたはず。マユラは貴女にとってたった一人の肉親ですから」

「……別に肉親の情などではない。あやつ一人生き延びたところで何ができるものでもないからな。必要がなかったから斬らなかつたまでの事」

「……そうですか」

ラトが言う。

「貴女様に同情します。マユラにも、誰にも言わなかったが、私は知っているのです。六百年前、あの『楽園』で貴女がポールスから何を聞いたか。ヴァルナの罪と真実。一人が背負うにはあまりに重すぎる真実。さぞ辛かったことでしょう。貴女様が血の涙を流してポールスと共にこの地を去ったこと。このラトにだけはわかります」

「……」

炎はさらに燃えていく。天井から火の粉が舞い落ちた。二人の肩に降りかかる。

「もう火の手がまわる。そろそろ参ります」

ラトがそう言うと言を構える。

「……すまんな、ラト……」

カーリアも刀を構えた。

二人の剣が交差する。血飛沫が舞った。

ラトの屋敷が炎に包まれて崩れ落ちた。それを背にしてロア達はヴァルナの隠れ里を走っていく。酷い状況だった。そこら中にバラバラになった人間の死体が山のように積まれている。里の中は血の匂いに包まれていた。カーリアが言ったとおり、もう里中の人間が殺されてしまったようだ。

「二人とも気をつけろ。たぶんそこらにまだ敵がいるぞ」

意識を失っているマユラを背負って走っているロアがリユネットとネーテルに言う。二人は

頷いた。

だいぶ走った。もう少しで里の出口という所で、ロア達の前方に白い甲冑を着た男が立っていた。ロア達の表情に緊張が走る。

リユネットが走りながら印をきる。リユネットの手のひらから眩く光る閃光が放たれた。矢のようなスピードで放たれたその閃光は白い甲冑の男に直撃する。爆発が起こり、辺りが爆煙に包まれる。

煙の中から白い甲冑の男が飛び出してきた。さすがに無傷ではないようだった。白い甲冑は無惨にへし曲がり、血と煤に汚れていた。それでも自分の傷などお構いなしに白い甲冑の男は凄く速さでロア達の方に向ってきた。

だがその時、横から白い甲冑の男に飛び掛っていった大男がいた。二本のごつい短剣が白い甲冑の男の身体を十文字に切り裂く。白い甲冑の男は身体を四つに斬り分けられ、地に落ちた。驚いた事にそれでもまだ白い甲冑の男は生きていた。上半身にだけになった身体で、腕をばたばたと動かしている。その白い甲冑の男の頭を大男の大きな足が踏み潰した。甲冑の金属がへし曲がり、中の肉と骨と脳髓がグシャリと潰れる。白い甲冑の男は最後にピクリと痙攣し、そして動かなくなった。

「よお、ルーテネ」

大男が不気味な笑みで、ロア達を見る。ザーバグだった。

「……ザーバグ。何でこんな所に」

ネーテルが呻く。

「なに、ずっとてめえを探してたんだ。俺もしくじってな。モードレッドから借りた軍勢を全滅さしちまった。これじゃあネグロード制圧は無理だ。だが、さすがにこのままおめおめ帰れねえ。てめえだけでもモードレッドの前に引きずっていかねえとな」

ザーバツグは笑いながらゆっくりとロア達に近づいてくる。血に濡れたその姿は大型の猛獣の様な威圧感がある。ネーテルが一歩前に出た。

「いいわ。相手になってあげる。ロア君達は先に行ってて。これは私の問題よ。後で追いつくから」

ネーテルが微笑んで言う。ロアはそのネーテルにマユラを押し付けた。

「そう言うなって。俺はこいつに借りがあるんだ」

そう言うってロアはザーバツグに向って歩き出した。

「なんだ、てめえか。てめえみたいな雑魚には用はねえよ。死にたくなかったらさっさと失せな」

「雑魚かどうか、やってみりゃわかるぜ。この前は不覚を取っちゃったけど、今回はそうはいかねえぜ」

ロアが笑う。その顔を見てザーバツグもにやりと笑う。

「よっ。ぼど死にてえみたいだな。いいだろう。ルーテネの奴を半殺しにする前の軽い準備運動くらいにはなるか」

ザーバッグはそう言うのと、腰の鞘に二本の短剣を収めた。指をボキボキと鳴らす。

「なんだ？武器つかわねえのか？」

ロアがポケットから煙草を取り出し、火を付けながら言った。

「笑わせんな。てめえみたいな雑魚に得物なんか必要ねえよ」

「無理すんなよ。ムキムキ野郎」

ロアが煙を吐いて言った。

「弱いくせに口だけは達者だな。ポールの野郎もそうだったが、吸血鬼って奴はみんなそんなのか？」

ザーバッグが口を大きく開けて笑う。その顔はまさに獣だった。

「二人とも手を出すなよ」

ロアが煙草を投げ捨てた。

ロアとザーバッグが同時に地を蹴る。両者はぶつかり合うと、そのまま互いに掌を合わせて組み合った。力比べだ。

ロアがじりじりと後ろに押されていく。体格だけ見てもザーバッグはロアより一回りは大きい。腕力ではロアが不利だった。

「どうした吸血鬼？でかい口叩いてそんなもんか？」

ザーバッグが余裕の笑みを浮かべる。

「……いいや、あいにく本気はこれからだぜ」

空は夕暮れを過ぎ、辺りはうっすらと暗くなっていた。空にぼんやりと月が見える。ロアの目が金色に輝いた。

ロアの後退が止まった。それどころか今度はロアがザーバッグを押し返していく。ザーバッグの表情が変わる。額からは汗が流れている。ロアに掴まれたザーバッグの手の骨がギシギシと軋みを上げた。たまらずザーバッグが前蹴りを放つ。ロアは手を離して蹴りを避ける。

「野郎……」

ザーバッグが呻く。獣の咆哮を上げてザーバッグがロアに殴りかかった。避ける暇もなくロアの顔面にヒットする。岩をも砕きそうな凄いパンチだった。ロアが数メートルも吹き飛ばされる。ロアの体が地面に落ちる前に、ザーバッグがすかさず追撃に入る。しかしザーバッグの予想に反し、ロアは無様に地面に倒れなかった。身体を空中で半回転させるとうまく二本の足で着地する。すでにザーバッグはロアの目の前にまで迫っていた。

「オラアッ！」

ロアの凄まじいアッパーカットがザーバッグの顎に命中した。あまりの衝撃にザーバッグの足が地面を離れる。顎の骨の碎ける感触があった。そのままザーバッグは後ろ向きに倒れた。それでもすぐに起き上がる。ザーバッグが口から血を吐いた。

ザーバッグが腰から短剣を引き抜いた。もう体面など気にしていられないようだ。ザーバッグがロアに襲い掛かる。

ロアは刃を紙一重でかわすとザーバッグの腕を取り、そのまま地面に押さえ込んだ。ロアが

ザーバッグの腕を締め上げる。ザーバッグは呻き声を上げ、腕に力を込める。

ボキリと音がして、骨が折れた。ザーバッグの腕が力を失う。

ロアはザーバッグの胸に馬乗りになり、拳を振り下ろす。水分を含んだ嫌な音がする。

二発、三発。

歯がへし折れ、鼻の骨が砕けた。ザーバッグの顔が潰れた石榴の様になっていく。

それでもロアは拳を振り下ろす。血が飛び散った。

やがてザーバッグは動かなくなった。

ロアがゆっくりと振り上げた拳を下ろした。拳から血が滴る。

平然とした顔で、ザーバッグの顔を見る。顔は原形をとどめていなかった。

ロアが立ち上がる。金色の瞳でリュネットとネーテルを見た。

「……やるわね」

ネーテルがニヤリと笑う。だがリュネットには笑えなかった。背筋が寒くなる。こんなにもロアが恐ろしいと思ったことは初めてだ。ザーバッグを殴っていた時のあの表情……リュネットには微かに笑っているように見えた。これがロアの奥に潜む吸血鬼としての闘争本能なのだろうか。

ロアがリュネットの横に立つ。リュネットは震えた、

「……行こう。長居は無用だ」

ロアがどこか遠くを見つめて言った。

月が闇夜を照らす夜。ヴァルナの隠れ里から少し離れた山の中。そこでロア達は焚き木を囲んでいた。ラトの当身で意識を失っていたマユラも意識を取り戻し黙って座っている。

パチパチと火の粉がはじける。誰も話す者はいなかった。虫の鳴く声が目につく。

「……ねえ、これからどうする？」

リユネットが静寂に耐え切れなくなったように口を開く。

「……私は『楽園』に行く。ヴァルナ全ての仇をとるために」

カーリアが火を見つめて言った。

ヴァルナの隠れ里から離れ、ロア達がこの山に身を隠した後、カーリアは意識を取り戻した。そしてロア達の静止も聞かず、ヴァルナの隠れ里に走っていった。ロア達も後を追った。

酷いものだった。里中が火に包まれ、死体が道端に数え切れないほど転がっている。マユラが叫ぶ。誰も答える者はなかった。わずか一時間足らずで、数千人のヴァルナ人は全て殺されたのだ。カーリア達に。

ラトの屋敷も燃え落ちていた。おそらくラトの死体もそこに埋もれているのだろう。マユラが膝を突いた。燃える屋敷の前で涙を流す。ロア達は声を掛けることもできず、ただ黙ってマユラを見つめていた。

「止めといた方がいいんじゃないか？あんたもかなり強いと思うけど、あのカーリアって奴は

次元が違うぜ。おそらく十三使徒のポールスなんかよりも遥かに強い。はっきり言ってあんたが勝てるとは思えない。ラトの婆ちゃんも『楽園』の事は忘れろって言ってたし。あんたは最後のヴァルナ人になっちまったんだろ。あんたが死んだらヴァルナ人は絶滅って事になっちまうぜ」

ロアが言う。

「命など惜しくない。もう『楽園』の事もどうでもいい。ただカーリアだけは許すわけにはいかん」

「ま、俺達もどっちにしろネグロードには行かなきゃならないんだけどな」

カーリアの言葉を受け、ロアが言う。リユネットの治療のためにはどうしてもネグロードには行かなくてはならないのだ。

「……もういいよ、ロア。私のために貴方まで死んで欲しくない」

リユネットが呟く。ネグロードに行けば死ぬとわかっていた。リユネット達四人がかりでもカーリアには歯が立たないだろう。おまけに何者か知らないが白い甲冑の化け物達までいるのだ。

「誰のためでもない、俺は行きたいから行くんだ。お前が気にすることないさ」

ロアが笑って言う。

「で、おまえはどうする？」

ロアがネーテルのほうを見て言う。

「私？私はもちろん行くわよ。ボールスの研究は何としても手に入れたいから」

ネーテルが当然の事の様に言う。

「お前は止めといた方がいいんじゃないか？どんな事調べてるかは知らないけど、調べ物で命落としたくはないだろ？」

「心配してくれるのはありがたいんだけど、どっちにしてもその心配は無意味なのよね」

「どういう意味だ？」

「私の寿命なんてあと一年もないの。だからここで死のうとあとで死のうとそんなにかわりはないわけ」

「一年？どう見たってお前は少女に見えるぞ」

ロアは驚きの声を上げる。

「私はいくらでもコピーを作れるでしょ。その分コピー一体一体の寿命は人間に比べて凄く短いよ。せいぜい2、3年ってとこかな。あ、別に気にしなくていいのよ。死ぬって言っても肉体が減るだけで、私の記憶を持ったコピーはちゃんと私なんだから。コピーが続く限り、私の生命は永遠よ」

微笑してそう言ったネーテル。しかし、その笑顔は作ったように寂しい。

「まあ、長く生きりゃあいってもんじゃない。俺なんかもう何十年も生きてるけど、自分で何やってたんだろってぐらい記憶があいまいだからな。ようはどれだけ真剣に生きるかだろ。真剣に生きて、いい思いで沢山作れりゃそれで幸せだよ」

ロアが笑う。

「さて、じゃあみんな行くって事で決まりだな。行くんならいつ行っても一緒だ。どうせなら今から乗り込もうぜ。ネグロードに」

ロアが立ち上がった。

サンダルークへ向けての援軍の出兵当日。ライオネルは全ての準備を終えて、自室でただ出発の時を待っていた。城外からは集まった兵士達の歓声が聞こえる。全身を鎧で固め、腰には長年使い続けてきた愛剣。椅子に腰掛けて、ただ、じっと目の前を静かに見つめている。戦において常勝無敗のこの男だが、今回の出兵は何か不吉なものを感じた。なにより遙か遠方にいるエレインの身が気に掛かったが、もう一つ……。

「失礼します」

部屋の扉が開き、エステルがお辞儀をして入って来た。

ライオネルが何かを訴えるように、エステルに目を向ける。エステルは首を横に振った。

「……ナナさんはまだ帰ってきていません」

エステルが言う。それを聞いて、ライオネルは静かに目を閉じた。眉間には深い皺が浮かぶ。ナナは昨日、ミリアムを尾行して行ったまま消息を絶った。丸一日何の連絡もない。ナナの身に何かあったとしか思えない。

「大丈夫です。ナナさんはレオデグランス一の諜報員ですよ。あの人こそ簡単に死ぬわけが

ありません」

エステルが言う。しかし、その声はどこが自身がない。

ライオネルにもナナが優秀な諜報員だとはわかっていて、女でありながら戦闘技術も下手な兵士などは問題にならないほどの腕だ。だが、そのナナが消息を絶った。だからこそ心配なのだ。

このキャメロンで、何か黒い陰謀が渦を巻いている。その中心にいるのが、あの謎の女貴族ミリアムであることは間違いない。ライオネル自身がずっとあの女を監視しておきたかったが、そもいかない。サンダルークへ兵を率いて行かなければならない。

「……時間だ」

ライオネルは静かに目を開けて、椅子から立ち上がった。鎧が重い金属音を立てる。

「エステル」

「はい」

「陛下とこの国を頼む。あの女からは決して目を離すな」

ライオネルの言葉に、エステルは黙って頭を下げた。

ライオネルは五千の兵を引き連れて、キャメロンを出た。サンダルーク国内に入る前に、あと二万は合流する予定だ。ライオネルの心は、一刻も早くサンダルークにいるエレインの元に返りたかったが、そもいかない。これだけの大軍となると移動速度も制限される。ライオネ

ル一人で移動する速度と比べて、倍は時間が掛かっていた。

もう日も暮れる。すでに隊は野営の準備に取り掛かっていた。兵士達は馬をつなぎ、テントを張る。夕食のシチューの匂いが煙と共に辺りに流れる。これから隊の外の見張りにたつ兵士達は恨めしそうに夕食の準備を眺めていた。

ライオネルは数名の兵を引き連れ、野営地を見回っていた。久しぶりの出陣で、気が弛んでいる者も多い。特に若い兵士は戦場を甘く見すぎている。厳しく戒めておかなければならない。まだレオデグランス国内とは言え、いつミルチア軍が攻めてくるかもわからないのだ。用心に越した事はない。そう言えば、そろそろ斥候が帰ってくる時間だ。

ライオネルの元に、馬に乗った一人の兵士が近づいて来た。ライオネルが放った斥候の一人だ。

「大変です、ライオネル卿」

ライオネルの前まで来ると、斥候が馬から飛び降りていった。

「どうした？」

「ここから約三十kmほど北西に、約一万ほどの部隊が駐留しております」

その言葉を聞いたライオネルが顔を顰めた。

「何処の軍隊だ？」

「それが、どうやら何処かの国に属している正規軍ではなく、各地から集まった傭兵部隊のようです」

それを聞いたライオネルの表情がますます険しくなる。傭兵部隊など珍しくもないが、一万もの大部隊だと話は別だ。おそらくは十数の傭兵団が一箇所に集まっているのだろうか。それだけの数が集結していると、戦に備えてるとしか思えない。

サンダルークがミルチア侵攻に備えて集めたのだろうか。しかし、その様な話は聞いていない。だとすればミルチアだろうか……。

「とにかく、そのままその傭兵団の監視を続けろ」

ライオネルが斥候から帰ってきた男に言う。男は敬礼をして、再び馬に乗り、走り去った。「どうしたいします、ライオネル卿？」

ライオネルの横に立っている老兵が言った。老兵の髪も顎鬚も真っ白で、ライオネルの父親といってもいいような歳だ。顔は深い皺で覆われており、おまけに片目が潰れているのか黒い眼帯をしている。子供が診たら泣き出しそうな、酷く怖い顔だ。彼の名はウーガン。今回の部隊でライオネルの副将を勤める男だ。ライオネルとウーガンとは何度か戦場で共に戦った事もある戦友だった。歳を食って力は衰えているだろうが、戦場の経験の多い頼りになる男だ。

「お前は どう思う？」

ライオネルが逆にウーガンに聞く。

「このまま押しかけて、詰問してやりましょう。それで怪しい節があれば叩き潰せばいい。

なーに、数は一万と多いですが所詮傭兵など烏合の衆。奇襲をかければ一発です。ミルチアの軍とやる前に軽く蹴散らしてやりましょう」

ウーガンが古傷だらけの顔でニヤリと笑った。自分達の倍の軍を相手にするのに、赤子の手を捻るかのように簡単に言う。

「いいかげん引退したらどうかと思っていたが、相変わらず盛んだな」

ライオネルが苦笑する。

「まだまだ青臭いガキどもには負けていられませんからなあ」

ウーガンが大口を開けて笑った。口の悪いのも相変わらずのようだ。

「で、どうするのです?」

「無駄な争いは避けたい。遠回りにはなるが、迂回してサンダルクに向おう」

「ほう? 貴方様らしくありませんな」

ウーガンが髭を捻りながら言った。

「我等の目的は一刻も早くサンダルクに援軍として向かう事だ。こんな所で無駄な時間と労力を食っている暇はない。それに敵兵と決まったわけでもないしな。キャメロンに注意を呼びかける伝兵だけ出しておけばよからう」

「わかりました。すぐに伝兵を出しておきます」

ウーガンが言う。

ライオネルはすっかり暗くなつた空を見つめた。暗い灰色の雲が流れている。

エレイン姫は無事だろうか。その事がライオネルの心に重くのしかかっていた。

闇夜の中、ロア達がネグロードの町に入っていった。相変わらず人の気配はまったくない。死んだように静かな街中を歩いていった。

やがてネグロード城前の広場にでた。ロアが立ち止まる。

「どうした？」

リUNETTがロアに聞く。カーリアが辺りを見回し腰から刀を抜いた。

建物の影から白い甲冑の男が姿を現した。一人だけではない。そこら中から出て来た。ロア達を円形に囲む。十二人の白い戦士だ。

そして、ネグロード城門からカーリアが姿を現した。

「カーリア！」

マユラが叫んだ。

「……せっかく助かった命、わざわざ捨てに来たか」

カーリアが静かにマユラに言う。何の感情もこもっていない声だった。

マユラがカーリアの方に走っていかうとするが、白い甲冑の男に道を阻まれた。マユラが立ち止まり、白い甲冑の男に剣を向ける。

「その者達はマードウーク。ポールスがヴァルナの血とこの『楽園』に眠っていた知識を使い作り出した生物兵器だ。吸血鬼をさらに進化させたものと思えばいい」

ロアがマードウークと呼ばれた白い戦士達を見る。甲冑に隠れたその表情は見えないが、不

気味な雰囲気だけは伝わってくる。

「マードウークは人類の究極の進化の一つの形だ。戦う事だけを目的としたな。不完全な試作品とはいえ、お前達では勝てん」

カーリアはそう言うと、ロア達に背を向け城の方に戻っていった。

「待て！カーリア！」

マユラが叫ぶ。

カーリアは振り返ることなく城門の中に消えた。

マードウーク達がじりじりと間合いを近づけてくる。

「こいつら倒さなきゃ先へは進めないってわけね」

ネーテルが冷たい笑みを浮かべて言う。

「お前らは城門まで走れ。全力で」

ロアが他の三人に言う。

「はあ？」

「はあ？じゃねえよ。俺達の目的はこんな奴等倒すことじゃないんだ。俺とリユネットは吸血鬼の治療のため、マユラがカーリアと決着をつけるため、おまえはボールの研究調べたいんだろ？だったら俺がこいつらの相手するから、お前達は先に城内に入れ。特にネーテル、おまえは何としても吸血鬼の治療法を探し出してくれ。おまえならできる。頼む」

「……わかったわ」

ネーテルが頷く。

「すまん」

マユラが言う。

「……私はロアと一緒にここで戦うわ。あなた一人じゃ心配なもの」

リユネットが言う。

「いや、おまえはネーテル達と一緒に行ってくれ。まだ中にどんな敵がいるかわからないからな。一人でも多い方がいい」

「でも……」

「走れ！早く！」

ロアの言葉に城門まで走り出すネーテルとマユラ。リユネットはしばらく動かなかったが、やがて意を決したように走り出した。

マードウークの一人がリユネットに襲い掛かる。ロアが地を蹴る。ロアの飛び蹴りがリユネットを襲おうとしていたマードウークの首元にきまる。鉄の兜がへし曲がり、ゴキリと音がして首の骨が折れる感触。マードウークが吹き飛んだ。

ロアが着地する。マードウーク達を見回した。

「さーて、今日は満月だ。思う存分相手してやれるぜ。吸血鬼とマードウーク、どちらが強いか試してみようぜ」

月の光に照らされたロアが不敵に笑う。

ロアに蹴られ、首の骨を折られたはずのマードウークが立ち上がる。首を元の位置に戻した。「なるほど……こりゃとんでもない化け物だな」

ロアが言った。

城内を無人の城内を走るリユネット、ネーテル、マユラの三人。彼女等の前に一つの人影が現れた。その姿を見てネーテルが立ち止まる。リユネットとマユラは驚きで眼を丸くした。その人影は彼女達の横にいるネーテルと瓜二つの姿、彼女のコピーだった。

「あら、私。そんな人間達と一緒に何をしているの？」

ルーテネが笑顔を浮かべて言う。冷たい笑みだった。ネーテルは戸惑いの表所を浮かべる。「私一人じゃ手に余るから協力してもらってるのよ。ギブアンドテイクだね。ねえ、私。吸血鬼を人間に戻す方法って知らない？」

ネーテルがルーテネの前に進み出る。鏡に向かい合ったような奇妙な光景だった。

「アハハ、馬鹿じゃない？人間なんかに手を貸すなんてさ。あなた、コピーの途中で情報が劣化してしまった出来損ないね。だから、人間なんかに妙な親愛感を持つのよ」

「……うるさいわね。私達の目的もちゃんと果たすわ」

ネーテルが呟く。ルーテネがまた面白そうに笑った。

「でももうそんな人間達と一緒にいることないわよ。すぐにこの城は私達が制圧するわ」
ルーテネが言う。

「私達？」

リユネットがルーテネに聞く。

「ええそうよ。今この城には私達が百人集まっている。この城にどんな守護者がいるかは知らないけど、私達が百人もいれば十三使徒だって倒せるわ」

ルーテネが笑う。その通りだとネーテルも思う。一人一人のルーテネは十三使徒に比べると遙かに戦闘力として劣るが、それでも魔族の中では中位に位置するぐらいの力はあるのだ。そのルーテネが百人も集まれば並みの十三使徒なら問題なく殺せるだろう。

「ね、だからそんな人間は殺してしましましょう」

ルーテネが残酷な笑みを浮かべてネーテルに言う。ルーテネが一步リユネット達の方に踏み出した。

「止めて！」

ネーテルがルーテネの前に立ちふさがった。

「ふふふ、あなたやっぱり変よ。それに私達は同じ私なのよ。自分に逆らうの？」

「その私が嫌だって言ってるのよ」

「あらそう。なら私達の多数決で決めましょ。多数決は公平だわ。ついて来て。たぶん他の私達は中央ホールにいるはずよ」

そう言うルーテネは駆け出した。ネーテルはリユネット達の方に振り向いた。

「ごめん、ちょっと私行ってくる。なんとか私達を説得してみるわ」

そう言うとなーテルはルーテネの後を追って走り出した。

「……なんか妙なことになってきたわね。どうする？」

リユネットがマユラに聞く。

「ネーテル殿一人では心配だ。私達も行ってみよう」

リユネットとマユラもネーテルの後を追いつ出した。

自分の部屋に戻ろうと城内の廊下を歩いていたらカーリア。中央ホールに来た時、多数の気配を感じて立ち止まった。

ホールの二階部分にあるテラスから続々とルーテネ達が現れた。百人のルーテネだ。

ルーテネ達はカーリアを取り囲み、二階からカーリアを見下ろした。笑っている。みんな同じ表情だった。異常な光景だとしか言いようがない。

そんな異常な光景の中にもカーリアは平静そのものだった。眉一つ動かさずルーテネ達を見回す。

「貴女がこの城の守護者？」

ルーテネ達が声をそろえて聞く。気味の悪い合唱のようだった。

「そうだ。主等はこの城に何の用だ？」

「この城にあるボールの研究はすべて私達がいただくわ。だから悪いんだけど貴女には死んでもらうわね」

ルーテネ達の冷たい微笑。

カーリアは何か考えていたが、やがて口を開いた。

「なるほど、お主がヘンギストか。ボールスから聞いておる。狂人だが自分に匹敵する天才的な錬金術師がいるとな。人格を情報として取り出し他の肉体に移し変えるという研究をしているたそうだな。その研究成果で移し変わったのが今のその姿か」

「あら、よく知ってるわね。まあ正確にはヘンギストは今の私の中の人格の一部にすぎないけど。この身体はなかなか便利だね。いくらでもコピーを作って情報を受け継いでいけるから、もういちいち人格を移し変える必要もないのよ」

「お主、ボールスの研究を手に入れて何をする気だ？」

「いくらコピーといっても完全ではなくてね。コピーを重ねるごとに、わずかに情報が劣化していくの。今じゃまともなコピーができるより人格障害を持った出来損ないのコピーの方が多くなってしまったぐらい。もうコピーを重ねるのも限界だわ。だから私は今の脆弱な肉体じゃなく、永遠に朽ち果てることのない完全な肉体が欲しいの。そうすればコピーの回数は最小限に抑えられる。これ以上情報が劣化することもないわ。それこそ究極の人類よ。ボールスの研究レポートと私の知識があればそれは手に入る」

「……究極の人類か。ボールスも同じものを目指していた」

カーリアが呟いた。

「その究極の肉体が手に入ったら、この世界は私だけのものにして見せるわ。他の人類はいら

ない。このアトラーズの世界に生きるものは無数の私だけ、でもそれはみんな私。世界にたった一人、私という存在。どう？素敵でしょ？」

ルーテネが狂った笑みを浮かべた。カーリアが冷たい眼でそんなルーテネを見る。

「……ポールスはお主を嫌っていたが、私はもしポールスが死ぬような事があれば、ポールスの研究をお主に渡してもよいと思っておった。ポールスの研究を引き継いでもらい、この世界を救うためにな。だがそれは間違いだったな。ポールスがお主を狂人と言った意味がようやくわかった。お主にこの『楽園』を渡すわけにはいかん」

カーリアが腰から刀を抜いた。ラトから渡されたかつての愛刀だった。

「別に渡してもらわなければならないわよ。力づくでとるから」

ルーテネ達がそう言うと、一齐にカーリアに襲い掛かった。前後左右、上方からの一齐攻撃だった。何処にも死角はない。

カーリアが刀を振った。

血と肉が飛び散る。

瞬きほどの一瞬で、六人のルーテネを斬っていた。カーリアの全身が返り血で真っ赤に染まる。

息つく暇もなく次々と襲い掛かってくるルーテネ。

カーリアは踊りでも踊るかのように刀と身体を動かした。美しく静かな動作だった。

血の雨が降る。

カーリアが刀を下ろす。

中央ホールは静寂に包まれた。

瞬く間に百人のルーテネは瞬く間にただの肉塊へと変わっていた。

カーリアが冷たい眼で床を見下ろす。其処には腹から下を切り落とされ、上半身だけの姿になった一人のルーテネが微かに息をしていた。

「……へえ、貴女やるわね」

口から血を吐きながらルーテネが笑う。虫の息だった。

「私は誰にも負けぬ。奴を殺すまではな」

「奴？」

ルーテネがカーリアに聞く。

「お主も永遠に近い時を生きるなら、やがて奴に会うだろう。その時が恐らくこの世界の終わりだがな」

カーリアが刀を振り下ろした。

ルーテネとネーテル、そしてリユネットとマユラが中央ホールに駆け込んだ。そこら中に体の一部を切り飛ばされたルーテネの死体が転がっている。その死体の山の中に立つカーリア。血に濡れたその姿は美しい修羅のようだった。

「あれ？みんなやられちゃったの？これじゃあ多数決できないじゃない」

今駆け込んできたルーテネが困った顔をしていった。自分のコピーの死体を見ても何も感じていないようだった。

「……まだ残っていたか」

カーリアが血の滴る刀を手に、ゆっくりとそんなルーテネの方に歩み寄る。

「あはは、悪いけど私逃げるわね。じゃあ、私、バイバイ」

ルーテネがネーテルに手を振った。幼い姿からは想像もできない跳躍力で二階ののテラスまで跳ぶ。カーリアはその姿を見ていたが、後を追う気は無いようだった。

カーリアがリユネット達の方を見る。マユラが一歩前に出た。

「二人とも手出し無用だ。これは我等ヴァルナの問題だからな。カーリアとは私がけりをつける。二人はボールスの研究室に行ってくれ」

マユラが言う。

リユネットとネーテルは黙って頷くと中央ホールから離れた。

マユラが腰の鞘から刀を抜く。

「カーリア！ヴァルナを裏切ったお前の罪は許されん。ヴァルナ最後の戦士として私がお前を討つ！」

「許してもらおうとは思わぬ。確かに私は許しがたい罪を犯した。しかし、それは人類が未来を勝ち取るための必要な犠牲だった。私もヴァルナもボールスの死もその犠牲の一つだ」

「わけのわからん事を！貴様の詭弁はもう聞きたくない！」

「お前が最後のヴァルナ人だと言うのなら、お前は聞かねばならぬ。それがヴァルナの使命だ。遙か昔、我等の祖先が犯した大罪を贖うため与えられた義務だ」

「問答無用だ！」

自分を奮い立たせるような一喝を放つと、ビュッ——と微かな唸りを発してマユラは刀を振り下ろした。

「何かしらこれ？」

マユラと別れ、ポールの研究室を調べていたリュネットが奇妙な道具を手取る。それは手鏡のようなものだったが、妙なのは鏡がついてあるはずの部分が真っ黒な光沢を持つ物質で覆われている事だ。

リュネットの声を聞いたネーテルも近寄ってきた。

「これは……」

ネーテルが呟く。

その黒い手鏡を覗き込んできたリュネットは、驚きで目を見開く。

先ほどまで黒かった鏡に、映像が映し出されていたのだ。

鏡の中で、黒い長髪で黒いローブを羽織り、まだ若いがやせ細った男が豪華な宮中を歩いていた。彼の名前はヘンギスト。天才錬金術師として知られた男だ。今は人間の国々を制圧し

たモートートをパトロンとして研究をしている。ここはモートの居城だった。今日は研究の試作品をモートに献上しに来たのだった。

ヘンギストが宮中の廊下を歩いていると、目の前の部屋から一人の娘が出てきた。女性にもかかわらず、腰に剣を差していたが、なによりもヘンギストが驚いたのは彼女が片手に大鎌を持っていた事だ。彼女の身の丈をも越えるその金属製の鎌を片手で軽々と持っている。

モートの配下に大鎌を使う女性の戦士がいると聞いた事がある。名前は確か……。

「……トウオン」

ヘンギストの口からその名前が出る。

部屋から出てきたその娘、トウオンがヘンギストを声を聞いて、怪訝そうに見る。

「何か？」

「いや……」

トウオンに話しかけられてヘンギストは少し戸惑った。別に用があって呼んだのではない、ただふと口から言葉が出てしまっただけだった。

「貴様、見慣れぬ顔だが、誰だ？」

トウオンが今度は厳しい口調で聞く。まだ幼さを残すと顔つきとは裏腹に、鋭い戦士の威圧感だった。宮中に似合わぬ薄汚れたローブを着ているヘンギストを怪しく思ったのだろう。

「いや、失礼した。私はヘンギストと申します。御貴殿を高名なトウオン殿と見受けまして、ついお名前を口走ってしまっただけです。」

ヘンギストの言葉を聞いて、トゥオンが表情を緩めた。

「ああ、貴公がああ、ヘンギストか。陛下が援助なさっていらっしやるという錬金術師だったな」

「はい。モート陛下にはいつも多大なご支援を頂いております」

ヘンギストが頭を下げた。

トゥオンはそんなヘンギストを見て何か考え込んでいたが、やがて口を開いた。

「ちょうどよい。貴公、ポールスという男を知っておるか？」

「ポールスですか……はい。名前ぐらいは聞いた事がありますが……」

ポールス、確かヘンギストと同じく錬金術師だったはずだ。特に生物学の分野で多大な功績を残し、その分野では天才といわれている男だった。

「……そうか。彼について何か知っているか？」

「いや、直接の面識はありませんので。優秀な錬金術師というぐらいにしか……」

「どれくらい優秀なのだ？ 貴公と比べてみてどうだ？ 貴公は天才的な錬金術師と聞いているが」

「私とは専門の分野が違いますから何とも言えませんが……まず彼も天才と呼べる錬金術師でしょうな。少なくとも現代に彼の右に出る生物学者はいません。しかし、彼がどうしましたか？」

「いや、ここ最近ポールスと名乗る男が何度か陛下に面会を求めていてな。陛下が皇位につか

れてからというもの、陛下に融資を求めようと胡散臭い学者どもが毎日何十人と城に押しかけてくるのだ。いちいち相手もしてられないから、基本的には全て追い払うのだが、そのポールスという男だけは何度追いつてもやってくるのだ。いい加減、地下牢にでもぶち込んでやろうかと思っていたところだったが、それほどどの錬金術師なら陛下がお会いになる価値もあるか……」

トウオンが呟く。

「……いや、足を止めさせて悪かったな。もう行ってよいぞ」

トウオンが言う。ヘンギストはトウオンに一礼するとその場から立ち去った。

トウオンが肩に大鎌を担ぎながら、宮中の廊下を歩いていく。行き違う人々が猛将と言われたトウオンを恐れて避けて歩く。

トウオンはほんの数年前まである裕福な商人、ナルグという男だったが、その玩具奴隷だった。奴隷に生まれたものは一生奴隷。子供の頃のトウオンはその事に何の疑問も抱かなかった。どんな辛い目にあってもそれが当然だと思っていた。

そんなトウオンの運命を変えたのは、同じ奴隷仲間達の間で流れた一つの噂だった。

『モートという元奴隷が奴隷解放のために、貴族達に反乱を起こした』

始めてその話を聞いたとき、トウオンは世の中には信じられない様な馬鹿な男がいると思った。当時のトウオンにとっては貴族などは雲の上の存在。万能の力を持った神と同じだった。モートという男はその神に戦いを挑んだのだ。

奴隷に何ができるといふのだ。どうせそのモートという男もすぐに殺されるだろう。

だが、モートは勝ち続けた。国中の奴隷達はモートに賛同し、自分達の所有者から逃げ出し、ては競って彼の軍に入隊した。すでにモートの軍はわずか数ヶ月で数万に膨れ上がっているといふ話だった。

ある時、トゥオンと同じ奴隷であり、親友でもあったキリという女性が、私達もナルグの元から逃げ出してモートの軍に入隊しないかと打ち明けてきた。トゥオンは首を横に振った。トゥオンに神に、自分の運命に逆らう勇氣などなかったのだ。

結局その晩、キリは一人で逃げ出そうとしてモルグに見つかり、見せしめに殺された。酷い殺され方だった。トゥオンは泣いた。

数年たって、モートの軍はますます巨大になっていた。トゥオンの生まれた国だけでなく、今や世界中の貴族達がモートと敵対していた。

ついにモートの軍がトゥオン達の住む町にもやってきた。モートの強力な軍勢に、町の領主と警備兵などは蜘蛛の子を散らすように逃げてしまった。

モートはこの町にも奴隷解放宣言を出した。トゥオンにとっては迷惑なだけだった。奴隷が奴隷でなくなると、どうやって生きていけと言うのか。モルグの屋敷からほとんど一歩も出たことがないトゥオンにとって、外の世界で生きるすべなど知らなかった。

モルグもトゥオンを手放すつもりはなかったようだ。町陥落の混乱に乗じて、財産を持って他国に逃げ出すつもりらしい。トゥオンにとってもその方が良かった。

だがその日がトゥオンの人生を一変させる日となった。後でトゥオンが考えると、偶然とは思議なものだ。もしあの時モートに出会わなかったら、私の人生はどうなっていただろう。逃げ出そうとしたモルグ一行とたまたま街中の巡察にでていたモートが鉢合わせしたのだ。あの時の事は今も鮮明に覚えている。当時のトゥオンはまだ十四歳。いきなり目の前に現れた、漆黒の馬に乗り、黒い髪をなびかせた青年を見上げた。後ろに数騎の騎士を引き連れていた。

モルグが弁解をする間もなく、一刀の元でモルグはその青年に斬殺された。

死体となったモルグを見てトゥオンは震えた。澄み切った青年の瞳がトゥオンの怯えた瞳を見つめた。不思議と体の震えは止まった。

「君は自由だ」

「……」

青年が言った。トゥオンは何も答えられなかった。

「親はいないのか？」

トゥオンがこくりと頷く。

「……そうか。メレアガス、城に連れて帰ってやれ」

青年がそう言うのと、横にいた馬上の騎士がトゥオンを掴み上げ、自分の馬に乗せてくれた。トゥオンにとって馬の背から見る見慣れたはずの町の景色は、まるで違ったように見えた。これがトゥオンと青年、モートの出会いだった。

モートの住む城に連れられていったトゥオンは、城の中で雑務などをこなす役として雇われた。仕事は掃除や調理補助が主だった。仕事はトゥオンにとって別に苦しいものではなかった。それより驚いたのは、勤め始めてから一ヶ月たって、始めて賃金を貰った時の事だ。今から思えば苦笑したくなるほどの僅かな額だったが、それでも当時のトゥオンにとっては自分が賃金をもらえるという事が信じられなかった。毎日の食事と寝床は与えられているのに、こんな大金を貰っていいのか。皮袋に入れられた一枚の銀貨と銅貨を受け取った時、受け取った手が振るえ、あまりの感激に涙が出た。急いで自分の部屋に帰って、自分の部屋といつても家政婦達三人との共同部屋だったが、自分に与えられた小さな引き出しにその皮袋を大事にしまった事を覚えている。その時の銀貨と銅貨は皮袋に入ったまま、今も手を付けずに置いてある。

トゥオンは一言モートにお礼を言いたかったが、モートの姿は見なかった。メレアガンズと呼ばれた騎士も。家政婦仲間に聞くと、この城はモートの居城といつても彼はほとんどこの城にいないらしい。モートもメレアガンズも各地で忙しく転戦しているようだ。

十六歳になったトゥオンはただモートにもう一度会いたいために、家政婦を辞め、モートの軍に入隊した。女の自分に兵士が勤まると思わなかったが、モートに会えるならいつ死んでも良かった。

だが自分でも驚いた事だが、トゥオンには戦士としての天性の素質があったらしい。誰に教えられるでもなく剣術を覚え、いつの間にか雑兵から部隊の小隊長になっていた。

トゥオンがモートに再開したのは、ある戦場の一陣でだった。その頃、すでにトゥオンは小隊長という低い身分ながら、彼女の強さはモート軍内部でも有名になっていた。

トゥオンはその戦場で敵の大將を討ち取ったので、モートに目通りを許された。

敵將の首を肩手で掴み、戦場から血塗れで帰ってきたトゥオンがモートの前に跪く。

モートはそんなトゥオンの顔を繁々と見つめて、やがてきよんとした顔をした。

「……驚いたな。あの時の子か」

モートが言う。トゥオンも驚いた。まさか二年も昔に一目会っただけの自分をモートが覚えていたとは思わなかった。記憶力のいい人だった。

「敵將を一人で討ち取ったのは見事。褒美をやりたいが何か望む物はあるか？」

モートがトゥオンに言う。トゥオンは頭を下げた。

「いえ、何もありません。モート様は私の人生を救ってくれ恩人。せめてもの御恩返しにと一平卒として働いているだけでございます。願わくばずっとモート様の側でお役に立ちたいと思います」

「そうか。ならば私の親衛隊に入隊してもらおう」

モートが言う。親衛隊といえ、モート直参のエリート部隊だ。なによりモート様の側にいられる。トゥオンにとっては何よりの褒美だった。

「しかし、あの時の君はまだ子供だったが、こうして戦場でみると美しい死神みたいだな」

モートが血塗れのトゥオンの姿を見て、笑って言った。この何気ないモートの一言で、トゥ

オンに『死神』という異名が付く事になる。トゥオン自身もこの異名を気に入り、すぐに鍛冶屋を呼んで全長2メートルを越す大鎌を打たせた。

それからトゥオンはずっとモートの側で戦い続けた。モートもトゥオンに目を掛けてくれ、彼女はモートの親衛隊長になった。

思い出に浸りながら宮中の廊下をトゥオンが歩いていると、前から一人の男が歩いてきた。黒い長髪に、豪華な服装。トゥオンは嫌な奴に会ったと思った。

「トゥオン嬢。相変わらず、君の可愛い姿に似合わぬ物騒な物を持ち歩いているようだな」

長髪の男、モードレッドがトゥオンの大鎌を見ていった。

「これはモードレッド様。どうしてこの城に？」

トゥオンが慇懃に、しかし不機嫌に言う。トゥオンはこの男が大嫌いだった。

モードレッドはかつてある大国の王だった。モートが奴隷の身分から反乱を起こし、各国と戦をしている時、彼は他国と連合を組みモート軍と敵対していたが、モート軍が優勢になると見るやあっさりモートの方に寝返った。

普通ならこの様な寝返りをしたところで、ある程度の処罰は免れないところだが、モートは無条件で彼を許して重用している。モードレッドの国も削減される事なくそのまま彼の領地とした。その巨大な軍力から、モート軍内では新参者ながらモートに次ぐ地位だと言われている。トゥオンとしては裏切りをしてきた男をこのように重く用いるなど納得のできないところだ。

が、確かにあの時点でモードレッドがこちらについてた事は大きかった。モードレッドの持つ巨大な軍事力が味方についた事で、モートの世界統一が五年は縮まったと言われている。それにモードレッドは指導者としても優秀だった。とくに戦況を鋭く読んで、最適な戦略を立てるその指揮官としての能力はモート以上と言う者もあった。モートはその様な事を考慮して、モードレッドを重く用いているのだろう。

しかし、モードレッドは今、聖都ラヴィーンで起こったイーリアス教の一揆の討伐に出ているはずだ。

「ようやくラヴィーンの制圧が終わった。今日は戦勝の御報告に登城したまでだ。これedyouやく陛下の夢、大陸統一が現実のものになったな」

モードレッドが笑って言う。彼の言うとおり、イーリアスの一揆が制圧されたとすれば、もうモートの敵対できる勢力はいないだろう。

イーリアス信者の一揆は今年に入って大陸全土で一斉に起こった一揆だった。モートは魔力で魔物を生み出す事ができる。そのトロロクやデーモンといった魔物はモート軍の重要な戦力だった。しかし、魔物を生み出すモートの禁術を、イーリアス教の法王は創造神に背を向ける背徳の行為としてモートに魔物召喚の中止を促す声明を出した。

しかし、例えばそれが大陸最大の宗教であるイーリアス教の法王の言葉であっても、僧の命令を聞くようなモートではない。両者の関係はこじれ、今年の始めついに法王はモートを神の敵とし、全国の信者に一斉決起を促した。その教えは大陸全土に広まり、信者は3千万を軽く越

すと言われているイーリアス教である。その反抗は、大陸統一間近と言われていたモート軍を一気に窮地に陥れた。

始めはただの民衆の一揆であるとして、敵にも手心を加えるようにと命じていたモートだったが、いくら倒しても集まってくる神のためなら命を惜しまぬ信者達に、ついにモートの怒りが爆発した。モートはイーリアス教を禁止し、全軍を挙げてイーリアス信者の弾圧を行った。

両軍の間で凄まじい戦闘が行われた。モートはイーリアス信者は改宗する事、でなければ死罪という厳しい法律を出し、大陸中の町で信者狩りを行っていった。

モート軍は血で地を洗う戦いで、各地のイーリアス教の一揆を制圧していった。そして最後に残ったのは聖都ラヴィーン。そこに全国から集まった二十万もの信者が立てこもっていた。

ラヴィーン攻略の総指揮はモードレッドに任されていた。

「それで法王様はどうなった？」

トゥオンが聞く。

「法王は斬首。立てこもっていた信者は老若男女すべて殺して串刺しにして道端に並べた。これは陛下の命である。今のラヴィーンは聖都どころか死の都だぞ。これで各地の信者どもも恐れて、大人しく改宗に応じるだろう」

モードレッドが笑って言った。

トゥオンが顔をしかめた。さすがにやりすぎだと思った。ただでさえイーリアス教と敵対したことで一般民衆からは不評を買っているのだ。それでこのような残酷な仕置きをしてしまっ

たら、モートの治世に大きなひびが入りかねない。

「……やりすぎではないか？」

「陛下の命だと言っただろう。それとも私に陛下の命に背けと？そんな事をしたら私の首が飛ぶわ。陛下の部下への厳しさはお前もよく知っているだろう。それに大陸統一は陛下の悲願。その障害となるものは誰であろうと殺さねばならん」

モードレッドが言う。

「……しかし、それで民衆の信頼を失ってはなにもならんぞ」

「民衆の信頼？民衆は信頼などでなく恐怖で押さえつけるべきだ。あんな愚かな民衆などに信頼などというものはもつたない。おっと、トゥオン嬢は平民出身だったな。いや、奴隷だったか」

モードレッドが笑って言う。

嫌な奴だ。モート軍内では出生など関係ないが、モードレッドは明らかに平民出を見下していた。この男にとっては貴族がまともな人間で、平民など虫ケラ以下ぐらいにしか思っていない。この分では奴隷出身のモートですら軽んじているかもしれない。

「民衆の間では今回のラヴィーンの虐殺で、陛下のことを魔王などと呼ぶ者が出てきたとか。まったくいい傾向だ。恐怖は絶対の治安を生む。陛下も皇帝の座につかれたし、これから陛下の絶対の帝政が始まる」

モードレッドが楽しそうに言う。

「そうそう、少し耳にしたのだが。近々軍内に新たな階級ができるそうだ」

「階級？」

「ああ、官位の名前はまだ決まっていなそうだが、十三人の軍務の最高官だそう。まだはっきりと誰が任ぜられるかは決まっていなようだが、どうやら君も私も任ぜらる事になりそう。お互いいたした出世だな」

モードレッドがにやりと笑って言う。嫌味だった。モードレッドにとつては貴族出身の自分と奴隷上りのトゥオンが同列に並ぶのが我慢ならないのだろう。

トゥオンは無言で大鎌を強く握り締めた。

数日後、城の皇帝の間に文武百官が集まっていた。今日は大陸統一の祝賀会だった。

着慣れぬ礼服を着て、参列していたトゥオンが辺りを見る。戦友のメラアガンスの姿が見える。ラウドやヴァシユラといった一騎当千の戦士達の姿も見えた。モードレッドも得意そうにモートの最も近い位置に参列している。驚いた事にヘンギストの姿もあつた。ただの一錬金術師がこの場に呼ばれた事にトゥオンは少し驚いた。玉座にはモートが座っている。

「諸君、よくやってくれた。諸君等の働きのおかげでついに大陸は一つに統一された。しかし、これからが我等の本当の仕事だ。私はこの国に理想郷を建てる。誰も苦しむ事のない、思想の違いも宗派の違いもない、争いの無い本当の理想国家。その建国を終えるまで、諸君等の力をあと少し私に貸して欲しい」

モートが玉座から立ち上がった。いった。

割れんばかりの拍手喝采が響く。

トウオンは涙が出た。苦しく長い戦いの日々を経て、遂にここまで来たのだ。数え切れないほどの仲間が死んだ。敵も味方も、多くの血が流れた。あまりにも大きな犠牲だった。だが全てはこの日のため。誰もが幸せに暮らせる理想国家を建国するため。今日がその始まりの日なのだ。

突然、音を立てて皇帝の間の巨大な扉が開かれた。モートが扉の方を見る。

一人の白髪の老人が扉の外からゆっくりと歩いてきた。文武百官は拍手を止め、この突然の来訪者を驚いたように見つめた。辺りがざわつく。トウオンは腰の剣の柄を強く握った。今日はさすがにいつもの大鎌は持ってきていない。

トウオンが参列者の中から飛び出した。老人の前に立ち塞がる。

「無礼者！陛下の祝いの席を乱すとは！」

トウオンが叫ぶ。

だが老人はトウオンを気にすることなく、前に進んでくる。

「止まれ！」

トウオンが腰から剣を引き抜いた。老人に剣を突きつける。

老人は自分の喉に突きつけられた剣をちらりと見る。

「なっ……」

トウオンは驚きの声を上げる。トウオンの剣の刃が根元から折れたのだ。折れた刃が音を立てて床に転がる。トウオンには何が起きたかまったく理解できなかった。老人が何かの魔法で剣を折ったのではない。老人は何も魔法など使っていない。戦士のトウオンにもそれくらいはわかる。そもそも剣が折れた瞬間、柄を持つトウオンの手には何の衝撃も感じなかった。まったく自然に折れた、そんな感じだった。

老人は、驚いて声も出ないトウオンの横を悠然と通り過ぎた。

トウオンが我に返って、老人の前に再び立ちはだかろうとした。だが、そのトウオンをモートは無言のまま手で制した。

「……何者だ？」

モートが玉座の前に立って、威圧するように老人に言った。辺りに威圧感が満ちる。人々は静まり返った。魔法を使えぬトウオンですら肌で感じる巨大なモートの魔力だった。この人界に並ぶものの無い無尽蔵の魔力があるからこそ、モートは大陸統一という偉業を成し得たのだ。「……なるほど、たいした魔力だ。人の域を大きく超えている。やはり特異点か……運命の流れがお前の周りで大きく乱れておる」

老人がモートを見つめて言う。

「何者だと聞いている」

モートがもう一度言った。

「クロートー」

老人が言った。

その名前を聞いて一部の文官達がざわざわと騒ぐ。トゥオンには聞いた事の無い名前だった。「……クロートー……聞いた事があるぞ。確か古き書物にその名があった……伝説の預言者だったな」

モートが老人を見つめて言った。辺りのざわつきが一度に大きくなる。

「そのクロートーが私に何の様な？」

「運命の修正とその予言に」

「運命の修正？予言だと」

モートが言う。

「予言とは面白い。あいにくこの私は運命も神も信じぬたちだが、一応は聞いてやろう」

モートの言葉に、クロートーはゆっくり口を開いた。

「お前の時代は三百年続く。だが三百年後、お前は一人の人間によって殺されるだろう。それがお前の運命だ。特異点のお前もこの運命からは逃れられん。それによって運命の修正は終わる」

老人が静かに言う。モートの顔付きが変わった。

馬鹿らしい事だとトゥオンは思った。エルフやドラゴンならともかく、人間のモートがどうやって三百年も生きると言うのだ。大方、この老人も適当な事を言って陛下に取り入ろうとしている人間の一人だろう。だが、トゥオンに拭いきれない不安もあった。この剣はなぜ折れた

のだろう。ただの偶然か、いや偶然にはできすぎている。

クロートーは予言を終えると、モートに背を向けて扉の方に向って歩きだした。

「待て！」

モートが叫ぶ。モートが手を伸ばす。モートの魔力で空間が奇妙に捻じ曲がり、クロートーに襲い掛かった。クロートーを絡める取るつもりだった。だが、歪んだ空間はクロートーの周りで溶ける様に消える。モートは信じられないといった表情で自分の手を見た。クロートーは悠然と歩き続けている。

扉の前には二人の男が立っていた。メラアガンスとラウドだ。二人とも無言でクロートーを睨んでいる。すでに剣は抜いていた。

クロートーは二人の前で立ち止まる。そして、すっーと消えてしまった。まるで空間に溶ける様に。メラアガンスもラウドも驚きを隠せない。

今や皇帝の間は大騒ぎだった。誰も彼もが勝手に様々な事を口走っている。

そんな騒ぎを取めたのはモートの高笑いだった。

文武百官凍ったように静まり返る。トゥオンは知っていた。笑っているのは楽しいからではない。こんな笑い方をする時のモートは心の中が煮えくり返っている時だ。下手な事を口にすれば誰だろうとその場で殺されるだろう。

「あーはっはっは、ようやく大陸を統一したと思ったら今度の敵は運命か。いや、それとも神かな。おもしろい、その勝負受けてやるぞ、クロートー」

モートは笑い続けた。

「ボールス？」

トウオンは部下に聞き返した。

「はい。ボールスと名乗る男が陛下への目通りを願ひ出ています。何度追い返してもしつこくして。如何いたしましょう。二度と城に近づけぬように少し痛めつけてやりましょうか？」

部下が言う。

忘れていた名前だった。クロートーの来訪から数日立つが、まだ城内はクロートーの事で混乱しており、トウオン自身ボールスなんて名前を思い出す暇はなかった。

「……いや、私の部屋に通してくれ」

トウオンが言う。ヘンギストがあれほど賞賛していた錬金術師だ。少なくとも私が会ってみる価値はあるだろう。それで有能そうな人物ならモート陛下に引き合わせてみてもいいとトウオンは考えていた。

しばらくして、部下に連れられて一人の男がトウオンの部屋に入ってきた。長身で彫りの深い顔をしている。だが、その男一人ではなかった。後ろにフードを目深に被った人物がいる。ボールスの後ろに影のように立ち、ここからでは男性とも女性ともわからない。

部下が部屋から出て行く。

「どちらがボールスだ」

トゥオンが言った。

「私です。こっちは私の助手みたいなもので」

長身の男がフードを被った人物を見て言った。

「そうか。私の名前はトゥオン。それで陛下に会いたいそうだが、どの様な用件だ？お前も陛下にパトロンになって欲しいという口か」

「まあそれもありますけど……それよりもっと大事な話が。どうしてもモート陛下にお聞きいただきたい重要な話があります」

「大事な話？それなら別に陛下に直接会う必要はない。私が陛下に伝えておこう。どのような話だ？」

「言えませんか」

ボールスがにやりと笑って言う。

「なぜだ？」

「これは陛下にだけしかお聞かせできない話なので」

「私が信用できないのか？私はこれでも陛下の側近だが」

「そういう問題ではありません。誰であろうとモート陛下以外に伝えるつもりはありません」
ボールスが言う。

「それでは陛下に会わせるわけにはいかん。陛下もお忙しい方だな。わけのわからぬ理由で時間をおつぶしになるわけにもいかんのだ」

トゥオンが言う。

「……なんと頭の固い小娘だ。これほど重要な話だといっているのにまだわからんとは……大体私が何度この城に足を運んだと思っっているのだ。モートも私ほどの人間をいつまで待たせるつもりだ」

ポールスが疲れたように言った。

「何！」

突然暴言を吐かれかっど頭に血の上ったトゥオンは、立ち上がって腰の剣を抜こうとする。何よりモートの事呼び捨てにされたことが許せなかった。

フードの人物がすっと動いた。それは特に速い動きとも思えなかった。だが、いつの間にかトゥオンの目の前に立ち、その片手はトゥオンの剣の柄を押さえていた。剣は三分の一ほど鞘から抜けたところでフードの人物に押さえられている。

フードの中の瞳がトゥオンの目を見つめた。トゥオンの体が硬直する。歴戦の戦士であるトゥオンが見つめられただけで、蛇に睨まれた蛙のように動けなくなったのだ。

「やめろ、カーリア」

ポールスが静かに言った。

カーリアと呼ばれたそのフードの人物は、その一言でトゥオンの剣の柄から手を離して、再びポールスの背後に戻る。

「……言っておくが、これは貴様のような小娘などがどうこうできるような事ではないのだ。

人類の存亡を左右しかねん重大な事実を、私はモートに知らせようとしているのだ。どうしても止めると言うなら、私はお前を殺してでもモートに会いに行くぞ」

ボールスが、額に汗を流して立っているトゥオンに向けて言った。

トゥオンはボールスを睨んだ。

「……いいだろう。そこまで言うなら、明日同じ時間に城に來い。陛下には私からその時間を空けておくように言っておく」

トゥオンが唸るように言った。

「わかった。時間を取らせて悪かったな」

ボールスはそう言うと、トゥオンに一礼して部屋から出て行った。カーリアもボールスについていく。

「……危なかったぞ、ボールス。必要もないのに人を挑発するのはお前の悪い癖だ」

カーリアが言った。

モートの居城の城下町をボールスとカーリアが並んで歩いている。町は大勢の人間でごった返していた。ほんの数年前まではただの地方都市だった町だが、モートがこの町を本拠地と定めてから目覚ましい勢いで発展していった。今ではアトラス大陸有数の都市となっている。

「さっきの小娘の事か？聞くとここではモートの親衛隊長らしいが、あの程度の小娘をそんな重役に置いているとは、モートの人物眼もたかが知れるというものだ」

ポールスが言った。

「……貴様は樂觀的で良いな。私の動きがほんの少しでも遅れていたら、お主は死んでいたぞ。それにあのトゥオンという娘、かなりの腕だ」

「そうか？」

「ああ。あのまま戦いになれば私かあの娘のどちらかが死んでいた。あの娘が大人しく武器を引いてくれたから良いようなもの。下手をすればそのモートという男まで敵に回すことになっていたぞ。しかし、なぜここまでしてそのモートという男に会わねばならんのだ？」

カーリアが聞く。

「私とお前だけでは計画の遂行は無理だからな。巨大な権力と莫大な資金がいる。それを持つ者がたまたまモートという男というだけだ。まあ、実際に会ってみなければ何とも言えんがな。無能な人物ならこちらから願い下げだ」

ポールスと言う。だが、この町の発展を見ても、モートという男が無能であるとは思えなかった。そもそも、モートは有史以来始めて大陸統一を成し遂げた男なのだ。大陸統一など並みの人物にできることではない。

「それより、体の調子はどうか？何処か痛むところはないか？」

「別に……ただ妙な感じだ。自分の体でないような」

カーリアがポールスと共にヴァルナの里を出て二年の月日が経っていた。二人はその二年間のほとんどを、ポールスの研究室で過ごした。ポールスはカーリアの身体を使ってヴァルナ人

の遺伝子を徹底的に研究していたのだ。カーリアには詳しい事はわからないが、やはりヴァルナ人と普通の人間では遺伝子に微妙な差があるらしい。

カーリアから必要なサンプルを全て採取すると、今度はボールスはカーリアの肉体の強化に取り組んだ。これはカーリア自身が望んだ事だ。

「私の行う肉体の強化とは、一種の強制進化のようなものだからな。慣れないうちは奇妙な感じがするかも知れんが、すぐに慣れる」

「そうか……」

カーリアが言った。

「……という事なのだが、どう思う？」

トゥオンがメラアガンスの部屋を訪ね、聞いた。

「ははは、お前らしくないな。よく剣と抜くのを我慢した」

メラアガンスは笑って言った。

「あの場合ではああるしかなかるう。斬り合いにでもなれば、こちらの兵に相当な数の死人が出たぞ」

トゥオンのその言葉に、メラアガンスの瞳が鋭く光った。

「……ほう、お前にそこまで言わせるとはな。それほどの腕なのか、そのボールスとか言う男？」

「いや、ポールスはたいした事ないだろう。問題なのはその後ろにいた人物だ。ポールスはカーリアとかよんでいたがな」

「そうか。明日は気をつけないと。ヴァシユラ殿などに知られると、喜んで殴りかかっていきそうだ」

メレアガンズが笑って言った。

「お前も内心では立ち会ってみたいのだろう？」

「わかるか」

「長い付き合いだからな。お前は明日一緒に来てもらうが、馬鹿な真似はしないでくれよ」

「私も陛下とポールズの会見に出るのか？」

メレアガンズが意外な顔をして聞いた。

「万が一、ポールズが陛下を危害を加えようとした場合、あのカーリアとかいう奴はお前でもいなければ抑えられそうにないからな」

「ほう。ポールスカ。聞いた事のある名だ」

モートがトゥオンの言葉に反応する。それでも書類に目を通す作業は休めない。

ここはモートの自室。彼の机の上には数々の書類が山のように積まれていた。この書類すべてに目を通し、採決を取るのが彼の日々の主な仕事だ。皇帝となったモートに休む暇などない。モートには毎日ほとんど寝る暇もなかった。長い苦勞の末、ようやく皇帝の座にまで登りつめ

ただだから少しは楽をすればいいとトゥオンなどは思うのだが、そうもいかならない。モートは部下の誰よりも忙しく働いていた。それが王というものなのだと言う。

「それで、お会いになりますか？」

「会ってみたいな。どれほどの男か興味がある。優秀な学者はいくらいても困らんからな」

モートが書類から目を離さず言った。

モートは非常に多くの学者達に惜しみなく援助を与えていた。武人のトゥオンにはわからない事だが、国を治め、国力を発展させていくためには多くの学者の力がいるらしい。モートは暇さえあれば学者を呼んで講義を熱心に聴いていた。政治学、経済学、軍略、歴史学、天文学、農業に漁業、それに自然科学。

こんな事があった。ある日、トゥオンがモートの部屋でその日の日程を確認していると、突然一人の男が慌てた様子で走りこんで来た。それはパルマーという男で、モートがパトロンをしている学者の一人だった。

「も、モート陛下、つ、ついに、や、やりました！大発明です！」

パルマーが興奮冷め止まぬといった様子で言う。

「落ち着け、パルマー。何を発明したというのだ？」

自室に断りもなく入って来たパルマーを咎める事もなくモートが言う。

「と、とにかく今すぐ私の研究所に来てください。まさに世界を変える大発明なんです」

「……よし、行こう。トゥオン、今日の予定を少しずらしてくれ」

「わかりました。私もご一緒します」

トウオンが言った。しかし、このモートの行動にも呆れる。今日も分刻みでモートの予定は入っているのだ。それをたかが一学者の言葉であっさりずらしてくれとは。トウオンは疲れたように、部下達に予定の変更を命じていった。

城を出て街中にあるパルマーの研究所に行く。わけのわからない機械が山づみされた部屋の床の中央にそれはあった。

「……これか？」

「はい。これです」

パルマーが熱い眼差しで答える。

モートとトウオンがそれを見る。

それは一辺2メートル程の長方形の形をした鉄の塊だった。下には四つの車輪が付き、ボディからは沢山の管が伸び、上部には煙突の様な穴の開いた棒が突き出ている。

「……何のための機械なのだ、これは？」

「まあ、見ていてください。では始めます」

パルマーはそう言うと、その鉄の塊の近くにしゃがみ込み何か作業を始めた。やがて、準備が整ったのか、パルマーはその機械から離れた。

無言の時間が流れる。モートとトウオンはずっと機械を見ていたが、機械は何の動きも見せなかった。トウオンはじろりとパルマーを見る、パルマーはそんなトウオンの視線には気付か

ず、機械を熱い眼差しで見つめている。

突如、ピーツという甲高い音と共に、機械の煙突部分から煙が吐き出された。トウオンが驚いて機械を見る。機械は亀の様にゆっくりと前に動き始めた。やがて3メートルほど前進したところで動きを止める。それ以上、微動だにしなかった。

「……これだけか？」

トウオンが言う。

「はい。凄いでしよう」

パルマーが胸を張って言う。

馬鹿にしているのかとトウオンは怒鳴りそうになった。これのどこが世界を変える大発明なのだ。どうやってこの鉄の塊が動いたのわからないが、内部がどんな細工であれこんな事ぐらゐなら、からくり細工を使わなくても魔法を使えばすぐにできる。それをわざわざ面倒なからくり細工を使い、たかだか数メートル動かしただけで大騒ぎしているパルマーの神経がわからなかった。だいたい学者というものは皆そうだ。誰も彼も何の役にも立たない研究を大真面目な顔をして毎日やっている。それも自分の金ではなく、モートの援助している莫大な資金を使っただ。

トウオンは恐る恐るモートの表情を覗った。貴重な時間を使い、こんな下らない物を見せられたのだ。さぞかし怒っているだろう。下手をすればこの場でパルマーを殺しかねないと思っ

だが、モートの表情は怒っているどころか真剣そのものだった。じっと床の機械を見つめている。

「……人の手も魔法の力も使わず、これはどうやって動いたのだ？」

モートがパルマーに聞いた。その目はなおも不思議そうに機械を見つめている。

「中に動力があるのです。私はそれを蒸気機関と名付けました。蒸気の圧力を使ってピストンを動かすんです。十年の歳月を費やして、ようやくこの試作品が出来上がりました」

「ふむ……」

「今はまだこんな非力な力しか出ませんが、これが実用化されればもっと大きな物も動かせるようになります。遠い将来には人の代わりに全ての仕事をこの様な機械がやってくれるようになるでしょう。人間は何もしなくても今よりもっと快適な生活を送れるようになるかもしれません」

パルマーが熱く語った。

「大変興味深い研究だ……お前の援助額を今までの三倍にする。何とかこれを実用化してくれ」

モートは言った。

トゥオンにとっては、まったくもって理解できないモートの考えだった。これが皇帝というものなのだろうと、トゥオンは溜息をついた。

翌日、ボールスとカーリアは再び城にやって来た。

トゥオンとメレアガンスが二人を謁見の間まで連れて行く。

謁見の間へと行く間、メレアガンスは横目で注意深く二人を、特にカーリアと呼ばれる人物を観察した。カーリアという者、ただ者ではないとわかる。ただ何気なく歩いているように見えるが、所作振る舞いに一部の隙も無い。

さらにカーリアからは闘気というものがまったく感じられなかった。普通、ある程度以上の腕の者になると、本人の意思に関係なく多かれ少なかれ闘気や殺気というものは自然に体から滲み出てくるものだ。トゥオンなどが良い例で、彼女が何気なく歩いている時でも、前から来る者は彼女を一流の戦士であると知らなくても、何となく気後れして道をあける。だが、カーリアにはそれが無い。彼女の周りには闘気や殺気といった違和感がまるで感じられない。その平静が逆に奇妙に感じるほど、カーリアの姿は静かだった。

メレアガンスは心の中で唸った。闘気を内に完全に押さえ込むなど、並大抵の者にできることではない。メレアガンスでもここまでは無理だ。カーリアと言う人物はよほど精神の鍛錬を積んでいるのだろう。

やがて、謁見の間に着いた。

謁見の間ではすでにモートが玉座に座っていた。4人は跪く。

「お前がボールスカ。名前は聞いておる。優れた錬金術師らしいな。それでこの度は重要な話

があるとの事だが？」

モートがボールスを見下ろして言う。人の心を見透かすようなモート特有の瞳だった。モートの前ではどんな詐欺師でも嘘をつけないと悟る。

「はい。世界の運命を左右するだろう重要な話でございます」

ボールスが顔を上げて言った。皇帝であるモートの視線にも、気後れする様子はない。「よからう。話してみよ」

モートのその言葉にボールスは首を横に振った。トゥオンとメラアガンスを見る。

「……なるほど、確か私一人にしか聞かせられぬのだったな。いいだろう、別室へ移動しよう
トゥオンとメラアガンスはここで待て」

モートが玉座から立ち上がった。言った。

トゥオンも驚いて立ち上がる。

「しかし、陛下の身に万が一のことがあつては！」

トゥオンが叫んだ。そんなトゥオンをモートがじろりと見る。

「私に万が一などという事が起こると思うか？いいから貴公等は此処で待て」

モートはそう言うと、謁見の間から出て行った。ボールスもその後が続く。トゥオンはそれでもモートの後を追おうとしたが、メラアガンスに止められた。

確かにボールスがよからぬ事を企んでいたとしても、モートがボールスごときに傷を負わせるとは思えない。だが、何か不安だった。あのボールスという男は不吉な予感がする。

謁見の間にはトゥオン、メラアガンス、カーリアの三人だけが残された。

トゥオンは一人立っているカーリアを見た。相変わらず、フードを目深にかぶっている。

トゥオンやメラアガンスになど興味も無い様で、謁見の間を黙って珍しそうに見渡していた。

「……貴公、名前は？」

トゥオンがカーリアを睨んで言う。その言葉に、ようやくカーリアがトゥオンのほうを向いた。

「……カーリアⅡアルⅡメリア」

カーリアが静かに言う。

「変わった名前だな。それに言葉に微妙な訛りがある。だいたい、なぜフードなど被っている？顔を隠さなければならない理由でもあるのか？」

「……別に」

そう言うと、カーリアは無造作にフードを外した。

そのカーリアの顔を見てトゥオンは驚く。美しく長い黒髪に銀の瞳。そして明らかに顔の造りがトゥオンやメラアガンス達と違っていた。異国人だ。しかし、こんな人種は見たことがない。

「……生まれは？」

「遙か東北だ」

カーリアが短く答えた。トゥオンを見つめる銀色の瞳が微かに光る。モートの瞳とはまた違

う、人の心を見透かすのではなく、心その物を射抜いてしまいそうな冷たい目だ。

「……どの様に剣を覚えたのか知らんが、かなり使えるようだな。陛下がここに戻ってこられるまでにはまだ時間があるろう。少し手合わせ願いたい」

「ここでか？」

カーリアが静かに言う。

「そうだ。昨日は貴公に遅れを取った。あのまま戦えば私は負けていた。しかし、私も陛下の親衛隊長。武芸で人に遅れを取るわけにはいかん。ここで借りを返したい」

「別に私は構わない。存分にかかってこられるがよからう」

まるで散歩の誘いを受けるように、軽く受けるカーリア。

「では。メレアガンス、立会人を頼む」

トゥオンはそう言うと、自慢の大鎌を大振りに構えた。

メレアガンスは仕方ないといったように苦笑して、二人から離れた。昨日、メレアガンスにカーリアと諍いを起こすなと念を押したトゥオン自身が、ここでカーリアと決闘をしようと言うのだから笑いたくもなる。だが、メレアガンス自身もこのカーリアという人物には興味があった。どれほどの腕なのか。立ち振る舞いを見れば只者ではないとはわかる。しかし、モート軍きつての戦士であるトゥオンと比べてみてはどうか。またはメレアガンス自身と比べてみては……。

トゥオンが立会いを言い出さなければ、メレアガンス自身がカーリアと立ち会って見たかつ

た。

メレアガンズがカーリアを見る。

カーリアはまだ刀も抜かず、ただ無防備に立っているだけだ。

「はっ！」

トゥオンが気合と共に、大鎌を振るう。

カーリアは後ろに少し跳んで大鎌の一撃を避ける。

びゅんと空気を派手に切り裂く音がした。少しの手合わせどころではない。こんなものが当れば、カーリアの細い身体など真っ二つに千切れ飛ぶだろう。

次々とトゥオンは大鎌を振るっていく。カーリアはまだ腰の刀も抜かず、大鎌の攻撃を距離をとって交わしていく。さすがにカーリアも迂闊に攻撃できないのだろうとメレアガンズは思った。カーリアの刀とトゥオンの大鎌ではリーチも破壊力も桁外れに違う。カーリアが自分の間合いに入っていく事は容易ではなかった。

トゥオンはまるで小さな竜巻のように大鎌を操っている。これがトゥオンの戦い方だった。

トゥオンは容姿こそ小柄で華奢だが、性格は非常に好戦的で、その戦闘方は『攻撃は最大の防御』という言葉そのものだ。あの巨大な大鎌を軽々と振るう事からもわかるとおり、トゥオンのその細腕は見かけに似合わぬ異常な腕力で、トゥオンの二倍はありそうな大男が数人掛かりで腕相撲しようともトゥオン一人に敵わない。試した事は無いが、おそらくメレアガンズですら純粋な腕力なら彼女に敵わないだろう。その怪力のトゥオンが自慢の大鎌を使おうものなら、

その一撃は巨大な大理石の柱でも簡単に砕き折る。

カーリアは今のところうまくトゥオンの攻撃を避けている。だがメラアガンズは知っている。トゥオンには驚くべき得意技があるのだ。その技でトゥオンは幾人もの強者を倒してきた。それは……。

カーリアはトゥオンの大鎌を避けながら、反撃の機会を覗っていた。トゥオンの攻撃は強力で刀で受ける事はできない。下手に受ければ刀がへし折れるだろう。だがその分、トゥオンの攻撃は大振りでカーリアには幾つもの隙を見出す事ができた。今まで防御に徹してきたのは、大鎌というカーリアには見慣れぬ武器の動きを見切るためだ。

トゥオンが大鎌を振る。カーリアは慣れた動作で回避行動を取ろうとした。だが……。

「なっ……」

カーリアが驚きで目を見張る。カーリアの目の前でトゥオンの大鎌が数十cmも伸びたように見えたのだ。一瞬の事でカーリアには避けようが無い。カーリアの首に巨大な鋼鉄の刃が迫った。

激しい金属音と共に、火花が散った。

カーリアは寸でのところで刀を抜き、大鎌の刃を受け止めていた。カーリアが軽く顔をしかめる。受け止めたその攻撃は、骨が軋むほどの重い一撃だった。

カーリアが力を込めて、大鎌を払う。二人は距離をとった。

「ようやく刀を抜いたな。これで私も本気になれる。しかし、今の一撃をよく受け止めた。少

し驚いたぞ」

トウオンが軽々と片手で大鎌を振りながら言う。

「……驚いたのはこちらだ。まさかその巨大な鉄の塊を片手で振るうとはな……」

カーリアが呟く。

片手持ち、それが先ほどカーリアが見た攻撃の伸びの正体だった。それまで両手で持っていた大鎌の柄をトウオンはとっさに片手を離し、片手で大鎌を振るったのだ。そうすることに よってリーチは格段に伸びる。攻撃の途中にリーチを変える恐ろしい技だが、それよりこの大鎌を片手で扱えるというトウオンの怪力にカーリアは驚いた。並みの者がこんな事をすれば、振るった大鎌の重さに耐えられず腕が壊れるだろう。

「何処にでも優れた戦士はいるものだな……少々甘く見すぎていたようだ。本気でお相手しよう」

カーリアは静かにそう言うと、刀を構えた。辺りの空気が一変する。異様な剣気が辺りを満たした。

暗い部屋の中、モートとボールスが巨大なテーブルを前に向かい合って座っていた。

「その話……本当か？」

モートが重い口調で聞く。

「はい。全て真実です。このままでは我等人類に未来はありません」

ボールの言葉。その言葉を聞いて、モートの表情がさらに重苦しいものになった。

「案ずる事はありません。まだ時間は十分にあります」

「……十分すぎる。クロートーは三百年後を予言したが、人間の私は三百年も生きられぬ」

「……時の禁呪というものがございます」

「時の禁呪？」

「はい」

ボールスは恭しく答えた。

「古代魔法の秘術です。この秘術を使えば、その者の寿命は数倍にも延びます。もっともこの儀式には巨大な魔力を持つ術士が必要で、有史以来、この秘術に成功したものはいません。秘術によって暴走した魔力を抑えきれずに、術者はみな死んでしまいます」

「お主にその秘術ができるのか？」

「いえいえ。儀式の手順は知っておりますが、私では術士としての魔力が足りません。いや、現代には世界中探してもこの秘術を行えるだけの術士はいないでしょう。ただ一人を除いては……」

ボールスがにやりと笑って言った。

「……なるほど、私にやれというわけだな。おもしろい」

モートも笑う。失敗は死を意味し、また誰も成功したことのないというその秘術を、モートは笑って、行うと言う。モートには自分の魔力に絶対の自信があった。

「人類の滅亡の時は刻一刻と迫っています。無慈悲な神の鉄槌によって。その神を倒せるものは、比類なき魔力を持ち、大陸を統一を成し遂げた陛下しかおりません」

ボールスの言葉を聞いて、モートは笑った。神、人類が畏怖し続けてきたその存在。その絶対の存在に自分は今、弓を引こうとしている。

モートは大声で笑った。

神が何だと言うのだ。自分の前に立ちはだかるものは、神であろうと悪魔であろうと打ち倒す。動物は黙って自分の死を受け入れるかも知れん。だが人は違う。黙って滅びを待ちはしない。人類は己の手で自分の運命を切り開くべきだ。

トゥオンとカーリアが睨み合う。

ふいに、トゥオンの視界からカーリアが消えた。

とっさにトゥオンが手にしていた大鎌を上げる。それは幾多もの戦場を生き抜いてきたトゥオンの戦士としての直感だった。

トゥオンの大鎌の柄がカーリアの刀の一撃を受け止めていた。トゥオンの背中に冷たい汗が流れる。今のは斬撃どころか、カーリアの動きそのものが見えなかった。

必死にトゥオンが大鎌の柄でカーリアの刀を弾く。カーリアが後ろへ跳んで間合いをとった。そのカーリアの姿がまた消える。

今度はトゥオンにもそのカーリアの動きが見えた。だが速すぎる。残像を目で追うのが精一杯だった。目の動きに体がついていけない。

カーリアの刀がトゥオンに迫る。

トゥオンは避けようとするこすらでなかつた。

トゥオンにできたのは、カーリアの刀が自分に迫り狂うのをただ見ている事だけだ。

そのカーリアの刀が、トゥオンの目の前でぴたりと止まる。

氣付けば、トゥオンとカーリアの間に一振りの劍が割って入っていた。メレアガンスだった。

「勝負はあつた」

メレアガンスがカーリアの目を見て、言う。

カーリアは切つ先をトゥオンの目の前から離すと、刀を鞘に収めた。

トゥオンはどつと汗が流れた。ようやく生きていくという実感が湧いてきたのだ。今のカーリアの一撃には、寸止めなどという言葉は一切感じられなかつた。メレアガンスが止めに入らなければ、自分は死んでいただろう。

「……カーリア殿と言つたかな？ たいした劍の腕だ」

メレアガンスが言う。

「まだまだ誇れるほどのものでもない」

カーリアが何でもないことのように言う。

「野においておくには惜しい。軍に入らないか？ 貴公ほどの腕なら、すぐにでも將軍位につけ

る」

「あいにく士官には興味が無い。ボールスは何と言うか知らんがな」

そこにモートとボールスが部屋に戻ってきた。

「話をついた。ボールス、今日のところは下がれ。沙汰は追って知らせる」

「はっ」

モートの言葉に深々と頭を下げるボールス。そのまま踵を返し、謁見の間から出て行った。カーリアはトゥオンに軽く一礼すると、ボールスの後に続いて、部屋を出て行った。

「どうだった？」

宮中の廊下を並んで歩くカーリアが、ボールスに聞いた。

「うまくいった。これで研究に必要な時間も金も十分に手に入る」

ボールスが笑う。満足げな顔だ。カーリアはそのボールスの瞳の奥に、何かしら嫌なものを感じた。かつての彼には無かった、暗い野望の光りだ。

「よかったな」

カーリアは素っ気無く言った。

「ああ。これで私はモートの配下という事になるわけだが、おまえはどうする？」

「私か？……わからん」

カーリアは軽く首を振った。

「どのような話でした」

トウオンが、ボールスとの会談を終えたモートに聞いた。

「……興味深い話だった」

モートはただ一言、それだけを言った。どこか遠い目をしている。

「……トウオン」

「はい」

「……議会から軍備縮小の案がでていたな」

「はい。陛下が大陸統一を成し遂げられましたので、もう必要最低限以上の軍備は必要ないかと。先週、元老院で可決されました、あとは陛下の了承を待つばかりですが……それが何か……？」

「……取り消せ」

「は？」

「廃案にしると言ったのだ」

「し、しかし、今さら強引に廃案にいたしましたでは……元老院も黙ってはいはいないでしょう」

「知った事か。それから、内政府に来年の軍事予算は今年の倍にしると伝えておけ」

モートが冷たく言い放つ。その言葉にトウオンは震えた。

「恐れながら……足りない分の予算は何処から……？」

「それは役人どもに考えさせろ。どうしても足りないようなら、増税もかまわん」

トゥオンにはわからなかった。長い戦乱を終え、ようやく大陸に平和が訪れようとしているのだ。兵士も民も疲れきって、目の前にある平穩にようやく希望の光を見出した時なのに。

その希望を打ち砕くように、増税と軍備増強とは……。大陸平定を成し遂げ、もうこの世界にモートの敵となる勢力など残ってはいないのだ。一体、モートは誰と戦うつもりなのか。

トゥオンの震えは止まらなかった。胸の中の大きな不安が、内側から押し潰すようにトゥオンの心に広がっていった。

カーリアは町の中を目的も無く歩いてきた。カーリアの故郷、ヴァルナの集落よりもこの町は遥かに活気がある。人も多かった。なのにカーリアはこの町がなぜか好きになれない。まだ昼間だというのに、酔い潰れたアル中や、行く当てもなく道端に蹲っている浮浪児達が目に付く。ヴァルナの里にはそのような者たちはいなかった。

ここ何週間か、ボールスにはほとんど会っていない。彼は忙しく立ち回っていた。ボールスと言う。「我等の目的の達成のために、私はモート軍内で確固たる地位を気付かねばならない」。なるほど、ボールスの言うとおりだ。なのに、なぜかカーリアはボールスのその言葉を聞いた時、胸に妙ないらつきを感じた。だが、ボールスならうまくやるだろう。派閥争いを勝ち抜き、彼にはそういう才能がある。しかし、私には無理だ。

カーリアは何気なく一軒の酒場に入った。狭く薄暗い店内には、薄汚れた労働者達がまばら

に見えた。

カーリアはカウンターに座ると、ブランドーを注文した。南国に来てから始めて知った酒だ。ヴァルナの里で作る酒より遥かに強い。

「『我等の目的』か……」

カーリアはグラスを手にながら、何気なくこの言葉を呟いた。ポールスと二人、ヴァルナの里を出る時、確かにこの言葉は二人に同じ意味を持っていた。だが今では微妙に違う。一体いつから違ってしまったのか。それとも、やはり始めから違っていたのか……。

「お嬢さん、暗い顔して飲んでるねえ」

カーリアの隣に座っていた老人が、酒で赤くなった顔で言った。吐く息は酒臭い。カーリアは顔をしかめた。

「お嬢さん、軍の人かい？」

老人がカーリアの腰に挿してある刀を見ていった。

「いや」

「そうか、そうか」

老人がうれしそうに言った。

「ここだけの話だがね。皇帝陛下は狂ってしまったとしか思えんな」

「ほう。なぜだ」

「今まで戦争でさんざん我々民に重税を強いていながら、ようやく大陸平定を終えたと思えば

また増税、軍備の増強。これが狂っていなくてなんだというんだね」

「そうかもな」

「噂じゃ、今度の軍備増強はドラゴンスピークを攻める為だと聞く。お前さんも知ってるだろ。あの世界最強の生物である竜族が住む、あの山脈だよ」

「……」

「まったく、なぜそんなところにわざわざ攻める込むのかねえ。今まで人と竜族と人間は交流こそ無かったが、別段争った事も無いのに。人間が竜族を一方的な理由で攻めるとなれば、エルフやドワーフといった他の種族も黙ってしまい。人間と異種族の大戦争になるぞ」

「……」

「わしが思うに、あの皇帝は一種の病気じゃないのかね。人間世界に敵がいなくなったら、今度は竜族が怖くなる。自分を脅かす敵だと思ひ込むようになる。竜族を滅ぼせば、また他の種族を攻撃するだろう。いつまでたっても自分の地位に満足するって事がないのさ。あげくのはてには、どこにいらっしやるかもわからない神にまで挑戦するかも知れん。神を殺して、自分が神になろうと思ってるな」

「……」

「おや、あんまり興味のない話しかね」

老人が、黙って酒を飲んでいるカーリアを見て、面白くなさそうに言った。

「ああ」

「そうか、そうか。ならお嬢さんにも興味がある話をしてやろう」

そう言うと、老人は一つの奇妙な話しをした。それは二人の戦士の話だった。カーリアを流れる者の戦士とも思ったのだろう。

「あるところにね、一人の戦士がいた。これは凄く強い男でね。いかなる相手の技も出す前に見切ってしまうことができるんだ」

「……ほう」

カーリアも少し興味がそられたのか、相槌を打って聞く。

「その男に一人の男が決闘を挑んだ。だが、これははてんで未熟な男でね。もちろん、未熟な男の剣など全て見切られてしまつて、強い方の男には簡単に防ぐ事ができた。未熟な男が何回切り込んで、強い男の方の身体に触れる事もできない」

「なるほど」

「だが、そんな強い方の男が、未熟な男に負けた。何故だかわかるかい？」

「ほう、なぜだ？」

カーリアが興味を持って聞いた。実際の真剣勝負には絶対などない。強いものが弱いものに必ず勝つとは限らない。だが、これは話である以上、何か理由があるのだろう。

「強い男が、未熟な男の剣を剣で受けた時にね。未熟な男の剣先が折れてね。その切っ先が飛んで、強い方の肩間に突き刺さつちまつたのさ。いかに相手の技を瞬時に見切ることができても、相手の無意識の、まったくの偶然の攻撃だけは防ぎようがなかったというわけさ。ど

うだい、おもしろいじやる？」

老人が笑つて言う。酒場のマスターは、やれやれという顔をした。もう何度も聞かされてい
る話なのだろう。

だが、カーリアは深い感動を覚えた。この話こそ、剣の極意だと思った。

（なるほど、劍客のうちでもっとも下なるものはその未熟な男だろう。いちいち相手に攻撃を
見切られては話にならない。強い方の男、これはいい。この強い男というのが、今の私に
相当している。しかし……）

カーリアは思った。

（真に兵法の極意極めた者とは、その折れた剣の切っ先でなければならぬ）

カーリアは数週間ぶりにボールスを訪ねた。今では、ボールスの部屋はモートの居城の中に
ある。ボールスは相変わらず忙しそうにしていた。

「おや、カーリアか。久しぶりだな」

ボールスが笑つて言った。

そのボールスの全身から、異常な雰囲気を感じられる。今までは無力なただの学者だったが、
今のボールスから発せられる異様な気は只者とは思えない。

「……ボールス、お主、何をした？」

カーリアが顔をしかめて聞く。ボールスはニヤリと笑った。

「モートが時の禁呪の儀を成功させた。もはやあの男は人間ではない。そして私もな。契約により、モートから力を与えられた。人外の力だ」

不気味な顔で笑うボールス。

「モートは十三使徒という官位を作ろうとしている。そこに列せられる者には、この力が与えられる。お前もこちら側へ来い。想像もできないような力が手に入るぞ」

ボールスがそう言って手を伸ばす。

確かに信じられない。カーリアから見れば、ボールスの力など赤子も同然だったはず。だが、今のボールスの力はカーリアと同格か、いや、それ以上かもしれない。

だが、差し出されたその手を、カーリアは取らなかった。

ボールスの表情が歪んだ。

「……何故だ。お前の願いは強くなる事だろう。お前は世界に並ぶ者のない兵法者となり、私は錬金術の研究によって、この世で最も優れた戦士を作り出す。そして二人で神を殺そうと、人類の未来を切り開こうと、あの時約束したではないか。忘れたのか？」

ボールスと言う。

「……忘れてはいない。だが、お前の言う力と、私の求める力は、おそらく違う」

カーリアは静かに言った。

この町へ来て、モートに会ったこの僅か数週間でボールスは変わってしまった。かつての、ただ純粋に知識を追い求めていた若き学者の姿はもう其処にはない。今、自分の目の前にいる

のは、皇帝の巨大な権力を目にし、権力と力に取り付かれたただの男だ。この男は自分が世界の王になる事を夢見ている。

これが権力の汚れか。人の組織に入れば、否が応でもそういうものに巻き込まれる。煩わしい事はごめんだった。

カーリアは思った。

自分は純粹でいたい。

ただ剣の道を極めたいのだ。

カーリアはボールスに背を向けた。ゆっくりと歩き出す。

「何処へ行く？」

ボールスが怪訝そうな顔で聞いた。

「……さあな。どこかの山に籠って、一から修行をやり直すつもりだ」

「……我々の約束はどうする？」

「心配するな。兵法の悟りを開き、修行を終えれば、必ず私はお主の元に戻ってくる。それまでは、お互いに己の使命を果たそう」

カーリアはそれだけを言うと、ボールスを振り返ることなく部屋を出た。

ボールスも止めなかった。すでに自分の肉体の遺伝子サンプルを取ってしまったボールスにとって、自分ももう用のない存在なのだろうと、カーリアは思った。

それから百年近い時が流れた。

モートはエルフや竜族といったこのアトラスの大地に住むすべての種族を自分の支配下に置こうと、侵略を続けていた。このため、ただでさえ少ないエルフや竜族の個体数は激減していった。

もはや、大陸にモートの敵はいない、モートは元老院を解散させ、完全な独裁体制に入った。民衆から反発の声は徐々に増していったが、巨大な権力を持つモートの皇帝としての地位を揺るがせることはできなかった。不平を口にする者は殺された。いつしか、彼は皇帝ではなく、魔王と呼ばれるようになっていた。

そして、ボールスはモート軍内で揺るぎのない地位を固めていた。十三使徒の一人として、今や敵だけでなく自国の領民達にも恐れられる存在だった。

ボールスはネグロード城と呼ばれる城にいた。かつて、ヴァルナの聖地であった場所だ。モートの軍を使い、ボールスがヴァルナ人達から奪い取ったのだ。

ネグロード城の一室で研究を続けていたボールス。試験管を持ちながら、その中にある液体の変化を見ていた時、ふと後ろに気配を感じた。

ボールスが試験管を置いて、振り返る。

そこにはフードを深く被り、全身をマントで覆った人物がいた。

「ほう。どうやってここに入った？」

ボールスが笑う。十三使徒、ボールスの居城であるこのネグロード城には警備は多い。警備

の目を盗んで入れるはずもなかった。

「……」

「誰だか知らんが、私の研究室に黙って入ってくるとはいい度胸だ。命知らずといってもいい」

笑うボールス。吸血鬼の不気味な笑みだ。全身からは十三使徒としての異様な力が感じられる。

突如、ボールスが地を蹴った。人の力を遥かに超えたそのボールスの身体能力は、フードの人物との間合いを一気に詰める。

ボールスが腕を振り上げた。鋼鉄の甲冑をも楽々とへし曲げるボールスの豪腕だ。当れば人の身体ぐらい簡単に真っ二つになる。

だが、その腕を振り下ろした時、其処にフードの人物の姿はなかった。

「なっ……」

気付けば、フードの人物はボールスの横に立っていた。ボールスの首元に剣先を突きつけて。「……この世界に並ぶ者はないと聞く十三使徒の力というものは、その程度か。だとすればこの百年、お主はさぼっていたとしか思えんな」

フードの人物はそう言うと、片手でフードを外した。

「……カーリア」

フードの下から現れた顔を見て、呻くように言うボールス。

カーリアはゆっくりと刀を下ろし、鞘に収めた。

「久しぶりだな」

静かに、そして短く言うカーリア。

「……冗談が過ぎるぞ、カーリア」

「お主の力を少し試してみたかっただけだ。まだまだよな、ポールス」

カーリアは冷たく笑った。時の禁呪を使っているわけでもないのに、カーリアの姿は百年前とまるで変わっていない。長命人種であるヴァルナ人ならではなかった。

「どうだ？研究は進んでいるか？」

「問題ない。すでに優れた生物兵器を幾つも発明した。私自身の身体にも、その研究成果を施してある」

ポールスが自分の手を見ていった。人を超えた生命の開発、それがポールスの研究テーマだ。「結構だな」

カーリアは興味なさそうに言った。

「……お前が再び私の元に姿を現したという事は、修行は完成したのか？」

「ああ。私は剣の極意を得た。もはや私は誰にも負けん。人外の者だろうが、何だろうがな」
そう言うカーリアの冷たい銀の瞳には、絶対の自信が見て取れる。

「ふふん、たいした自信だ。神にも勝てるのか？」

「勝てるさ。何なら、今すぐ証明して見せてもよい。最強と謳われている十三使徒とやらを皆

殺しにしてな」

カーリアが軽く刀の鞘に触れる。

ボールスは引きつった笑顔を浮かべた。カーリアの表情は冗談を言っているとは思えない。本当に十三使徒全員に勝てる気であるのか。しかし、先ほどのカーリアの動きは、ボールスには目で追うことができなかった。すでにカーリアの力は、人の到達できる限界を遥かに超えていることは間違いない。

「……我々の敵は十三使徒やモートではあるまい」

「その通りだ。そして、今日お前の元に来たのは、頼みがあるからだ」

「何だ？」

「昔、お前は言っていたな。肉体を長期にわたって保存しておく方法があると。その方法を使えば千年でも二千年でも眠っておけると」

「ああ。極限まで肉体を死に近づけて、細胞の動きを止め、肉体を保存する方法だ。それがどおした？」

「それで私を眠らせて欲しい。どうやらまだクロトーは現れんようなのでな」

「……いいだろう。こっちへ来い」

ボールスは言った。

カーリアは静かに金属製のカプセルに身を横たえた。ボールスが見下ろしている。

「お前が目覚めるのは、百年後か二百年後か……もしかしたら本当に千年、目覚めんかも知れん。それでいいのか？」

「ああ。クロトーが現れ、この世界が滅びに向かった時、起こしてくれればそれでいい」

「そうか。ではそれまでいい夢を」

ボールスがそう言って、カプセルの蓋に手を掛けた。

「……ふふ」

「何がおかしい？」

カーリアの笑みに、怪訝な顔をするボールス。

「あいにくヴァルナ人である私は夢を見ないが……しかし目覚める時が楽しみだ。この世界が、お前がどうなっているか……おそらく私もお前も想像のつかないような世界に変わっているだろう。そして、私はこの世界でも最も強い存在と戦えるのだから」

「……もう閉めるぞ」

「ああ、やってくれ」

カーリアは目を瞑った。

カプセルの蓋は重く閉じられた。

カーリアはこの後約五百年眠り続ける事になる。カーリアの予想通り、世界は彼らが想像もしなかったものになっていた。絶対の権力者であった魔王モートは、たった一人の人間である勇者アトロに倒された。モート軍は魔族として忌み嫌われ、大陸の北地に追いやられていた。

魔族と人間の終わりのない争い。モートを補佐し、大陸に生きる全ての種族を纏め上げて、クローターの降臨に備えようとしていたボールの計画は大きく狂う事になる。

そして、もう一つの大きな誤算。ボールスまでも死に、ロア達がカーリアを目覚めさせてしまった事。

そこで鏡の映像は消えた。また元通りに、鏡は黒い物質に変わる。

リユネットは呆然と、その鏡を見続けていた。

「……何なの？これ？」

リユネットがようやく鏡から目を離して呟く。

「……おそらく……魔鏡ね。聞いた事があるわ。過去を映し出す鏡を、ボールスが開発したと……」

同じく鏡を見続けていたネーテルが、唸るように呟いた。

「……じゃあ、今のは？」

「ボールの過去のね。この鏡は、近くにいる人物や場所に関係ある過去を映し出せるんですよ。ここはボールの研究室だから、ボールの影響を受けて、その過去を映し出したのよ」

ネーテルが言う。

「まあ、そんなものどうでもいいわ。今は貴女の治療法を探すのが先決でしょ？」

ネーテルはそう言うと、魔鏡から目を離し、再び部屋を調べていった。

リユネットは魔鏡を机の上に置いたが、やはり思い直して自分のポケットに入れた。

「そんなものどうするの？」

「さあ、わからないけど……何かの役には立つと思って」

ネーテルの言葉に苦笑しながらも答えるリユネット。

「ふーん」

そう言いながら柵をひっくり回していたネーテルの動きが止まる。

「見つけた！」

ネーテルが歓声を上げた。リユネットが駆け寄る。ネーテルが手にしていたのは一冊のファイルだった。

「ここに吸血鬼から人間に戻る治療薬の製法が書かれてあるわ」

リユネットがホッと溜息をつく。これで自分は吸血鬼にならずにすむ。安堵の溜息だった。「で、あなたなら作れるの？」

「ええ、必要な材料はそれほど珍しいものでもないし、ここには機材もそろってるからここで作ってしまうわ。どうせ私は他にも調べ物があるし」

ネーテルが研究所と見回して言う。

「どれくらい掛かるかしら？」

「そんなに長くはかからないわ」

「わかった。あなたはここをお願い。私はロアが心配だから先にロアと合流するわ。あなたも

治療薬ができて自分の調べ物が終わったらすぐに来て」

「わかったわ」

ネーテルはそう言うど研究所の中を歩き回って必要な材料と機材を集め始めた。

リユネットは部屋の出口に向かい、そこで少し立ち止まる。ルーテネの方を振り返った。

「ごめんね、色々酷いこと言って。私知らなかった、魔族も人間も変わらないって事。魔族の中にも悪い人もいればいい人もいるのね。あなたはいいい人だわ」

リユネットが言う。

「……やめてよ。私はいいい人なんかじゃないわ」

「みんな生きて此処を出ましようね。私、貴女となら魔族と初めての友達になれそうなの気がするわ。例えばそれで教会を破門されてもかまわない」

ネーテルがうな垂れる。リユネットは研究所を出て行った。

カーリアから逃げ出したルーテネが暗く長い階段を下りていく。もうどれくらい階段を下りているかわからない。かなり深い地下にまで達しているようだった。

「まったく、本当にこの城は迷路みたいな構造ね。そこら中に隠し扉があるんだからルーテネが笑う。」

この階段への入り口はこの城の玉座の間で見つけた。隠し扉を付ける位だからよほど大事なものを隠してあるのだろうとルーテネは階段を下りていったのだ。だが何処まで降りたらこの

階段は終わるのか……。

そんな事を思っているうちに階段は終わった。突然眼下に巨大な空間が現れる。そこに見えるのは巨大な黒い直方体の建物。

「ネグロードの地下にこんな物が隠されてあるなんて……あの建物に一体何が……」
ルーテネは眩くと直方体の建造物に向った。

直方体の建造物の内部に入っていくルーテネ。中に入って驚いた。暗闇の廊下の壁がぼんやりと青白く光っているのだ。ルーテネがそつと壁に触れてみる。なんだか生暖かい。

「何これ……いったいどういうテクノロジーでできてるの？」

ルーテネが眩く。人の技術で作られたものとは到底思えない。

ルーテネは先へ進んでいった。

やがて一つの広い部屋に出る。部屋の中央に巨大な石版が立っている。黒い石版自体も青白く光っている。

「文字……古代文字か。いや違うか……」

ルーテネが石版の文字を指でなぞっていく。彼女の天才的な頭脳が文字を解読していった。闇の静寂の中、しばらく時が立った。

「……ふふふ、あはははは、そうか。これがポールの目的だったのね。これが隠された世界の真実か」

ルーテネが突然狂ったように笑う。

ルーテネが辺りを見回した。

「まさにここは宝の山ね。『楽園』なんて名前にふさわしいわ」

ルーテネが部屋の壁に歩み寄り、壁に手を当てて何か小さな声で唱えた。

突然壁が割れ、入り口が現れた。

「くだらない暗号だわ。古代人って優れた文明を持ってたみたいだけど、案外、知能指数的にはたいしたこと無いのかもね」

ルーテネが中に入る。

部屋の中に入ったものを見て驚きで足を止めた。

「……何これ？鉄の巨人？」

ルーテネの目の前にそびえ立つ全長五メートルはある人型の何かだった。鎧を着ているかのように全身を黒い金属の装甲で覆われている。透明の巨大な容器の中に立っていた。

ルーテネが近づくと、巨人の前に置かれてあった石版に目を通す。

「ふーん。機械仕掛けの人形かと思いきや、一応生き物なのね。この金属製に見えるのは装甲じゃなくて外殻か。珪素化合物で全身を固まらせている。冷凍冬眠みたいなものかしら。って事はまだ生きてるの？」

ルーテネがにやりと笑う。

目の前にあったスイッチを動かし始めた。

容器の中が真っ赤な光に包まれる。蒸気が上がり、やがて収まった。

容器の中の巨人は珪素が溶かされ、外殻は黒から灰色に変わっていた。

ルーテネが見つめる。巨人はピクリとも動かない。

「ちっ、やっぱり死んでるか。つまらないわね」

ルーテネがぼやく。

その時、巨人がゆっくりと手を動かした。透明の容器に触れる。硝子のようなそれは亀裂が入り、粉々に砕けた。

「きゃあ。ラッキ。動いた！」

ルーテネがうれしそうに歓声を上げる。

巨人がルーテネを見下ろす。硬い甲羅に覆われたその顔からは六つの眼が青い光を発射している。

「ハロー。私ルーテネ。貴方、なんか面白い特技でもある？」

ルーテネがおどけた様に手を差し出した。

巨人の口が光った。

レーザー光線がルーテネの手首を通過する。

ルーテネの手首から先は綺麗に無くなっていった。

「あれ？これってやばくない？」

ルーテネが無くなった自分の腕を見て言った。それでも顔は笑っている。

巨人が吠えた。空気を震わす咆哮だった。

巨人が天井を向いて口からレーザーを発射する。

黒い天井が真っ赤に光り、大きな穴が開いた。

巨人は背中の外殻から透明の羽を出す。羽が燃える様に光り輝いた。目を開けていられないほどの光りだ。

巨人の足がゆっくりと地面を離れた。浮いている。どういう仕組みかはわからないが飛べるようだ。この様な大質量のものが自力で浮かぶなど考えられない。

巨人は自分が作った天井の穴から飛んでいった。

ルーテネは面白いものでも見るかのように、それをうれしそうに眺めている。

天井から次々溶けた金属が垂れてくる。ルーテネが飛び退いた。

「あはは、なんか逃げた方がよさそうね」

ルーテネが笑ってそう言うのと、建物から走って逃げ出した。

74

リユネットが城門まで走る。城門を出た。

満月の光の下、ロアが血だらけで倒れているが見える。

「ロア！」

十二人のマードゥークがリユネットの方を見た。

リユネットはロアの元に走ろうとした。その時、異様な殺気を感じて立ち止まる。

ロアがゆっくりと立ち上がる。暗闇で表情は見えない。闇の中で瞳だけが燃えるような金色に輝いていた。

ロアが吠える。耳を覆いたくなるような雄叫びだった。

マードゥークが再びロアの方を見る。

ロアが地を蹴った。

マードゥークの一人に飛び掛る。豪腕が兜ごとマードゥークの頭部を叩き潰した。

頭部の潰れたマードゥークを踏み台にしてロアが別のマードゥークに襲い掛かる。

マードゥークが腕を振る。ロアはそのマードゥークの両肩に着地すると迫ってきた腕を掴んだ。

ロアがその腕を引っ張る。嫌な音がしてマードゥークの腕が根元からちぎれた。

マードゥークが唸り声を上げて倒れる。他のマードゥーク達が一齐にロアに襲い掛かった。

凄まじい惨劇だった。

獣同士が殺しあっている。

互いに傷を負うことになど躊躇しない。

豪腕と鋭い爪が唸る。

肉をえぐる音と血が飛び散る音。

一体、また一体。マードウークが倒れていく。

ロアが恐ろしい形相でマードウーク達を殺していく。

満月の夜とはいえ、ロアの強さは異常だった。怖いまでに。

やがて最後のマードウークが倒れた。

ロアがリユネットに背を向けて呆然と月を見上げる。ロアの身体も傷だらけだった。

リユネットがロアに駆け寄る。

ロアが振り返った。目が正気ではない。狂気の色を写している。

その瞳を見た時、リユネットは恐怖で立ち止まった。ロアの目の前で。

ロアがリユネットめがけて腕を振り下ろす。

リユネットは動けなかった。金縛りのように。

リユネットが恐怖で眼を見開いた。

ロアの腕がピタリと止まる。

「……リユネットか」

ロアが血に濡れた傷だらけの顔でニヤリと笑った。

リユネットがヘナヘナと腰を下ろす。

「……脅かさないでよ」

「悪かった。戦いに夢中で、ほとんど意識がなかったんだ」

「……酷い傷」

リユネットがロアの傷に触れる。

マードウークの一人がゆっくり立ち上がった。肩から腕が無くなっている。血が噴水のように吹き出していた。それでも生きている。驚くべき生命力だった。

ロアとリユネットが身構える。

マードウークがゆっくり一歩を踏み出した。

ピシツと音がした。

マードウークの被っていた兜の一部に亀裂が走る。

留め金が砕け、重い金属音を鳴らして兜が地に落ちた。

「……ロア……」

リユネットが震える声で言った。

兜の下から現れた顔は、ロアと瓜二つのもだった。

ロアの顔をしたマードウークが三日月のように唇を吊り上げる。

不気味な笑みだった。

マードウークがロア達の方に歩いてくる。

リユネットはロアにしがみついた。震えを感じる。

ロアは震えていた。奥歯をガチガチと鳴らし、震えている。

マードウークはどんどん近づいてくる。唇がどんどん吊り上る。狂気的笑みだった。

ロアもリユネットも動けなかった。

マードウークが腕を上げた。頭上で満月が輝いている。

リユネットは眼をつぶる。

ブンツと空気を切る音がした。

リユネットが恐る恐る眼を開く。

マードウークの首は大蛇に食いちぎられていた。

首を失ったマードウークがどさりと地に倒れる。

リユネットが後ろを振り返る。片腕を大蛇に変えたネーテルがロア達の方にゆっくりと歩いてきていた。

「……見ちゃったのね」

ネーテルが悲しげに言う。

「……これは……これは一体なんなの！」

リユネットが叫ぶ。ロアは呆然とマードウークの首を見つめていた。

「ロア、それは貴方の兄弟達よ。ポールスが作り出したね」

「……兄弟？」

ロアがマードウークの顔を見たまま呟く。

「ええ。覚えてる？前に私が貴方と私は似てるって言ったこと。貴方も私と同じで神によって生み出された命じゃない。人の手によって創られたものなのよ。私はヘンギストに、貴方はポールスに。貴方は吸血鬼に囃まれて吸血鬼になったんじゃない。貴方が生まれたのはポール

スの研究所の試験管の中よ」

「命を生み出すですって！そんなの神への冒瀆だわ！」

リユネットが叫んだ。

「ええ、そうね。でも人間はそんな冒し難い罪も平気でやってしまう生き物なのよ。ロア、貴方は自分の昔の記憶が無いって言ってたわね。でも無くて当然なの。だってそれ以前の貴方はずっとポールの研究室の中で眠っていたんだから」

「そんな……」

リユネットが呟いた。

「ポールスは優れた肉体と戦闘能力を持つ生命体を作り出す研究をしていた。なぜそんな研究をしていたかは正確にはわからない。でもおそらくは……いや、推測を口にしても仕方ないわね。とにかくその研究の過程でマードゥークは生み出された。ロア、貴方はそのマードゥークの初期の試作品の一人なの。でも貴方には大きな欠陥があった。貴方は他のマードゥークには無い人格というものを持っていたのよ。だからポールスは貴方を破棄した。魔界の僻地にまだ未完成の貴方を、なんの生命維持装置もつけずにね。貴方は其処で死ぬはずだった。でもポールの予想に反して貴方は生き延びた。そうしてロアという一人の人間が生まれた……言ったでしょ、知らない方がいい過去もあるって」

ネーテルが暗い口調で言った。

ロアがうな垂れる。リユネットが心配そうにロアを見た。

人は生まれてきてからの経験によって、自己を形作っていく。経験によって人ができるのだ。そういう意味では記憶が人としての本質なのかもしれない。記憶が無い。それはアイデンティティが持てないという事。自己認識ができないと言う事。どれほど苦しい事だろう。

そして、ようやく過去を取り戻したと思ったら、自分は神の意志に背いてできた、ただの化物だったと言う事実。祝福もない、人の手によって生み出された、神の模造品。そんな機械と変わらぬような命に価値があるのか。

リユネットはロアにどう声を掛けるべきかわからず、ただ見守る事しかできなかった。

「……ふふふ、あははは。なーんだ、そんな事か」

ロアが明るい表情で顔を上げる。

「は？」

リユネットとネーテルが同時に声を上げる。

「いやー、俺って記憶の無い過去にどんな悪いことしたのかとずっと心配だったんだけど、今聞く限りじゃ俺はなんも悪いことしてないんだな。いや、よかったよかった」

「いや、まあ、そうなんだけど……」

ネーテルが呟く。

「やっつこれで俺もまっとうな吸血鬼として胸を張って生きていけるな」

ロアが笑う。そして笑いをやめると悲しそうな眼でマードウークの死体を見た。

「こいつらに比べたら俺は何倍も幸せだよ。こうして人間の世界に生きて、仲間達に会えた。」

面白いことも辛いことも、楽しいことも苦しいこともあった。でもこいつらにはその何一つと
してないんだからな」

ロアが呟いた。

「……そうね。生まれはどうであつても、今生きてるってことはそれだけでとても素晴らしい
事かもしれないわね。貴方を見てると私も少しはそう思うわ」

ネーテルが言った。自分自身に向けて。

突如、城の中で轟音が聞こえた。城内から砂煙が上がり、大地が揺れる。

「な、なに？」

リユネットが城を見る。

「わからん。マユラが心配だ。行こう」

三人は城内に入つていった。

刀と刀が交錯する。金属音と共に火花が散った。

マユラが必死の形相で刀を振っていく。

カーリアはそのすべての斬撃を平然と刀で受け流していた。まるで剣の稽古でもしているよ
うな動きだ。

マユラが上段に振りかぶる。

カーリアが、すかさず踏み込み、肩をマユラの胸にぶつけていった。

カウンター気味に入り、大きく飛ばされるマユラ。転がりながらも、すぐに立ち上がる。カーリアが刀を下ろした。

「そろそろ諦めはついたか？ そのような未熟な腕では到底私は倒せん」

カーリアが静かに言う。その額には汗一つかいていない。

一方、マユラの方はと言うと、ほんの三分にも満たない斬り合いですでに体力と使い切っていた。普段のマユラならこのような事はありえない。しかし、カーリア相手ではまったく話は違った。向き合うだけで異常に精神力を消耗する。先の先まで読まれている様なカーリアの瞳。ただ何気なく刀を構えているだけに見えるのにまるでカーリアには隙が無い。それだけカーリアとマユラでは実力に天と地ほどの差があるのだ。

「私は誰にも負けん。奴を殺すまではな」

「……」

カーリアは刀を下ろして無防備だが、マユラは刀を構えたままだ。しかし、それでもマユラは斬りかかることができなかった。斬りかかれれば逆にマユラの首が飛んでいるだろう。

「ボールスは自分の研究のためにヴァルナ人としての私の身体を利用したかも知れんが、私もボールスの錬金術士としての腕を利用した。元より普通の人間より優れているヴァルナの肉体をさらにボールスの研究によって強化した。そして私はすべての修行を一よりやり直した。それは肉体の限界を極め続けた苦行だった。長い修行の末、私は兵法の悟りを得た。もはや私に

は鬼神をも殺す自信があった。そうして私は再びボールの元に戻り、ボールの研究室で長い眠りについた。来るべき時に備えてな」

「……貴様がそこまでして倒したい者とは誰だ？」

「神だ」

「……神だと？」

「神といっても、我等ヴァルナが信仰しているような神ではない。この世界に破滅をもたらす破壊の神だ」

「破壊の神……」

「お前もヴァルナの伝承で聞いているだろう。かつて我々ヴァルナはこのアトラーズの大地で栄華を誇っていた。今の魔法技術とはまったく異なるテクノロジーを使い、闇に光を灯し、空を飛び、現代では考えられぬような巨大な都市を世界中に建設していった。しかし我等の祖先はそれだけでは飽き足らず、遂には神の領域にまで手を伸ばした」

「神の領域……？」

「生命の領域だ。ヴァルナの祖先は命を作り変え、新たに生命を生み出すことまでやってのけた。我等ヴァルナ人が普通の人より身体能力に優れているのはその名残だ。自分達の肉体まで改造し、より長命で優れた肉体を生み出したのだ。我等ヴァルナの祖先は驕っておった。

そんな時だ、神が我等ヴァルナの前に姿を現したのは。そこから世界の崩壊が始まった。ヴァルナの作り出した巨大な鉄の兵器も神の力の前ではまるで無力だった。世界中で繁栄していた

ヴァルナ人の文明はわずか数日で滅び去った。だが神は人類全てを滅ぼしはしなかった。生き残ったわずかな人類は神の恐れを避けるために全ての知識を捨て去り、原始人のように暮らし始めた。ようやく神の怒りは収まった。その人類が長い時を掛けて築き上げたのが今の文明だ。だが世界崩壊の中、一部のヴァルナ人の中にある計画を建てた者達がいた。彼等は世界の端に隠れ住み、一つの都市を建設していった。そしてその都市の地下にさらに巨大な一つの建造物を建設した。その建物の中に彼等は自分達が持つ全ての知識を保存した。世界が滅んでいく中、人類の再建のために。そして再び神が我等人類の前に現れた時、その神に対抗するために。そう、彼等こそが我等ヴァルナの直接の祖先、そしてその都市こそがこの場所、今では我等ヴァルナ人が『楽園』と呼んでいる場所だ。彼等は都市を建設し終わった後、そこにずっと隠れ住んでいた。この都市を守るために。この都市を人類再建の始まりとなる『楽園』にするためにな。だがあまりに長い時が流れ、彼等の子孫の我々は自分達の使命も忘れてしまっていたがな。だが数千年、いや数万年もしれぬ時を経て、この地下の『楽園』の本当の意味と価値に気付いた者がいた。それがボールス、そして私だ。私とボールスは一つの約束を交わした。いつか必ず再び現れるであろう神の侵攻に備えて準備を整えることを。そのためにボールスは当時世界を制していた魔王モートに近づき、彼の援助を得た。そしてボールスの研究が始まった。神を超える人類の創造だ。だが大きな挫折があった。彼のパトロロンであった魔王モートの死だ。モートは勇者アトクによって討たれた。しかし、それでもボールスは諦めなかった。研究を続け、進化した人類、マードウークを生み出した。彼の研究も完成まで後一歩だった。だがその

あと一步のところまでボールスは死んでしまった。モートも死に、ボールスも死んだ。残されたのは私一人。私は何としても神を、クロートーを殺さねばならん。人類が己の手で未来を勝ち取るためにな」

カーリアが言った。

「……世迷いごとを……そんな作り話を誰が信じる！」

マユラが怒鳴った。

「……クロートーの出現は近い。信じようと信じまいと、その時世界は滅びる」

カーリアが言った。マユラは黙り込んだ。

沈黙が辺りを包む。

その沈黙を打ち破るかのように轟音と共に城全体が大きく揺れた。

「何だ！」

マユラが叫ぶ。カーリアも驚いたように床を眺めた。

「……まさか、あれを起こしたのか。そんな事のできる人間がボールス以外に……ちっ、あのヘンギストか！」

カーリアがマユラに背を向けて走り出す。

「カーリア！何処に行くつもりだ？」

マユラが後を追う。

「お前の相手をしている暇はなくなった。あれを外に解き放つてはならん。とんでもないこと

になるぞ！」

カーリアがマユラに向かって叫ぶ。

カーリアが中央ホールから廊下に出ようとした時、突然廊下から光りが満ちた。

大爆発が起こる。

廊下の天井が崩れ落ちる。

炎と煙の中、カーリアの姿は見えなかった。

「カーリア！」

マユラが瓦礫の山に走り寄ろうとする。しかし、廊下の先から来た存在に気付いて足を止めた。

「なんだ……あれは……」

マユラが呆然と呟く。

それは廊下の天井と壁を破壊しながらこっちに向かって来る。巨人だった。

マユラが後ずさりする。

巨人が中央ホールにたどり着いた。

巨人がマユラを見下ろす。マユラが刀を構えた。

その時、別の方角の廊下からロア達³が走りこんできた。

巨人の姿を見て足を止める。

「何、こいつ？」

ロアの横のネーテルが言う。

巨人が吠えた。空気が振るえ、中央ホールの窓ガラスがすべて粉々に砕けた。
「何にせよ味方じゃないわよ！」

リユネットが怒鳴ると、両手で魔法印を描く。

「浄化の光！」

リユネットの手から眩い光りが放たれた。

光りは巨人に直撃する。

閃光が弾けた。白い光りがホールを満たす。

ロア達はあまりの眩しさに目を細める。

やがて光りが収まった。

「……全然効いてないみたいだぞ」

ロアが呟く。

巨人は変わらず其処に立っていた。ただ全く効いていないというわけではないようだ。外殻の一部が少し溶け、泡立っている。

「冗談でしょ！今のは神聖魔法の中でも最高レベルの攻撃魔法なのよ。まともにくらえば十三使徒クラス魔族だったただじゃすまないわ。それが装甲をちよつと溶かしただけ？」

リユネットが信じられないように叫んだ。

巨人がマユラの方からリユネット達の方に向きを変えた。

巨人が地を蹴った。

巨大な石柱の様な腕が唸りを上げる。

「散れ！」

ロアが言う。ロア達はそれぞれ別の方向に飛び退いた。

巨人の腕が床の石版を粉々に砕く。ここが一階でなければ床が貫けていただろう。

マユラが後ろから巨人に飛び掛った。背中を刀で斬りつける。

硬い金属音がして、刀が弾かれた。

マユラが巨人の背中から飛び退く。

巨人の外殻には傷らしい傷も付いていない。

「斬撃もきかないか……」

マユラが呟く。

巨人が腕を振るった。ロア達やマユラは何とか巨人の攻撃を避けていく。

「魔法も物理攻撃も効果無いんじゃないわね、どうしようもないわね」

ネーテルが走りながら横にいるロアに言う。

「リユネット、もっと強い魔法無いのかよ？」

ロアが巨人の攻撃を飛び避けながらリユネットに言う。

「無いことはないけど……いくら私でもそう簡単に扱えるような魔法じゃないわ。急に言われ

ても無理よ」

「じゃあ、さっきの魔法もう一回試してみたらどうだ？少しは効くだろ」

「あのね。私の魔力だって無限じゃないのよ。あんな高位魔法を連発はできないわ。少しは間をおかないと……」

「じゃあどうすんだよ？」

「どうしようもないわ」

リユネットが言う。

「頼りねえなあ」

ロアがリユネットの顔を見て呟く。

「ちよっと！ロア！前！」

リユネットが叫ぶ。

ロアが前を見る。巨人の腕が迫っていた。

巨人の腕に殴り飛ばされるロア。激しく壁に叩きつけられた。

どざりとロアの体が床に落ちる。

「……今のはきいたぜ……」

額から血を流し、よろつきながら起き上がるロア。激痛を感じる。肋骨と数本と腕の骨が折れたようだった。

巨人がロアの元に歩み寄る。

「ロア！」

ロアの近くにいたネーテルがロアに駆け寄る。

巨人の口が光った。

「え……?」

何か妙な感覚を感じ、下を見るネーテル。

そこには何も無かった。

腹も足も。

ルーテネの胸から下は消滅していた。巨人のレーザーによって。

「きゃあ!」

そのネーテルの姿を見たリユネットが悲鳴を上げる。

上半身だけになったネーテルは声も出せず、体は床に落ちる。

「ネーテル!」

ロアが叫ぶ。ふらつく足でネーテルの元に駆け寄ろうとする。

それより早く、巨人がネーテルの元に来る。六つの目がネーテルを見下ろした。

「おい、化け物」

誰かが言った。

ネーテルがかすんでいく目で声のほうを見た。

血だらけのカーリアが立っていた。右腕の肘から下が無い。爆発によって腕が飛ばされてしまったのだろう。それでも片手で刀を握っていた。

巨人がカーリアの方を向く。

カーリアが地を蹴った。

巨人の口が光る。

刀が美しい弧を描く。凄まじいスピードで。

どちらが速いか。

刹那の差だった。

カーリアの斬撃が巨人の首を切り飛ばしていた。

「ネーテル！」

ネーテルの目の前にロアの顔が見える。視界は酷くぼやけていた。

「リユネット！回復魔法を！」

「無理よ……こんな重症どうしようもないわ！」

リユネットが涙ぐみながら叫ぶ。

ネーテルが震える手を伸ばす。小さな小瓶が握られていた。

ロアがルーテネの手を握る。

「これ……胸のポケットに入れといてよかったわ……薬よ……まだ完全に吸血鬼になっていない者なら……治療できるわ……」

ルーテネが口の端から血を流し、言った。

「……私、死ぬのね」

ネーテルは弱々しく笑った。体から力が抜けていくのがわかる。酷く寒かった。

「お前は不死身なんだろう？こんな傷ぐらいで死ぬんじゃない！」

ロアがネーテルに怒鳴る。ネーテルが微笑む。無理な注文だった。再生能力の高いネーテルといえども、上半身だけの身体になって死なないはずがない。

「……大丈夫よ。私の代わりはいくらでもいるもの……私が死んでも、ルーテネは死なないわ……」

「ルーテネなんて知ったことか！ネーテルはお前一人しかいないんだぞ！」

ロアが叫ぶ。

その言葉を聞いたとき、ネーテルが妙な感覚を感じ、自分の頬に手を当てた。

熱いものが手に触れる。

「涙……これが涙……私……泣いてるの……なぜ……？」

ネーテルの手に触れたものは涙だった。次々と瞳から溢れてくる。

死ぬのは怖くないはずだ。代わりはいくらでもいるのだから。

くだらない感傷は持たないはずだった。どうせこの肉体は短い命なのだから。

「……私、死ぬのが怖いのもかもしれない……みんな忘れてしまうのが……あなた達に会えなくなるのが怖い」

ネーテルが震える声で言う。

「この身体ではわずか二年たらずしか生きていないけど……私の頭の中にはこれまでのルーテネの数百年分の記憶がある……でも、そのどんな記憶より……あなた達と過ごしたこの数日間の方が遥かに楽しかったわ……」

ネーテルが小さく笑った。最後の笑みだった。

「……ありがとう……最後にあなた達に会えてよかった……」

ネーテルが目を閉じた。その瞳はもう二度と開かれることはない。

「別れはすんだか？」

カーリアが言う。服の裾を切り裂いた布で無くなった左腕を止血のために縛る。

片腕がないのだ。痛みだつて相当なはず。しかし、顔色も変えない。驚くべき精神力だった。

ロアが、ネーテルの側から立ち上がった。カーリアの顔を見る。

「……あの巨人は何だったんだ？」

「旧時代の世界を滅ぼした神の尖兵だ。その一体を古代人が捕獲し、この城の地下に眠らせてあった。そのルーテネと呼ばれる者の一人が起動させてしまったのだろう」

カーリアが言う。

地鳴りと共に、ネグロードの城が揺れる。天井から砂埃が舞い落ちた。

「ちっ、奴め。地下の動力炉まで破壊していたか……ここももう終わりだな……」

カーリアが呟く。

「……時間がない。けりをつけよう」

カーリアが片手で刀を構えた。

ロアが前へ出ようとする。それをマユラが片手で制した。

「こいつとの決着だけは私につけさせてくれ」

マユラの言葉を聞き、下がるロアとリユネット。

マユラが刀を正眼に構える。

カーリアも残った片腕で、刀を構えた。

二人が対峙する。

マユラが切り下げのような面打ちを放つ。カーリアは平然と、一步後ろへ下がるようにしてそれをかわす。マユラは間を空けることもなく、次々と切り込んでいく。

離れて見ていたロアは、カーリアの動きを見て感嘆の唸りを上げた。カーリアはマユラの斬撃を最小限の動きで、紙一重でかわしていく。まるで動きに無駄が無い。

それにしてもロアの目には、カーリアは反撃しようと思えばいつでも切り込めるように見えるのに、マユラの斬撃をかわし続けているのはなぜだろう。

マユラは焦っていた。いくら切り込んでも、カーリアに触れる事さえできない。カーリアは受け太刀すらしていないのだ。カーリアの動きはまるで、目に見えても触れる事のできない陽炎のようだ。

カーリアが、マユラの視界から消えた。

「遅い。剣は俊速。それを為すは心技体の一致」

いつの間にかマユラの後ろに立っていたカーリアが、マユラの首に刀を突きつけて言った。マユラが慌てて、そのカーリアの刀を払いのける。

「……失望したぞ。動きがまるでなっていない。その程度の剣の腕なら、世界に幾らでもいる」カーリアが言う。

マユラはそれでも、齒を食いしぼるようにして刀を構えた。

カーリアの強さは、人間の到達しえる強さのほぼ限界に達しているのは間違いない。いや、それすらもすでに超えているだろう。もはや、カーリアは人と呼べる存在ではないのかもしれない。少なくともマユラとの実力差は天と地ほどある。しかし、

(なんとしても、カーリアに、せめて一太刀浴びせなければならぬ。そうでなくてはヴァルナの民の無念が浮かばれぬ)

マユラは心の中で唸った。

その心中を見透かすように、カーリアの冷たい瞳がマユラを刺す。

「お前の剣には邪念がこもり過ぎていて。ゆえに体に無駄な力が入り、剣は遅くなる」

カーリアは静かに続けた。

「お前には私の動きが見えていない。だが、私の動きが本当に目に見えないほど速いわけではない。お前と私の身体的な能力にそれほど大きな差は無いのだ。私の動きはフェイントや死角を利用して、お前の視覚を惑わしているに過ぎぬ」

そうとわかっていても、マユラにはどうしてもマユラの動きを捉えることはできない。

「だが、私が今使っているような様な技術など些細な事。所詮は小手先の技に過ぎぬ。本当の剣の極みとは、無心の先にある。理知的な下らぬ小細工よりも、ただ単純な一撃が勝るのだ」

カーリアが諭すように言った。

無心。無心とはなんだろう。何も考えるなど考えるほど、無心からは遠ざかる。

ヴァルナ、ラト、楽園、ネーテル……。

悲しみ、怒り、憎しみ。嫉妬、情熱、羨望……。

マユラの心の中で、それらのものがごちゃ混ぜに交わっていく。交わって、どろどろにとけていくそれは、熱を持ち、やがて白く光って消えた。

マユラが地を蹴った。

ただ剣を振り下ろす。

カーリアは後ろに下がって避けようとしたが、

(……ほう)

マユラの斬撃の軌跡を見つめながら、カーリアが心の中で呟いた。予想のつく単純な攻撃だ。だがマユラの動きは、今までのどの動きよりも速い。

マユラの刀が振り下ろされる。カーリアは、後ろへ跳んで着地した。

カーリアが頬に熱いものを感じる。マユラの切っ先が掠っていた。頬が薄っすらと斬れて、血が流れている。

「……悪くない」

一瞬驚いたような表情をしたカーリアが、ニヤリと笑った。

マユラは刀の柄を強く握った。初めてカーリアに触れたのだ。今のは、自分でも信じられないような動きができた。これならカーリアに勝てるかもしれない。

マユラが突きを繰り返した。

カーリアもさっと刀を突き出す。

マユラの突きが止まる。

自分の剣先を見たマユラには何が起こったか、一瞬理解できなかった。信じることもできなかった。

カーリアの刀の切っ先が、マユラの突きの切っ先を受け止めていた。マユラの突きの刀身、切っ先の一番頂点、その針ほどの先を同じ切っ先の頂点でカーリアは受け止めたのだ。

数ミクロンの狂いも無い、まさに神技と呼ぶにふさわしいカーリアの刀捌きだった。

マユラが必死に突きの力を込める。しかし、まったく前に動かなかった。

マユラが刀を横に振る。ただ切っ先同士がはずれ、マユラはとっさにカーリアから間合いをとる。

平然とカーリアが刀を下ろした。

刀を持ったマユラの手が震えた。額から、嫌な汗が流れる。

(……こいつは人間じゃない……化け物だ……)

背筋が震える。理解不能な現象を見せられた時、人は恐怖を覚える。今のマユラがまさにそれだった。相手の剣先を剣先で受け止めるなど、絶対に不可能だ。それをカーリアは平然とやっつてのけた。

地面が大きく揺れた。地下からの地鳴りはいつそう酷くなる。

揺れるネグロード城内で、カーリアは満足げに笑みを浮かべていた。

「……私に一太刀入れたのは、マユラ、お前が始めてだ。お前は強い。十三使徒にも魔王モトにも私は興味を惹かれなかったが、お前とだけは命のやり取りをしてみたい」

カーリアが刀を手に、笑った。

カーリアが一步前に出る。カーリアの、全てを撃ち抜く様なその異常な剣気に打たれ、マユラは後ろへ下がりがりたくなるのをなんとか踏み堪える。

逃げるわけにはいかない。私もヴァルナの戦士の一人。勝てないとわかっていても、ここで絶対に背は向けられぬ。いや、もはやヴァルナのこと、カーリアの事もどうでもいい。私はただ一人の兵法家として、この最強の相手と立ち会ってみたいのだ。カーリアが一步でた。じり、じり、と二人が間合いを詰めていく。

互いの剣先が触れ合うほどの距離になった。

片腕とはいえ、カーリアの構えにまったく隙など無い。

カーリアの氷の様な視線がマユラを刺す。

マユラの肌があわ立つ。

対峙する相手を押し潰してしまいそうなカーリアの闘気だった。

どう転んだところで、マユラの技が通じるような相手ではないとわかっていた。技が通じぬなら、捨て身の一撃に掛けるしかない。

マユラは刀を正眼から上段に上げた。

そして、大上段に構えたまま、眼を閉じた。

「……ほう。背水の陣のつもりか」

暗闇の中、カーリアが呟く声が聞こえる。

マユラはただ、カーリアの気配だけを感じていた。感じ取れる。二人の間合いは、もうぎりぎりのところまで来ていた。

喝ッ

短い気合と共にマユラが一步を踏み出し、刀を振り下ろした。

一瞬、遅れてカーリアも片手で刀を振り下ろす。

マユラの刀が、紙一重でカーリアの目の前をかすめていく。カーリアの完全な見切りだった。カーリアの刀がマユラの刀を打ち下ろした。

打ち落とした。

カーリアが瞬時に刀を上げる。

刀を下段に打ち落とされたマユラは完全に無防備だった。

「もらったぞ！」

カーリアが突きを繰り出す。

しかし、マユラはまだ目を瞑ったまま、身をかわそうともせず刀を八双に上げた。カーリアの刀がマユラの胸を貫く。

身体に激痛が走る。

マユラが眼を開いた。

そこに、カーリアの顔があった。カーリアと瞳が合う。

マユラはただ、刀を振り下ろした。何の考えもない。ただ、そこに相手がいるから、振り下ろしただけだ。

マユラの刀がカーリアを袈裟切りに斬り下ろしていた。

「……見事」

肩を押さえ、膝を付いたカーリアが、床に倒れているマユラに向って呟いた。

肩口から血が溢れ出す。それでもカーリアは表情を変えなかった。

ロアとリユネットが倒れたマユラに駆け寄る。

「……急所は外れておる。すぐに手当てをすれば助かるだろう」

カーリアがゆっくり立ち上がっていった。

リユネットがマユラを見る。確かにまだ息はあるようだった。

ネグロード城が大きく揺れた。

地下での爆発音が大きくなる。天井からは石材が崩れ落ちてきた。

床から炎が柱のように吹き上がる。

当たりは一瞬で火の海に包まれた。

カーリアは炎が燃え広がっていく中、ただじっとマユラを見つめていたが、やがてその視線がすーっとそれた。

カーリアがロア達に背を向ける。

「……マユラが起きたら伝えてくれ。最後の一撃は見事。その無心の一撃に免じて命は預けておく。だがその様な未熟な腕ではヴァルナ最後の戦士を名乗るのは許されぬ。ヴァルナの戦士は強くなければならん。何人よりも。立ち塞がる者は、それが神であろうと仏であろうと殺す。それが兵法者の悟りの極意。その言葉をしかと胸に刻んでおけとな」

カーリアはそう言うのと刀を手に、城の奥に向って歩き出した。

「どこへ？」

ロアが聞く。

「……ポールスは死んだ。この『楽園』も終わりだ。そして私も。片腕を失ったこんな身体では、もう満足に戦うこともできん。私はこの『楽園』と最後を共にする。お前達は早く脱出するがいい。ここもすぐに崩れる」

カーリアが背を向けたまま言った。

カーリアの姿が炎に包まれる。

城の奥に向けてゆっくり歩き出した。

「おい！」

ロアが声を掛ける。

しかし、カーリアは振り向きもしなければ歩調も変えなかった。

炎が生き物のように荒れ狂い、カーリアの姿を覆い隠した。

ロアはじつとそのカーリアの姿を見ていたが、やがて足元のネーテルの死体と意識の無いマユラを抱き上げた。

「……行こう」

「そうね……」

リユネットも頷く。

二人は炎の中を走り出した。

カーリアは燃え盛る炎の中、ボールスの研究室までたどり着いた。力ない足取りで部屋の中へ進んでいくと、まだ燃え残ってあった一脚の椅子に倒れるように腰掛けた。もう身体は満足に動かなかった。失った片腕からは血が滴り、全身には重度の火傷を負っていた。カーリアの強固な意志が、激痛を何とか押さえ込んでいる。

カーリアは血でかすむ瞳で、部屋の中を見回した。研究室もすでに火の海で、ボールスの集めた何百冊にも及ぶ文献や研究器具が猛り狂うように燃え盛っていた。

なぜ最後に自分がここへ来たか、カーリア自身にもわからない。もうこの場所には誰もいないのだ。そして、二度と誰も訪れないだろう。ヴァルナが数千年にわたって守ってきた楽園も、ポールスが集めた莫大な知識も、カーリア自身が鍛え上げてきた肉体も技も、全てここで灰に変わる。

カーリアは自嘲気味に小さく笑った。

思えば虚しいものだ。気の遠くなるような時間の結晶が、ただの一晩で灰に変わるのだから。そう思えば、黄金の価値ある物も、ただの灰も、長い目で見れば同じものなのかもしれない。

ふと、カーリアの視界で何かがきらりと光った。それは片腕に握られた彼女の愛刀だった。刀は傷一つなく、炎の揺らめきを受けて鈍い光を発している。

(いや、この刀だけはおそらく燃え尽きずに残るだろう)

カーリアは自分の視線まで刀を上げた。

この刀だけが、自分の剣の腕だけがカーリアには唯一絶対信じられるものだった。

刀は美しい。

無駄なものなど一切ない。ただ純粹に人を殺すために作られた道具だ。

無機質な殺しの道具である。

なのに、なぜこんなに美しいのだろう。

思うにそれは単純だからだ。単純な目的ほど美しく、何よりも力強い。

私の目的……それは……。

カーリアがゆっくり刀から目を上げた。

そこにはボールスが立っていた。若き日の姿だった。

「……ふん、神も仏も信じぬ私が最後に幻など見るとはな」

カーリアが苦笑した。

「ボールス、貴様も私も六百年前に結んだ誓いは果たせなかったな。お互いまだまだ未熟よな」

カーリアが笑う。ボールスも笑って消えた。

そして、今度はラトの姿が現れる。カーリアに奉公していた頃の幼い姿だ。

「ラト、すまん……ヴァルナを犠牲にしてまで私は己の信じた道を行きたかったのだ……お前にも迷惑を掛けた」

ラトも満足そうに微笑んで消えた。

炎が強くなる。

炎の中から一人の老人が姿を現した。炎に包まれているのにまるで熱さを感じていないように冷たい顔をしている。

「……誰だ？」

カーリアが言う。

「人間達がクロトーと呼ぶ者」

老人が言った。

「クロトー？貴様がクロトーか……ははは、あーはっはっは」

カーリアが大声で笑った。

カーリアが笑いながら、そのクロトーと名乗る老人を見る。何処にでもいそうな品のいい老人という感じの姿。これが神なのか。しかし、その全身からは明らかにこの世のものではない異質の力を感じる。

「ははは、ようやく来たか。しかし、来るのが少し遅かったな。もう少し早く私の前に現れていたら殺してやったものを。残念だ。この傷では、もうろくに刀も振れん」

カーリアが笑いながら言う。

クロトーがそんなカーリアをじっと見つめた。

「……人の身でよくぞそこまで技を練り上げた。しかし、人は人。神にはなれぬ。お前がいくら腕を磨いたところで、私には勝てん」

クロトーが静かに呟く。

その言葉を聞くと、カーリアは笑いを止めた。真顔で椅子からゆっくりと立ち上がる。

カーリアとクロトーが、静かに対峙した。気の遠くなる様な苦行の果てに剣を極め、人としての限界を超えた者と、人の及ばぬ力、神の力を持つ者。部屋中で燃え狂う炎も、一瞬で凍り付いてしまいそうな張り詰めた空気。

カーリアが突然、刀を振るった。

刀は万分の一秒にも満たない刹那の瞬間でクロトーの顔に襲い掛かる。

刀が空気を薙いだ様に手ごたえなくクロートーの身体を通り過ぎる。まるで霞だった。クロートーは身動き一つしなかった。平然とその場に立っている。

「……無駄だ。人の力で私は斬れん」

「そうかな？」

カーリアが刀を下ろし、にやりと笑う。

クロートーの頬から薄っすら血が滴る。

「……驚いた。運命の流れの細部では時に私でも予想もつかん事が起こる。だが所詮、細部だ。大きな流れに影響するほどのものではない。お前はここで死ぬ。それはもう決まっている運命だ」

クロートーが言う。

「だろうな。だが覚えておけ。人は己を鍛えることで鬼にも仏にもなれる。人の可能性に限界はない。人は己の力で運命を切り開く。人の運命を押さえつけることは何人もできん。例えばそれが神でもだ……」

カーリアはそう言って笑うと、壁に寄りかかって、そのまま地面に倒れこんだ。すでに体力は限界だった。

床に倒れたカーリアの身体に火がゆっくりと燃え移る。

クロートーは炎に焼かれていくカーリアをじっと見つめていた。

「傲慢……人は何万年経っても変わらぬと見える。やはり滅ぶべき種か……」

「……………」

すでに全身火の塊となったカーリアはもう何も答えなかった。ただ、その燃えていく瞳の奥にはマユラの姿が映っていた。自分の剣を次ぐ者。人は死ぬ。だがやはり死なないのだ。技と意志は、人から人に受け継がれていく。その営みこそが、生命なのだ。

消え行く意識の中に、もはや何の後悔も心残りもなかった。

透き通るように、カーリアの意識と命は消えた。

天井が崩れた。

ロアとリユネットが城の外に走り出た。

息をつけてロアが後ろを振り返る。

ネグロード城は炎に包まれ、音を立てて崩れていく。

翌朝、崩れて瓦礫の山とかしたネグロード城の近くにロアとリユネット、そして胸に包帯を巻いたマユラが立っていた。

眼の前には一つの丸い岩があった。荒い文字でネーテルと刻まれている。ロア達を作ったネーテルの墓だった。

「ありがとう、おかげで私は治ったわ。ゆっくり眠ってね。あなたにイーリアスの抱擁があら

んことを」

リユネットが岩の前に跪いて言った。

ロアが空を見上げた。雲の高い、気持ちのいい朝だった。

「マユラ、これからどうするんだ？」

ロアが言った。

「私は山に籠ろうと思う。もう帰る場所もないしな。兵法の鍛錬を一から始めるつもりだ。

カーリアのとった行動が正しかったのかどうかは私にはわからん。ただ私は強くならねばならん。ラト様よりも、カーリアよりも。ヴァルナ最後の戦士としてな。クロートーとやら本当に現れた時、無様な腕をさらしてカーリアに笑われたくはない」

マユラが広大なネグロード城の焼け跡を見て言った。この何処かにカーリアも眠っているのだろう。カーリアが最後に何を思ったのか、マユラにはわからなかった。だが、カーリアのことだ、その最後は美しいほどに潔いものだったのだろうと、マユラは思った。

「そっか。がんばれよ」

「ああ。お前達には世話になった。もう会うこともないだろうが、二人とも達者でな」

マユラがロア達に背を向けた歩き出した。

振り返ることもなく歩いて行って、やがて見えなくなった。武人らしい、あっさりした別れだった。

「さーて、俺達も帰るか。じゃあなネーテル。また会いに来るよ」

ロアが墓石に手を振った。

そのロア達の目の前に、いつの間にもいたのか一人の少女が現れる。

ルーテネだった。

「おまえ……」

「あら、あなた達の知り合いの私は死んじゃったの？馬鹿な私。人間なんかと馴れ合うからそんなことになるのよ。まあ所詮、複成の途中で人格に劣化の生じた欠陥品だから仕方ないか。死んでくれてよかったわ。コピーでも作られて、バグのある私が増えても困るもの」

ルーテネが笑って言った。自分のコピーが死んでも何の感傷もないようだった。

「てめえ……それ以上つまらねえ事言ったら殺すぞ」

ロアが拳を握り締めて言う。ルーテネを睨んだ。

「あはは、恐い顔。いつもならそんな顔する奴は殺しちゃうんだけど、今日は気分がいいから許してあげる」

そう言うのとルーテネは持っていた鞆から二本の試験管と数冊のファイルを取り出した。

「アトロとモートの血、ボールの論文も手に入れた。そしてネグロードの地下に眠っていた、古代人の残した膨大な知識の一部もここにあるわ」

ルーテネは笑いながら自分の頭を指差した。

「すべての準備はそろった。これだけあれば私はボールの研究を完成させる事ができる。古代人も、モートもボールスも、かつて誰もが成し得なかった究極の人類への進化。それは神へ

の道。永遠の肉体と精神、そして運命の流れをも捻じ曲げる力を持つ完全な生命体。私は神になる。神と名乗る者、クロートーを殺してね」

ルーテネが気が狂ったように笑う。

「研究は近いうちに完成する。その時また会いましょう。その時は神と人類の終わりで、私だけの世界の始まりでしょうけど」

「ようゼト」

エフラムが一人の騎士に声を掛ける。声を掛けられた騎士は、エフラムの方へと振り返る。

「エフラムか。これから出陣だそうだな……」

「ああ、そうだ。サンダルクに攻め込む」

「サンダルクか……他国が黙っていないな」

「なんだ？またくだらない考え事か？」

「エフラム、お前はあのアルテオムを信用できるのか？あんな何処の馬の骨ともしれん奴の言う事を信じると言うのか？」

そんなゼトの問いに、鼻で笑うエフラム。

「ゼトよ、俺はあんな男の言う事を聞いてるわけじゃない。戦う事だ。そのことを前提に、俺は行動しているのだ」

「貴様は戦うためだけに、あんな男の下で働くと言うのか」

「ゼトよ。俺たちは軍人でありながら、この二年間何をしていた？守備、見回り……魔族が攻めてきているというのに、他国に手を貸す事すらせず、戦鬪から遠ざかっていた……そんな時だ。あの男が来たのは……ようやく戦える時が来たんだ」

「しかし……」

「よく考えるんだゼト。お前も騎士団の隊長ながら、エーデルリッターがいたせいでその名を眠らせたままになっていただろう？なあ、猛将ゼトよ」

「エフラム……！」

「そろそろ時間だからな。準備があるから俺は行く。よく考えておくんだな」
エフラムはそういい残し、ゼトの前を去っていった。

「コーデリア……私はどうすればいいのだろうか……」

―サンダルーク城

スイートピーの元に一報が届けられた。

「魔族の軍勢がこちらに向かっているそうです」
スイートピーのその言葉に、一同は睡を飲む。

「極少数のようですが……さてどうしたものか」

そう言い、考え込むスイートピー。

「ミルチアに動きがあるとの一報もあります。ここで軍を動かすと後々に影響を及ぼすかと……他国に援軍を要請してはいかがでしょうか？」

リジヨが言う。

「……他国の援軍が間に合う可能性は低いでしょう。どちらにせよ、応戦しなければなりません。シーグムント將軍に軍の出撃準備をさせましょう」

「お待ちください」

スイートピーの言葉に、制止をかけるコーデリア。

「先ほど少数とおっしゃりましたね？数の方はどれくらいです？」

「報告では百に満たないほどですが……相手は魔族です。一匹でもこちらの数十、数百に匹敵しますから」

「では、我々エーデルリッターだけで出撃しましょう」

「え……しかし」

「その数なら我々だけで問題ありません。少数というのも気がかりですし、ミルチアの動きも気になります。我々にお任せください」

コーデリアの言葉に、しばらく考え込むスイートピー。

「……わかりました。ただし」

言いかけ、スイートピーは地図の一点を指差す。

「この拠点よりこちら側への侵入を許すわけにはいきません。それを承知の上で……と、いうことになりますけど、いいですね？」

「ここからですか……わかりました」

「それでは、この件はエーデルリッターにお任せします。よろしく願います」
「お任せください。それでは出撃準備が整い次第、出撃します」

コーデリアは一礼し、その場から離れた。

「と、言うわけで、出撃許可が出た。ここでこの魔族どもを抑えられなければ、サンダルクが危機に晒されると思え」

コーデリアが、先ほどの状況を兵たちに説明をする。

「奴らの進撃ルートは恐らくこの線上だろう。敵を一匹も逃さぬため、左舷にヴァネッサ、右舷にヨシユア、拠点真ん中ギリギリにクーガー、奴らの本隊には私とロットのブラックナイツで特攻する」

「なるほど……我々だけで魔族を撃退ですか」

ロットが少し不安げに言う。

「ええ。ここでサンダルクに被害を出すわけにもいかない。幸いながら、敵は少数、我々だけで魔族を撃退する」

コーデリアの話を不安そうに聞いていたメルフィナ。

（方角、敵の数から考えると、その部隊は恐らく……だとしたら、エーデルリッターが何騎か
かろうと、勝ち目は無い）

「コーデリアさん、私も行きます」

「メルフィナ殿？何故また……今回は危険です。エレイン様と共に、ここへお残りください」
「大丈夫です。皆さんに迷惑はおかけしません。お願いします」

コーデリアは、困った顔でしばし考える。

「コーデリア、メルフィナなら大丈夫だ」

「モリスン……貴方が言うなら……メルフィナ殿、戦場ではあなたをお守りする余裕がないか
もしれない。それでもいいですか？」

「はい、私のことなら大丈夫です」

「はあ……仕方ありませんね。わかりました」

「ありがとうございます」

コーデリアに言いながらにっこり微笑むメルフィナ。

「しかし、いいのだな？メルフィナよ」

メルフィナに耳打ちするモリスン。

「ええ、あの子は……パルミラはもう来ると思います。ただ、私が戻らなかった時は、あの三
人によるしく伝えて置いてください」

「お前が負ければ、ここもただでは済まんぞ……」

「大丈夫です。刺し違ってでも、止めて見せます」

メルフィナは、表情一つ変えず、静かにそう言い放った。

時を間もなくして、慌しくなるサンダルク城内部。エーデルリッターの面々は、次々と馬へ乗り、出撃していく。

「騎乗戦か……何年ぶりか」

ロットは誰に言うでもなく呟き、手綱を握り締め、他の兵と共に出撃していく。コーデリアもまた、出撃せんとしていた。そこへ、メルフィナが声を掛ける。

「コーデリアさん、ロットさんをいきなり最前線へ送るのは少々危険ではないでしょうか？
仮にもエーデルリッターとしては初陣になるでしょうし……」

「メルフィナ殿、戦というのは攻めるより守る方が難しいのですよ。特に今回のような城内戦ではなく、魔族を一匹たりともサンダルク本内へ踏み入れないような戦はね……状況によっては守りやすい場合もあるが、見知らぬ地、底知れぬ戦力が相手だ。まあ、どちらも安全とは言えないが……。とにかく、今回は私も一緒だ。ロット殿には場慣れしてもらおう」

「そうですか。ごめんなさい、勝手な事言ってしまった……」

「いえ、どちらも危険なことに変わりはない。誰もがそう思うはずですから。さあ、私たちも

行きましよう」

そう言つて、コーデリアはティティスを駆る。その後が続いて、メルフィナも馬で走り出した。

街の外周を駆けるエーデルリッター達。その中の若い騎士に近づく二人の騎士。

「ようフランツ、どうした？浮かない顔して」

「フォルデ兄さん……どうして僕はレキ隊長のお供を外されたのかなつて……。それに、レキ隊長がブラックナイツを離れるなら、隊長はカイルさんでしょう？なんであんな男に……」

「私はそうは思わんがな」

言われたカイルは、静かに言う。続いて、フォルデが口を開く。

「フランツ、外されたのは俺達の方だけ？ロット君は今だけの臨時隊長だ。多分、お前はまだまだ若すぎるって判断されたんだろうな。ブラックナイツを外された俺達は、隊長になる見込みさえないってことだな。悲しいねえ」

笑いながら言うフォルデ。

「そう言う事だ。まあ、私は隊長になどなる気はないがな」

「そりやそうだ。お前声小さすぎて、何言ってるかわかんねえもん」

「貴様は不真面目すぎだ」

「ちよつと、喧嘩は後にしなよ。今は大事な時なんだから」

フォルデとカイルのけなし合いに、割って入るフランツ。

「おおっと、そうだったな。とにかく、お前は慣れないロット君のサポート。いいな」

「うん、わかってる」

「よし、フォルデ。我々は先行するぞ」

カイルが叫ぶ。その言葉にフォルデは頷き、カイルの後を追う。やがて、エーデルリッターの前に、巨大壁と一つの砦が姿を現した。

「全騎いるな？」

コーデリアの問いに、頷くエーデルリッターの各隊長達。

「敵はかなり迫ってきている。手筈通りに行くぞ！ヨシユアは右舷で部隊を展開。ヴァネッサは左舷だ。クーガーはこの砦ギリギリのところまで部隊を展開。幸いにも、守備兵が援護射撃をしてくれるようだ。私とロットの部隊で、正面から当たる。奴らは左右に部隊を展開するだろう。いいな、一匹も中に入れるな！」

コーデリアの言葉に、士気高まる兵士達。

「よし、出撃だ！ブラックナイツは私に続け！カイル、フォルデ、遅れるな！」

コーデリアが叫ぶと、エーデルリッターは一斉に動き出した。ホワイトナイツは右へ、ルビーナイツは右へと歩を進める。エメラルドナイツはその場に留まり、クーガーの指示で部隊を展開し、陣形を組む。

コーデリア達とブラックナイツは草原を駆ける。やがて、彼女達の前に、魔族の集団と思

われる部隊が遠方に現われる。

「いたぞ！全騎戦闘準備！」

コーデリアの言葉に、武器を抜く兵士達。魔族達の姿がどんどん近づいてくる。

（空中部隊が八……いや、九匹か。足の速い奴らもいるとして、ここで止めるべき数は約三分の二！）

ロットはすぐさまそう判断し、ブラックナイトに指示を与える。

「空中部隊は捨て置き！とにかく、数をここで押し留める！」

ロットの言葉に、ブラックナイトは左右に展開。

「ミルチアのエーデルリッターどもか。構うな！目標はサンダルークにいるエレインだ。突き進むのだ！」

エーデルリッターを確認したラウドが叫ぶ。そして、魔族とブラックナイトが激突する。空を飛ぶ魔物たちが、ロット達の頭上を越える。何人かの兵が、それに気を取られる。

「構うな！地上部隊に専念しろ！」

ロットが叫ぶ。自らも剣を抜き、魔物に斬りかかる。

（老人？人の姿をした魔族か！）

コーデリアがラウドを見て、そう察する。

（恐らく、奴が指揮官。ならば……！）

コーデリアはティティスを走らせる。

「カイル、フォルデ、続け！」

コーデリアの叫びに、二人は後を走り出す。その三人に、三体の魔物が襲い掛かかる。ティティスは大地を蹴り、その魔物たちの頭上を飛び越えていく。

「カイル、フォルデ、その三体を止めろ！」

止まることなく、コーデリアはそう叫んだ。

「無茶言うなよ……」

「うるさい。やるぞ！」

言いながら、二人は三体と交戦に入る。

「覚悟！」

コーデリアはスピードを落とさないまま、ラウドに斬りかかった。だが、ラウドは左手の剣でコーデリアの剣を弾き、右手の剣でコーデリアに斬り返す。

「うっ」

ティティスが前足を上げ、思いつきり仰け反る。寸でのところでラウドの攻撃をかわす。

「ほう……その馬は……だが、乗っているのが人間ではな！」

叫び、斬りかかるラウド。ティティスは、懸命にラウドの攻撃をかわす。その間、コーデリアも攻撃を繰り返すが、いずれもラウドに捌かれる。

「こいつ……！まさか、二刀のラウド……十三使徒か！」

顔が青ざめるコーデリア。相手が十三使徒であれば、何人でかかろうが止める事は不可能に

近い。手綱を引き、距離を取るコーデリア。

(どうする……どうしたらいいんだ!)

ラウドは動かぬまま、コーデリアをじっと睨みつける。

「コーデリアとかいう小娘か。なるほど……貴様を殺せば、エーデルリッターも終わりだろう。邪魔はさせぬぞ!」

ラウドが叫び、コーデリアへと向かう。

(やられる……!)

覚悟し、ぎゅっと目を閉じるコーデリア。だが、小さい衝撃音が聞こえただけで、ラウドからの攻撃は一切なかった。ゆっくりと目を開けるコーデリア。彼女の目の前には、メルフィナの後姿があった。更に先に、倒れ込むラウドの姿。

「メル……フィナ殿?」

何が起きたかわからないコーデリアは、その言葉だけをなんとか口にした。

「コーデリアさん、ここは私に任せてください。コーデリアさんは他の魔物を……」

メルフィナがそう言うと、ラウドがゆっくりと立ち上がる。大したダメージは受けていないようだった。

「また貴様か……ドラゴンよ。本当に命が惜しくないようだな……」

ラウドの言葉に、目を丸くするコーデリア。

(ドラゴン?メルフィナ殿がドラゴンだって?)

驚きの表情のまま、その場に立ち尽くすコーデリア。

「ラウド。何故今頃エレイン様を……まさか、仇討ちなどと言うのではないでしょうね」

「そのまさかだ。我が輩は、ボールス殿の仇を討つためにきた」

「古臭い考えですね」

表情を一切変えないまま、メルフィナは淡々と言う。

「コーデリアさん、ロットさんに、ブラックナイツを後退させるように伝えてください。この辺りは危険です」

ラウドから一切目を離さないまま、コーデリアにそう伝えるメルフィナ。

「……わかりました」

そう言い残し、ロットの方へと駆けて行くコーデリア。

「貴様、まさか我が輩に勝てるとも思っておるのか？」

「私は思ってません。でも、あの子はそう思ってるでしょうね」

「あの子だと？」

ラウドの問いに答えないうまま、メルフィナは静かに目を閉じる。

「パールミラ……さあ、起きなさい。貴方が望むなら」

黙ったまま、目を閉じているメルフィナ。

「貴様、なんのつもりだ！」

「黙れじじい」

声、容姿はメルフィナそのものであるが、その周りに漂う雰囲気、先ほどとは全く違っていた。そして、メルフィナはゆっくりと目を開ける。だが、その瞳は真っ赤な色へと変わっていた。

「久しぶりだな。ラウド……」

「貴様は……やはり、パルミラ……か。どう言う事だ？」

「説明するのも邪魔くさい」

そんなラウドとパルミラのやり取りの間に、魔物が一匹、パルミラに槍を突き立て襲い掛かる。無言のまま、その魔物を殴り飛ばすパルミラ。一瞬のうちに、その魔物の首から上が吹き飛ぶ。

「いい槍持ってるじゃない。借りるわよ」

首のない魔物から槍を奪い取り、その魔物を蹴り上げる。すると、その魔物は一瞬にしてチリと化した。

「フン……生きていたところで、貴様に勝ち目はないぞ。我が輩の剣の錆びにしてくれるわ」
「黙れじじい。六百年前のようにはいかないわよ」

そう言い合い、ラウドは剣を、パルミラは槍を構える。

「ロット殿、無事か？」

コーデリアがロットに駆け寄りながら言う。

「コーデリアさん！私は大丈夫です。しかし、魔族の三分の二を後ろに逸らしてしまいました……」

「上出来です。ただ、ここは危険です。少し後退しましょう」

「危険？何故ですか？」

ロットが不思議そうに聞く。魔族と交戦中ならば、どこが危険などという言葉は浮かんでこない。むしろ、後退する方が危険ではないのか？後退と言うのは作戦上もとても危険な行為である。撤退とは違い、作戦上後ろに下がるわけである。この時、多かれ少なかれ敵に背を向けることになるのだ。撤退は、どれだけ犠牲者が出ようと、『逃げる』ことに全力を尽くす。全軍が全力で『逃げる』からだ。だが、後退の場合は違う。敵に背を向けつつも、犠牲者を出さないように後ろに下がらなければならない。犠牲者が多く出て、兵力が低下してしまっただけは『失敗』『失策』という言葉へと結びつく事になる。

「危険を冒してまで後退する理由とはなんですか？」

「十三使徒が中にいた。二刀のラウドが……」

「なんだって!？」

コーデリアの言葉を聞き、ロットが声を揚げる。

「しかし、よくご無事で……」

「信じ難いことですが……ラウドは今、メルフィナ殿が一人で食い止めています」

「な……メルフィナ殿が一人で!？」

「ラウドが言っていた事が本当だとすると、彼女は……メルフィナ殿はドラゴンだと言う事になります……」

コーデリアの言葉に、驚きのあまり声も出せないでいるロット。

「とにかく、この辺りは危険だそうです。後退します。ブラックナイトに命令を!」

パルミラとラウドは、その場から一步も動かないでいた。互いが互いの出方を伺っているように、お互いの目をじっと睨みつけ、お互いが隙を見せないように構えたまま動かないでいる。

「しかし……」

不意にラウドが口を開く。

「よく今まで、カオスドラゴンの闘気と、感情を抑えられていたものだな。一体、どうやって抑えておったのだ?」

「相変わらずおしゃべりの好きなじじいだな」

「気になりだすと、夜も眠れんのかな……」

「だったら今すぐ眠らしてやる！」

叫び、パルミラが地を蹴る。槍を右手に持ち、リーチを生かしてラウドへと斬りかかる。ラウドは左手の剣でその攻撃を受け止め、右手の剣でパルミラを突く。避けられる体勢ではなかった。だが、パルミラは左手でその剣を弾く。弾かれたラウドの剣は、パルミラの左肩を少しかする程度に終わった。パルミラはラウドに受けられた槍を軸にし、地面を蹴り上がり、反復した体勢からラウドの顔面を、思いつきり蹴り上げる。蹴られたラウドは、そのまま後ろへと吹っ飛んだ。しかし、パルミラに追撃をさせまいと、瞬時に飛び起きるラウド。

「……我が輩の剣を素手で弾くとはな。やはり、人間相手のようにはいかぬようだ」

そう言って、再び剣を構えなおすラウド。パルミラも、瞬時に槍を拾い上げ、静かに構える。「それにしても、動きがよくなったな。どこで何をした？」

「何もしちやいないよ。ただ、この人間の姿と言うのは、小回りがきくのでね」

「フム……ならば、さっさとケリを付けた方がよさそうだな」

そう言い、ぐっと力を込めるラウド。

「やらせるかっ！」

再び地を蹴るパルミラ。ラウドが目を見開き、両方の剣で空を斬る。剣から真空破が発生し、パルミラを襲う。以前、パルミラの翼を斬り落とした技だった。

「くっ！」

パルミラは、空中で無理やり体をひねり、それを避けようとした。直撃は避けたものの、パルミラの体の数箇所を切り裂く真空破。勢いを失ったパルミラの体は、そのまま地面へと墮ちる。

「止めっ！」

ラウドは間を置かず、パルミラとの距離を一気に詰める。パルミラはよろりと立ち上がり、右の拳に力を込める。ラウドは間合いを詰め、両方の剣を突き立てた。二本の剣は十字を描き、パルミラの胸を貫いた。吐血するパルミラ。

「はああああっ！」

パルミラは叫び、右の拳をラウドの腹へと殴りかかる。鈍い音とともに、パルミラの右の拳はラウドの腹の中へと侵入する。

「ぐっ……やりおるな……だが、これでは致命傷にはならんぞ……」

「それは……どうかな？」

パルミラがにやりと笑う。そして、もう一度右の拳に力を込める。すると、ラウドの腹の中へえぐり込んだままの拳の中に、青白い閃光が生まれる。

「き、貴様！まさか……やめろ、貴様も死ぬぞ！」

パルミラが何をしようとしているかを察し、荒だつて叫ぶラウド。

「構うか！死にな……ラウド！」

パルミラの拳の中の閃光が大きくなる。

「おおおおお！」

ラウドが叫ぶ。間を置かずして、周囲を巻き込むとてつもない大きな爆発が起こった。

後方にて交戦中だったコーデリアたちにも、その爆発は目に見えて大きいものだった。

「あれは……メルフィナ殿の所か……！」

爆発は、次第に薄くなり、やがて消えていった。爆発による煙だけが、その周囲に漂う。

「メルフィナ殿は無事でしょうか……？」

ロットが心配そうに言う。自身は、魔物たちをあらかじめ片付けており、残りは後方のエーデルリッターに任せる形となっていた。

「わかりません。なんせ、相手は十三使徒の一人……もしかしたら、今の爆発でもう……」

「しかし、どうします？我々だけで、十三使徒に勝てるでしょうか……私には、その自信がありません」

「ロット殿、もし勝てないとしても、我々はやらねばならない。それが、サンダルクとの約束ですからね」

「コーデリアさん、あなたはミルチアを救わなければならないんじゃないですか？ここで朽ち果てるわけにはいかないでしょう……やはり、サンダルクに撤退して、事情を話すべきではないでしょうか」

「ロット殿……確かに、私はミルチアを元の姿に戻したい。しかし、それとこれとは話は別です。騎士道精神と言うのかしら……？我々にも誇りはあります。勝機がないわけではない敵を前に、撤退などという行為は、兵の信頼、士気に大きく関わってきます」

「コーディリアさん、少し落ち着いて……冷静になってください。勝てるかどうかわからない敵に挑むなんて、無能な指揮官のすることです。これは、少人数の戦いではありません。エーデルリッター全員の命もかかってるんです。それに、我々が敗れば、今度はサンダルクです。ここは、サンダルクに一度退きましよう」

ロットの言葉に考え込むコーディリア。どうすることが一番正しいのか。ドラゴンとはいえ、司祭であるメルフィナを一人残していくのか。それとも、全軍をあげてラウドに仕掛けるのか……色々な考えが、コーディリアの脳裏に浮かぶ。しかし、ふとアルテオムの顔が、コーディリアの脳裏をかする。

（私は、あの男を殺すまでは死ねない……！）

「全軍、サンダルクに撤退する！」

「コーディリアさん！」

「すまない、ロット殿。確かに、ここで死んでは、さきの戦いで命を落とした者たちに申し訳がたたくない。これより撤退する」

「了解！ブラックナイツ、全力で撤退だ！」

ロットの言葉に、ブラックナイツは全力疾走で撤退を始めた。

周囲の煙がやや収まってきた時、パルミラはふと目を覚ました。

(……やったか?)

ゆっくりと起き上がるパルミラ。辺りを見回すが、ラウドの姿はない。ゆっくりと、胸に突き刺さった二本の剣を抜く。痛みで、顔がゆがむ。

(幸い心臓は逸れていたか……だが、結構重症だな……)

自分の胸に手を当て、回復魔法を唱えるパルミラ。

——パルミラ、ラウドの気は完全に消滅しています。やりましたね——

内側から声を掛けるメルフィナ。

(そう……でもごめん、結構ダメージが大きいみたい)

——そんな事気にもなりません。よくやりました、パルミラ……——

(私は勝ったんだ……これで、思い残す事は何もないね……)

——思い残す……?何を言ってるんですかパルミラ——

メルフィナが問うが、パルミラは黙ったままである。しばらくの時間が流れる。

(メルフィナ……私はもう、消えなければならぬ)

やがて、パルミラが決心したかのように、そう心の中で呟いた。

遙か昔。

カオスドラゴンの長、ミリアルドと、妻クラリーナの間一人の子が誕生した。

「よくやったぞクラリーナ！よし、この子の名前はメルフィナと名づける！」

「メルフィナ……よい名前です……」

「ああ、メルフィナだ。女の子だからと言って、誰にも文句は言わさん！」

こうして、カオスドラゴン次期長、メルフィナが誕生したのである。

メルフィナはすすくと成長していった。元気に、たくましく、親の強さを継ぐ才気溢れるドラゴンへと成長していった。だが、一つだけ問題があった。それは、なんとも人間くさいと言いか、普通の人間ならば別に問題ないようなものであった。しかし、カオスドラゴン……いや、カオスドラゴンの長になる者としては、最大の問題であったのかもしれない。

彼女は優しく、穏便で物静かな女性だった。代々カオスドラゴンとは、ドラゴン族きつての戦闘種族。ましてや、次期長なのである。

「気品があるのは大いに結構。だが、それとこれとは話が違う……」

ミリアルドは、メルフィナを厳しく訓練した。戦闘能力、頭脳、指揮官としてはなんの問題もなかった。むしろ、優秀な方でもあった。ミリアルドが厳しく指導したのは、性格面であった。

メルフィナはそれが嫌だった。訓練したからといって、性格が変わるわけではない。そう思い込んでいた。

「そんなことでは魔族と戦えんぞ」

それが父、ミリアルドの口癖だった。メルフィナは、父の呪縛から一刻も早く、抜け出す事だけを考えるようになった。毎日、そのことばかり考えるようになった。

しかしある日、メルフィナのところに一報が届けられる。父、ミリアルドと、母、クラリーネが戦死したとの報告だった。魔王軍勢との交戦中に、戦死したとの報告だった。

それはメルフィナにとって、もっとも残酷な知らせだ。両親を亡くしたことに留まることなく、メルフィナは、父の呪縛から解き放たれる事が永遠にできなくなってしまったのだった。ミリアルドの死は、すなわち、メルフィナが長にならなければならないという図式ができあがってしまうのである。

私は長にならなければならない。

私は戦わねばならない。

私は皆を導かねばならない。

私は勝たねばならない。

私は父の呪縛から解き放たれる事はできない。

戦いたくない。嫌だ、死にたくない。

そんな事を考えてるメルフィナは、ある日、夢を見た。

「どうしたんだい？浮かない顔して」

目の前にいる人の姿をした女性は、メルフィナにそう尋ねた。しかし、よく見ると自分も人の姿になっていたのだ。奇妙な事に、メルフィナの目の前にいる女性も、自分とまったく同じ姿をしていることだった。

「ふむ……まあ、夢なんてものは所詮自分の思考が描く現実味ある仮想映画のようなものさ。姿かたち、風景出来事、すべてが自分で描くもんなんだから」

「どうして私の疑問がわかったんですか？」

「そりゃ、私はあなただからね」

その答えに、メルフィナの頭の中はさらに混乱する。

「まあ、これは少し夢とは違うかもね。この姿や、風景なんかはあなたが描いているものだけ

ど……何も無い真っ白な空間で、人の姿……スペースを取らないコンパクトな絵だ」

「……これが仮に私が描く世界だとして、あなたはなんなんですか？」

「私はあなた。この世界で、あなた以外に唯一存在を許された存在。いえ、正確に言えば、私はあなただから、この世界において当然の存在でもある」

「ちよつと待って、訳がわからなくなってきたわ……」

「簡単に言うと、私はあなたのもう一つの人格」

「……私が多重人格だということ？」

「そういう言い方は間違いだね。生きているものは皆、誰だって多重の人格を保有しているものさ。どんな生物を前にしたって、同じ顔、同じ喋り方の奴なんていないだろう？ 家族、仲間、他人……すべて同じ顔で接している奴なんてこの世にはいないのよ。人間、魔族、ドラゴン、エルフ……誰だってそうさ。ただ、少し例外がある。私のような、一般的に言う多重人格のよくな存在」

「それは、一種の人格が別の意思で動いていると言うことですか？」

「少し違う。確かに、私は意思を持っているわ。でも、生物が保有する多重の人格が意思を持つことはない。それは、本人の意思でコントロールされているものだから、どの人格であっても、それは本人に変わりはない」

「じゃあその例外って言うのは……？」

「本人が持たない、全く別の人格。あるきっかけで、形成されてしまった本人がもつはずのな

い完全無比の人格。その形成された人格が、自我を持ったとすると？」

「全く別の意思が存在すると……」

「メルフィナの中に、メルフィナがもう一人、存在している。メルフィナは二人いる」

そのメルフィナの言葉に、当人は黙り込む。

「でも、正確には『そっちのメルフィナ』は、まったく別の人格。よって、私はメルフィナであってメルフィナではないの。だから、私の事はパルミラと呼んでちょうだい」

「……パルミラ、私の前に姿を現したということは、私にあなたと変われということでしょうか？」

「別に強制はしていない。ただ、私はあなたの父親が望んだ人格だということをお伝えしたかっただけなんだ。メルフィナ、あなたは死にたくない、戦いたくないと思ってるけど、実際は違うんじゃない？父、ミリアルドは偉大だった。その娘のあなたが、部下である者達からの期待を一身に受けるわけだ。不安だ、恥をかきたくない……そんなことばかり考えてるんじゃない？」

その言葉に、またも黙り込むメルフィナ。構わず、パルミラは言葉を続ける。

「だから、私が変わりになってあげるって言いたかったのよ。何も、乗っ取ってやろうなんてこと、考えてない」

「入れ替わった後、私はどうなるのでしょうか……？」

「どうもしないさ。普段はあなたでいるといい。ただ、みなの前に出るとき、戦う時だけ私と

変わればいいんだよ。ただ、強制はしないけど、もう無理だと思う。だって、私には自我が生まれてしまったもの。一つの体に、まったく別の、二つの自我が存在する。全く同じ生物が、一つの中に二つ、存在する……。だけど、残念ね。今日はもう時間がきてしまったわ。あなたが目覚めれば、私はまた闇の中へと消えてしまう。あなたが私の存在を認めない限り、私達はここで会う事しかできない。でも、これは夢じゃない……現実なの。だから、目覚めてからゆっくり考えてちょうだい。さあ、目覚めの時間よ」

メルフィナはふと目を覚ました。外はやや明るくなってきている。

(パルミラ……)

夢であって夢でない現実には、メルフィナはその場でしばらく考え込んだ。

メルフィナは考えた。昨日の夢の事を、その日一日ずっと考え込んでいた。しかし、結論は出なかった。だいたい、自分が自分でなくなるというのはどういうことなのか？もし、あのパルミラが、メルフィナの体をもったとすると、メルフィナ自身の意識は、いったいどこへいつてしまうのだろうか？

その日の夕方、メルフィナの元にアースドラゴンの長、モリスンが尋ねてきた。モリスンは、メルフィナの父であるミリアルドと親しい仲であった。戦友とも言うべきか、彼らには他のドラゴン族にはない、絆と言うものがあつた。そのモリスンは、ミリアルドが死んでからも娘のメルフィナのことを気遣い、たまに尋ねてきているのだ。

メルフィナは、メルフィナは、モリスンに夢のことを話してみた。夢とも現実とも区別のないその出来事を、最初から最後まで話してみせた。

「なるほど……パルミラか」

「モリスン、私はどうしたらよいのでしょうか……？」

「お前はどうしたいのだ？そのパルミラという者になんか変わってでも、恥をかきたくないと言うの

ならば、変わってしまったえばよい。だが、もし変わらなければ、パルミラは每晚お前の夢の中に出てくるだろう。それに耐えられるか？」

「私は……」

口をつぐむメルフィナ。しばらくモリスンから顔を背け、黙り込む。そして、重い口をゆっくりと開いた。

「もう一度……彼女と話をしてみます」

その晩、メルフィナが眠りに着く。現実から自分の世界……夢の中へと意識が切り替わる。当然、そこにはパルミラの姿があった。

「待ってたよ、メルフィナ」

静かに、優しく語り掛けてくるパルミラ。

「どう？考えてみた？今、自分がどうするべきなのか……」

「もちろん考えました。でも、私にはどうしたらいいかわからない……私は消えてなくなってしまうの？」

「消えないさ。言ったじゃない……普段はあなた自身でいればいいってね。乗っ取ろうってわけじゃないの。ただ、今の貴方は、正直見るに耐えかねるわ……だから、私が出てきたのよ……」

「私は……消えてしまわないという事ですね？」

「そう、消えない。お互い消えることはない。それぞれ、適材適所で入れ替わればいいだけさ。簡単だろ？もつと気楽に考えてみなよ」

「気楽にですか……私は気楽に考える事なんてできません。ですけど、貴方の要求を承諾してみようと思います」

「うんうん、それでいいんじゃない？気楽に考えなくても、結論が出たならそれでいいと思うよ」

「結論は出てません。ただ、貴方の言う事が本当かどうか……試してみるのです」

メルフィナのその言葉に表情を堅くするパルミラ。

「いいでしょう……そう言うのなら試して見るといい。それも一つの結果なのだから」

そう言うと、パルミラは何もない方向を見上げる。

「さ、そろそろ朝ね」

パルミラのその言葉の後に、メルフィナは目を覚ました。

どこも変わっていないかった。メルフィナ自身がそこにいた。なんら変わらない朝である。

ほっとしたようなしないような表情で、メルフィナはしばらく考え込んでいた。しかし、そのメルフィナにどこからか語りかけてくる存在があった。

「おはようメルフィナ」

その言葉を聞き、辺りを見回すメルフィナ。声の主は間違いない、夢の中で聞いたあのパルミラの声だ。

「あはは、探しても見つからないよ」

「ど、どこから……？」

「私はあなたの中にいるんだから。貴方の脳に直接話しかけてるのよ。で、さっそくで悪いけど、変わってもらわね」

「え、ちよ……待って」

メルフィナの制止にも関わらず、入れ替わりを行うパルミラ。メルフィナはそこで不思議な感覚に襲われる。自身の意識はそこにあるのだ。しっかりと自分の目で見て、自分の耳で聞くことができる。だが、体はまったく動かせない。そう、意識だけがそこにあって、体は自分のものではないのだ。

そんな不思議な現象に、ことばを失うメルフィナ。逆に、初めて外へ出た子供のように辺りをキョロキョロと見回すパルミラ。

「なるほど、これが外の世界ね……」

物珍しそうにしているパルミラの前に、モリスンが入ってくる。

「ああ、起きていたかメルフィナ」

「あら、初めまして。あなたは確か……モリスンね。私はパルミラ。よろしくね」

「……」

パルミラの言葉に、面食らって言葉を失うモリスン。

「あら、確か話は聞いているはずだけど……?」

「あ、ああ、確かに話は聞いていた。しかし……」

「信じられないって顔してるわね」

「にわかには信じられんな。話を信じてないわけではないが……」

「でも、本当だから仕方ないわ」

そう言つて、にっこりと微笑むパルミラ。

そして、二人は……メルフィナとパルミラは一つの体を共有しあつた。普段はメルフィナであり、カオスドラゴンの長として、軍を率いる時はパルミラであつた。

パルミラはそういうことに慣れており、その堂々たる態度と指揮能力は、カオスドラゴン全軍を率いるには申し分ない存在であつた。ただ、少数の者以外には、メルフィナではなくパルミラであるという事は伏せていた。その事実が知れば、カオスドラゴンの長としての権限が失われるかもしれない……そのことについては、パルミラも承認していた。それ以外では、二人は姉妹のように……あるいは、姉妹よりもっと絆の深い関係にあつたかもしれない。一つの体を共有する二つの人格。それは、誰にも理解できない、二人だけの世界。

そう、あの日が来るまでは……。

72

撤退するコーディネリア達の前に、拠点となる砦が姿を現す。

「首尾はどうだ？」

コーディネリアの声を聞きつけ、各エーデルリッターの隊長たちがコーディネリアの元を集まる。

「流れてきた魔物はすべて片付けた。これで全部なのか？」

「ああ……大方片付いたと思う。だが、まだ一匹残っているかもしれない」

コーディネリアの言葉に、顔を見合す隊長達。

「十三使徒の一人、ラウドが中にいたんだ……」

「なんだって？」

「コーディネリア、それが本当だとしたら、よく無事に戻ってこれたわね……一体どうやって……」

……？

「それは……」

言いかけて、言葉を濁すコーディネリア。ここで、メルフィナがドラゴンだという事実を明かし、てしまっているのだろうか？そんなことが頭の中を過ぎる。

一方のロットも、同じことを考えていた。メルフィナがドラゴンであるということ完全に信じたわけではないが、実際、ラウドが追撃してこないということは、メルフィナが足止めしているからに違いないという事実には、否定する余地がないのは確かである。

ロットはコーディネアの言葉を待ったが、コーディネアは黙ったままである。

「そう言えば、一緒にいた司祭殿は？」

クーガーが指摘する。このまま黙っている事はできない。そう判断したコーディネアが、ゆっくりと口を開いた。

「彼女は……今、一人でラウドを食い止めています」

「どういうことだ……？」

「司祭を一人残して、おめおめと逃げてきたってこと？」

「コーディネア、納得のいく説明をしてもらおうか」

「メルフィナ殿には……不思議な力があるようだ。司祭とは別の何か……私にはわからないが、その力を持って、ラウドを制止しているのだ」

あえてドラゴンかもしれないという事を伏せ、説明をするコーディネア。

「しかし、メルフィナ殿がラウドを倒せる保障はどこにもない。だからロット殿、このことを一刻も早くユング王に伝えて欲しい」

「私が？それはコーディネアさんの役目ではないでしょうか？その馬なら、早急にユング王のところに駆けつけることができる」

「いや、私にはここで指揮を取る役目がある。我々が全軍でかかっても、奴に勝てる保障はないから……」

「それはつまり、自分だけおめおめ生き延びるのが嫌だということですね？」

「貴様っ！」

カイルがロットを掴みにかかる。

「待てカイル。確かに、貴方の言う通りかもしれない。だけど、もうこれは私の一人の戦いではないのだ。貴方が言ってくれた通り、私はエーデルリッターを導く義務がある。だから、私はこの場を離れるわけにはいかないのよ」

「なら、尚更貴方が行くべきだ。サンダルークが全軍を挙げれば、ラウドとて撃退できるはずです。それには、早急な対応が必要とされてくる。貴方の馬で、早急にユング王に知らせなければいけない」

コーデリアの言葉に対し、きっぱりと言い放つロット。

「それに、私の言葉よりも貴方の言葉の方が、ユング王にとって信頼がある。貴方が行けば、事の重大さを察し、早急に軍を動かしてくれるでしょう」

ロットの言葉に、少し考え込むコーデリア。

「私も彼の意見に賛成よ」

ヴァネッサが言う。ヨシユアとクーガアの二人も、彼女の言葉に頷く。

「……わかった。私が走ろう」

コーデリアが観念したように言う。その言葉に、ロットが頷く。

「すまない……私が戻るまでの間、なんとか持ちこたえてくれ」

そういうと、コーデリアは急ぎティティスを走らせる。サングルーク城へと向かって……。

「見えてきたな」

エフラムがサングルーク城を下に見ながら、そう呟く。

「早速攻撃準備にうつりますか？」

ミルチア兵の一人が、エフラムに言う。だが、エフラムは首を横に振った。

「そう焦るな。戦闘だけが国を落とす手段ではない。そうだな……あの山のふもと辺りに船を落とせ」

エフラムがサングルークからやや離れた山の辺りを指差す。

「わかりました……ですが、一体どうするおつもりですか？このまま空から攻撃した方が、こちらとしてもかなり有利に戦えます」

「焦るなど言ってるだろう。もうじき雨が降りそうなんだ。そうすれば、こちらは一気に形勢不利となることがわからんのか？」

「不利……ですか？」

「俺たちの持つ装甲蟲は、ほとんどが鉄でできている代物だ。鉄は電氣を通す。やつらの雷魔法は厄介だな。そこに雨なんか降ってみろ。水が電氣を通して、俺達は一氣にやられるぞ？」

エフラムの言葉に納得し、黙り込んでしまふミルチア兵。

「そろそろ山のふもとにさしかかります。降下準備！」

「よし、降下させろ」

エフラムの合図と共に、降下を始めるゴットシップ。やがて、大きな音を立てながら着陸するゴットシップ。

「この音でギリギリ聞こえないといったところか……」

そういうと、エフラムは開いた扉から外へと出る。

「馬を用意しろ！それと、誰か二人ほど、俺に着いて来い」

「ど、どうなさるおつもりですか？」

「サンダルク王に会いに行く」

「へ……？」

エフラムの言葉に、目が点になるミルチア兵。

「明日の明朝までに俺が戻らなかつたら、サンダルクを攻撃しろ。それまではここで待機、一切の動きをするな。わかつたな？」

「は、はい」

「よし、じゃあ行って来る」

そう言うと、エフラムはサンダルク城へと馬を走らせた。

——サンダルク城——

ユングの下に、伝令兵が駆け込んでくる。

「ユング様、コーデリア殿がお話があると申しております」

「わかった、通して」

ユングの言葉が終わらないうちに、コーデリアが謁見の間に入ってくる。

「ユング王、急な用件で申し訳ないのですが、魔族の中に十三使徒であるラウドが含まれていたのです」

「なんですって？」

声を揚げたのはユングではなく、スイートピーであった。

「あれほど大口を叩いておいて申し訳ないのですが、我々だけで食い止めれる自身がありません。どうか、サンダルクのお力をお借りしたいのです」

そう言って、頭を下げるコーデリア。

「頭を上げてよ、コーデリアさん。相手に十三使徒がいるとなると、話は別じゃない？」

「そうですね……しかし、十三使徒までもここへ向けて攻めてくるなんて、どうしてでしょうか？」

「それは……」

コーデリアがそう言いかけた時、先ほどとは違う伝令兵が駆け込んでくる。

「ユング様、大変です！ミルチアの使者が会いたいと申してきています！」

「ミルチアのー!?」

ユングが声を揚げる。コーデリアもそれを聞き、表情を強張らせる。

「ど、どうしようスイートピー」

「大丈夫です。我々は中立国サンダルク。別にミルチアと戦争を起こしてるわけではありません。ただ、エーデルリッターをかくまっていると、話は別ですが……」

「では、私はその影の方にいましょう。あまり時間をかけすぎると、向こうもおかしく感じるかもしれませんよ」

「そ、そうだね。じゃあ、ミルチアの使者をお通ししてくれ」

「わかりました」

ユングに言われた伝令兵は、急いでその場から立ち去った。

(ミルチアの使者か……サンダルクに何の用だ？やはり、我々の件だろうか……)

しばらくして、三人の男が謁見の間へと入ってくる。そのうちの一人は、入ってくると同時

に、コーデリアの方へと目をやる。その男と目が合ってしまうコーデリア。だが、その男は気にもせずユングの前まで歩を進める。

「ミルチアのエフラムと言う者だ。以後、お見知りおきを」

「サンダルークの王ユングだ。今日はどういった用件で？」

「その前に……」

そこまで言いかけ、エフラムはコーデリアの方を向き直る。

「コーデリア、お前もこっちに来て俺の話しを聞け」

名前を呼ばれ、ビクンと肩を震わせるコーデリア。だが、出て行かないわけにもいかない。

ゆっくりと、エフラムの方へと出て行くコーデリア。

「久しぶりだなコーデリア」

「エフラム……貴様、何の用だ？」

「そう噛み付くな。今から話す」

エフラムはユングの方へと向き直り、言葉を続ける。

「我々ミルチアは、サンダルークに無条件降伏を申し出に来た」

「無条件降伏だと!？」

コーデリアが声を揚げるが、エフラムは構わず続ける。

「俺の軍は、今サンダルーク領地内にいる。いつでも攻撃できるようにな。もちろん、ここを落とすには充分すぎるほどの戦力である。だが、我々としても被害は最小限に抑えたいのだ。

そちらとしても、俺たちに虐殺、破壊されずに済むのだから、できれば受け入れて欲しいのだがな」

「貴様……ふざけるな！」

コーデリアが腰にある剣に手をやる。

「まあ待てコーデリア。お前とやり合ったら勝てる気がしない」

「それはよかったな。じゃあ死んでもらう！」

「待てと言っているだろう。何故攻撃隊長の俺が直々にここへ来たか考えてみる。もし俺が戻らなかった場合は、部下に攻撃を開始しろと言っている。そうなれば、勝敗に関わらずここは大惨事になるぞ？それでもいいのか？」

「それは困る！」

ユングが声を揚げる。

「そうなれば、国民達に被害が出てしまう！それだけは……困る！」

国民の事を第一に考えるユングにとって、エフラムの言葉はあまりにも残酷すぎた。ユングは泣きながら「困る」を連呼し続ける。

「これは、交渉成立かな？」

「お待ちください」

エフラムに制止をかけるスイートピー。

「ユング様は今、少し混乱しておられるのです。いきなりいわれて、その場で決断できるよう

な交渉ではありません。少し、お時間をいただけますか？」

「ふむ……」

エフラムはスイートピーをじっと睨む。

（なるほど、こんな子供でどうやって国を成り立てているのかと思っていたら……そういうことだったのか）

エフラムはしばらく黙り込んで考えた。ここで攻を焦っては、わざわざここまで足を運んだ意味がない、そう考えるからだ。

「まあいいだろう。三日間、時間をやる。せいぜい考えることだな。さて、そろそろ戻らないと、部下たちが攻撃を開始してしまうな」

そう言って、謁見の間を後にしようとするエフラム。出口で立ち止まり、口を開く。

「後を着けようなんて考えるなよ。もしそんなことをしたら、即座に攻撃開始だ。それじゃ、いい返事を期待している」

そう言い残し、今度こそその場を後にするエフラム。残された者たちは、しばらく沈黙したまま、その方向を黙ってみていた。

「どうする……おつもりですか？」

その沈黙を破ったのは、コーデリアだった。

「一応、我々エーデルリッターもいます。戦えない事はありませんが……」

「まあお待ちくださいいコーデリア殿。三日あります。今はとにかく、十三使徒撃破のための兵

を用意しましょう。そのために時間を作ったんですから……」

スイートピーの言葉に頭を下げるコーデリア。

（確かに、今はラウド撃破が優先だ……しかし、もし降伏となると、私達の立場はさらに危うくなる。どうしたものか……）

自らに回復魔法をかけ、ゆっくりと起き上がるパルミラ。辺りを静かに見回す。そこに、ラウドの姿も気配もない。やったのだろうか……？

——パルミラ！答えてください。消えるってなんですか！？——

メルフィナがパルミラに語りかける。ラウドや魔族たちの姿がないことを確認すると、パルミラはゆっくりと口を開いた。

「メルフィナ、あなたにはもう私は必要ないのよ」

——必要ない？ そんなことはありません。あなたが消えてしまうなんて……そうしたら、私はどうしたらいいんです？——

「どうもしないさ。あるべき姿に戻るだけよ」

パルミラはゆっくりと目を閉じ、言葉を続ける。

「ラウドに敗れた時点で、私は消えるべきだったのよ。それを、くだらない復讐心のために、

あなたの人生のほとんどを棒に振ってしまった。そんな私が、この先も存在するなんて間違っていると思うわ」

——そんなことはありません。私がここまで生きてこれたのも、あなたと共にあったからこそなんです。だから、そんな事を言わないで……—

「私はもともといなかった存在だ。私が消えることによって、あなたは完全に元通りに戻るのよ」

——それなら、消えるべき存在は私です。私はもう必要ない存在なんです。あなたがこの体を使った方が、必ず皆の……この世界の役に立つはずです。だから——

「メルフィナ、私では彼らを導く事はできない。それはあなたの役目だから」

——人を導くのは、むしろあなたの役目です。パルミラ、あなたがこの体に二つの存在が必要ないと考えているならば、私が消えます——

「メルフィナ、よく聞いて。私は作られた人格なんだ。でもあなたは違う。この世界に生をもつて産まれた人格なのよ。だから、あなたは消えることはできない。それに、私はもう疲れたんだ。だから、あなたにすべてを任せようって言ってるのよ」

疲れた、という言葉は、嘘だなとメルフィナはすぐに感じ取った。だが、そうまでしてパルミラは自らを消そうとしている。

——パルミラ……本当の理由を聞かせてください。でなければ、私は納得しませんよ——

「……何故、私はあなたとこの体を共にしたと思う？ 乗っ取る事だって出来た。でも、私はそ

うはしなかった。何故？それはね、私には、限られた時間しか与えられなかった。だから、ラウドの姿を見るまで、私は表には出てこなかったのよ。この時が来るまでは、その限られた時間を温存する必要があったの」

——どちらにしても、消える運命だったと……言う事ですか——

「そういうことよ。だからメルフィナ、私は消える。時間切れなの。ただそれだけよ」

——何故それを……そのことをもっと早くに言ってくれなかったんです？何故、消える今になるまで、隠しておいたんですか……——

「すまない……でも、そのことを言えば、あなたがラウドに近づかないようにするんじゃないかと思つて……それがとても怖かつた。だから、このことは黙つていたのよ」

——それは……——

「……さ、そろそろ時間ね。あなたたちが魔族に勝利するのを見届けられないのは残念だけど……それ以外に悔いはないわ。消えてしまうことに対しての恐怖もない。おそらく、私が消えてしまつても、メルフィナがここに残るからだと思う。肉体はまだ、あなたの意思で生き続けるからでしょうね」

メルフィナは答えない。それを察したバルミラは言葉が続ける。

「眠りながらも感じ取つていたわ。もう、あなたたち四人にしか、この世界を救えない。勝つよメルフィナ。あなたは勝たなければならぬ。そして、私のために勝つて欲しい」

——……はい——

「それと、モリスンに今までありがとうって伝えておいてくれない？」

「……はい——」

「それから……」

パルミラの声が途切れる。いつまでも聞こえないパルミラの声に不安を抱き、メルフィナは右手を動かしてみる。動く。その肉体は、すでにメルフィナの意思によって動くようになっていく。

「……パルミラ！」

メルフィナが叫ぶが、返事はない。

（こんな時、悲しんでる暇はないと言われる時がある。でも、私は悲しい。絶望感さえ感じ取ってしまうくらいに……でも、私は前に進むよ。パルミラ、あなたとの約束は必ず守って見せます！）

メルフィナは涙をぬぐい、サンダルクの方へと歩み始めた。